

種子島民俗調査報告書(1)

西之表市の民俗・民具

第 1 集



平成 9 年 3 月

調査 鹿児島大学比較民俗学研究室
鹿児島民具学会種子島調査班

発行 鹿児島県西之表市教育委員会

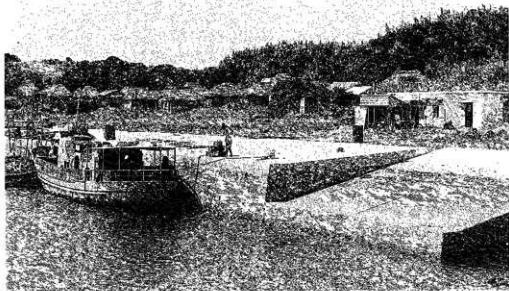
表紙写真の説明

穂垂れ引きと天道祭り。1月15日の朝、ホダレヒキをしたあと、写真のように縁側又は庭の軒下などに箕の上に品物をいっぱい並べて、天道すなわち太陽に供える。太陽に感謝し、今年の豊作を祈る。

西之表市では上西でも現和でも大戦前までは大方の農家でこのような祭りをしたが、戦後は激減した。写真は、昭和44年1月、上西大広野の河口末雄氏宅で写したものの。箕の中には、柳の枝に四角い餅（ゴ－・団子）を差したゴ－サシと海草、その上の左巻き棒の祝い物（タブの木製）、十字の切り込みを入れた天道の箸（柳の木製）、カシワイチゴの葉（シオツリノハ）に盛ったカシワガユ、煮シメ、オミキ、ホダレヒキのワラがのっている。脇には鋤や斧、鎌、鍬などの農具をおいてある。これらの農具も祝っているのである。

ホダレヒキとは、穂垂れ引きのことで、1月14日又は15日にカシワガユのカユを炊くとき、その煮汁に茅又はワラの先を浸してそれにスクボ（粃殻）をひっつけて、あたかも稲が穂のようにして、天道の箸で穂をしごき落とす真似をする。そのようにすることをホダレヒキという。小正月に、秋の豊作を予想して見せる行事で、昔は鹿児島県各地で行われていた。この写真は今では貴重な写真ではないかと思う。

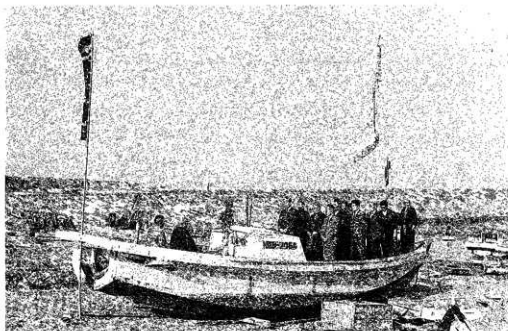
（撮影と説明、下野）



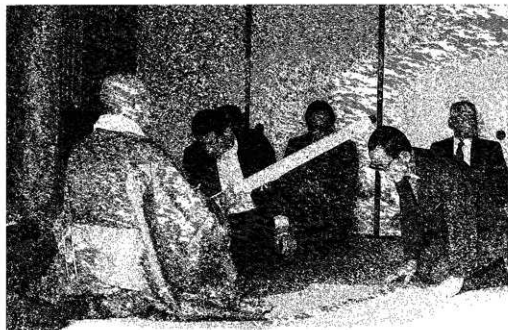
① 西之表の西方沖合に浮かぶ馬毛島の玄関口の葉山港。連絡船の馬毛丸が見える。ここは壺泊（あまどまり）の漁師たちが開拓した港。昭和38年（1963）撮影。



② 壺泊の漁師たちの季節移住の小屋。対岸の壺泊の本宅に対してこれは夏の別荘でもあった。ここを基地にトビウオを捕り、ナガラメヤブト（テングサ）を採取した。今では小屋は全滅してしまい、幻の光景となった。昭和38年撮影。



③ 庄司浦の1月2日の船祝い。昔はこのようにして実際に船に乗って、船頭・船主（艫）と船中（舳）が対面して、独特の「船祝い歌」を歌った。住吉では昔は船を海に浮かべて歌ったという。昭和43年（1968）撮影。



④ 住吉浜之町の「お経頂戴^{きょうとうがい}」。12月のベンザシ祝い（交替式）の時、昔からの法華宗の方式に従って、このように「オマンガラ」の軸をもって師匠（鮫島氏）が氏子の頭をなでる。昭和61年（1986）撮影。



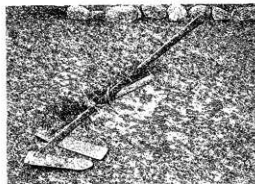
⑤ 国上の中目神社の森の中にある弓場（いば）の椎の神木と的。1月15日、氏子たちはこのような的を射て破魔行事をする。何百年とつづいて来た行事であり、祭場である。昭和80年（1985）撮影。



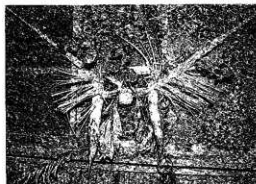
⑥ 1月11日の大的始め式。西之表市栖林神社の境内。昭和43年。



⑦ 現和西侯のチンチョウのハマ。1月15日。昭和42年。



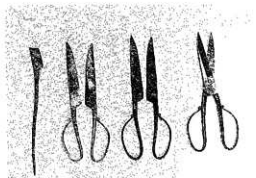
⑧ 1月4日の「クワ入れ」祝い。立山にて、昭和43年。



⑨ 正月の「オーバン」飾り。上石寺にて、昭和43年。



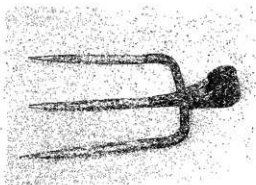
⑩ 牧瀬家の鍛冶屋の火の神様。手錫杖と矛を供えてある。平成6年。(西之表市東町)



⑪ 種子鋏の工程を表す。東町の牧瀬種子鋏製作所にて。昭和57年。



⑫ ヒラグワ。中野の野平農具製作所にて。昭和61年。



⑬ 中野の野平農具製作所にて。昭和61年。



⑭ 中野の野平農具製作所にて、野平隆信氏 (S10生)。昭和61年。



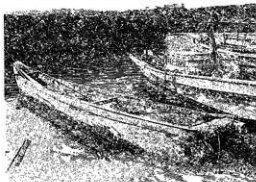
⑮ 東町の牧瀬種子鋏製作所にて、牧瀬義文氏 (S18生)。昭和61年。



⑯ 東町の種子鋏製作所にて、牧瀬義美氏 (M44生)。昭和57年。



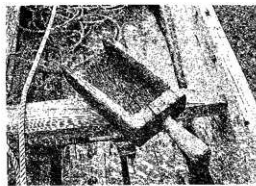
① 壺泊港にて。昭和42年。



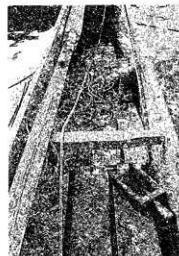
⑧ 田之脇港の丸木舟。昭和42年。



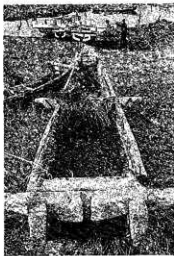
⑨ 壺泊の造船所。昭和42年。



⑩ 田之脇港の丸木舟のアカトリ。昭和42年。



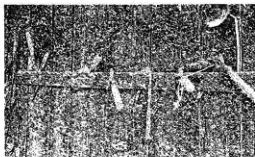
⑪ 田之脇港の丸木舟。昭和42年。



⑫ 中西の港の丸木舟。昭和42年。



⑬ 國上の湊にて。丸木舟の帆を調査する川崎見檢氏。右端は荒河長次氏（M32生）。昭和43年。



㉔ 壁に差してある農具。右の丸い物は車のミラー。安納にて、昭和60年。



㉕ ウマゴヤの農具。安納にて、昭和60年。



㉖ 農作業に使う鎌類。安納にて、昭和60年。



㉗ 大ガマ。安納にて、昭和60年。



㉘ 野打ち鎌とナカヒキ。横山にて、昭和43年。



㉙ 壁にかけてある農具。安納にて、昭和60年。

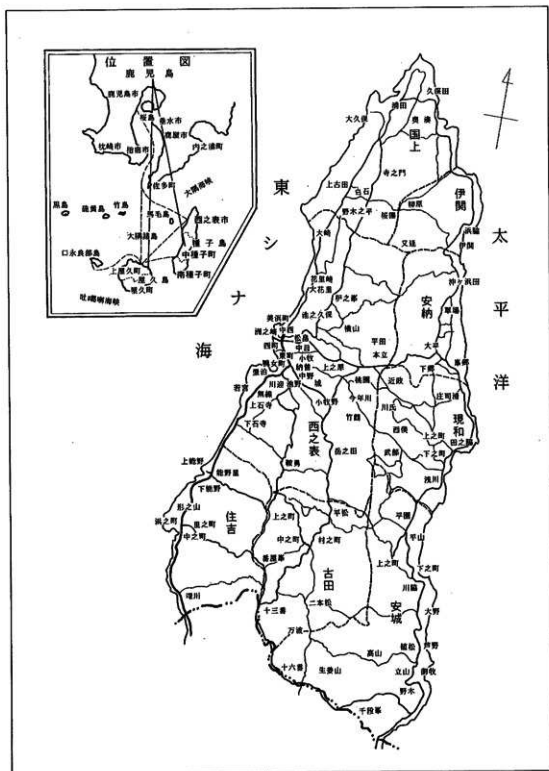


㉚ ウマヤの農具。鎌類。西之表市大崎にて、昭和60年。



㉛ 国上の澳にて、「砂糖スメ」風景。昭和43年。

西之表市地図



『西之表市の民俗・民具』（第1集）

調査 昭和五十六年（一九八一）～平成八年（一九九六）
 刊行 平成九年（一九九七）三月

目次

表紙写真の説明（表紙裏——穗垂れ引きと天道祭り）
 口絵写真（馬毛島の葉山・年中行事・伝統技術・丸木舟・楸・他）
 西之表市の地図

発刊にあたって

『西之表市の民俗・民具』発刊によせて

民俗・民具誌の刊行によせて

『西之表市の民俗・民具』の発刊を祝して

西之表市長

西之表市教育委員会教育長

西之表市文化財保護審議委員長

種子島開発総合センター所長

榎本 修……………五

鎌田 一正……………六

楢原 定男……………七

蛟嶋 安豊……………八

『西之表市の民俗・民具』

『西之表市の民俗・民具』調査の概要

種子島のイワナとセブロを訪ねて

元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会会長

愛知大学助教授

下野 敏見……………九

印南 敏秀……………三一

一、農 業

稲作と備礼

農具と農鍛冶

農業と農耕具

農業・農具・牧について

農耕儀礼の変遷と展望

楠田 秀史……………四一

姫野 智雄……………四九

日比野 恭一……………五七

門野 伸……………六五

砂田 光紀……………七三

鹿児島民具学会員

鹿児島民具学会員

二、漁業

漁村と漁撈習俗	神園博人	八一	
漁村組織と採取物と水産加工	矢野真弓	八六	
漁具と漁法	新名祐史	九四	
北部漁村の刺突漁法	久保楨子(旧姓田中)	一〇三	
漁村探訪(船・漁法・組織・信仰)	鹿児島民具学会員	海江田義広	一一一
北部漁村の網漁法と分配、葬制と漁村	高山由美子	一二五	
種子島南北の各種漁法と漁村習俗	古川泰生	一三二	
潜水漁法と採取漁法	井出渉	一四〇	
釣り漁法(一本釣り・イカ釣り・ホロ曳き・延縄)	鹿児島民具学会員	溝辺浩司	一五一
アテ・ソネ・潮流・他	鹿児島民具学会員	木下直子	一五九
船(丸木舟・サツマ型・日向型・船霊・船祝い・他)	鹿児島民具学会員	溝辺浩司	一六六
漁撈儀礼と稲作儀礼	瀬戸口良二	一七二	
漁業と信仰	東口匡樹	一七七	

三、民具

竹の種類と利用法・竹細工	長野美智代(旧姓中村)	一八二
竹製品の種類と機能	古林孝子(旧姓新保)	一九四
種子島の民具から	鶴田静彦・新名祐史・他	二〇五
運搬具の概要と婚姻事例	山口かほり	二一〇

四、衣服

衣服	児島ひろみ	二二七
----	-------	-----

五、食生活

農村の食生活と漁村の食生活	伊藤なおみ(旧姓隆)	二三五
---------------	------------	-----

種子島の「食」の民俗を訪ねて	伊藤 なおみ(旧姓 隆)	二三〇
伝統食の種類と現状	中村 陽子(旧姓 広瀬)	二三六
食生活について	柏木 重司	二四五
各地の「食」の伝承を探る	首藤 由美子	二五一
日常の食とハレの食	是枝 恵里乃	二六一
種子島の食習俗について	佐藤 玲子	二七五

六、住 居

家屋配置と間取り、その他	園田 成史	二九二
種子島の住居の比較研究	楠田 聖子(旧姓 有村)	三〇一
住居と生活	牧 志保	三〇九

七、年中行事

正月行事	鹿児島県民具学会員	鶴田 静彦	三一六
正月行事と飾り物	安田 つかさ(旧姓 佐藤)		三二一
年中行事(トシトイドンを中心として)	宇都 博一		三三〇
正月行事・タコ捕り	橋元 健一		三三八
伝統行事の現状と問題点	高本 由紀子		三四五
年中行事(正月準備〜四月)	前田 晶子		三五六
下能野のサカイワイ	田中 勉		三六一
年中行事(盆・正月)	鹿児島県民具学会員		三六四
各地の年中行事聞書	日高 ルミ子		三七〇
海村の行事	日高 文仁		三七七
漁村の年中行事・養い親・年祝い	鹿児島県民具学会員		三七五
	井上 賢一		三八四
	長野 美智代(旧姓 中村)		三八四



発刊にあたって

西之表市長 榎 本 修

種子島は、その近海を流れる黒潮によって、太古から琉球・中国・東南アジア・西欧・そして日本の中央文化との交流により、多くの文化を吸収した島であり、文化の発祥の地であると自負いたしております。

私たちの祖先が、英知をしほり、自然とのかかわりの中で育まれてきた貴重な民俗・民具資料は、市民のかけがえない共通の文化的財産であります。私たちは文化財の伝える自然愛や人間愛などの深い精神を理解し、郷土の良き伝統を生かして、文化的・教育的風土に根ざした地域文化の振興を図っていかねばなりません。

この度、元鹿児島大学法文学部下野敏見教授と比較民俗学研究室の皆さんの調査にもとづき『西之表市の民俗・民具』の報告書が編纂・発行されることになりました。数多くの貴重な民俗資料の掘り起こしがなされ、永い時代を懸命に生きてきた心豊かな先人の文化に感激するところです。

郷土の文化に学び、郷土のもつ豊かな自然との調和を図りながら、文化の香り高い特色あるまちづくりの一環として、本書が活用されることを念願いたします。

本調査にあたり、下野教授をはじめご協力をいただきました多くの方々には深く感謝を申し上げ、報告書発刊にあたっての言葉といたします。



『西之表市の民俗・民具』発刊によせて

西之表市教育委員会教育長 鎌田 一 正

種子島は、古代より海を通じての南島からの文化と、九州、本州の北からの文化が交じりあって独自の文化を形成してきました。

そして、我々の先人たちは種子島の風土に根ざした文化を創造し、子から孫へと幾世代にもわたって伝承してまいりました。

しかしながら、今日の日本は経済優先の大量消費国となり古くから各地域に伝えられてきた昔ながらの風俗、習慣、信仰、芸能等は急速に影を薄くしつつあります。

このような文化は、一度失われると復活が困難であるという宿命にあることから、これら先人の残した極めて貴重な文化を後世に正しく継承していくことは、現在生きている私たちの責務であると考えます。

文化とは、その時代その時代の生活の証しであり、その中で創造し伝えてきたものが文化遺産であるとする、西之表市には数多くの伝統文化が残存しているといえます。本書は、その中で重要かつ伝承しなくてはならないものを選択し、資料にまとめたものであります。

ここに、元鹿児島大学教授下野敏見氏をはじめ関係者のご協力によって永年待ち望んでいた『西之表市の民俗・民具』を発刊できますことは、まことに喜ばしいことであります。

今後、本書がふるさとへの心を伝える財産として、また学術研究用として広く活用していただければ幸いです。



民俗・民具誌の刊行によせて

西之表市文化財保護審議委員長 楢原定男

旧・鹿児島大学法文学部民俗学専攻の皆さんが十数年に及んで西之表市を調査された民俗調査記録がここに『西之表市の民俗・民具』として刊行されました。

種子島は南西諸島の最北端に位置し、その文化は沖縄・奄美など琉球の文化と西日本文化が混在する吹きだまり的な現象をもっており、貴重な民俗の宝庫といわれてきました。

しかし、昭和四十年代の高度経済成長を契機として、神社・仏閣の佇まいや住宅の構造・民俗行事等、加速度を増して消失していきつつあります。

人類の足跡は、文献による文献史学・土の中の埋蔵文化財による考古学・人類の医学的見地等による人類学そして生活習慣や民具等による民俗学などによって、年々明らかにされております。

南種子町において、三万年前の調理場跡を残す横峯遺跡が発見され、一気に二万年も種子島における人類発生の起源を古くさせました。

しかし、これらの人類がどのような生活を営んでいたかの全体像は長い年月とあらゆる学問の成果によって、少しずつ解明されていくでありましょうが、その解明のスピードは、消失のスピードからすると、極めて遅々としているといえます。

この書のように、今日の生活習慣等を通してその全体像に接近することができるわけであり、民俗学は大変大切な学問であるといえます。

更に、これらの先祖代々受け継がれてきた民俗文化財をこのように記録にとどめておき、後世に伝えて行くことも、われわれの最低限度の義務であります。

そんな意味からも、本市の古き良き姿が、この民俗・民具誌の刊行によって、末長く保存されることは誠に意義深いことだと喜びに耐えません。

せめて、今後、本書が本市を知るための参考書として、幅広く活用されることを念じる次第であります。最後に、この書の刊行にあたって、ご尽力された皆様にご敬意と感謝を申し上げます。



『西之表市の民俗・民具』の発刊を祝して

種子島開発総合センター所長 鮫 嶋 安 豊

元鹿児島大学法文学部教授 下野敏見先生が昭和三十年代から種子島の民俗を調査されていたことは、種子島に住む人なら誰でも知っていることであり、今日、種子島の古い歴史等を調べる時に、どうしても先生の著書にお世話にならないければ理解できないほどに、先生の著書は種子島を知る「必須の参考書」といえます。

しかし、その先生の著書をして、すべてを調査し尽くすということはできないほどに種子島には豊富な民俗行事があると先生は云われます。

ここに刊行された『西之表市の民俗・民具』は先生が鹿児島大学に在動中に先生の教室の民俗学専攻の皆さんが本市を長年に亘って調査をされた報告書の中から、抽出されたものであります。

その量はこの数倍にも及ぶ膨大なものであったことから、先生に無理をお願いして抽出し、このように二冊にまとめて完成したものであります。

この書を編くと、各集落の協力者（古老の名前）はすでに逝去された人が大部分であり、再び聞き出すことの不可能な内容が多いことに気づきます。

延々と言い伝えられてきた事柄が今日完全に途絶えてしまったのだと確認を新たにすることであります。民俗誌は常民の歴史であり、記録に残らない歴史でもあります。

私たちの西之表市の歴史そのものと云っても過言ではありません。

この刊行にあたって、ご尽力いただいた下野先生はじめご執筆いただいた皆さんに心から深甚の感謝を申し上げる次第であります。

末尾にあたり、今後、この書物が本市を知るための良き参考書として活用されんことを願いたします。

西之表市の民俗・民具

第1集

『西之表市の民俗・民具』調査の概要

元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会会長 下野 敏 見

一、はじめに

民俗学を学ぶ若者たちが西之表市内に合宿して、毎年、市内各地を調査したレポートがだいたいぶたまっていた。筆者は鹿児島大学を平成七年三月をもって停年退官したのであるが、そのずっと前から西之表市教育委員会の教育長先生をはじめ、現種子島開発総合センター（種子島博物館、別名鉄砲館）所長の蛟崎安豊氏に、学生たちのレポートは種子島にとっては貴重な調査内容のものが多く、それを教官が見たとテリカゴに捨てるのはなんともったいない。それで、市として印刷してもらえないだろうか、と話していた。それが本年度、突如、印刷したい旨のご連絡をいただいた。印刷・発行の責任は市でやってもらい、当方は編集だけをするということで、発足した。ここに、昭和五十六年（一九八一）から十数年間の学生たちのレポートが日の目を見ることになったのである。

一週間ずつという短い期間ではあったが、青春の日々を種子島の民俗調査・研究に打ち込み、それぞれが学友たちと笑い喜びながら、フィールドを歩き回った記録を、今や各地で活躍しておられる諸君が読むと表現や研究方法に必ずや不満もあることと思われ、できれば全面書き改めたいと思う人もいるに違いない。しかし、もし書き改めるとすれば第一にそのような暇がない人もいるだろうし、第二に初めて種子島で接したフィールドの新鮮な印象や感激などは洩れてしまおうし、第三にやはり調査は調査した時点が問題で、その時点での記録にはかならないのである。こうしたことから、旧稿のまま収録することにした。そのほうが、全体として意義のある報告書になると考えられるのである。

二、西之表市について

西之表市は、種子島の北部を占める行政区域である。最近は少ないけれども以前は、西之表と沖繩県八重山諸島の一つの西表島とよくまちがえられた。

西之表は種子島の主邑であり、南西諸島の北端の市であり、南への玄関口である。昔からここは種子島の政治、経済、文化の中心地で、その栄光の歴史は奈良時代までさかのぼる。当時、南島を統治する多摩國の首都であり、国府がおかれたのもこの地といわれている。中世以来、明

治初年にいたるまで種子島氏の居城の地として栄え、西之表は赤尾木と
呼ばれていた。

西之表の町は過疎のため人口が近年減ってしまったが、それでも南島
では屈指のにぎやかな市街地を形成している。町は、東町と西町は近世
からあってにぎわっていたが、その上のほうには、中目、小牧、納曾、
松島……といくつもの集落があって薩摩藩特有の「麓」(府元)を形成
している。この地域には島主種子島氏の居城、赤尾木城を中心として家
臣団が居住していた。

西之表は大きな湾(榕城湾)に面し、湾の三方には、洲之崎、池田、
瀬泊という「赤尾木三ヶ浦」が今もある。ただし、池田は埋立によって
海岸は前進し、様相はすっかり変った。この三ヶ浦は島主の御用浦でも
あって、島主上臈の場合など御用船の船頭や水夫を動めた。この浦の
人々をはじめ島内各浦では初夏の頃、沖合に浮かぶ馬毛島に季節移住し
てトビウオ漁やテングサ採りを行った。そのための住まいの茅葺き小屋
が各地に集落ごとにあった。その写真は口絵写真に掲載してある。

西之表市は「統計にしのおもて」(平成七年度版、西之表市役所)
によると、総面積二〇五・七平方竪、東西の長さ八二竪、南北の長さ
二五・二竪である。総面積のうち田は八・一平方竪、畑は三二・八平方竪
で、あとは山林、原野、道路などが多い。

気温は、最も寒い一、二月が摂氏一度八分九分まで、最も暑い八月
は二九度である。年平均気温が一九度から二〇度という暖かい地で、無
霜地帯である。

次に「統計にしのおもて」平成七年度版から、いろいろな統計資料を
掲げてみよう。

1 西之表市の人口の推移

各年10月1日現在

区 分	世帯数	人		口	1世帯 人	人口密度 (人/km ²)	備 考
		総数	男	女			
大正9年	3,918	18,154	8,954	9,200	4.6		第1回 国勢調査
昭和5年	4,130	20,533	10,337	10,196	4.9		第3回 "
15年	4,133	21,804	10,901	10,903	5.2	105	第5回 "
20年	4,052	23,281	10,936	12,345	5.7	113	推 計 人 口
30年	6,323	32,527	16,136	16,391	5.1	157	第8回 国勢調査
34年	6,434	33,593	16,685	16,908	5.2	162	推 計 人 口
35年	6,907	32,645	16,089	16,556	4.7	158	第9回 国勢調査
40年	7,525	30,490	14,893	15,597	4.1	147	第10回 "
45年	7,367	26,222	12,488	13,734	3.6	127	第11回 "
50年	7,493	24,266	11,598	12,668	3.2	117	第12回 "
55年	7,754	23,537	11,250	12,287	3.0	114	第13回 "
60年	7,844	22,692	10,829	11,863	2.9	109	第14回 "
平成2年	7,734	20,952	9,978	10,974	2.7	102	第15回 "
7年	7,773	19,821	9,386	10,435	2.6	96	第16回 "

要計表による

2 西之表市の集落別世帯数及び人口

地区別	世帯数	人口	男	女	
総数	7,895	20,139	9,631	10,508	
楢	西町	188	431	183	248
	東町	167	391	166	225
	洲之崎	191	457	218	239
	池田	54	122	47	75
	天神町	66	152	69	83
	田屋敷	64	109	47	62
	鴨女町	335	724	341	383
	野首	341	798	383	415
	松島	600	1,671	834	837
	中西	133	345	153	192
城	中目	396	988	471	517
	小牧	146	327	161	166
	納曾	129	307	149	158
	中野	90	217	102	115
	城	111	256	125	131
	小牧野	44	165	84	81
	竹鶴	12	35	18	17
	今年川	28	81	37	44
	桃園	29	67	30	37
	岳之田	45	111	57	54
区	平田	24	50	22	28
	牧之峯	18	43	24	19
	本立	55	132	67	65
	上之原町	130	372	179	193
	美浜町	272	658	317	341
	朝日が丘	29	95	39	56
	計	3,697	9,104	4,323	4,781

地区別	世帯数	人口	男	女	
上 西 校 区	池之久保	53	141	68	73
	柗之峯	29	71	38	33
	横山	63	195	95	100
	大花里	23	57	29	28
	花里崎	35	87	41	46
	大崎	52	154	76	78
計	255	705	347	358	
下 西 校 区	川迎	216	594	293	301
	池野	196	555	279	276
	壺泊	271	620	276	344
	上石寺	140	390	196	194
	下石寺	52	150	79	71
	鞍勇	50	155	74	81
	無線	21	57	29	28
	若宮	51	190	89	101
計	997	2,711	1,315	1,396	
国 上 校 区	桜園	78	213	101	112
	白石	22	53	26	27
	野木平	82	241	115	126
	中目	127	367	192	175
	奥	20	56	27	29
	久保田	53	129	58	71
	浦田	72	176	75	101
	湊	83	296	166	130
	上古田	10	18	8	10
	寺之門	93	232	114	118
計	640	1,781	882	899	

平成7年10月1日現在

地区別	世帯数	人口	男	女	
伊 関 校 区	柳原	75	219	104	115
	又延	5	18	11	7
	浜駒	48	152	74	78
	伊関	28	85	33	32
	沖ヶ浜田	95	289	128	141
計	251	723	350	373	
安 納 校 区	軍場	84	198	91	107
	大平	49	131	66	65
	峯下	49	124	61	63
	郷	55	144	65	79
計	237	597	283	314	
現 和 校 区	庄司浦	100	306	155	151
	田之脇	63	162	80	82
	浅川	142	269	127	142
	上之町	69	172	82	90
	下之町	53	156	81	75
	武部	115	368	176	192
	西保	79	227	108	119
	川氏	39	85	44	41
	近政	39	104	44	60
計	699	1,849	897	952	
安 城 校 区	平山	45	86	39	47
	平園	8	13	7	6
	上之町	34	79	38	41
	下之町	64	169	82	87
	川脇	15	34	17	17
	大野	49	109	49	60
計	215	490	232	258	

地区別	世帯数	人口	男	女	
立 山 校 区	芦野	13	25	11	14
	御牧	11	27	12	15
	立山	36	77	38	39
	野木	13	38	17	21
	植松	11	25	16	9
高山	4	8	5	3	
計	88	200	99	101	
中 割 校 区	千段峯	5	17	6	11
	生姜山	17	45	23	22
	十六番	21	48	21	27
	万波	13	21	11	10
計	56	131	61	70	
古 田 校 区	十三番	18	40	19	21
	二本松	37	80	38	42
	村之町	54	117	57	60
	中之町	45	116	52	64
	上之町	39	109	52	57
	番屋峯	22	97	46	51
	平松	14	30	13	17
	計	229	589	277	312
住 吉 校 区	深川	80	194	96	98
	里之町	60	135	59	76
	中之町	54	120	52	68
	浜之町	92	203	84	119
	形之山	39	93	44	49
	上能野	97	248	118	130
	下能野	51	121	48	73
	能野里	58	145	64	81
計	531	1,259	565	694	

資料：市民課

3 西之表市の農家数の動き

平成7年2月1日現在 (単位:戸)

年	区分	総世帯数	総農家数	専業農家	兼業農家		
					計	第一種兼業	第二種兼業
昭和	45	7,309	3,613	886	2,727	1,381	1,346
	50	7,451	3,071	1,047	2,024	791	1,253
	55	7,740	2,850	974	1,876	795	1,081
	60	7,953	2,666	987	1,679	586	1,093
平成	2	7,738	2,380	977	1,403	587	816
	7	7,801	2,049	806	1,243	496	747

(注) 総世帯数については2月1日現在推計

資料: 農業センサス

4 経営耕地規模別農家数 (西之表市)

平成7年2月1日現在 (単位: 戸・ヘクタール)

年	区分	総農家数	例外規模	0.1	0.3	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	4.0	5.0	7.5
				}	}	}	}	}	}	}	}	}	}	}
				0.3	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	4.0	5.0	7.5	10.0
平成7		2,049	6	242	221	532	404	253	158	72	109	24	24	4

資料: 農業センサス

(注) 例外規模農家とは、経営耕地面積が5アール未満で、調査期日前1年間の農業生産販売額が10万円以上ある農家

世帯員数別農家数

平成7年2月1日現在 (単位: 戸)

総農家数	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人以上
2,049	200	773	440	259	159	118	73	23	2	1	1

資料: 農業センサス

5 熊毛地区各市町の面積・世帯・人口・人口密度

平成7年10月1日国勢調査 (単位: km²・戸・人)

市町名	面積	世帯数	人口	男	女	人口密度
西之表市	205.70	7,773	19,821	9,386	10,435	96.4
中種子町	137.76	4,007	10,025	4,711	5,314	72.8
南種子町	110.37	2,906	7,422	3,589	3,833	67.2
種子島計	453.83	14,686	37,268	17,686	19,582	82.1
上屋久町	298.89	2,898	6,932	3,389	3,543	23.2
屋久町	242.02	2,679	6,662	3,310	3,352	27.5
屋久島計	540.91	5,577	13,594	6,699	6,895	25.1
熊毛地区計	994.74	20,263	50,862	24,385	26,477	51.1
鹿児島県計	9,166.58	688,048	1,794,276	841,059	953,217	195.7

※面積については、平成5年10月1日現在

6 漁業種類別漁船数（西之表市）

平成7年4月1日現在

漁業種類 トン数階層		合 計		一本づり漁業		敷 網 漁 業		雑 漁 業	
		隻 数	総トン数	隻 数	総トン数	隻 数	総トン数	隻 数	総トン数
動 力 漁 船	総 数	448	1,029.01	383	873.85	2	5.52	2	0.99
	3 トン未満	288	363.38	246	320.83	1	2.45	2	0.99
	5 トン未満	152	614.23	135	539.02	1	3.07	0	0.00
	5 トン以上	8	51.40	2	14.00	0	0.00	0	0.00

定置網漁業		刺 網		は え な わ	
隻 数	総トン数	隻 数	総トン数	隻 数	総トン数
12	29.45	49	119.20	0	0.00
7	7.70	32	31.41	0	0.00
4	16.25	12	55.89	0	0.00
1	5.50	5	31.90	0	0.00

資料：商工水産観光課

7 漁船の動向（西之表市）

年 トン数別		4 年		5 年		6 年		7 年	
		隻 数	総トン数	隻 数	総トン数	隻 数	総トン数	隻 数	総トン数
動 力 漁 船	総 数	467	1,035.29	455	1,033.48	444	1,020.50	448	1,029.01
	3 トン未満	306	399.12	297	383.17	287	337.60	288	363.38
	5 トン未満	156	604.77	152	611.71	150	638.80	152	614.23
	5 トン以上	5	31.40	6	38.60	7	44.10	8	51.40

資料：商工水産観光課

8 許可漁業の状況（西之表市）

漁 業 種 類	件 数	操 業 期 間
か じ き 流 網 漁 業	4	7月 ～ 11月
と び う お 流 網 漁 業	26	1月 ～ 10月
固 定 式 刺 網 漁 業	20	周 年
潜 水 器 漁 業	42	5月 ～ 8月
あ さ ひ か に か か り 網 漁 業	28	9月 ～ 4月
キ ビ ナ ゴ 刺 網 漁 業	20	周 年
ロ ー プ 曳 と び う お 網 漁 業	4	1月 ～ 10月
も じ ゃ こ 特 別 採 捕 漁 業	38	4月25日 ～ 5月24日

資料：商工水産観光課

9 漁家と漁船（西之表市）

各年11月1日現在

区分 年次	漁 家 数 (世 帯)				漁 船 (隻)	備 考
	総 数	専 業	兼 業			
			漁 が 主	漁 が 従		
昭和63年	536 (559)	59	245	232	動 力 365 無 動 力 3 船外機付 101 979.40t 14,478馬力	漁 獲 高 141,006万円 一経営体 252万円
平成5年	426	62	194	170	動 力 306 無 動 力 1 船外機付 71 938.48t 13,917馬力	漁業経営体数 433 漁獲金額 145,199万円 一経営体平均漁獲金額 335万円

資料：漁業センサス

10 主要漁種別水揚高（西之表港）

(単位：kg・千円)

区 分	平 成 5 年		平 成 6 年		平 成 7 年	
	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
総 数	1,498,556	1,110,687	1,483,302	1,138,154	2,040,995	859,648
ト コ ブ シ	30,070	96,302	26,891	106,072	28,517	134,960
エ ビ	9,417	51,580	9,297	51,114	10,101	51,601
と び う お	331,570	82,833	340,233	86,063	245,837	81,366
イ カ	117,430	218,398	86,884	172,968	88,533	163,574
ブリ,ヒラス,赤バラ	40,844	60,966	31,595	44,989	30,038	47,078
ア サ ヒ カ ニ	3,244	13,995	4,042	16,293	4,926	17,786
サバ,アジ,カマス	105,728	32,102	122,889	37,412	76,283	23,275
瀬 魚	843,959	515,401	835,769	553,624	1,539,872	315,644
アラ,赤上,その他	16,294	39,110	25,702	69,619	16,888	24,364

金額……消費税抜き

資料：商工水産観光課

11 漁船別水揚高（西之表港）

(単位：kg・千円)

区 分	5 年		6 年		7 年	
	数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額
総 数	1,498,556	1,110,687	1,483,302	1,138,154	2,040,995	859,648
地 元 船	1,428,101	1,058,469	1,420,771	1,064,862	2,020,273	841,401
県 内 船・その他	58,712	43,516	56,933	66,868	5,849	7,199
県 外 船	11,743	8,702	5,598	6,424	14,873	11,048

金額……消費税抜き

資料：商工水産観光課

三、西之表市（市外の地も一部含む）調査の概要

1 調査の年月日

鹿児島大学法文学部文化人類学研究室による種子島の民俗調査は、昭和五十六年十二月末より翌二月初めまで行ったのを第一回とし、次いで中種子町増田の調査（昭和五十八年十一月二十五日～昭和五十九年一月一日）と、平成二年（三月十二日～三月二十日）および平成六年（三月十五日～三月二十三日）の南種子町（金城）の調査を間にはさんで、西之表市の調査が前後九回で、合計すると、種子島全島の調査を十二回実施したことになる。

このほかに研究室では、大隅半島や薩摩半島、奄美大島、トカラ列島、奄美大島、沖縄本島の調査も行った。そうした中で、種子島の調査が最も回数が多いのは、鹿児島から近い島であるというだけでなく、そこには豊かな民俗が息づいているし、それにもまして島内の方々の温かい心があるからであった。

次に西之表市での調査の年度と日程を記す。

第一回調査	昭和56（一九八二）・12・28	昭和57（一九八二）・1・3
第二回調査	昭和59（一九八四）・12・25	昭和60（一九八五）・1・3
第三回調査	昭和60（一九八五）・12・26	昭和61（一九八六）・1・3
第四回調査	昭和61（一九八六）・12・25	昭和62（一九八七）・1・3
第五回調査	昭和62（一九八七）・12・24	昭和62（一九八七）・12・30
第六回調査	昭和63（一九八八）・12・27	昭和64（一九八九）・1・3
第七回調査	平成2（一九九〇）・12・26	平成3（一九九一）・1・3
第八回調査	平成6（一九九四）・12・25	平成6（一九九四）・12・29
第九回調査	平成8（一九九六）・8・8	平成8（一九九六）・8・11

右のうち、最後の第九回は卒業生を含む鹿児島県民具学会による調査である。

なお、それ以前の各回にも鹿児島県民具学会の会員たちが特別参加した。筆者が鹿大を退官したあとの現在の編集であるので、本報告書はこれまでの経緯を考えて、鹿大比較民俗学研究室と鹿児島県民具学会の調査を併記しただいである。

2 文化人類学から比較民俗学へ

鹿児島大学法文学部文化人類学研究室はのち、比較民俗学研究室と改められた。なぜ、比較民俗学と改められたかというと、鹿児島大学のおかれている南九州の地は日本の他のどこよりもヤマト（本土）と琉球（沖縄・奄美）の接触地として国内における比較民俗学のできる地である。それは朝鮮や台湾、さらに日本列島でも東日本やアイヌ社会を視野に入れるとただ民俗学を称するよりも比較民俗学としたほうがよいと考えられる。この比較をまず試みたのち、中国や東南アジア・南太平洋などと比較するという作業がやりやすい地の利にあるのが、鹿児島大学である。地の利を生かした研究こそ、フィールドを重視する社会科学には大事なことであろう。

「比較民俗学」というと、まだ日本の民俗文化をよく知らない人びとは、日本という国での一国民俗学ではなく、他の国との比較でないと成立しないかのごとく考える傾向もあるが、比較民俗学は当然他国と日本を比較研究することは今さらいうまでもない目標であり、手段であるけれども、日本の中も他国と比較できるくらい地域によって民俗が違ふことを認識しなければならぬ。例えば、沖縄県は（その昔は奄美も含めて）かつて明治初年まで独立国であったので（このことは誰でも知っていて、実は忘れていることが多いが、ヤマト（本土）とはりっぱな比較民俗学の対象になり得るし、北辺のアイヌ社会も同様であろう。もし国の異なる間のみの比較が比較民俗学であるというならば、いろいろ矛盾をきたす。今の沖縄と本土の比較研究のほかに、中国のような他民族国家の中での比較民俗学は成立しないということになる。例えば北部のツングース族と西南部のペー族は大変違ふのにかかわらず、ということになる。なお、日本でも昔にさかのぼると、ヤマト朝廷成立後しばらくは南九州などは熊襲のすむ異国扱いであり、東北の蝦夷もそうであった。この研究は、国が違ふという意味では、比較歴史民俗学とでもいうべき場での研究はできるということになるけれども、その文化を變容しつつも継承しているであろう今日の南九州や東北の比較民俗学的研究はできないというのであろうか。さらに韓国と北朝鮮は国は異なるが、朝鮮民族としての基本的文化がそんなに違ふとも思えない。韓国と北朝鮮は比較民俗学研究ができて、ヤマト日本と琉球の比較民俗学研究は成立しないというのは甚だおかしなことである。

このようなわけであるから、日本列島においても、文化の違いの大きい地域間の比較はできると思われる。そもそも民俗学は、資料の比較から始まったものであるので、国内であろうと国外であろうと（よく吟味した上で）の比較であることは当然のことであるが、比較することから出発せねばならない。それが民俗学研究であり、列島の文化の亀裂の大きい地である、ヤマト・琉球、アイヌ・ヤマト、東日本・西日本の比較は比較民俗学の対象となり得るのではないかと私は思う。そして、さらに視点をひろげて東アジアや東南アジア、南太平洋へ、さらには世界各々へと比較の範囲をひろげていけばよいのである。

さて、長くなったが、「比較民俗学」と研究室名を変えた理由を記しただいである。

比較民俗学の視点から見ると、種子島はヤマト文化圏の南辺の地を占め、しかも先にも記したように古代以来、朝廷の出先機関の国府があっ

た。歴久島を含むここまでが古代日本であり、ここから南は琉球の範囲であった。もっともトカラ列島は両属の地であり、ヤマト・琉球の中間文化の地でもある。

種子島の地は中世以来、種子島氏の私領として統括されてきたので、中世的文化が豊富に残っている。今はもう本土で見られない中近世の古い文化がいろいろ残っている。ここで若い学生たちが学ぶということは、日本文化の一つの確固とした文化視点を持つようになるということである。ここでフィールドに出て民俗文化に親しく触れて、のち沖繩・奄美やヤマト各地を見ると、その異同が鮮明に見えてくるであろう。そして、比較民俗学の学問を自ずから体得できるようになるであろう。

種子島を比較民俗学実習地を選び、たびたび来島したのはこんな理由もあったからである。

3 調査年度と日程、参加者

第一回調査 (1) 実習地 鹿児島県西之表市西之表、他

(2) 期 間 昭和五十六年十二月二十八日～昭和五十七年一月三日

(3) 日 程 昭和五十六年十二月二十八日……午前八時半、「わかさ丸」にて鹿児島港発→午後一時、西之表港着

西之表市立種子島博物館見学

二十九日……島内史跡見学および集落調査

三十日……西之表市内集落調査（瀬泊、池田、洲之崎）

三十一日……（現和）

昭和五十七年 一月 一日……（各地）

二日……（瀬泊、池田、洲之崎）

三日……午後一時半、西之表港発→午後六時、鹿児島港着

(4) 実習内容 南西諸島の基層文化の人類学的調査研究（特に、漁法、船祝い、正月行事、他）

(5) 参加者 教官 一名 下野 敏見（鹿児島大学教授）

学生 七名 鶴田 静彦 新名 祐史 神園 博人 石川 康浩

池田 洋子 陸 なおみ 前田 純子

(6) 宿泊所 鹿児島県西之表市下西川迎 日興寺内宿泊所

第二回調査

- (1) 実習地 鹿兒島県西之表市の東岸集落および西岸集落
- (2) 期間 昭和五十九年十二月二十五日、昭和六十年一月三日
- (3) 日程 昭和五十九年十二月二十五日……午前八時半、「わかさ丸」にて鹿兒島港発→午後一時、西之表港着
調査予定地一巡、西之表市立種子島開発総合センター見学
- 二十六日 西之表市東岸集落の調査（浦田・湊・浜脇・沖ヶ浜田・庄司浦・田之脇・浅川）
二十八日 西之表市西岸集落の調査
二十九日 西之表市西岸集落の調査
三十日 ……（大崎・洲之崎・池田・瀬泊・上能野・下能野・住吉（浜之町））
三十一日……西之表市国上の調査および野木之平のトシトイドン見学
- 昭和 六十年 一月
一日 …… 漁村正月民俗および「船祝い」見学（住吉・瀬泊）
二日 ……
三日……午後一時半、「わかさ丸」にて西之表港発→午後六時、帰鹿
- (4) 参加者 教官 一名 下野 敏見
学生 七名 (三年) 井出 渉 木下 直子 高山 由美子 矢野 真弓
(二年) 中村 美智代 野尻 朋子 溝辺 浩司
- (5) 特別参加者 日本民俗学会理事および評議員 小林 梅次
国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授 高桑 守史
同 松崎 憲三
東京女子大学理学部史学科三年 関沢 まゆみ
名古屋大学（考古学専攻三年） 佐藤 つかさ
同（考古学専攻予定一年） 田中 慎子
- (6) 宿泊所 鹿兒島県西之表市下西川迎 日典寺内宿泊所

第三回調査

(1) 実習地 鹿児島県西之表市の各集落

(2) 期間 昭和六十年十二月二十六日、昭和六十一年一月三日

(3) 日程 昭和六十年十二月二十六日……午前八時半、「わかさ丸」にて鹿児島港発、午後一時、西之表港着

調査予定地一巡、西之表市立種子島開発総合センター見学

二十七日……島内各地の調査見学（西之表市内、他）

二十八日

三十日……西之表市各集落（農村、漁村、麓）の調査

三十一日……西之表市園上の見学および野木之平の「トシトイドン」見学

昭和六十一年 一月 一日……正月行事の調査（住吉、他）

二日……西之表市壱泊の船祝い行事の見学

三日……午後一時半、「わかさ丸」にて西之表港発、午後六時、鹿児島港着

(4) 参加者 教官 下野敏見

学生(三年) 溝辺浩司 野尻朋子 広瀬陽子 中村美智代

浜崎由美子 引地美咲

(二年) 砂田光紀 竹野功 姫野智雄 高本由紀子

佐藤玲子 力丸哲子 清水純子

(5) 特別参加者 東京外国語大学教授（日本民族学会会長） 山口昌男

日本民俗学会会員（東京） 佐々木 勝

駒沢大学大学院 岩井 洋

食習研究家（名瀬市） 久留ひろみ

(6) 壱泊所 鹿児島県西之表市下西川迎日典寺内壱泊所

第四回調査

- (1) 実習地 鹿兒島県西之表市の各集落
- (2) 期間 昭和六十一年十二月二十五日、昭和六十二年一月三日
- (3) 日程 昭和六十一年十二月二十五日……午前八時半、「わかさ丸」にて鹿兒島港発、午後一時、西之表港着、日典寺宿泊所へ。西之表市立種子島開発総合センター見学、西之表市旧蹟見学

二十六日……西之表市現和地区の調査（二年団体行動、三年分散）

二十七日……西之表市内各地の調査（立山、安城本村、武部、現和本村、西俣、田之脇、庄司浦、大平、軍場）（一、三年グループ編成、分散）

二十八日……西之表市内各地の調査（深川、浜之町、里之町、下能野、上能野、石寺（上・下）、麓（納曾、小牧、中目、松島、横山、花里））（一、三年グループ編成、分散）

二十九日……全員、西之表市と中種子町、南種子町民俗の比較調査（上中一泊）

三十日……同右（但し、日典寺泊）

三十一日……全員、西之表市^{（上）}上の調査、夜は野木之平の「トシトイドン」見学

昭和六十二年 一月 一日……西之表市住吉、能野、瀬泊、他の調査

二日……西之表市住吉浜之町の船祝い、瀬泊の船祝い見学

三日……清掃、午後一時半、「わかさ丸」にて西之表港発、午後六時、鹿兒島港着

(4) 参加者

教官 下野敏見

学生（三年） 砂田光紀 清水純子 高本由紀子 佐藤玲子

姫野智雄 庄司琢也

（二年） 有村聖子 楠田秀史 永松明子 濱川まゆみ

古川泰生 渡辺一弘

(5) 特別参加者

教官 鹿兒島大学教養部講師 高谷紀夫

学生 鹿兒島大学法文学部研究生 的場道正

琉球大学法文学部社会学科 宇都博一

(6) 宿泊所

西之表市下西川迎 日典寺内宿泊所

（但し、十二月二十九日夜は、南種子町長谷野口二七一番地 長田太喜夫経営民宿「長田荘」）

第五回調査

- (1) 実習地 鹿児島県西之表市の各集落、他
- (2) 期間 昭和六十二年十二月二十四日、昭和六十二年十二月三十日
- (3) 日程 昭和六十二年十二月二十四日(木)……午前八時半、「わかさ丸」(九四三ト)にて鹿児島港発↓午後一時、西之表港着。日典寺宿泊所へ。
- 西之表市立種子島開発総合センター見学。西之表市旧蹟見学
- 二十五日(金)……西之表市および中種子町、南種子町の農村および漁村一巡
- 二十六日(土)……西之表市現和地区の調査(榎木貞彦氏宅訪問。民具調査、他)。武部、庄司浦の墓制と「村落構造」の調査
- 二十七日(日)……深川、住吉(浜之町、里之町)、能野の調査
- 二十八日(月)……圃上(浦田、奥、野木之平)の調査
- 二十九日(火)……西之表市内各集落の調査
- 三十日(水)……日典寺宿泊所の清掃。午後一時半発の「フェリー出島」(二五二六ト)にて西之表港発↓午後五時半、鹿児島港着。桟橋集合、解散
- (4) 参加者 教官 下野敏見
- 学生(リーダー、二年) 古林昭治
- (二年) 今村健治 斧測 和水 橋元 健一 日高文仁
- 松村利規 黒木綾子 末吉奈津子 今屋麻貴
- (三年) 古川泰生 渡辺一弘
- (5) 特別参加者 韓国国立順天大学教授 崔 徳源
- (6) 宿泊所 西之表市下西川迎 日典寺内宿泊所
- (7) 協力 西之表市役所および西之表市教育委員会
- 鹿児島県西之表市農業改良普及所

第六回調査

- (1) 実習地 鹿児島県西之表市の各集落
 (2) 期間 昭和六十三年十一月二十七日～昭和六十四年一月三日
 (3) 日程 昭和六十三年十二月二十七日(火) ……午前八時半、「フェリー」出島(二五・六分)にて鹿児島港発→午後〇時半、西之表港着。日興寺→若狭公園→雲ヶ城墓地→種子島開発総合センター(博物館)

二十八日(水) ……西之表市および中種子町、南種子町巡検
 二十九日(木) ……現和地区(武部)上之町→田之脇(庄司浦)および安納地区(大平)調査
 三十日(金) ……深川、里之町、浜之町、下能野、上能野、石寺の調査
 三十一日(土) ……国上(湊、奥、中目、寺之門、野木之平)、トシトイドン調査(柳原、野木之平)
 昭和六十四年 一月 一日(日) ……住吉浜之町浦祝い、能野、瀬泊、他
 二日(月) ……住吉浜之町船祝い、瀬泊船祝い
 三日(火) ……清掃・整理、午後一時半、「フェリー」出島にて西之表港発→午後五時半、鹿児島港着、解散

(4) 参加者

教官一名および学生二名(内一名は中華人民共和国留学生)
 教官(団長) 下野敏見
 学生(リーダー、三年) 橋元健一 (会計、二年) 有村月美
 (三年) 斧淵和水 日高文仁 古林昭治 松村利規
 (二年) 園田成史 大石和世 新保孝子 山口かほり

(5) 特別参加者

モンゴル師範大学の留学生および民俗学者(東京)計四名
 (民俗学者、東京) 佐々木 勝
 (モンゴル師範大学留学生) 阿莉塔(アリタ) 何艶(カエン)

- (6) 宿泊所 西之表市下西川迎 日興寺内宿泊所
 (7) 連絡場所 同右「日興寺」住職 山田水順先生宅(☎〇九九七二二二一九七) 取次

第七回調査

(1) 実習地

鹿児島県西之表市(種子島)

(2) 期間

平成二年十二月二十六日～平成三年一月三日

(3) 日程

平成二年十二月二十六日(水)……午前八時半、「フェリー」出島にて鹿児島港発↓午後〇時三〇分、西之表港

着、日典寺(若狭公園)雲ヶ城墓地(種子島開発総合センター(博物館))

二十七日(木)……西之表市および中種子町巡検(午前八時三〇分～午後五時)

日典寺(現和)安城(増田)野間(中種子町歴史館)平編(深川)住吉(

能野)石寺(日典寺)

二十八日(金)……現和地区(武部)土之町(田之隔)庄司浦)および安納地区(大平、軍場、

沖ヶ浜田、伊関地区および国上地区の巡検と調査

二十九日(土)……住吉地区(各地)および下西地区(各地)の調査

三十日(日)……上西地区および西之表各地の調査

三十一日(月)……国上地区の調査および野木之平と柳原のトシトイドン調査

平成三年 一月 一日(火)……住吉浜之町の浦祝いおよび西之表、下西各地の調査

二日(水)……奥泊船祝いの見学、調査

三日(木)……清掃、整理。午後一時半、「フェリー」出島にて西之表港発↓午後五時三〇

分、鹿児島港着、解散

(4) 参加者

教官一名および学生二名

教官(団長) 下野敏見

学生(リーダー、三年) 原田弘典 (会計、三年) 村岡 やすみ

(二年) 岩切公美 谷口雄三 海江田 義広 門野 伸

(二年) 柏木亜弓 後藤啓子 野間口 美紀

(四年) 大石和世 新保孝子

(5) 特別参加者

(教養部教官) 桑原 季雄 (日本民俗学会員) 近藤 津代志

(鹿児島大学大学院生) 松村 利規 (成城大学大学院生) 石川 康浩

(鹿児島大学聴講生) 田野辺 昭穂

(6) 宿泊所

西之表市下西川迎 日典寺内宿泊所

(7) 連絡場所

同右 「日典寺」住職 山田永順先生宅 (☎〇九九七二二二一九七) 取次

第八回調査

平成六年度『比較民俗学野外学習』（西之表市） 一九九四年二月二十五日～二月二十九日

(1) 参加者 教官(団長) 下野 敏見 高松 敬吉(鹿児島大学教授)

学生(リーダー) 笹峯 隆行 (会計) 田上 美子

(三年) 蔵田 弓子 首藤 由美子 東口 匡樹 引地 ルミ子 日比野 恭一

(二年) 前田 晶子 牧 志保 江藤 なほ子 児島 ひろみ 是枝 恵里乃 畑中 京子 吉福 優

(一年) 若松 まりか 東川 隆太郎

(研究生) 馬込 恵里 (大学院生) 田中 勉

特別参加者 鹿児島民具学会員 井上 賢一

琉球大学大学院生 後藤 啓子

第九回調査

鹿児島民具学会・種子島を語る会 合同研究会要項

(1) 趣 旨 地域の人々とともに、種子島の文化並びに民具・民俗文化について考えたい。

更に、他地域との文化や民具・民俗を比較することにより種子島の文化や地域性を探りたい。

(2) 期 日 平成八年八月十日(土) 一三・〇〇

(3) 会 場 種子島開発総合センター「鉄砲博物館」(番〇九九七二一三二二五)

(4) 日 程 一三・〇〇 一三・三〇 一三・四五 一六・五五 一七・〇〇

受付	開会行事	研究発表	閉会行事
----	------	------	------

(5) 内 容

開会行事 ・ 開会の挨拶（鹿兒島民具学会会長）

・ 日程説明

研究発表（※発表は会議室、実演は円卓室にて）

① 種子島の火縄の製作について

発表 奥村 学

実演 柳 峯義（現和武部）、木炭シズ（現和武部）

② 実演「ミソケ」の製作

西川 次男（現和武部）

③ 種子島の民具

日比野 恭一

④ 石塔祭りとお水棚祭り

下野 敏見

閉会行事 ・ 閉会の挨拶（種子島を語る会会長 井元 正流）

4 テーマの選定と事前事後研究

学生はテーマを選定し、事前研究して実習にのぞまねばならない。テーマの選定は卒業学年で卒論研究中の四年生、またはすでに卒業論文テーマが決まっている三年生の場合、そのテーマにそった調査をすることにした。

また、卒論テーマが決まっていない三年生および二年生は、テーマを選定しなければならない。そのテーマは教官の筆者と面談の上決めることにした。基本的には学生が自主的に決めることにしてあったが、同じようなテーマに集中すると、現地での調査のとき、伝承者不足をきたしたり、いろいろ不都合が生じやすいので、できるだけテーマはみんなちがうほうがよい。教官は同一分野に片寄らないように調整し、調査地の特徴も考えた上で学生が研究しやすいテーマを選ぶように助言し、必要な本の紹介などをした。

テーマが決まると、大学や県の図書館へ行って研究書や参考書を読まねばならない。そして、質問表を作らねばならない。同時に、学内での

事前研究発表会の用意もせねばならない。事前研究は、実習参加者全員集まって、各々レジュメをもとに発表し、質問し、教官の指導が行われ
た。

実習から帰ると、事後研究に入り、広い視野本を読み、ノートを見て考え、そして事後発表会の準備としてレジュメを用意した。その発表会
がすむと、レポートを書いて提出しなくてはならない。

テーマ選定は、二年生などにはできるだけ実習ごとにテーマを変えて自分の研究範囲をひろげるのがよいと言い、早くから一つの細道に入ら
ぬように注意した。全く学生の自由選択にすると、不思議なことに「信仰」に集中するのであった。でも、種子島の包圍する民俗文化は信仰に

昭和六十三年度 「文化人類学実習（種子島）」分担テーマ（例）

調査 昭和六十三年十二月二十七日～昭和六十四年一月三日

学年	氏名	メインテーマ	サブテーマ
三年	橋元健一	通過儀礼（誕生・成長）	通過儀礼（婚姻・葬送）
三年	斧渕和永	葬制と墓制	異常死人（特殊葬法）
三年	日高文仁	年中行事	正月行事と盆行事
三年	古林昭治	屋内の神々とその機能	
三年	松村利規	種子島のシャーマニズム	
二年	有村月美	通過儀礼（葬送儀礼と墓制）	民具（織の種類と機能）
二年	園田成史	住居の形態・構造・機能	神社の形態・構造・機能
二年	大石和世	神社の形態・構造・機能	住居の形態・構造・機能
二年	新保孝子	民具（竹製品の種類と機能）	屋内神の種類と特色
二年	山口かほり	運搬具の種類と形態・機能	出産と成長儀礼・婚姻
大学院生	栗国恭子	種子島の宗教的世界（ヤマト・琉球比較の視座から）	種子島と中国の民俗関係
聴講生	張帆	種子島の正月行事の種類と構造・特色	

とどまらず、行事も衣食住も芸能も口頭伝承も民具も生業も面白い内容を持っていた。

ここで民俗学を各方面から学ぶと将来、複眼的にまた大きく羽ばたくことができるであろうと思うのであった。

5 調 査

宿泊所の日典寺に泊って、学生当番による自炊で朝夕食をとり、昼食は各自自由、又は鴨女町の「小政」店の弁当を朝早く購入し、各自持ってフィールドへ行った。

自炊当番の学生は忙しい。夕方、調査がすむと、スパーへ買物に出た。学生の自炊の腕は年々向上したというが、少ない経費でおいしい料理をするようになった。先輩たちの指導なのか家庭での慣れなのか分らないが、上手なのであった。

調査は、学生リーダーが翌日の調査地とメンバーを決めて発表した。テーマに応じて場所を決め（例えば、漁業テーマの人は漁村に）、上級生と新入生との組合せ、男女の組合せなど、なかなかよく考え練られた案を出した。二人か三人組んで出かけるようにし、昼食はいっしょにとるが、調査は同一集落内で別々に個人的に行うようにした。そして、帰りの時間を打ち合せて集合し、徒歩または定期バスで帰った。初期の

西之表市（種子島）野外実習持参品リスト（例）〔学生リーダー作製〕

（一九九四・二二・二五―二九）

◎衣類

下着、シャツ（厚手のもの）、長ズボン、上着（コート等）、パジャマ（ジャージ等）、ソックス、☆帽子、☆マフラー 等

◎洗面・入浴具

歯磨きセット、櫛・ブラシ等、タオル類、石鹸・シャンプー等、手鏡等

◎その他

☆保険証、薬（傷薬・風邪薬・酔い止め等）、懐中電灯、☆米五合、カイロ、☆一五、〇〇円 等

◎調査携行品

フィールドノート、☆質問表、筆記用具（ボールペン）、☆カメラ、ストロボ、フィルム（白黒）、諸資料、☆紙ばさみ、電池（ストロボ・カメラ用）、☆巻き尺、方位磁石、☆西之表市地図、雨具、録音機（必要者のみ）、軍手、箒・はたき・タオル（民具のホコリ落とし用）、民具カード、☆民俗調査ハンドブック

〔注意事項！〕

- ※ 体調を整えておきましょう。
- ※ ☆印は必需品。
- ※ ラジオ・トランプ等は持って来ない。
- ※ 荷物はなるべくコンパクトにまとめましょう。

頃は西之表市役所が調査研究への協力としてバスを運行してくださって、朝学生を配り、夕方回収するという方法でやった。その頃は大変助かった。西之表市内を隅々まで調査できた。

調査から帰ると、宿泊所の風呂に交替で入り、そして一緒に夕食。夕食後はミーティング。その日の調査成果を発表し、コメントした。そのあと自由時間だが、男子諸君はダレヤメしたい者は集まったが、女性諸君も希望者は加わった。

宿泊は大広間は多いときは二〇人くらいが、頭をつき合わせて教官もまじって二列に並んで寝た。若い学生たちはいつも笑い声が絶えず、華やいた空気に包まれていた。男女雑魚寝の形であったが、何日もしつよだと兄弟姉妹みたいで甚だあっさりし、まちがいなど起こりようもなかった。でも、そういう中にもリーダーは気を配って調査の上級下級・男女の組合せの妙を追求し、皆から喜ばれつつ事故のない完全を期した。こうして、民俗学を最良のフィールドにおいて、実践の中で、学生たちは学んでいったのである。

四、わがこと

西之表の民俗・民具調査を始めた昭和五十六（一九八一）年から、最後の平成八（一九九六）年までちょうど十五年間。たくさんの方々の若者たちが種子島にお世話になった。学生たちは全国から集まっていた。お互いはそのルツボの中で逞しく鍛えられ、市内の各地の人びととの出会いを通して、善意にあふれる人間の存在をいたる所に見、たくさんの方々の伝承者を通して古く貴重な生の民俗文化にふれることができた。

過疎の今日、種子島の農漁村にも若者の姿は少ない。学生たちが「今日は」と声をかけて行くと、どこでも歓迎された。伝承者とはすぐ友人になり、年齢の差を超えて心は一つになり、学生はきわめてやさしく親切な雰囲気の中で質問し、記録した。本当に有難うございました。沢山の学生に代って、心からお礼申し上げます。

記録した本誌の第一集・第二集は果してどれだけだけの価値を発揮するか、これからの興味ある問題ですが、年々、年輩の伝承者の減っていく今日、本誌の記載内容は若干の意義もあろうかと思えます。

食 事 当 番 (例)

(一九九四・一二・二五～二八)

12月25日(日)	田中、蔵田、小林、馬込、東川
26日(月)	東口、前田、是枝、若松
27日(火)	首藤、吉福、児島、畑中
28日(水)	日比野、引地、牧、江藤
29日(木)	朝食は前夜作る。昼食は日高食堂で。

※ 昼食は、おにぎりを作ることに なります。

なおさいごに、本誌原稿(学生レポート)中の各「部落」を「集落」とした。集落とは近年役場が使っている用語である。地理学では集落をよく使うのだが、人文科学では「村落」の語も使うので、筆者は学生に村落を使うようにすすめてきた。しかし、本誌は校正を種子島開発総合センターにもお願いしたところ、「集落」と直されていたので、今回はそれを使うことにした。

西之表市役所でも十年ぐらい前までの公文には「部落会長」などの名称も見られたが、各集落では今も人びとは自分たちの村落を「部落」といい、その長を「部落会長」というている。いや南九州でも農村地域では人びとは自然にそうしている所が多い。

「部落」といわずに「集落」というのは、いうまでもなく被差別用語に気を使ってのことである。誤解を招かぬために、集落としたのはやむを得ないと思うが、「集落」の語のひびきはなんとも散文的であり、「村落」のほうがよっぽどよい。でも「村落」は学問用語であり、一般には使われない。ちなみに、種子島には部落と呼ぶ被差別村落はかつて存在しなかったことをここに明記しておきたい。いや、種子島以南の島々にも歴史的にはそれほどない。

あるとき、筆者が種子島高校の教員の頃、それは確か昭和四十二、三年頃であったが、東京から二人の身元調べ人(探偵)がやって来て、ある卒業生(男)が東京で嫁をもらおうとしているが、身元調べに来たといったので、筆者はびっくりして、東京は日本の中心でもっとも民主主義の発達した所のはずなのに、そんな前近代的なことを調べに来るとは、何事かといった。そして、その生徒はかつての武家の出なので、系図もあると行ってやったら、喜んで帰って行った。

本誌中でも、やむを得ず、部落とか、部落会長と記してあるものもある。学生はそのように聞いたからであり、また調査当時はそのようにしていたのである。部落会長と公民館長は別であるけれども、兼務している所もあるようだ。部落会長を公民館長という所もあって、呼称の過渡期の今日、なかなかむずかしいものがある。

種子島のイワナとセプロを訪ねて

愛知大学助教授 印 南 敏 秀

一、はじめに

一九九六年八月八日から十日にかけてイワナ（岩穴）とセプロ（瀬風呂）を中心とした種子島の入浴習俗の調査をおこなった。イワナとは岩窟の中を暖め、その中に入って汗をだす熱気・蒸気浴施設である。セプロは海岸の自然の岩盤の窪みや石積みで浴槽とし、満潮時に潮水を溜めて潮がひいた後に石を焼いて入れ、潮水を温めた中で入浴する湯治施設である。

イワナと同じ岩窟や、石積みによる石室を利用した熱気・蒸気浴施設は、瀬戸内地方中心に分布する石風呂と同系統の北方につながる文化要素を持つ入浴施設と考えられる。セプロは下野先生によると薩南諸島の温泉湧出地帯の海岸にみられ、焼石利用の加熱方法から南方設で、種子島は日本で最南端の施設となる。種子島は南北両方の人浴文化が重層し、境界となる興味深い場所といえそうである。

今回は短期間ではあったが西之表市と南種子町をめぐり、その概要と現状を知ることができた。ここではできるだけ、調査経過にそって報告したい。

二、西之表市のイワナとセプロとの出会い

武部 はじめに訪ねたのは西之表市現和字武部のイワナで、地元の木原一郎さんに御案内いただいた。付近の谷田はすでに稲刈りを終え、畑にはサツマイモを中心にサトウキビなどが植えられている。台地上の武部集落から下って西之川橋を渡り、再び上りはじめて途中で車を下りると左側に最近の埋め立て地がある。荒れていた棚田の谷を、基盤整備で出た残土で埋めたという。イワナは棚田から少し登った岩盤に掘られていたが、残土で埋まっていた。一郎氏が伝承として聞いた話では一度に六、七人が入浴できたという。

イワナがあった付近からは谷田と、台地に繁る青々とした樹々がみえる。集落からも隔離し、静かでのんびりできる位置につくられたのである。

武部の本皮シズさん（明治四十四年生まれ）から後日うかがった話を、ここでまとめて報告する。シズさんが子供のころには、イワナはす

に使われていなかった。イワナは前方の田の所有者であった西川家の先祖の作兵衛が一人で湯治を目的に獲ったのだという。親にも知らせず、できた時は親も驚いたという。シズさんが初めてイワナを見たのは、昭和五十二年頃に老人会でイワナを整備した時で、天井から罾がたれ、床周りに溝が掘ってあった。

シズさんは十五年ほど前に一度セプロに入った経験がある。浅川の山口与太郎氏が個人でセプロを焚くというのを聞いて、武部の二、三人の仲間と入らせてもらった。馬車に期間中に使う薪を乗せて持っていたという。石を並べた上に薪を置いて石を焼き、セプロツボキ（壺型の穴）に入れてわかった。湯加減は普通の風呂ぐらいだったという。夏の暑いときで、昼間は木陰で弁当などを食べてゆっくりし、涼しくなってきたら、三度入った。時化る日を除いてしばらく続けて入り、神経痛や皮膚病に効いたという。

浅川の隣集落の田之脇には自然のツボキを利用して、二〇人ほど入れる大がかりなセプロがあった。満潮になって潮水が入ると、藁束を積み上げて水路をふさいで潮水を溜め、そこに焼石をいれた。大正頃まで入っていたという。

武部は大きな集落で昔から二〇戸ほどとかわらない。シズさんが子供のころ内風呂のある家が一〇戸ほどで、庭に鉄砲風呂を据えて焚いたが、露天なので雨が降ると入れなかった。夏間は川や海にかかるか行水ですませ、風呂を焚くのは十月から六月ぐらいのおもに冬間であった。近くの家はもらい風呂に呼んでくれたが、遠い家は行きにくかった。もらい風呂の湯は汚れており、皮膚病や冬はあかぎれになりやすかったという。内風呂が普及するのは昭和になって五右衛門風呂が使われるようになってからだという。

庄司浦 武部から海岸にて、庄司浦のセプロを見にいった。庄司浦の海岸で孫の水泳の監視をしていた板元忠氏（昭和十二年生まれ）から、セプロは二、三年前に養殖場をつくるために海岸を掘りおこしてなくなると教えられる。念のために案内していただいたが、港の南方三〇〇呎ほどの位置にあったセプロは跡かたもなかった。

忠氏によると、セプロは海岸の石を組んでつくった浴槽で、四、五〇呎程の深さがあった。戦前までは一〇〇戸ほどの庄司浦から年寄りが男女とも集まり、石を積んだ上で薪を燃やし、熱くなった石を浴槽の中に入れて温めて入ったという。焼くのに適した石はマイシといい、大小使い、焼石はスコップなどで入れたという。

午後遅くからはじめた西之表市での初日の調査では、実際にイワナとセプロを見れなかった。近代化により種子島の谷も海岸も、その姿をかえつつあるのである。

三、南種子町でイワナとセプロを見る

二日目は南種子町にでかけることになった。下野先生によると種子島は北側より南側に古風をよく残しているという。南種子町では西海岸を牛野から南端の下西目まで集落ごとに聞いてまわった。

牛野 牛野の海岸に二つのセプロが残っていた。近くに住む中川スママさん（大正五年生まれ）によると、一つは広浜イツコさんが十年程前、もう一つは中川ツヤさんが四年程前に、いずれも個人でつくったセプロで、今は使われていない。セプロはそれぞれの家の前の磯の岩盤を利用しながら、石とセメントで補って浴槽をつくっている。セプロは腰が痛い時などに、石を焼いて浴槽の潮水の中に入れて温めて入った。一日に二、三回、十日ぐらい続けて入ったという。広浜イツコさんの浴槽は中に砂が詰まり確かめなかったが、中川ツヤさんの浴槽には今も焼けて赤くなった石が残っていた。石を取り除いても底までは浅く、中で横たわって入ったという。中川スマさんは入浴体験はないが、近くに住む人の中には、一緒にいらせてもらった人もいたという。

牛野には地域の人を利用した古くからのセプロがあり、それを利用してなくなって個人でつくるようになったという。牛野集落のセプロはエビス様を祀る巨岩の北側に自然にできた穴で、現在は波避けのコンクリートブロックで一部が塞がれている。穴は小さく、一度に二、三人しか入れなさそうであった。

大川 牛野の隣の中ノ塩屋の中峯健一郎氏（昭和三十一年生まれ）と同清司氏（昭和三十二年生まれ）によると、中ノ塩屋では大川のセプロに行っていたという。現在残る大川のセプロは老人会が町から補助をうけ二十年ほど前にエビス社の背後に新しくつくった。古いセプロはエビス様を祀る岩盤の横にできた自然の窪みを利用していたという。現在のセプロはコンクリートで浴槽と屋根、水槽をつくっている。大小二つ並ぶ浴槽は穴で通じていて、小さい浴槽に焼石を入れ、穴から熱い潮水を大きい浴槽に入れて温めたのだという。種子島の古い内風呂は浴槽と燃焼室をわけた鉄風呂で、その仕組みを真似たのであろう。台風で全体が痛んだため今は使っていないという。以前は老人の遊び場として、大川だけでなく、近在から老人が集まってきた。大川のように内陸からもセプロに入りに来る例はこの後たずねた木原等でも聞かれた。また、向方も五、六十年前までは、海岸に焚きにでいたという。

清司氏によると、頁岩はハエイシといって焼くと割れるので、砂岩の丸石を焼くという。焼け石が大きすぎると浴槽に移すとき大変で、一五センチ程の大きさがよいという。セプロは神経痛やリュウマチによくきいたという。なお、清司氏は子供のころ岩盤に溜まった潮溜まりに痺いところをつけて治したことがあったという。

立石 立石にセプロがなかったのは、立石の海岸がハエイシだけで、つくれなかったのかもしれない。隣接する大川に入りきっていたのであ

らう。

砂板 砂板にはセプロがかつてあったという。

木原 木原集落も海岸からは離れているが、海岸にセプロがあったと小坂ヒサさん（明治四十一年生まれ）に教えていただいた。自然にできたツボキ（穴）を少し掘り直したもので、石を焼いて投げ入れた。毎日弁当を持って行き、茶をわかつて飲んだ。夏間に通い、天幕を張って日陰をつくることもあった。入るときは裸で、男が多く、女は少なかったという。近くに小川があり、体を洗ったという。木原だけでなく、内陸の平野からも沢山入りにきた。隣の野尻からもきた。入りに来る人は薪を背負ってきた。

下西目 下西目にも海岸に自然にできたツボキを利用したセプロがあり、日高静一郎氏（明治三十三年生まれ）が子供のころまで使っていたという。入るのは爺さん婆さんで、自分達でわかつて、浅くはあったが二人ぐらい一度に入れたという。夏場に焚き、木を切ってきて立て、その日陰を休息所にした。セプロは満潮時に潮が洗う場所であり、次の満潮まで入れた。丸太を伐って燃やし、焼石は丸太に刻みを入れて薪で焼いて造った鉄で挟んで移した。四人から八人ほどのグループで焚いたという。下西目のセプロも築港工事で埋まってしまった。

静一郎氏の母親は二、三人と連れだつて平山へ温泉湯治にいらっていた。平山の温泉は傷やふきでものによくきいた。馬に夜具や食糧を積んで、二、三週間いらったという。

広田 南種子町の西海岸から、次には東海岸の広田にいらった。広田にはイワナとセプロの両方があり、西銘十市氏（大正十年生まれ）に案内していただいた。偶然の出会いではあったが、十市氏は七年ほど前に小学生を集めてセプロを焚いて見学させたり、現在もイワナを焚く世話をしており、最も相応しい伝承者であった。

セプロは砂浜に面した広田遺跡のすぐ南側の砂岩質の岩盤に掘られていた。大小四つのセプロツボキがあり、三つは身体浴用で、一つは手や足などの部分浴用のツボキである。部分浴用セプロは、工事の折りにけずられて今はない。

身体浴用と部分浴用の間に岩盤を掘りくぼめ、薪を燃やして石を焼いたりお茶を沸かす炉がある。炉で焼いた焼石は木原と同じ、丸太の鉄で移ってきた。焼く石は軟らかくて丸いドロイシで、硬いマイシは焼くので使わなかった。セプロの付近には水がなく、飲み水は薬罐に入れて持ってきた。休息所はなく、岩の割れ目に着替えを置いた。十市氏は子供の頃手を切り、このセプロでなおした経験がある。

イワナはセプロから南に四、五〇ぶほど離れた、海に面した道沿いにある。丘の根付けの岩盤に掘り、入口は狭く、奥はドーム状で広くなっている。イワナの前に建つ草葺きの休息所は後年移転したもので、以前は前の草原に籬を敷いて横になって休んだ。イワナの右上にエビスの小祠が祀られる。瀬戸内海の石風呂には薬師仏などが祀られ、入浴後に拝んだりするが、ここではイワナと関係ないという。

イワナの入口の前に板枠を置き、岩と板枠の間にガルイシ（珊瑚礁のかげら）を詰め、その上から赤土で塗り込めて密閉する。板枠より少し

大きめの木枠に竹をわたして稲藁を縛りつけた扉をつくり、板枠の上から被せて密閉する。室内の床は入口より七〇センチほど低くなっている。天井がアーチ状になっていて、天井は煤で真っ黒になっていた。

焚き始めには海水を汲んできて、イワナにふりまいて清める。室内の奥に焚きつけにする枯木と生木を置いて燃やす。おきになると煙が出なくなるので奥の一ヶ所に集め、おきのまわりに座ったとき尻が熱くならないようにカシワ（サジンの一種という）の葉を厚く敷きつめる。カシワが一番よいがツンナメの葉を使うこともあり、いずれも強い臭いがでるといふ。ツンナメは油気が多いので、焚きつけにも利用する。おきを囲んで五、六人がうずくまって温まり汗をだす。一度に一五分から二〇分ほど入り、二、三度入浴をくりかえす。今は、休息所の床の上に藁を敷き、横になって休憩する。

イワナは中断した時期があり、中断以前は年寄りが利用し、四〇歳や五〇歳で入るのは恥ずかしく、六〇歳ぐらいから利用した。男女混浴で、男は裸、女は腰巻きをつけた。イソポッター（古着を縫い重ねたもの）を着て入った。以前はおきを中央に集めて、おきを取り囲んで温まった。それだけ火にも近く、熱いためイソポッターを着たのかもしれない。ヒエヒキ（破傷風）や神経痛などによく効いたという。

四、再び西之表市へ

セプロは南種子町の西海岸ではどこでも利用されており、東海岸にもみられた。先に西之表市の東海岸の利用は知ることができた。西之表市の西海岸で確かめられれば、セプロは種子島全体の伝統的な入浴文化といえるのである。

下石寺 西之表字下石寺の「日本甘藷栽培初地之碑」から北へ一〇〇メートルほどの海岸にセプロが残っていた。セプロは道路脇の岩盤の裏側であり、道路からは見えにくくなっている。セプロは岩盤の上にセメントやブロックでつくり、脇の岩盤が自然の休息所にもなっている。石焼き場もセプロのすぐ脇にあり、岩が赤く焼けていた。セプロのなかには、大小の赤く焼けた焼石が残っていた。

洲之崎 洲之崎にセプロがあったことは、二人の婦人からうかがうことができた。海岸の先に中島があり、そこにセプロがあったという。

花里崎 花里崎に住む長野ヤスコさん（昭和四年生まれ）は、新港の南側の海岸に二つ並んでセプロがあったという。年寄りが利用し、第二次世界大戦中まで入っていたという。いずれも自然のツボキを利用し、潮が引いたあとに溜まった潮水に焼石を入れた。

このあたりでは戦後になって、霧島山麓の単人町の妙見温泉が神経痛によくきくからと、湯治宿に夜具を置いてかよう人が多かった。田仕事ですんでからいくことが多かった。セプロの利用から、温泉湯治にかわったのである。

美浜の磯にはセプロに使う石を焼いた跡と思われる、赤く焼けたところが点々とみられるという。

大崎 平原末治氏（明治四十二年生まれ）によると、大崎には二つセプロがあったという。一つは塩屋神社前方の字「塩屋の下」の海岸で、もう一つは南によつた字「ヤクシタ」の海岸である。

前者はクロヘー（第三期層）の岩盤を昔の人が掘り運めたもので、二畳ほどの広さがあり、深くて肩までつかれた。セプロ周辺の岩盤も休息できるように平坦にならしていた。末治氏が子供のころ、一、二度入るのを見たことがあるが、以後使われていない。流れ川が近くにあり、風呂上がりに体を洗ったのではないかともいふ。大広野からも入りにきていたという。

後者は自然のツボキを利用したものであった。二つとも現在は海岸整備事業によりなくなった。

大崎で戸数が三〇戸ほどのとき内風呂があるのは五戸ほどで、当時はオケプロ（鉄砲風呂）であった。風呂のない家は、薪を持って親戚などにもらい風呂に行った。内風呂の普及は五右衛門風呂（鉄釜）になった、昭和七、八年ごろだといふ。

戦後、年寄りは夫婦連れや仲間と湯治に行くようになる。戦前にも少しは湯治に行く人があった。種のとりにれがすんだあとで、妙見温泉や指宿の砂風呂に一週間から一〇日程いっていた。

以上が三日間のフィールドノートのまとめである。イワナはほとんど調査できなかったし、島全体を見ることを優先したため、個々の調査地では断片的な調査で終わっている。ただし、断片的ではあったが入浴と島の暮らしとの幅広い関わりや、入浴を通して暮らしの変化を見ることができた。地域に根ざした文化であったからこそ、生活文化の近代化や個別化が進むなかで、個人や行政、老人会などにより継承しようと努力されてきたのである。入浴文化を通して種子島のアウトラインをスケッチしたいという、当初の目的を果たすことができたようにおもふ。

五、これからの課題

フィールドワークのあと種子島を語る会の先生方と歓談する機会を得た。

下家尊先生からは地理学の立場から東海岸と西海岸で地質に違いがあり、セプロやイワナ、その他の入浴慣行に差がうまれる要因となっていることを教えていただいた。東海岸には二、三層の厚さの砂岩層が通り、広田ではその砂岩層を穿ってイワナやセプロがつくられているのである。

南種子町の東海岸には所々で硫黄を含んだ粘土ができる。中種子町との境界の大城の浜では二十番の黒田さんが鍋の上に風呂桶を据えたなかで海水をわかし、硫黄を含んだ粘土を入れて入らせていた。今熊野にも三十年ほど前まで個人が鉱泉をわかし、入浴客のための休息所もあった。

平山の広田と浜田の間の海岸にも二カ所鉱泉が出て、個人と町が経営していた。硫黄は切り傷によく効いたという。イワナとセプロに加えて鉱

泉の利用があり、複合的な入浴文化が構成されていたのである。また、石寺のイワナは十数年前まで焚かれ、玉石を積んで焼き、そこに潮水をかけて蒸気をたてて温まったという。

高重義好先生からは武部のイワナは床周りの溝に水を溜め、入浴中に体に水を掛けたと教えていただいた。イワナの温め方や入り方にも幾つかのバリエーションがあり、水と熱利用の複合的な入浴技術が展開していたのである。入浴文化に限らず水と熱利用の民俗技術を探る意味でも、イワナは興味深い調査対象といえそうである。

また、高重先生と松田誠先生からイワナとセプロについて、地元の文献を御教示いただいた。なかで、故川崎兎彦氏が「南島民俗」と「種子島民俗」において、ユアナ二カ所、セプロ三カ所の所在と入浴習俗を詳しく紹介していることを知った。川崎氏はイワナとセプロ以外にも湯治や内風呂、床風呂などにもふれていた。今回は、私自身に貴重な資料を十分に引用するだけの島についての知識がなく、今後の課題とせざるえなかった。

川崎氏の調査から約三十年を経て、現在施設も体験者も急速に失われようとしている。ただし、現在もなお薄れつつあるが調査は可能だし、入浴文化の研究もその後進展している。種子島の民俗研究は膨大な資料の蓄積があり、下野先生の研究により薩南諸島から日本、さらには大陸との広範な関わりのおかげで文化的な位置づけがなされている。今後はイワナとセプロを含めた入浴文化を、こうした先行資料や研究を踏まえて、種子島の生活文化の中で構造的にとらえることが必要である。九州や私がフィールドとする瀬戸内海との比較検討、さらには日本の南北につながる地域との関わりを考える必要もありそうである。同時に実験考古学的な手法で、実際に体験や科学的な計量を通して、入浴を文化的・科学的に解明し、今後の島の老人医療などにも活用してゆく必要がある。

私は種子島でのわずかなフィールドワークを通して、島の入浴文化の魅力と限りない可能性を直観した。だからこそ、種子島のイワナやセプロの伝統を今後も継承し、発展させてほしいと強く願うのである。そして、今がその最後のチャンスであることも、事実のように思えるのである。

今回の調査では地元伝承者や種子島を語る会の先生方、下野先生を団長とする調査団員の方々の御協力を得て、ひさしぶりに楽しい調査ができたことをこより感謝申しあげたい。最後に、種子島に私をいざない勉強の機会を与え、暑いなか三日間御指導頂いた下野敏見先生、三日間の運転の労をとっていただいた松田誠先生の御高配なしには調査はできなかった。学患にたいしてこより感謝申しあげる次第である。

(一九九六・九・一四稿)

「種子島のイワナ」



武部のイワナ
中央の木の下方にイワナが掘られていた。



広田のイワナ
休息小屋の隅柱の左に入口が見え、右上はエビス社である。現在南種子町の指定文化財になっている。



広田のイワナ
イワナの内部で、天井は焼けて黒くなっている。

「種子島のセプロ1」



牛野のセプロ
中川ツヤさんがつくり、満潮時に潮水が入る
ような位置が考えられている。



牛野のセプロ
岩盤を一部利用しながら石囲いしている。



牛野のセプロ
広浜イツコさんがつくり、セメントで浴槽の
形になっている。架設屋根をとりつけられる
ようにビニールパイプが4隅につくりつけら
れている。



牛野集落のセプロ
中央の岩の上にエビスが祀られ、右下のプロ
ックとの境にセプロに利用された穴がのこっ
ている。



大川のセプロ
コンクリートの屋根の下がセプロで、すぐ後
ろの岩の上にエビスが祀られている。



大川のセプロ
今は二つの穴が砂と小石で埋まっている。右
奥が上がり湯をためた水槽で、右にのぼる石
段の上に自然のセプロがある。

「種子島のセプロ2」



広田のセプロ
手前の小高い所が広田遺跡で、セプロは中央の小山の裾にある。



広田のセプロ
手や足などの部分浴用のツボキがあった位置をしめす。



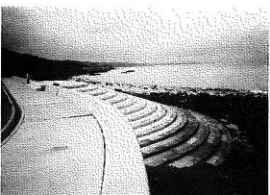
下石寺のセプロ
丁寧なつくりで、大小の焼石が中に残っている。



花里崎のセプロ
岩盤の窪みの自然のツボキ。



庄司浦のセプロ
左側の石の積み上げられているあたりにセプロがあった。背後に遠く見えるのは庄司浦の波止場である。



大崎のセプロ
塩屋神社の前方「塩屋の下」のセプロのあと。海岸の景観は急速に失われつつある。

稲作と儀礼

楠田 秀史

一、はじめに

種子島は、古い歴史と豊かな民俗文化を内蔵する島である。更に南九州から種子島を含む薩南諸島は、ヤマト文化圏と琉球文化圏の境界であり、日本文化の裂け目であるといわれる。このように日本文化を探る上で重要な位置にある種子島において、今回、民俗調査を行った。私のテーマは農業であるが、ここでは、まず、その背景となる風土や歴史について簡単にまとめ、次に農業、特に農耕儀礼について種子島の特色を探り、更にそれをヤマト文化圏と琉球文化圏との比較において、とらえてみたいと思う。

二、概観

1 種子島の風土

種子島は、鹿児島島の南方約一五度の海上にはば南北に浮かぶ細長い島で、低平な台地状の地形をなし、台地を浸食する諸川ぞいに大小の沖積平野が開ける。山地は少なく、しかも三〇〇呎以下で屋久島と著しい対照をなす。気候は鹿児島よりはるかに亜熱帯的で、それは植生に、農作物に特色をつくる。(註1)年平均気温一九・五度、年降雨量は二三五六ミリ。土質は淡褐色の粘土と黒ボコが主で、

地味はやせている。(註2)その他、台風や冬季の季節風の強い影響もある。このような風土のもとで農業も営まれるわけだが、現在の農作物をみると、水稲・サトウキビ・甘藷が主で、輸送園芸や肉用牛・乳牛の畜産も盛んであるようだ。その他、ボンカン・タンカン等の生産も伸びている。ただ水稲については、私が調査した範囲内では、ほとんど自家用だそうで、全島的に畑作農業の比重が高いといえそうである。

2 農業の変遷

種子島の農業が、古代から現代に至るまで、どのような変遷をたどっているのだろうか。「中種子町郷土誌」を参考にしながら、簡単にまとめてみたい。

種子島における水稲の歴史は古く、中種子町地田の鳥ノ峯遺跡出土の靱跡瓦葺土器などから、少なくとも弥生時代にさかのぼるといわれる。また、種子島の農業についての最初の記録と思われる日本書紀に、「……梗稲常豊、……」とあることや、南種子町広田遺跡から梗稲が発見されていることから、すでに梗稲栽培を重んじていたであろう。しかし梗稲は住民がその年一年食うに必要な程度の量で、かつ、水田以外に一定の土地を私有せず耕作適地を転々と移る原始的農業であった。二二〇一年頃まではこのような原始的農業から、原始共同体的な牧畜農業に入り「住民僅かに耕す」程度となった。

平信基が初代島主となってからは、牧畜農業の拡充に重点をおき、各種物産の生産に努力をし、更に第六代島主時充は、これまでの原始共同体的な牧畜に、生産目的な方策をとり、牧の発達をうながし、それに伴い農業もしだいに発展をみるようになった。しか

し度重なる災害はどうしようもなく、天保年間に至るまで「経を誦して祈る」より他になかった。この頃から、養蚕、養鶏、牛酪製造などの多角的経営のさざしが見られるようになった。明治維新と共に土地私有が促進されたが、土地所有によって上納が重くなることを恐れ、「食うだけ」を求めて耕作地を求める原始農業を気業としていたが、地租改正とともに、私有地を自作することにより、ようやく島民としての生業を考えるようになり耕種方法も改良され、水稻耕作は、これまでのホイトウによる整地実種散播から、明治二十六年の馬耕法の導入により一大変革をきたし、農法自体をも改革した。

大正・昭和初期は、サトウキビ栽培の普及を除けば、本土と大差なかったが、生産力が著しく低位であったため、島内の食糧自給が出来ず、他から供給を受けた。水稻について、その原因は、ほとんど毎年の台風被害、害虫の被害であり、それらを守るために、昭和十三年頃から早期栽培に切り替え、これが急速に普及し、収量は飛躍的に向上するに至った。また、戦後の農地改革により、マキ共有地は、ほとんど崩れ、農地としての私有財産制度が確立した。

以上、種子島の風土と農業の歴史を見てきたのであるが、種子島の農業は、古くから、様々な変遷を経て現在に至っていることが理解出来る。他にも、マキとホイトウの関係や、共有地・耕作地としてのマキの問題や、それに伴う社会関係など詳細に見ていかなければならないが、ここでは省略しておく。

次に、水稻栽培と、それに伴う稲作儀礼を見てみよう。

3 水稻栽培

種子島の水稻栽培について述べる場合、やはり、昭和十三年頃か

ら導入された早期水稻栽培が重要であろう。それまでの晩期栽培では、台風や害虫の被害がひどく、どうすることも出来なかったが、昭和七年、鹿児島農事試験場熊本分場が設置され、それまでの被害を避けるために早期栽培のテストがはじめられ、昭和十三年頃から全島的に実施され、それは急速に普及したのである。これによって、収量の増大はもちろん、水稻の作業手順、技術、栽培層に変化が現れたのである。

現在は早期栽培で、田植は三月末から四月初旬の間に行われ、収量は七月中旬から八月中旬までには行われる。

戦前、晩期栽培では、田植は五、六月頃で、収穫は十、十一月頃であったので、台風の被害が避けられなかったのは想像に難くない。

① 種子籾の保存

種子籾は本宅の方に「カマス」(駄)に入れて保存する。古くは「クブキ俵に入れ家のソラ(天井)に上げていた。」(註3)

② 種子漬け

種子播きの二週間位前に湧き水につけておくと一週間位で発芽するという。

③ 種子播き

昔は苗床に山から柴を取ってきて、それを踏みつけて肥料にした。骨粉を使って、種を播いたと聞く。苗床は一畝位の短冊型で、三〇センチ、溝を開け、土を盛るといふ。西之表市市上の溝では、大正時代まで、直播をしていた。「ネズンメ」といふ。ネズンメとは、チョッポウエ、ツボマキ、チョボウエなどといって指五本のうち、親指、人差指、中指三本で堆肥と種子籾を混ぜたのをつかみ(ネズンで)、後せざりに播くのでネズンメという(註4)のであ

る。今は苗代もせずにハウスで育苗する所が多い。

④ 耕 耘

昔は馬に鞍をつけ、犁をひかせ耕起し、水を入れ「モーガ」(馬糞)で土を細かく砕き、代よみを行い、「エフリ」で平らにして水を干し、もう一度、犁ですき、水を入れ、ホンシロにしたと聞く。今は耕耘機を使うが、エフリは現在でも使用するという。

⑤ ホイトウ

昔はマキバに馬を何頭も野放ししておき、シロアケの時に連れてきて、田に馬を二頭または、三頭入れ、人は真ん中に立ち、たづなを持ち、むちでうちながらぐるぐる回す。こっちの方がしまったと思えばあっちの方に移動し、人間が移動すると馬も移動する。回り方はどうでも良かったと聞く。

ホイトウは犁導入以前の古い田耕法を示し、非常に興味深い。

⑥ 田 植

昔は親戚同士や近所同士でイーをして田植をした。縄に印をつけ両端に引っぱり、一度に一〇人位並んで植えたという。正条植えの方法であった。それ以前については、「明治三十年代前半頃までは、苗おろしには田植綱を使用しないで、数人並んで後退しながら競争して植える方式であった。」(註5)今は機械植になり、家族労働で十分であり、イーはしない。イーとは本土の結で労働交換のことであり、結返しをイーナシという。田植期間は十日位で、今日はこの家、明日はあそこの家というふうにイーをしたと聞く。

⑦ 除 草

田植から二週間位で一番草といって、素手で取ったり田車で土をまぜたりした。更に十日位してから二番草といって手で取る。せめて一ヶ月位までにはすまずという。今は薬(除草剤)もまく。

⑧ 除 虫

昔は、油を竹の筒に入れ、田にまき、長い竿や竹でウシカなどの害虫をはらい落として殺したと聞く。

⑨ 収 穫

稲刈りを田刈りともいうが、鎌を使用し、イーをした。今はバインダーを使い、家族労働で可能な家もあるが、やはりイーをする所は多いようである。稲刈り後、天気の良い日に田に広げ、二日位干したり、五日位掛け干してから脱穀をする。脱穀は昭和二十年頃までは、千歯こぎを使い、その後、足踏み脱穀機を、今は機械を使用するという。足踏み脱穀機は昭和二年頃普及し(註6)、現在でも使用する場合があると聞く。

⑩ 労働の問題

イーは、昔は田植、刈り入れなどを中心に農作業それぞれにあつたようだが、近年、動力機械の導入により、家族内労働で十分となり、その関係は希薄になりつつあるといえると思う。しかし一方では、基幹作物のサトウキビの労働などは、イーも盛んであるようだ。将来、もっと機械化が進み、イーのような相互扶助的な関係も希薄になっていくのだろうか。

西之表市安納の峯で聞いたのであるが、この集落では、戸主さえも出稼ぎに出る場合が多く、後継者の問題も深刻だという。現在は、そういう家の田畑を何年間かの契約で預り、大々的に事業をする農家もあるようである。どの程度の問題として受け取めればいいのか、私に判断は出来ないが、そういう一面もあるとしてとらえておきたい。

表1 雇用労働受入れ農家数と人数

(農家数:戸, 人数:人)

	農 業 臨 時 雇				手間替え・結		手 伝 い	
	雇い入 れた 農家数	延 べ 人 数			農家数	延べ人数	農家数	延べ人数
		計	男	女				
西之表市	571	21,443	4,163	17,280	785	17,501	470	7,858
中種子町	570	25,331	4,216	21,115	471	7,230	302	4,028
南種子町	444	10,943	3,038	7,905	267	4,709	376	5,552

表2 農作業をよそに請負させた農家数と請負させた面積

(農家数:戸, 面積:a)

	実農家数	育 苗		耕 起		代 か き		田 植	
		農家数	面 積	農家数	面 積	農家数	面 積	農家数	面 積
西之表市	591	41	739	196	3,621	197	3,372	541	10,842
中種子町	475	24	492	108	2,312	121	2,596	381	9,767
南種子町	210	49	1,499	141	5,390	124	4,270	136	4,272

防 除		収穫・脱穀		耕起から脱穀ま での作業を請負 させた農家数	育苗から脱穀ま での作業すべてを請 負させた農家数	水 稲 作 以 外	
農家数	面 積	農家数	面 積			農家数	面 積
63	1,322	443	8,346	40	23	536	21,291
32	740	335	7,505	23	14	1,085	54,652
29	841	126	3,927	21	16	91	4,865

表1・表2(註7)

4 稲作儀礼

① タネマキ

「苗代に種をまく時に、水口に、注連縄、焼酎、米などを供え、種もよく育つようにと折る。」これは西之表市国上湊の例だが、「南種子町平山では彼岸の中日に、水口の近くの田に笹竹を立てて、家に飾ってあったオーバンと正月十四日に使った穂垂れ引きの茅、柳の木の箸、オミキ、餅を供え、種子粃を少し播いて拌む。」(註8)などの例と比べると、だいぶ違ふ。資料の質の差もあろうが、特に目立つのは、最初の例は注連縄で、平山の例はオーバンと穂垂れ引きの茅を供えるという点である。これは、小野重朗著『農耕儀礼の研究』の考えに従えば、「秋のカリホを材料として正月に稲穂を作り水口に置き、秋から冬をへて失われようとする稲魂を苗に継承させるための儀礼」と、「正月のめでたさにあやかかって苗がよく育つようにする儀礼」の違いであり、合理化され単純化された変遷であると考えられる。

② 田植期——田植前に祭りはしない——全島的

③ 田植終了後——「サノポリ」

「イ」をした人が集まり、焼酎や御馳走で慰労会をする。この例は単なる慰労会に終始し、田植前に祭りはしないことを考えあわせて、本来の田の神送迎の意味は失われているようである。

④ 虫供養——西之表市国上湊の例

「四年に一回、旧十月二十五日に村落の入り口の供養の石で、神官を頼んで虫供養をする。」この祭りは北種子(西之表市)だけやっていて、中種子、南種子ではないということである。(註9)

⑤ 収穫期(刈)——「刈り穂」

安納峯では刈り始めに水口の稲を三株、四株、五株位刈りつけて

て、五枚、田があれば五ヶ所どころでも掛けるのを「刈り穂」という。住吉、深川では、刈り始めた水口の稲を三株か五株取ってきて火の神に供える。同じく深川では、刈り入れ時、田の水口から三株刈り、それを「田の神の稲」といい、大事にとっておくという。国上湊では、刈り入れ時、七株位取り、それを水口にまつるのを「刈り穂」という。

以上のように、掛け供える場所や、数は違ふが、共通するのは、刈り始めの稲を大事にし、それに特別な意味をもたせていることだろう。

⑥ 収穫期(刈)——「田の神祭り」

田から稲を刈ってきて、その米と古い米を混ぜあわせて炊き、にぎり飯にして、それを神棚、仏壇にあげて、皆で御馳走して食べるのを「田の神祭り」という。同じく安納の峯の例で、新しい米で御飯を炊き、水口の違う田があれば、その水口の数だけ、にぎり飯を作り、床の間に供えるのを「田の神祭り」という。国上の湊では、刈り入れがすんでから餅をついて「田の神祭り」をする間く。

この「田の神祭り」は、新穀を神に感謝する意味が考えられ、新嘗祭といえる。

⑦ 刈り入れ終了後

「イ」やカセイ(加勢)の人達に「ゴクローブン」といって焼酎や御馳走で慰労会をする。これも「サノポリ」同様、慰労会程度の意味しかないと思われる。

以上、稲作栽培に伴う稲作儀礼について述べてきたが、次は正月の行事について、述べてみる。

5 正月行事——予祝儀礼

予祝儀礼とは何だろうか？「日本民俗事典」によると、「多くは年頭に、来るべき一年間の農作業や農業生活の行為をまねて行う模装儀礼。したがって実際の農作業よりは、はるかにやく行われ、主として稲作の開始に先だって農事を円滑に行うための占いを伴う、農業開始の儀礼である。……正月に集中してみられるが、農業に伴う農民の願望を象徴した模装儀礼であるため、実際は農業の開始時期と不可分に行われたものであろうが、農神が祖霊や歳神と融合した形として正月という時期に迎えられ、神力をあおいで予祝するという複雑な信仰形態を伴っている。日本にみられる神観念の複雑さに由来しているといえよう。」とある。そうした神観念をとらえることは難しいにしても、とりあえず種子島の正月行事の中で「予祝」の意味をもつものを、取り出してみよう。

① 「日起こし」

正月二日の晩、松の木を切って作った臼に、米を一升位と餅を入れ、杵も添えて土間に置いておく。青年たちが来て「祝い申そう、年のはじめに、年とり男が米つきはじめる時は、東こうさの峯にたちたるおのえの松で、臼切りて、杵切りて、つかせたまえ、いせごめ、いせごめ」と唱え、米を三回ずつくまねをして、うすのふちを三回たたいて、餅をもつて帰っていく。今ではしない。

これは臼の使いはじめであると共に、来訪神としての性格をもつかがわせる。「予祝」というより、「来訪神」としてとらえた方がいいかもしれない。しかし、どちらにしてもこの行事は、正月の縁起ものとして受けとめられていたのだろう。私の調査範囲では、今はしない例が多く、消滅の傾向をたどっている。これは、物質文化の向上により、臼を使わなくなっているということ、餅つきにしても

餅つき機を使ったりするということが原因があるのだろう。

② 「畷入れ」

○ 畑の畷入れはしない所が多く、採集出来たのは、住吉深川で一軒のみ。

○ 正月四日「畑の畷入れ」

ユズリハ、モロバに餅をつみ、それを畷にくくりつけ、畑にもつていき、それを畑に立てて畷で土を寄せ、その前に焼酎・米を供えて「畑の神様まつりませ」という。

○ 田の畷入れは、比較的する所が多く、今でもやっている。

○ 正月八日「田の畷入れ」

(ウ) 安納の峯の例——正月に飾った餅とタイダイと酒と水の子（米を水で洗い清めたもの）と、新しく山から取ってきたウラジロ、ユズリハを持ち、田の水口で供え、「新しい年の畷入れに來ましたから今年もかふうに五穀豊穡を」と祈る。

(イ) 南種子町西之本村——正月四日に田の畷入れ。オミキと米を少し皿に入れ、正月の餅をもつて苗床の水口に供え、三回畷を入れる。

(ウ) 住吉深川——正月十一日に田の畷入れ。ユズリハとモロバに餅をつみ、それを畷にくくりつけ田の水口に行き、焼酎、米を供えて、「田の神様にあげます。ヒラキの主様、水神の神様にあげます。」と唱える。

以上「畷入れ」の事例をあげてみたのであるが、共通して言えることは、田の畷入れは多く、畑の畷入れはしない所が多いということである。これは、畑作より稲作の方が重要であるからととらえるべきであろうか。畑作文化が基層であり、稲作文化はその上層にあるという仮説に基づくと、右のような現象は、畑作文化から稲作文

化への移行の過程であり、畑作文化の衰退であるといえるかもしれない。

③ 「コノミヤジョー」

正月十四、十五日に餅をつき、それを小さく四角に切ってヤナギやコヤスギの木の枝に刺す。それをコノミヤジョーという。南種子町西之本村では、ダゴサシという。それを家の四方の隅々に一枝、一枝飾る。西之表では「蚕のまゆを意味する」といい、南種子では「作った稲もこんな風にたくさん実ってくれ」という意味だと聞く。また「コノミヤジョー」は、門口にもさしておいて、それを子供たちが、祝い歌を歌い、餅を取ってまわった。

④ 「ホダレヒキ」

南種子町西之本村では十二月三十日に神棚にあげておいた刈り穂の餅をむす時の湯気にあてて清めることをホダレヒキというが、他ではほとんど正月十四、十五日にする。刈り穂を正月十四日に、ひきうすでひき、スクボ（初敷）をとり、それをバラの上に広げておく。十四日にコノミヤジョーにする餅をせいろに蒸しておき、その上で「米の穂もブラブラ、粟の穂もブラブラ、カライモもゴトゴト」と三回くりかえす。カヤの葉先を、かまに炊いたどろどろした御飯につけ、それをバラに広げておいたスクボにつけ、こんなふうになくさん実るようにと祈る。

秋の刈り入れ時の刈り穂を正月までとっておき、小正月に稲の穂が垂れる姿をつくり、更に、それをタネマキで、水口に供えるという三段階の関係がみられ、このことは、秋に失われる稲魂を刈り穂として残し、小正月に稲魂の象徴であるホダレに保ち、更にそれを新しく芽ばえる苗にひきつくという稲魂の循環を示しているといえる。これはコノミヤジョーにみられるような予祝としての意味だけ

でなく、もっと深い意味の稲魂継承の儀礼といえる。

次に稲魂の循環ではないが、種子島独特の予祝行事であるチイナビキも注目される。「チイナビキは種子島でも平山だけにある行事で、若水迎えで泉の神に祈ったのち、秋の豊作を予想して稲穂の垂れなびくさまを氏子自ら演ずる行事である」（註10）これは全国的にみても、特異な予祝儀礼として注目できるだろう。

6 まとめ

以上見てきた種子島の稲作儀礼の特徴をまとめてみる。

種子島の稲作儀礼は、正月に重点的にみられるようだ。前項で記した以外にも農具祝いや種子祝賀なども正月にみられる。これらは、ほとんどヤマト文化圏各地と共通するようである。ただ、ホダレヒキやチイナビキが特異である点、歌入れが畑と田の両方行われる点、本土に見られる田植前後の祭りが顕著でない点などに違いが認められよう。

一方、琉球文化圏を見ると、奄美のシヨチュウガマなどは小屋の中に稲霊を招き寄せ、畦に倒れるほどの稲の豊作を祈る行事（註11）であるが、これは平山のチイナビキと共通点が見出せるのではないか。その他、全般に田植に伴う儀礼が発達していない点、シキユマにみられる稲霊信仰など、種子島との類似性を指摘出来るのではないだろうか。

非常に、大雑把ではあるが、種子島がヤマト文化圏と琉球文化圏との混合地帯の一つであり、日本文化の裂け目であるといわれるのも、ぼんやりとだが理解出来たように思う。

種子島の水稲栽培、稲作儀礼にも、少しずつ変化が現れ、消滅化の傾向も見られる。機械化が進み、それに伴う社会構造の変化、儀

礼の単純化や合理化などが、原因としてあげられそうである。しかし、その変化や消滅に対しても、我々は目を向けていかなければならないであろう。

註1 『鹿児島大百科事典』（昭和五十六年、南日本新聞社）

註2 『西之表市百年史』（昭和四十六年、西之表市）

註3・4・5・8 下野敏見著『種子島の民俗Ⅰ』（一九八二年、法政大学出版局）

註6 『中種子町郷土誌』（昭和四十六年、中種子町）

註7 『鹿児島県の農業——一九八五年農業センサス結果——』（鹿児島県企画部情報統計課）

註9・10 下野敏見著『タネガシマ風物誌』（昭和四十四年、未来社）

註11 『黎明館企画特別展「田の神」展示図録』（昭和六十二年、斯文堂）

その他の参考文献

○ 小野重朗著『農耕儀礼の研究』（昭和四十五年、弘文堂）

○ 下野敏見著『ヤマト文化と琉球文化』（一九八六年、PHP研究所）

○ 大塚民俗学会編『日本民俗事典』（昭和五十三年、弘文堂）

農具と農鍛冶

姫野智雄

第一次大戦後から急速に発展・普及した動力機械のため、現在では、手労農具の使用、手労農具に対する人々の考え方は大きく変わってきている。

耕作用具・収穫用具・脱穀具・運搬具と、これら全ての農具が機械化されている。しかし、全ての農家がこれらの動力機械を持っているわけではない、また、全ての農家が今まで使われていた手労農具を捨ててしまっているわけではない。手労農具による作業は決してなくなったわけではなく、動力機械ではできない仕事、場所などでは決して欠くことができない。

動力機械の導入が、農業生産の増大、生活の変化などに大きな影響を与えたように、かつて、手労農具の発展は、鉄鍛の普及のように、農業生産、生活の変化、人々の考え方に大きな影響を与えてきた。そして、今日の農作業に中心的役割をはたしている動力機械の登場にも大きな影響を与えてであろう。これらの手労農具から動力機械への変遷は、人々の生活に大きな変化を与えてきた。これらの手労農具に対する人々の考え方の変化を調べることで、生活の変化（文化の変化と言ってもいいだろう）を知る第一歩を踏み出すことができると思う。

種子島での調査では、これらのことに留意し、農具とそれを製作した農鍛冶について調べ、全国的にも年々減少している農鍛冶の現

在の姿も明らかにし、消滅する恐れさえある農鍛冶という農具生産者の生活の変化からも現在の文化を調べ、これからの在り方をも見ていきたいと思います。

ヒラグワ

写真①は西之表市花里崎の榎本さん所有のものである。柄の長さ



① ヒラグワ
(西之表市花里崎 榎本氏所有)

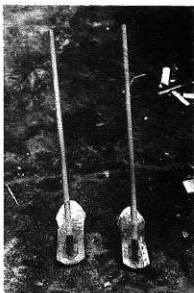
が一〇四〜一〇六寸、刃の長さは五三〜五五寸、角度は五〇度程度で、柄の長さは現在使われているものと大体同じではあるが、刃の長さ、重さなどでは現在のものより大きい。ヒラグワの中で特に大きいものをノウチグワと呼び、刃の長さが七〇寸のものもある。

現在では使用する人もなく、もちろん作る人もいない。昭和の初め頃までは、製造していて、二十〜三十年程前まで修理を頼まれたそうである。刃金と台木の接合には、特別な技術が必要とし、たいていの場合、大工の人たちに頼んだそうである。鍛冶屋での刃金の工程もかなりの技術を要し、一日一丁〜三丁ほどしか製造できなかった。

ったそうである。

主に、ヒラグワは引き鍬としての使い方をしていたようだが、ノウチグワのような重い鍬はその重さを利用して打ち込むというように打鍬としても使われていたようである。

ヒラグワ (改良鍬)



② ヒラグワ (改良鍬)
(西之表市安城下之町
徳永只継氏所有)

前述のヒラグワの台木(ヒラ、フロ)の部分も鉄にしただ金鍬のことで、この鍬が出はじめの頃は、改良鍬と呼ばれていたこともあったようであるが、現在では、ヒラグワと呼ばれ、ただ単にクワと呼ぶ人もいる。

形状は、前述のヒラグワの形を継承しており、クサギリ・サキトギリ(図①参照)などの特徴が残っている。柄の長さは一〇〇〜一一〇センチで、刃の長さは三八〜四四センチ、刃と柄の角度は四〇〜四五度で軽く扱いやすい。

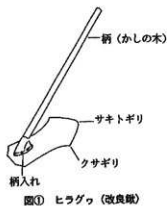
前述のヒラグワの改良として普及した鍬で、どの農家を見ても必

ずある。動力機械にその主役を奪われてはいらぬもの、ヒラグワを必要とする場所はまだまだ残っている。主に機械の入らない所、うまく出来なかつた所などを。うねたて、中耕をする時に使う。畦ぬり、畦切りに使用する場合もある。主に引鍬としての使い方をしているが、収穫の後こなす作業のときに打鍬としての使い方をしている。こなすとは、いったん鍬を打ち込んで、引いて、横に返すという、うねをつくるのと同じ様な作業である。写真③は横に返している所の様子である。しかし、このような作業も今では機械でやってしまうので、このような作業をやる場所も限られている。



③ こなす時の横にかえしている動作
(西之表市大花里 清水氏)

昔は、一日の農作業から帰ってきた時には、ヒラグワなどの鍬は、かれ草と竹べらできれいに泥を落し、さらに機械油で軽くふいて、鍬のためにつけておく。鍬かけにかけてしまっていた。しかし、今では、も



図① ヒラグワ (改良鍬)

う大抵の農家では、水で洗い流すだけで、他の農具と同じように置かれることが多く、鍛をかける様なことは最近少なくなってきたようにである。

ヤマグワ (カイコングワ)



④ ヤマグワ
(西之表市安城下之町)
徳永氏所有

細身で厚刃の鍛である。柄の長さはヒラグワと同じ位で一〇〇、一〇〇、刃の長さは三二、二五寸である。柄と刃の角度は、八〇度位でヒラグワとは違って打鍛であることがすぐわかる。カイコングワとも呼ばれることで分かる様に開鑿の時に使用される。田では使用される事はなく、畑で使用される。畑でも主に小石などが多いところなどで使用する。また道路の側溝を作ったりする時などにも使用される鍛である。

この鍛も、どの農家でも使われている。特にサトウキビなどを栽培しているところでは、なくてはならないものである。

キビグワ (オーギグワ)

ヤマグワを小さくした様な形をしている。サトウキビの収穫の際、使用される鍛で、サトウキビ(オーギ)を切りたおすのに使用する。柄の長さは四四、四七寸、刃の長さは一四寸、角度は八〇度である。

サトウキビの特産地である種子島では、この鍛も、サトウキビを栽培しているところはもちろん、そうでないところでも、ちょっとしたことに使うようである。

備中鍛

普通、備中鍛と言えば刃が三、四本に分かれている鍛を思い浮かべるが、ここで言うものはそれではなく、刃先が丸くなってなく刃が長方形の形をしたものである。柄の長さは一〇三、一〇五寸、刃の長さは三八、四〇寸、刃の幅は二、二、三寸、刃と柄の角度は四〇、五〇度である。主に畦切り、畦ぬりに使用される。現在ではヒラグワと同じような使い方もいる。一般に種子島では土壌との関係もあり、使い分けている人もいる。一般に種子島では土壌との関係もあり、クサギリ、サキトギリの付いているヒラグワのほうを使用するようである。

以上、最初に述べたヒラグワを除き、他の四つの鍛は、現在でもよく使用され、動力機械の補助、あるいは動力機械そのものをよせつけずに活躍している。他にも鍛の種類はあり、現在ではほとんど堆肥をかえずときに使われてしまっているミツマタ、工所用として

使用される一寸グチ、そして今回実際見ることはできなかったが、ヤマイモホリなどがある。

エブリ

田をならす農具で、シロかきの仕上げに使う。自家製のものほとんどで、柄の長さは一定してはいないが、一一〇〜一五〇㌢、板の長さは九〇〜一〇〇㌢、幅は一三〜一六㌢であった。田の表面を均一にするために使用され、押して使用する。現在ではほとんど使用することはなく、小さい田などには使わない。写真⑤のものは杉



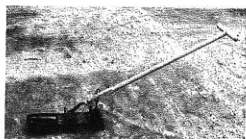
⑤ エブリ
(西之表市安城下之町 徳永氏所有)

でつくられており板の下の部分がすり減っている。

本来の使用目的とは違いますが、モミカキの作業の時にモミをならす道具として使用されることがある。

タオシグルマ

水田での中耕除草機として用いる。現在では除草剤などの使用により、使用されることは少ないが、まだ売られている。



⑥ タオシグルマ
(西之表市現和下之町 榎本氏所有)



⑦ キビタオシ(左2つ) カマ(右2つ)
(西之表市現和下之町 榎本氏所有)

キビタオシ

サトウキビの収穫の際使用する農具で、キビグワと同じ目的の農具である。柄の長さは四六㌢、刃の長さは一三㌢、刃の幅は一〇㌢である。キビグワを使用する人もいれば、このキビタオシを使用する人もいる。それぞれ使用する人の好き好きであるが、キビグワのほうが使用している人は多いようである。

カ
マ

ただ単にカマと呼んではいるものの、サトウキビ専用のカマである。柄は一五呎、刃は一三呎程の長さである。刃の先の部分が二股に分かれている。この分かれている部分で、切りたおしたサトウキビをさきむようにして、葉を切り落とす。

以上、採取した主なもの、特に現在も使用されているものを挙げてみた。

前にヒラグラ(改良鎌)のところでも述べたように、農具に対する扱い方が昔に比べると、かなり複雑になっているようである。例えば、鍛を農鍛冶に、修理に出すと言う人はかなり減ってきている。機械が入ってきて鎌の役割が小さくなる以前には、一年に一回の割合で修理に出し、五、六年ほど使用していたものが、現在は、修理にも出さず二、三年ほどしてダメになれば、買いかえてしまうといった具合である。動力機械の導入により、人々の手労働具に対する考えが変わったのは確かで、さきの例もその影響であるの間違いないであろう。と同時に、修理に出すようなめんどくさいことはせずに、いっそのこと買ってしまおうと思えるほど生活が豊かになったのも確かであろう。

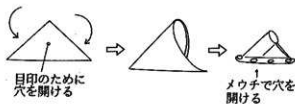
動力機械の導入により、手労働具の経済的価値が失われつつあるのは確かである。またその農具を作る農鍛冶そのものがなくなっている。いずれ消滅することが推測できる農鍛冶の現状はかなり厳しいものとなっている。以後、農鍛冶の技法を見ていきたいと思います。この技法もいずれ消滅していくであろう。

種子島は古来良質の砂鉄の産地で、種子鉄に代表されるように、鍛冶技術の高度なところである。古くからのすぐれた技術と良質の砂鉄の産地であることを背景に、現在その数は少ないものの立派な種子島独自の鍛をはじめとする農具を製造している。西之表市には現在、二つしか農鍛冶が残ってなく、今回、野平農具製作所のほうを詳しく調べてみた。

鍛を作る場合に、金属で構成する部分は、地金と刃金である。野平製作所の場合、福岡の工場から厚さ約三ミリ、幅一二呎、長さ四〇・五呎の地金をとりよせ、その地金の上に大豆ほどの大きさに割った鋼金をのせ、火床で加熱する。しばらくすると、地金の上にのせた鋼金だけが赤く溶けてきて、溝のような状態になる。これを刃先になる部分にまんべんなく流していく。この時、鋼金の量が多かったりした場合(めったにないことではあるが)、ホウキと呼ばれるウチボウキと同じようなもので、はきおとされる。

刃先にまんべんなくひろげたら、これをさましてから、うががえしハンマーでたたき、形を整える。このとき、ほぼ完全な形にしておく。次に柄入れを行う。

柄入れの部分(図②参照)は、二等辺三角形になっている鉄を折りまげ、柄入れの部分の形をつくり、目打ちと呼ばれる道具でリベ



図② 柄入れの部分の作り方

ツトの部分の穴をあける。

刃に柄入れを、リベット六個でしっかり固定したら、火床で加熱しながらたたく。この時に形はできている。そして、やきを入れる。この時の加熱の具合で、やきが良くなる、悪くなるなどと言う。地金と刃金である鋼金では、収縮率が違うのでやきを入れると多少形がくずれる。これをハンマーで軽くたたいて形を整える。次にグラインダーで刃を研ぎ、柄を入れると、出来上がりである。

上のような技法を、野平氏はオキザキ(置先)と言っていた。

鋼金は、砂鉄を溶かして、固めてつくった鋼などで、旧家にあるのを廃品回収業者に頼んで集める。この鋼金はツクと呼ばれ、高炭素の鋼鉄である。地金は極軟鋼であり、ツクの方が溶融点が高いので、オキザキという技法ができる。ツクは、金床の上でワラにくるんで破片が飛ばないようにして割る。その際に、その破面を見て、白味で、不純物が入っていないものを使い、うす黒くねずみ色を帯びて不純物が入っているものは使われない。

オキザキの技法で作られた鍔は、地金が極軟鋼でやわらかく、鋼金の鍔はかたく強いために、使い込んでいくと、刃先の地金の部分が減っていくために、刃先が鋭く尖がっていく。

修理をする場合は、ほとんどが、刃先に鋼を付け加えるというものである。個人的に、野平氏のところを持ってきて頼む、こうすれば、何年でも使えるとの事である。

出来上がったヒラグワの柄の長さは一定しており一〇五サ、刃の長さ四三サ、クサガリの部分の幅一三・五サである。全てが勘の作業であるので完全に同じ形とは言えないが、この数値が大きくかわることはない。一見しても形は全く同じに見える。

このオキザキの技法はヒラグワの製作のときのみに使われる技法

である。また作業は全てが勘で行われ、ツクの量などは、めったに多すぎたりすることはないし、加熱する時の加減の仕方失敗することはない。まったく熟練された技術である。

ヤマグワなどの鍔には、このオキザキの法は用いられず、鋼は、工場に頼んでとりよせたものであり、鉄の粉と工業用う酸を混ぜた、てつろうと呼ばれるものを用いて鋼を付ける。

出来上がったヤマグワの刃の長さは二五サ、刃の幅一二・五サである。

野平製作所では、ヒラグワの製造が八割ほどをしめ、ヤマグワ、キビグワが次に多い。ミツマなどの鍔ももちろん作るが、数は少ない。また、特別に頼まれれば、どのような形のものも製作してくれるそうである。

野平農具製作所で作られた鍔は、主に農協におろされ、小売価格は、ヒラグワ二、九〇〇円、ヤマグワ三、三五〇円、キビグワ一、二〇〇円、ミツマ二、九〇〇円だそうである。修理をする場合は、もちろんその程度にもよるのだが、たいてい一、四〇〇〜一、八〇〇円程度でしてくるそうである。

野平農具製作所としては、野平隆信氏が現在二代目として活躍されていらっしゃるが、もとは、中種子のほうに弟子入りして、そこから西之表市に出て来て、仕事をしているそうである。現在使われている技法はもともと中種子で習得されたものであるらしい。

野平氏のところでも、後継者がいないことをなげいており、せめて、オキザキの技法だけでも残しておきたいと言っておられた。先ほども述べたように、農耕冶の仕事は勘が重要な位置を占めている。この勘は、もちろん経験によるものであってそう簡単に習得できるものではなく、かなり厳しいそうである。少なくとも五年はか

かるだろうと野平氏はおっしゃっていた。

オキザキの技法が発展してきたのは、やはり種子島の良質の砂鉄のおかげであろう。昔から、その点においては、かなり発達していることがうかがえる。

このように、種子島の農鍛冶の技法は、その土地の特質を生かしたものであるが、その需要の減少、後継者がいない事と相まって、消滅の危機にさらされている。西之表市にあるもう一つの農鍛冶に永浜農具製作所があるが、ここも現在後継者がいず、消滅の危機にさらされている。

農鍛冶自身時代の流れと承知し、自分で最後であることにあきらめている状態である。農鍛冶自身、農業がある限り、鉄の利用はなくなるまいとわかっていながらもどうしようもないのが現状である。ヒラグワ（昔のほう）の時代から、ヒラグワ（改良鉄）にかわり、ますます農鍛冶がふえるであろうと思つたのもつかの間で、動力機械の登場により、ひと昔まえまでは多かつた農鍛冶も、現在では消滅寸前である。

容易に予測されるように今後、農鍛冶はなくなり、生産コストの合理化を目指す、大量生産方式での鉄がこれからは増えてこよう。つまり、種子島独特という鉄も、徐々になくなっていくだろう。

以上のように、人々の手労働具に対する考え方はかなり大きくかわっている。

このことは、動力機械自体にも言うことができる。動力機械に対してさえ、扱ひ方が粗雑になってきているのである。現在では、動力機械の中古品などが出回り、新しく購入しても次々に新しいものが出てくるために、二、三年で新品を買いかえた、という例を今回

いくつも見ることができた。

最近では、若い人は農業をしないとされるが、それでもしかり、若い世代へと農業は受け継がれている。そんな中で、人々の考え方も変わってきているのである。それは、動力機械の登場という方向からだけではなく、農業自体に対する人々の考え方の変化からも言えるであろう。

動力機械の登場・普及は、共同作業というものの価値を大きく衰退させた。農作業をそれ自体を、個人化させてしまってきているのである。

このような現状のなかで、鉄をはじめとする手労働具は、もう便利なそれではなくなっているのである。必要ではあるがたいしたものではないと考え方が拡がってきているのである。確かに動力機械だけでは農作業はできない。しかし、便利なものではなく、しかたがないので使っているのが現状なのである。特に若い世代になればなるほどそうであり、たかだか二、九〇〇円程度の品物をそう大切に五、六年もたせることはない、と思う人もいるようで、そうはつきり言った人もいた。

農業それ自体に対する考え方が若くなればなるほど個人主義的になり、省力化、合理化のための努力をするようになってきた。手労働具がこわれれば買えばいい、機械化をしたほうが能率が良いなどと考えるようになってきているのである。そのような人々の考え方は、農村独特のそれではなく、都市のそれに近いのではなからうか。

動力機械の登場・普及は、農業を行う人々に大きな変化をもたらした。個人的作業へと進みつつある。また人々の考え方も、都市のそれへと近づいていく。

先に述べたように、農具は画一的なものへとかわっていくであろう

う。そして人々の考え方もそうなっていくのかもしれない。しかし、農業がある限り農具はなくならないのであり、手労農具も決してなくなることはないだろう。そういった意味からも今後農具を調べる事は大切で、そこから人々の心(文化)を見ることもできるであろう。

(昭60・12・28、昭61・1・3調査)

参考文献

- 佐藤 次郎著 『鍛と農鍛冶』 (昭和五十七年、産業技術センター)
下野 敏見 『種子島の製鉄および鍛冶技術』 (『鹿児島民具』)
小野 重朗著 『南九州の民具』 (慶友社)
村松貞次郎著 『鍛冶の旅』 (昭和六十年、芸艸堂)
福田アジオ・宮田登編 『日本民俗学概論』 (昭和五十八年、吉川弘文館)

農業と農耕具

鹿児島県農具学会員 日比野 恭 一

一、はじめに

今回の調査地は、西之表市である。以前、南種子町を調査したことがあるので、種子島での調査は二回目ということになる。

南種子町の調査の時にも実感したことだが、種子島は本当に民俗の豊かな土地である。伝承者の話を聞く中で、また、民具をみていくときなど、何度もそんなことを思う。このような恵まれたフィールドで調査をさせてもらえるというのは、本当にありがたいことであると言わなければならない。

さて、今回の自分のテーマは農業である。中でも農具という有形の面に視点を向けてみたいと思う。今回の調査全体からの趣旨からすれば、無形民俗の収集にあたるのが本来の姿なのだろうが、やはり種子島の民具は、調べておきたいことのひとつである。できるだけ民具の調査にも力を入れるよう心掛けた。

しかし、実際に調査を始めると全てが順調に進むというものではない。うまくバランスのとれた調査は出来なかったのではないかと、反省しているところである。

それでも、見せていただいた農具の中には、伝承者の方が昔から使い馴らしてきたであろうと思われる、まさに土の匂いのする貴重な民俗資料と出会えたのではないかと思う。また、話を聞かせてい

ただいた伝承者の方と過ごした時間は、自分にとっても貴重な経験となった。

二、事例

1 中種子町 牧川

① カライモ

苗床に堆肥を積んで、そこにイモを並べて土をかぶせた。芽が出るところで二〇センチ程度まで育て、その後、五月に畝に植え替える。戦前から昭和四十年位までは、鋤で畝をたてていた。

畝に植え替えた後は、除草と追肥をした。除草は六月頃に始まり、道具は使うことなく、手で取った。

除草と同時に追肥をする。すると、ツルが伸び、草はツルの下敷きになり、伸びなくなる。その後は放っておく。

十月頃から収穫が始まるが、これは鋤を使って取っていた。

② サトウキビ

サトウキビは、三月に植え付けが始まり、十二月から収穫をする。植え付けの時は、一畝五〇センチあるサトウキビの節をいくつかに切る。これを二〇センチ程度の深さまで土に差し込む。

戦後に犁を使い始め、畝をたてるのが出来るようになった。馬も戦後になってから使い始め、これに鋤をつけて引かせ、畝をたてていた。

サトウキビを植え付ける時は、土地を平らに整理し、そこに間隔を一畝程度とって目測で真っすぐに植えしていく。その後、芽が出てから畝をたてて、上に土をかぶせて分蘖させる。畝をたててから苗をさしていくカライモとは反対である。

四、五月に肥料をやる。五十年位前までは、リン酸、カリ、骨粉、追肥としてアンモニアをまいていた。肥料は種類毎にまいていた。もと肥は、一回まく。特に、リン酸、カリをまかないと大きくならない。その後、八月になってアンモニアを追肥としてまく。暑さが厳しくなるので、五、六月中に大体の作業は終わらせた。カライモも同じ。土壌の質によって出来が決まるので、肥やしは大切であった。

その後、成長を待つて、十二月、四月にかけて刈り取る。畑にながくあれば、糖度が高くなる。十年位前までは、鎌で刈り取っていた。

サトウキビは、収穫したらすぐに黒砂糖にした。昭和三十年位までは、集落単位で黒砂糖を作っていた。集落に一人か二人いるタキコと呼ばれる人が作っていた。水車を使っていたが、現在は、水車跡に石碑が残っている。当時は、収穫があったので、届け出をしていた。黒砂糖が出来ると、結(ユイ)の者が集まって祝った。

サトウキビ栽培は、戦時中は途絶えていた。

③ ヤマイモ

ヤマイモはかなり長いので、ヤマクワで掘る。掘るときは、脇の方から周囲を崩しながら掘る。

ヤマイモは、ツルが腐るので、印をつけておかないと、次に行った時に分からなくなる。

④ その他

ソマ、アワは、二十五年位前まで作っており、食用として重要なものだった。

終戦当時、はた織機があったが、綿は、昭和十五年位までは作っていた。

蚕は、昭和二十五年位まで飼っていた。

2 西之表市

大花里おほはなり

① 稲 作

三月に苗床を作り始める。苗床は、まず一枚田の、水を入れて馬でモガを引く。そこに肥やしをまいて、畝で畝をたてて種を播く。

五月末、六月にかけて田植えを行う。苗が七寸位になったところで、手で抜き取り、東、南、西、北、六本ずつ田に植える。

田を整ですいてから水をかけ、モガを引き、その上にエブリで平らにしてから田植えをする。

田植えをするときは、ケンボウという、長さ六尺位で七寸ずつのしきりの入った棒と、タイヒキナワという縄を用いた。

田にタイヒキナワをひき、これと垂直にケンボウを合わせ、これに沿って植えていく。三人位で、ひと束を二、三株に植えていた。

田に入ると、泥まけといって、よくかぶれるものだった。

田植えが終わると、除草をする。除草は、刃が四本位ついているガンツメという道具を使った。これで草を取ると同時に、光を入れて土を返す。尋常小学校の四年生の頃まで使っていた。ガンツメの後、昭和十二、三年の頃に、田車が登場した。

肥料は、硫酸、石灰、塩化カルシウム、レンゲソウを使った。田植えで犁で田をすく時に、一緒にすきこむ。追肥は六月末に同じものを入れた。

害虫は、農薬が無い時はあまりいなかった。当たり前に農薬を使い始めるようになったのは、昭和二十、三年の頃である。それまで、カメムシは、手で取って、水の中に入れて殺した。カメムシは、潰して液が目に入ると目がつぶれることもあった。ウンカは、

カヤを袋にしてとった。作業は、ほとんどが裸足だったので大変だった。

農薬の無い頃は、多くてせいぜい六反作るのが精一杯だった。ウシカが多く、米が出来ずに、他の種類の米に変えていった。それだけに米は大切にされた。

終戦頃までは、九、十月に収穫をした。

② カライモ

三月頃に苗床で芽だしをした。畳一畳位の床にいもを並べて土をかぶせた。紙やビニールは、昭和二十四、五年頃にかけて始めた。床は家の近くに作る。床を作る時は、飯を使った。

畝は、犁を馬に引かせてたてた。

七、九月に除草を行う。昔は手で草を取ったが、昭和二十五、六年にカルチ（カルチペーター）を馬に引かせて使い始めた。刃先が尖っていて、両側に土がかぶさるようにしてある。

肥料は、硫安、石灰、塩化カリンの三つを混ぜて使用した。今はビニールに入っているが、昔は薬のカマスに入っていたものを使った。もと肥は、五月に三、四俵を一回入れ、追肥には二俵を入れた。

十一月十二月に収穫をした。

③ 麦

終戦前後までは、十二月にモガを馬に引かせて、一尺五寸位の型を作る。そこに手で麦をまいていく。

二月頃に、鋳でナカヒキをする。麦と麦の間をかいいて空気を入れ草を埋める。

また、二月には麦踏みをする。麦が人差し指位に伸びたら麦を踏む。これをするると、分蘗が良くなる。

四、五月初めに収穫をする。その後、またカライモを作り始めた。

昔は米より麦のほうを多く作った。米は売って収入とし、麦を食べた。

④ その他

畑は休ませることなく、一部では落花生やアワ、キビを作ったりした。

3 安納 下郷

① 稲

三月末に苗代を作る。自分のもっている田に必要な分を苗代とする。田を五反歩もっていたら、一〇〇坪を苗代とした。

三月に地ならしをして柔らかくし、まもなく床を作る。床は四尺位の畝幅をとり、その間に一尺〜一尺五寸の溝をとる。まき床に種をまき、その上に山土を種が隠れる程度にかぶせる。そして、一尺五寸の作業道に水をはり、まき床に水がのらないようにして乾かす。水は、芽が三つ位までのびたら全体にはる。

まき床に種をまいて三十〜三十五日すると、苗は一五つ位に成長する。この段階で、手で苗をとり、ひと廻り位になったらくくって作業道の水につけておく。苗をとるときは、水を少し少なくしてある。

苗をとる時期には、男は稲え代を作らなければならない。馬を使って、犁をすかせた後、水をはりモガで整理する。モガを縦横十文字にひき、その後でエブリを使って平らにする。

昔は四月に苗代の作業をして、六月位に稲え代を作った。稲え代ができたなら、イイといって共同で田植えをしていた。

田植えは六月に行う。一〇〜一五人が集まり、田に縄を張って植えていく。オヤシシヨウと呼ばれる縄には、二〇ヤ位の間隔で印の玉がついている。まず、この印に合わせて一列目の苗を植える。この苗が次から目印となる。次に、オヤシシヨウと垂直に縄を張り、その縄にそって苗を植える。それができたら、オヤシシヨウの二列目に移動して、一列目と同じ作業を繰り返していく。

田植えの後二〇日位してから中耕をし、そのついでに除草もしていく。

中耕は、終戦前後になって田車が登場した。中耕を三回程度した。メイチュウという害虫の発生時期と、台風の時期とが重なる。農業ができるまでは、害虫については、何もできなかった。農業は、終戦以降に出たのだろう。

メイチュウと水不足で、多くの被害を受けた。一反歩に初で三俵あれば良かった。そうした状況から、昭和十三年頃に早期水稲が始まった。奥羽（オオプ）二号（一号？）と陸羽（リクウ）一三二号があった。

十月下旬〜十一月月上旬にかけて、収穫を行う。収穫には鎌を使い、刈ったものはヒラ干しにし、千歯でこいで脱穀した。

② カライモ

四月上旬に、種イモに土をかぶせて芽を出させる。この時は、菜園を平らにしておき、その上に土を山にしてかぶせる。地温が高くなると芽が出て、六月になると四〇ヤ位になる。

昔は、鶏糞、人糞を肥料とした。

六月頃に鎌で刈り取り、畝にツルを一本一本、手でさしていく。畝は麦ができた後に、土を返し、堆肥を蒔いてその上に植えた。

昭和十年以降に、犁を使い始めた。この頃、この地域に犁が入っ

てきたという。（種子島に初めて犁が入ったのは明治十九年）。

除草は、六月下旬から始まった。ツルを根本まで手で持ち上げて草をとってしまう。これを二、三回した。

収穫は、十一月頃に行った。ツルを根本から鎌ではらって、一つずつ畝で打つ。

収穫したイモは、規格毎に分けて、馬に背負わせてセンゴヤ（織維小屋・澱粉工場）にもっていった。センとは、カライモから澱粉をとる時に、沈殿する織維のことをいう。澱粉工場には、ゲンイモというカライモをもっていった。固いが、澱粉を多く含んでいた。

③ 麦

カライモの後に、小麦とハダカ麦の二種類を作る。

犁が無かった頃は、畝で耕して畑に作係をする。十一月末〜十二月中旬に、できた溝に肥料を入れ、種を蒔く。十一月下旬に種を蒔けば、十二月月上旬には芽がでる。

昭和十三、四年頃に、硫安A、カリン酸石灰、リン酸などの肥料が出てきた。

正月二日位が仕事始めで、草履を履いて、麦踏みをした。麦踏みは、カニのように横になって、麦の芽を踏んでいく。麦を踏んでやることで、魂が入って、分蘖するようになる。麦踏みで分蘖することで、丈夫になり、多くの実が入る。

冬は、霜の消える二月頃に中耕をする。中耕は、小さな畝を引っ張っていく。中耕をしまえば、手がかからなくなり、後は刈り入れを待つだけになる。

五月末〜六月月上旬に、鎌で刈り取りをする。刈った後は、ヒラ干しといって、畑にきれいに並べて、一週間位乾かす。乾いたら、畑に臼のようなものをもっていき、そこで麦を叩く。周囲にはカヤを

はって、麦が飛んでいかないようにした。風のある日は、その風を利用して麦の実とサヤを分け、風のない日は、扇風機をもっていった。また、トウミで分けた。

サヤと分けた実は、二日間程乾かして、農事組合にもっていき、販売した。

麦の後には、カライモを植える。

畑を一町歩もっていたら、五反歩は麦で、残りは落花生などを植えた。

④ 牛馬について

昭和十年以前には、馬は飼っていた。生産用と農耕用として使い、荷物を運ばせたりした。

昭和十四、五年になって、牛が流行りだした。中種子町で、年に一、二回、馬の競り市があった。

三、民具解説

○ ク ワ (中種子町 牧川一松下 藤氏)

長さ九七センチ 刃の長さ三五・五センチ 刃幅一〇・五センチ

柄はカン材。

○ ク ワ (西之表市 大花里一安山 実氏)

長さ一〇六センチ 刃の長さ三九・五センチ 刃幅二三センチ

○ ヤマグワ (中種子町 牧川一松下 藤氏)

長さ一一三センチ 刃の長さ三二センチ 刃幅九・五センチ

柄はツバキ材。

開墾にも使っていたが、今では、ヤマモミ掘りのみに使用。腰を曲げないで済むように、曲がっている自然木を探してきてつけた。

○ ヤマクワ (西之表市 大花里一安山 実氏)

長さ一〇五・五センチ 刃の長さ二二・五センチ 刃幅二三センチ

○ ス キ (西之表市 大花里一安山 実氏)

農協から購入した。

○ ス キ (安納 下郷一鎌田 時成氏)

長さ一四二センチ 高さ一〇六・五センチ 刃の長さ五〇センチ

安納に、専門で作る人がいた。

刃は壊れやすいので、上下が二つにわかれている。

○ モ ガ (西之表市 大花里一安山 実氏)

幅一〇二センチ 高さ八〇センチ 刃の長さ一六・五センチ

カシ材。

地元で作ってくれる人がいた。

後から、敵をたてるための、別の大きな刃を二つ両端につけた。

○ カルチベーター (西之表市 大花里一安山 実氏)

長さ一六二センチ 高さ八五センチ

馬に引かせて使用した。

除草用具として、昭和二十五、六年頃から昭和三十五年頃まで使用した。

農協から購入した。

略して、カルチと呼ぶこともある。

○ エブリ (西之表市 大花里—安山 実氏)

幅八一センチ 長さ一、六九〇・五センチ

スギ材。

○ 田車 (西之表市 大花里—安山 実氏)

柄の長さ一二三センチ 除草部分の長さ五四センチ 幅一五・五センチ

○ ナカカケ (西之表市 大花里—安山 実氏)

長さ一九三五センチ 刃幅一七センチ

柄は、曲がっている自然木をとってきてつけた。曲がっているほうが、作業が楽にできる。

四、民具について

1 中種子町 牧川

昭和二十五年頃までは、鍛冶屋があった。今は西之表市にあるが、金物屋から購入する。

2 西之表市 大花里

今は、金物屋でも鍛冶屋でも買うことができる。現在、鍛冶屋は、西之表市に三カ所ある。野平、牧瀬、池液がそれである。

野平、牧瀬は、調査者が実際に訪ねた。牧瀬は鉄専門で、野平は農具専門である。

3 安納 下郷

クワは、柄の部分を作る大工がいた。金の部分を鍛冶屋に作ってもらい、それを大工のところに持って行くと、それにあわせて柄を作ってくれた。鍛冶屋は、安納にいた。

鍛冶屋がいなくなつてからは、既製品を買うようになった。金物屋や農協から買う。

五、まとめ

今回は、調査期間の短さと調査の仕方によってか、多くの農具は見られなかった。同じ種類の農具についても、比較できるまでは集めることができなかった。ただ、今までの調査地(曾於郡大崎町)に比べると、使用者の使い勝手に合わせた形の農具が、いくつか見られたように思う。

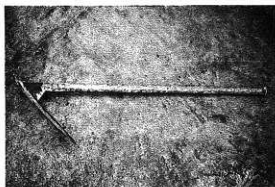
柄を自然木に変えたというものは、以前にもいくつか見られた。種子島では、自分の体に合わせて、また使いやすいように、作業中に腰を曲げずに済むようにと、わざと曲がった木を使っているものがあった。

購入先についても、鍛冶屋がいくつかあった頃は、そこに頼んでいた。また、地元の職人に頼むこともあった。それが、今では、農協や金物店へと購入先が変わってきている。

形にしても、先述のように、曲がっている自然木を使っているものもあり、柄にしても真つすぐなものばかりではない。これは、ナカカケとヤマグワに見られた。

大崎町では、ナカカケのことをナカヒキと呼ぶが、こちらの柄は全て真つすぐで、腰にヒモを引っかけて使うものだった。また、ど

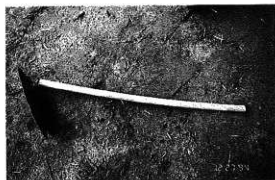
「農具 1」



① クワ
(中種子町牧川 松下巖氏所有)



② スキ
(西之表市大花里 安山実氏所有)



③ クワ
(西之表市大花里 安山実氏所有)

の家にもナカヒキは見られたが、西之表市ではひとつしか見られなかった。そのため、柄については、大崎町のようなのか、また曲がった自然木を使うのが一般的なのかは言い切れない。
今後、購入先を含めた農具の入手手段や、その形態について、改めて調べ直したいと思う。

六、さいふに

いつもより期間の短い実習であったが、やはり、種子島は、調査のやり甲斐のある土地であった。

また、話を聞かせていただいた方々の人情の厚さには、つつい甘えっぱなしで、調査以外に費やした時間もかなりあったのではな

いかと思う。ただ、こちらとしても、そうした時間を楽しむことができ、本当に良いところだと実感した。今後も、何度か訪れてみたい。

今回の調査にご協力くださった伝承者の方々、そして、それを支えてくださった関係者の方々にお礼を申し上げます。

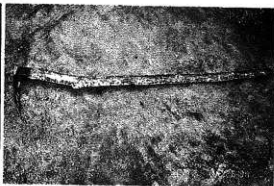
伝承者リスト

中種子町 牧川 松下 巖
西之表市 大花里 安山 実
安納 下郷 鎌田 時成 (敬称略)

「農 具 2」



④ スキ
(安納下郷 鎌田時成氏所有)



⑤ ヤマグワ
(中種子町牧川 松下巖氏所有)



⑥ モガ
(西之表市大花里 安山実氏所有)



⑦ カルチベーター
(西之表市大花里 安山実氏所有)



⑧ ナカカケ
(西之表市大花里 安山実氏所有)



⑨ 田車
(西之表市大花里 安山実氏所有)

農業・農具・牧について

門野 伸

安納 牟田

世上畑

「セジョウヘ行く」という言葉がいまも残っている。キビ、唐芋の他に團栗作物としてエンドウ豆や花を栽培している農家も一つ二つある。水田は近くにあり、現在はほとんど自給用である。特別な名称で呼ばれることもない。キビは十一月〜四月末ころまでに収穫をする。収穫が終わったら、株の間に施肥をする。堆肥には糞、ガラ、チップかすが用いられている。一方、唐芋は十月初〜十一月中に収穫する。そして、キビや唐芋は農協をとおしてそれぞれ製糖会社や澱粉工場へ出荷する。ところで、水田では水の最初の取り入れ口を楾で一箇所だけ少し耕すという行事を新暦の十一月一日に行っていた。これは個人別であるので、神社とは関係ない。水の取り入れ口には米、酒、ダイダイを供えた。

團畑

(ソノ) 大根、白菜、キュウリ、トマト、キャベツ、ホーレンソウなどの自家用の野菜を家の敷地内で作っている。広さは五畝ぐらいである。年に三回、春、夏末、秋に畑に楾をいれる。

牧 安納大平に牧がある。今は安納校区の区有林となっている。面積は一六〇畝ぐらいである。安納校区全員のものとされ伐採された木材の代金は、全員に分配される。また、分担で間伐などの山仕事が終わってくる。

安納 下郷

世上畑 現在もそれ以前もキビと唐芋を主に作ってきた。また、昭和四十年頃までは一家に二頭ぐらいい馬がいて田を耕すのに用いられていた。牛は、肉用、繁殖用として昭和五十年頃まで、やはり二〜三頭を飼っていた。

團畑 大根、菜、葉などの自家用野菜を作っている。広さは二〜三畝が普通である。その手入れなどは、決まった人がするのでない。

西之表 小牧野

世上畑 集落から一處ほどのところにある。面積は、四〜五反とかな、八畝の畑が多い。主にキビ、唐芋、落花生を作っている。他に、稲作も行っている。昔は五〜六町の水田が多く、とれた米は売っていたが、今は自家用の米を作るぐらいである。また、十年位前までは新暦一月四日に、水田の水の取り入れ口に焼酎、ユズリハ、ウラジロを供えて「今年もよかごと」といってお願した。一方、旧暦の十月十一日には集落の神様にとれた米や唐芋などを供え、集落の人がそれぞれ頭をときに行くものだった。

團畑 自家用の大根、葱、白菜、ホーレン草、菜、葉などを植えている。手入れは家族のものが皆である。ただ、耕すのは主人が多かった。

肥料 十四〜十五年前は、各家に必ず馬が一〜二頭いた。その馬の排泄物から肥料は多く用いられた。また施肥の方法は、作物の種類によって時期や量が決まった。一方、馬は犁をつけて田畑を耕すのに使われた。

牧(共有地) 牧は集落から四話ほど離れたところにあった。牧の

周りを囲ってあった土手だけが今は残っている。馬の放牧がされていたらしい。そこは七、八年ぐらい前から農地となっている。また、集落の共有地も四十近くぐらい前に個人に分配された。ところで、この小牧野という集落は、明治の中頃に蛟島宗始という山師（熊）が森を拓いて集落をつくったのがはじまりだそうだ。この人の記念碑はいまも集落の中にある。

西之表 城^{じま}

世上畑 集落の外に方々に散らばっている。主にキビ、唐芋を作っている。他に煙草を三町五反ぐらいの畑で作っているところもある。稲作をしている人もいるがほとんどが自家用としてである。新曆一月四日は、畑の五穀豊穡を祈って「鎌入れ」という行事を行う。その年の最初に畑に鎌を入れるものである。今から五十年ほど前までであった。一方、新曆一月十四日には、水田の水の取り入れ口（ミナクチ）にお神酒をたらしたり、田で焼酎をのんだりしていた。四十年ほど前までのことである。

園畑 各家庭にあり、広さは五畝ぐらいである。自給用の野菜である大根、葱、キャベツなど、毎日の朝晩に使うものを作っている。季節による事例をあげると、春には、じゃがいも、夏葱、きゅうりなどを二、三月に植え付け、五月からあとに取り入れる。また秋には大根、高菜、ホーレン草などを十一月に植えたりしている。家畜・堆肥 現在は化学肥料が主流であるが、煙草を作っている園芸農家などは牧草と牛糞から作った堆肥を交換して、それを使っている。一方、今から七十年ほど前まではホイトウが行われていた。それ以降は、馬に犁をつけて田を耕し、マンガ（モウガ）で平らにした。馬に左右に手綱をつけて操作した。しかし、今から二十年く

らい前に導入されてきた耕転機のために馬はいなくなつた。だが、牛は現在でも食用としてと、繁殖（生産）用としてわずかだが飼育されている。

農具 この集落ではいくつかの農具を見ることができたので以下にあげておく。

ノコ——大きい木を切るための鋸。全長六〇センチほどで片刃である。

ナタ——ナタは、木の枝を切り落とすのに使う全長七〇センチのナタ、杉山の下払いなどに使われる柄の長いヤマハライナタ、女子供が使う小型のハライナタなどがある。

クワ——荒地を耕すのに使われるカイコンクワ、普通のクワ。キビの根を刈り取るのに使うタオシクワなどがある。タオシクワの刃先は非常に鋭く、畑に持っていくときは毎回刃をといでいく。

ジョレン——盛った土を移し変えるのに使う。

フォーク——キビのむきかすや堆肥を乗せるのに使う巨大なフォーク状のもの。

キンツ——山芋を掘るのに使う、長い棒の先に鉄のヘラがついたもの。

カマ——鎌の刃の先端が二股に分かれており、この部分でキビの皮を剥ぎ、刃のところでまきとると言うキビムキガマ、それに普通のカマがある。

スキ——ホイトウと耕転機の間時代に活躍した、馬に引かせて田を耕すのに使った道具である。全長約一・五尺、全高約一・二尺である。土を切る部分には鋤物の鉄の刃がついている。これらの他に、ツルハシやスコップなども見ることができた。

住吉 中之町

世上畑 住吉の農家の八割がサトウキビを作っている。残りは、キヌサヤ・エンドウなどを作る園芸農家と、唐芋を作っている農家がそれぞれ一割ずつである。農地の広さは、一家あたり七〜八反ぐらいである。一方、稲作は一毛作である。四月の十日ごろまでに植え、盆前に刈り取る。田植えのときに田植縄をつかっていたところは、男が縄を張って女が植えていた。また、稲刈りが終わった後はほったらかしである。ところで、減反政策が始まってからは、広い田を持つ人はキビづくりに変えるのが多かった。今では一反ぐらいの水田で、自給用の米を作るくらいである。また、農村の高齢化により高齢の地主が小作を雇う場合もある。その賃金はとれた米で支払われることが多いが、一部では金である。米の場合は、昔は収穫の二分の一、現在で収穫の三分の一である。ところで、ホイトウがいつごろ消滅したのかは分からないが、その後は昭和四十年ごろまで馬に犁を引かせて田を耕す「シロヨミ（シロカキ）」という方法が取られた。シロヨミの後はモウガをやはり馬に引かせて平らにしていた。ところで、住吉神社では新暦二月十七日に「祈願祭」というのが行われる。これは、五穀豊穡や無病息災の願をかけるものである。そして、新暦十月二十三日には「願成就」という願はどきの行事を行う。この行事は、三年に一回は踊りなどの余興を神社でする。他の年は、村役人等の有志だけで行う。

牧（共有地） 牧は牧場と言いつつ藩政時代からあり、原野で馬を放牧していた。今は住吉牧場組合となっている。広さは三〇〇町ぐらいで、雑木林と杉林になっている。杉林の広さは七〜八町くらいである。牧の中には神社があり、その牧の神は、馬の神様であるといふ。昔はホイトウに使う馬を飼っていた。ホイトウに関した伝承

に、「今日は、ホイトウウマヤらあ」という言葉がある。その意味は、今日は御馳走をしないというものである。ところで、牧の神社では、年に二回、夏と秋に祭を行う。夏の祭は早朝八時に神官を呼んで神事してから山で下駄などの作業をし、午後は決算の報告を行う。秋の祭は、午前中は夏の場合と同様の事をし、夕方からは「なおり」といって宴会をする。一方、牧の所有方式は株によって行われている。株は世襲制であり、昔は個人で自由に売買できたのだが、今では組合が買取って、株の数を減らそうという動きがある。また、株の所有者は手入れとして山仕事を年に二回、株の数と同じ人数でかりだされる。また、大正年間の頃は株の数が五〇あったが、今では三六株しかない。話が変わるが、昭和二十四〜二十五年ごろまでは枕木にするために松の木を切って、それを馬で運んで業者に売っていた。木は丸太のまま島外へ出荷されていた。また、炭焼きも昭和三十年頃までは牧の中で盛んに行われていた。炭焼きに関しては、「炭焼きん五郎」というあまりよい意味でない言葉が残っている。それから、住吉校区にも共有地がある。これは、牧場とは別で、共有林である。伝承者の話によれば、西之表市から買ったのではないか、ということである。

牧について

1 牧の種類

種子島には、牧と呼ばれる山林草地が藩政時代から存在していた。その牧は大まかに五つに分けられる。

- ① 塩屋牧 塩を作る集落に与えられた薪用の森林。
 ② 直宮牧（御用牧） 島主直宮の放牧場。

- ③ 共同民間牧 株制度によって牛馬を共同で飼育する牧。
 ④ 自然発生の民間牧 勝手に牛馬を放牧した。
 ⑤ 私有牧(個人) 全くの個人の所有牧。

2 牧の発生

十三世紀の頃に、島民がときの領主の土地に無断で、つまり自然発生的に原始共同体的なありかたで牛馬を放牧したり、農地として耕していた。この時点で牧は各集落毎にあったようだが、これに島主の平信基が生産拡充の手段として、直宮のマキ即ち牧場を設けたのが始まりであるとされている。これは、最初に南種子町西海の立石に、次に現在の西之表市の国上の澳に、そして次第に島内に増やしていったといわれている。

これらの直宮の牧場は、沿岸部分に属した製塩に適した地帯である。これは塩が種子島の特産物であり、この塩が当時は税金にもなりうる貴重品であったからである。つまり、これらの沿岸の牧場の経営に、島主が重点を置いたことにより、牧は公式には「塩屋牧」として発足したのである。その後、十七世紀になると製塩とは関係なく、牧本来の姿である放牧場として栄え始めた。このときのことには「全島此牧というも可なり」というほどだったという。つまり、自然発生的・原始共同体的性格の牧から始まり、島主の目的意識による塩屋牧の生産拡充、そしてそのための薪運搬用の牛馬の飼育が、牛馬牧としてその牛馬の生産を目的にするようになったと考えられる。

ところで、マキという言葉は「親族用語の一つであり、動物の集団をも意味する言葉である。柳田國男によれば「巻」という漢字があたりれるという。つまり、同じ血筋から分かれた家のすべて、血

縁を引く限り含まれるというように、血筋や血統の意味に用いられる例も少なくない。(「日本民俗事典より」というように、牧という言葉は同族的血縁団体の性格を強く持っていると思われる。

3 牧の目的

- ① 塩屋牧 製塩のための塩屋そのものとそれに用いる薪である松材を供給するために、島主から分け与えられた山林の松材運搬に必要なとされた馬のための放牧場。
 ② 牛馬牧 皮革用、軍馬用、農耕用などのために馬だけ、もしくは牛だけ飼育するようになった牧。初めは、種子島家の直宮牧だけだったが後世には、共同民間牧にも許されるようになった。

- ③ 牧共有山林 集落各家の、炊事、建築用材、共同作業場建築用材、防風林などに使う山林資源用地として所有した。しかし、建築用材は原則として株主にしかその使用は許されなかった。

- ④ 採草地・切替畑 飼育用の採草地、または家屋のための茅の採地、焼畑耕作などで収獲が低下してくると一時休閑地として作物を作るのをやめて地力の回復をまったり、開墾をして耕作していた。ここで切替畑とは、常畑に対する言葉であり、山林・原野と畑とを転廻する方式の畑のことである。

4 飼育牛馬の利用法

- ① 製塩・製糖 薪用の木材運搬
 ② 農耕用(ホイトウ) 明治中頃に馬耕が広まるまでは、馬群を水田に追い込んで土を踏ませて耕すホイトウという方法が

とられていた。その後馬耕や牛耕が広まってからは、耕耘や運搬に使われた。

③ 軍用馬 武士の乗用馬として戦闘の際に騎乗した。又は、物資の運搬用に使用されたようだ。

④ 子馬の生産 天保年間には牧場の馬にも課税されるようになったためか、牧の財源の確保として子馬を売るようになった。

⑤ 皮革・食用 牛馬の皮革は、種子島の特産品の一つとして種子島家が買い上げて貿易品としていた。島主の専売品だった。また、食用として老馬の肉がもちいられた。南種子の方では牛肉も早くから食用にされていた。

5 牧の組織

牧の代表者はマキガシラやマキモトと呼ばれた。特に塩屋牧の場合は、カマジ(釜司)といったが、これは塩屋の釜を司るという意味である。釜司は、推薦によって決められ、任期は普通一年であるが、例外として終身制をとる集落もあった。中種子の平鍋集落では、牧そのものが春田姓の同族牧であり、マキモトは春田同族の本家筋であった。また、マキガシラが世襲制をとるところもある。長谷や能野、石寺などがそうである。

牧の構成員はカブヌシとよばれた。つまり、牧に対する有権者である。年に数回カブヌシ総会という会合が行われていた。その総会では、①マキガシラの推薦、②牧内での切替畑などの農業の許可申請、③建築材の伐採許可申請、などが話し合われ皆の同意が得られれば許可された。

6 牧の神

牧には必ず牧の神が祭っており、山頂や小高い丘の上、平地では景観のよいところに祭られている。そこには、自然石が立ててあり後ろには松や蘇鉄などの樹が植えてある。これらの樹は、神樹である。また、前記の自然石には「受母地(宇気母知)大神」と彫りこんであるものもある。「宇母知(宇気母知)大神」なら、氏神信仰とも結びつく。これらの牛馬の牧の神は、「陰曆の申の日においてになった神」であるといわれたり、馬頭観音であるともいわれているように、仏教の系統とは違うようである。神がどうであつてもそれらの場所には、鳥居がたてられている。また、牧の神は牧の幸福繁栄を司っている。つまり牛馬の繁殖を守っているのである。

一方、塩屋牧にはシオヤの神が祭られている。その本尊は、天照大神である。塩屋には火が不可欠であり、その火を司る神である天照大神を祭っているのはまことに自然なことだといわねばならない。シオヤの神は海岸の見晴らしのよい清浄な地に祭られている。

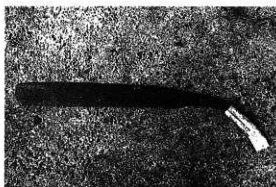
7 牧の消滅

牧は、元和元年(一三三二年)〜明治三十四年(一九〇一年)の間、およそ五〇〇年の間、種子島の集落と経済の中心を形成してきた。しかし、明治十二年の地租改正の実施によってその崩壊が始まることになった。それらの直接原因をあげてみよう。まず、人口の増加による食料不足からくる農地の増大、そして、役所による造林計画などにより放牧は次第に圧迫をうけていくことになった。特に、塩屋牧では従来の伝統的製塩方法はハイコストのために、製造をやめてしまう。つまり釜の火を消してしまうのだ。そうなること、馬を放牧する意味がなくなるので、自然に牧場に農地と林が進

「農具 1」



① ノ コ (城)
柄とも全長64寸、刃の幅6寸。少し大きい木を伐るとき使う。



② ノ コ (小牧野)
柄とも長さ71寸、刃の幅7寸。少し大きい木を伐るとき用いる。



③ カ マ (城)
稲刈り、その他いろいろの用途がある。普通の鎌である。刃の長さ18寸、柄の長さ36寸。

参考文献

『日本民俗事典』(昭和四十七年二月十五日、弘文堂)
大山 彦一著「鹿児島県熊毛郡種子島マキの研究」(昭和二十七年

出していく。そして牧場については農地と造林にとってかわられたのだ。その後は、昭和二十年に施行された農地改革によって決定打を被ることになったのだ。例を挙げてみることにしよう。①農地改革というのが、土地つまり農地の所有の私有権の確立を自差していること。そして、これによって共有地である牧は課税されるか、買収されることになった。②そのために、牧を分割して私有地にしてしまふ。そうなるとう共有地として、または牧の同族集団としての意味もなくなっていく。そうこうしていくうちに、牧の本来的姿は失われていったのではないだろうか。

四月、鹿児島県農地部農地管理課)

『中種子の牧資料』(昭和六十二年三月二十五日、中種子町立歴史

民俗資料館)

『鹿児島県畜産史 中巻』

伝承者

安納 牟田	日高 實秋	T 15・11・15
安納 下郷	中園 義成	T 1・12・31
西之表 小牧野	日高 義成	M 43・3・29
西之表 小牧野	日高 イネ	T 1・9・10
西之表 城	羽生 能盛	M 41・6・17
住吉 中之町	高橋 基吉	T 4・3・30

(敬称略)

「農具 2」



④ キビムキガマ(城)
刃で茎を刈り取り、刃先の二股部分で草をむく。全長27寸。



⑤ ナタ(城)
山仕事に用いる。刃の長さ16寸、柄の長さ53寸。



⑥ ヤマハライナタ(城)
杉山の下払いに用いる。刃の長さ24寸、柄の長さ89寸。



⑦ ツルハシ(城)
柄の長さ78寸。



⑧ ハライナタ(城)
山払い、その他に女子供がよく使う。柄が短い。刃の長さ17寸、柄の長さ36寸。



⑨ キンツ(キンツリ)(城)
刃の長さ13寸、柄の長さ100寸。山芋掘り棒である。

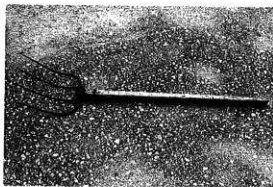
「農具 3」



⑩ クワ(城)
刃の長さ40寸、刃の幅14寸、柄の長さ107寸。



⑪ ジョレン(城)
盛った土を動かすのに使う。刃幅25寸、柄の長さ90寸。



⑫ フォーク(城)
キビのムキカスや堆肥をのせて運ぶ。針の長さ30寸、柄の長さ100寸。



⑬ スキ(犁)(城)
刃(鋤物)の長さ50寸。短床部分は34寸。



⑭ 開墾鋤(城)
柄の長さ97寸、柄入れから刃先までの長さ24寸。

農耕儀礼の変遷と展望

鹿兒島県農学会員 砂田光紀

本稿は、昭和六十年十二月調査の報告レポートである。

今日、産業構造の変化や農業機械の発達によって日本の農村社会は激動の時期を迎えている。専業農家の数は、その存在が危ぶまれる程までに激減し、協同作業による地域社会のコミュニケーションも著しく変容をとげた。農業に従事する人々の年齢も高齢化の一途をたどり、農業によって成立していた地方の小共同体は、今その存続を年老いた人々の細々とした営農に頼っている。このような急激な変化によって、農業を生業としてきた人々の生活習俗はどのような影響を受けているのだろうか。また、彼等を取り囲む小規模な共同体、村落は今、何を感じ、何を求めているのだろうか。農業が現在置かれている立場を把握し、その将来を展望することは、農村社会に生きる人々の精神文化を知り、生活様式を考える上で意義が大きいと思われる。ひいては農耕民族として狭い国土を耕しながら生きてきた日本人の魂の根源にふれることができるかも知れない。こうした展望のもとに種子島の農村を調査した。

農業を考える時、どうしても切り離すことのできない要素として、農事暦がある。日本の風土に於て、主食である水稲を育成するには、春夏秋冬の一年のサイクルに目を向ける必要がある。そしてそのサイクルは、植物の一生であり、節目節目にはそれなりの儀式を必要とする。天の恵みであり、生き物である稲ゆえに、人々はこ

の儀式を大切にしてきた。農業をめぐる文化に触れるには、この一年サイクルの中に展開される儀式、「農耕儀礼」の実際を調査することに意義があると考え、今回のテーマを選択した。農業の激変は、恐らく農耕儀礼においても何らかの形であらわれてくるに違いない。急変の途上にある今、このテーマについて現況を探るのは興味深い作業であった。

今回の調査地が種子島であったことにも意義があると考えられる。この島の文化的特質は注目に値する。農耕儀礼に関しても例外ではなく、島内には様々な儀礼が伝わっている。南種子町の宝満神社に



① 宝満神社に奉納されている赤米の稲穂
(南種子町 宝満神社)

は赤米が伝えられ、それを祀ってお田植え祭が行われるが、島の北部の西之表市の浦田神社ではかつて白米が伝えられ、それを祀った。同じ島内においても、南北でこのような違いが認められ、稲の伝来を考える上で注目されている。また、それ以外にもこの島の最近の農業には特殊性が見出される。第一に、水稲の早期栽培が一般化していること、第二に、さとうきびの占める割合が、増加しつつあるということである(調査当時)。今回の調査においても、さと

うきび収穫の最盛期ということもあって農業従事者の多くは多忙な時期であり、人々の生活に深く根ざしたさとうきびの姿が印象深かった。これらのことから、農村の激変は種子島においても進みつつあるということが理解できよう。

以下の報告は西之表市内の少数の集落に限定したものであると同時に、年末の多忙な時期の調査であり、その内容は浅薄であるが、農耕儀礼と人々のかかわりを考える上で役立つものとなれば幸いである。なお、各々の儀礼を稲作のサイクルにそって考察するが、収穫期から小正月にかけての儀礼が最も多く現存し、注目されるので、その時期から考えてゆく。

収穫から小正月まで

前述のとおり、現在の種子島の稲作は、早期栽培に移行している。これは台風などによる農作物の被害を避ける上で好都合であり、温暖な気候を利用した合理的な農業を表現している。ところで、この早期栽培が始まったことにより、収穫期には大きな変化が生じたのである。早期栽培以前は、九月から十月にかけて行われていた刈り入れは、八月に行われるようになった。収穫期の儀礼の変遷を考えると、この栽培時期の変化が大きなヒントとなる。

西之表市安納^{（下郷）}では、ハツホを祀る人は殆んどいなくなつたという。しかし現在でも、形を変えながらも続ける人はいる。日時が決まっていないが、収穫期に「田の神まつり」と呼ぶ儀礼を家で行う。これは新米を使ってオニギリを作り、家の火の神に供えるものである。このオニギリは、まだ自分が新米を口にしないうちに行る。また、その個数は、一枚の田に一個、つまり田の数だけ作る。そしてその晩、家族で火の神に供えてあったオニギリを食する。オ

ニギリを供える際にはカリホを一株、一緒に供えるという。

また、この家では五年から十年程前までホダレヒキを行っていた。ホダレ用のワラは、昔は収穫の時から別にしておいてあったが、最近では普通のワラから抜き取っていたという。そのワラに、新米を炊いて沸騰した時ののりをつけ、モミを付

着させる。それをそのまま台所の火の神の所にかざっていた。同時にモチを一つ二つとだけ、御神酒を供えていたという。これは小正月に行うが、二十日までそのままにしておき、後に焼き捨てる



② 田の神まつりに用いるカリホの保存
（西之表市 安納 下郷）



③ 田の神まつりの際にカリホを供える状況の再現・火の神
（西之表市 安納 下郷）

という。この行事は、水田を持つ人は以前は皆行っていたというが、現在ではやっているという話を聞かないという。その理由は、人それぞれであろうが、やはり十一月下旬から四月下旬まで延々と続くサトウキビの収穫で多忙な時期であることが大きな要因となっているようだ。また、正月のモチにすべてを託すという考え方が非常に強くなっている。従って、昭和十五年頃までは、倉庫に農具を集め、めしを炊いて記っていたという「農具まつり」も十二月三十日のもちつきの中に含まれてしまうのだという。

同じ安納の蜂郷において、昔ながらの儀礼を大切に、現在も行っている家がある。ここでも収穫期に「田之神まつり」を行っている。三所田があれば三所の（つまり各々の田の）水口のハツホを刈ってきて、小バラの上に置いて祀る。新しくとったばかりの米を炊いてオニギリにして、田の数だけ供える。それぞれのオニギリには、竹を二つに割って作ったワリバシを垂直にさし、御神酒等とともにハツホに供える。そして田の神様に祈るといふ。また、この祭りは台所の板の間で行い、家の中と周囲は海から汲んできた潮で清めるという。

正月には各々の田の水口に、モチ、焼酎、だいたい、ユズリハ、ウラジロ、しめらせた米二合等を供えておまつりする。これをカイレイ（回礼）という。

小正月にはホダレヒキを行う。ワラで、米が実ったときのようにホダレを作る。ワラに米を炊くときの湯気をつけ、米を付着させる。ホダレは合計四束を作るが、一束の太さは一握りに満たない程度で、二束ずつワラのシベで縛って左右にわける。これを火の神のわきに下げ、五穀豊穡を祈る。このホダレヒキは、先祖代々男によって伝承されており、十五日の未明に、「小鳥の飛びまわらんうち

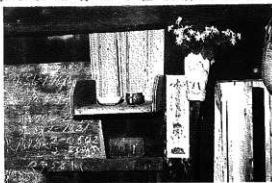
に、大鳥の地に歩きださないうち」(世界が不浄にならないうち)に行うという。このホダレヒキを行う時も、海から汲んできた潮で、家の中と周囲を清める。また、祀ったホダレは二十日に片付けますが、その際は、「人のしょっちゅう行って踏みつけん所」に捨てるという。

前述の、下郷の例も、この蜂郷の例もホダレを火の神に供える点で共通しているが、これは、「火の神は、火と水の神様であるから。」だという。井戸の柱の所に別に水の神は祀ってあるのだが、ホダレヒキのときは水の神様が最も大切な時であり、家の中の水の神つまり火の神様を大切にしないではいけない時なのだということである。蜂郷

のこの家では、他に正月、大みそか等の大切な時には常に海から汲んできた潮で家の内外を清め、火の神様をお祀りするという。

また、毎朝戸を開けたら東に向かって立ち、手を合わせて「おてんとうさま」に、「目覚めをありがと。今日一日、何事のさわりもなく過ごせますように」と祈るといふ。周囲において、この家のような農耕儀礼を行う人はいないということだったが、この家においては今後もこれらの儀礼は行われるであろう。

西之表市現和、西保では、安納のように収穫期に「田之神まつ



④ 水の神でもある火の神
(西之表市 安納 下郷)

り)を行うという例は聞かない。但し、ハツホ、カケホは保存したり、祀る習慣がある。

ある家では、収穫直前に一枚の田から一株ぐらいすつ稲穂を引き抜いてくる。つまり根付きの状態であるが、これを「ハツホ」と呼び、泥だけを落としてそのままの状態に床の間に釘にかけける。一年間、そのままかけておくという。一年たつと取り替えて、古いものは焼き捨てる。ところで、小正月にはこの「ハツホ」を使用する行事はない。これは恐らく、この集落の氏神である、「大山神社」の「破魔まつり」が一月十五日に行われることに起因すると思われる。この日、「ちんちょうのハマ」といって、この神社の境内で破魔祈禱の行事が行われることは有名であるが、このときにさつまいもを一株、自宅の床の間に根のついたまま保存してあったものを奉納するという。人によっては床の間に保存していたカケホ(この人の場合は「カケホ」と呼ぶが「ハツホ」と同一のものと思われる。)を、「ちんちょうのハマ」の際に神社に奉納するという。やはりこの西保集落においては、集落氏神の大山神社の存在が農耕儀礼の変遷に微妙に影響していると思われる。この神社では現在もさかんに「ちんちょうのハマ」行事をとり行っているが、人々はハツホ、カリホをまつる中心となる時期「小正月」に行われるこの破魔祈禱に、全てを節約してしまったのではないだろうか。

西之表市西上、大花里では、現在個人で行っている儀礼は全く聞くことができなかった。集落の中心に、種子島でも最も大きな神社の一つである伊勢神社があり、この神社と人々とのかわりも考える必要がある。現在は行われていないものの、以前はさかんに儀礼が行われていたということなので、ここに記録しておく。

大花里においては、収穫用に各個人で行う「田之神まつり」はな

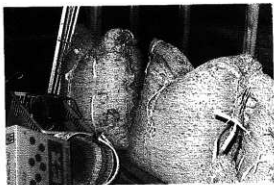
かった。かわりに四月初旬に、「青田まつり」と呼ばれる田の神を祀る行事を行っていたという。これについては後述する。

一月一日の夜には白起こしが行われた。石ウスに米一升とマスに入れたモチを入れ、上に四つ折りにしたムシロをのせ、その上にキネを二本置いてワラで縛った。それを子供たちがあけてキネを上下させ、つくまねをする。子供たちはモチをもらった。何よりもウス、キネを使用することがなくなったことが、この儀礼の消滅の原因であろう。他の地域においても同様の儀礼は著しい減少をみせており、恐らくこれを伝承する人は殆んどいなくなるとと思われる。使わない道具をまつる必要はないのだから。

大花里では鎌入れ(クワイレ)を行っていた。一月十一日に行った。大黒様の前に、大根を二本下げたしめ縄が張っており、それを取ってきて田に捨てる。そして一つ、二つ鎌を入れた。これは男の人ばかりがやっていたという。

一月十五日には、ホダレヒキとサクイワイの両方を行っていた。未明の、「小鳥の起きらんうち」にホダレヒキを行う。ホダレヒキ用のカリホは火の神のそばにかけて保存されていた。モミを落としたカリホを、米を炊くときののりにつけ、それにモミをまぶす。モミがたくさんついた年は豊作になると考えたという。できあがったホダレは、床の間にかけたたり立てたりした。屋になるとサクイワイを行った。農具を洗いそろえ、箕の中にならべて、そこにほんんとごちそう(にしめ)を供えた。ごはんは「かしわいちご」の葉にもってあった。このごはんは保存してあり「ホツシのめし」と呼んで、床の間でバラバラと落ちてしまったコノミヤのモチとともにほんにませて六月か七月の一日に食べたという。

西之表市西之表、城集落では独特の方法で儀礼を行っている家を

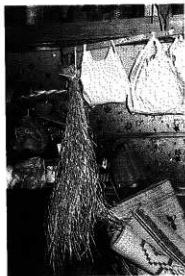


⑤ 保存中の種籾（中には伊勢神社で祀った
 昨年のハツホの籾を別に入れてある。）
 （西之表市 西之表 城）

み、袋に入れて種籾のカメラの上に入れておく。苗代の準備をするとき、塩水で籾をより分けるが、その際に混ぜるといふ。ハツホの根は切り、田へ返す。また、残ったワラはクラの中にしめておき、正月のしめ縄を十二月三十日に作る際に用いる。一月の十五日が過ぎると、しめ縄を処分する。焼く人が多いようだが、この家では海へ持

訪ねた。
 集落の秋まつりは十月二十三日に集落の氏神である弓矢八幡宮で「ガンジョウジ」として行っていたが、現在では都合のいい日に行っている。御神酒を供え、オセンマイを集落民に配る。米二合、カライモ三本を供えてお祝いし、それらを米を作らない人などが買う。

ハツホをまつる人は最近では殆んど聞かないというが、この家では種籾との関連で、現在でも行っている。収穫期に入ると、大安の良い日にカシラの方の田の水口付近の種を引き抜いてくる。泥を洗い落とし、氏神と床の間と伊勢神社（花里）の三所にまつる。その際、籾のついたままの穂先を右に、根を左にした状態で供える。伊勢神社に奉納したものは持ち帰り、籾を落として半紙一枚でつま



⑥ 籾を落とした状態で保存中の
 ハツホ、根は切りとり、田へ返す。
 ワラはしめ縄にする。
 （西之表市 西之表 城）

って行き、秘かに流すのだという。オオクニヌシノミコトがきちんと処分してくれるからだという。しめ縄についていたモチは家族で食べる。

以上のハツホに関する儀礼は我流だということであるが、ハツホの籾を種籾に混ぜたり、根を田に返すことは、稲の靈魂を翌年の稲に持ちこすという点で非常に興味深い。

田の神を祀る儀礼は、一月十一日から十四日に以前やっていたそうであるが、現在はない。カシワイチゴにごはんをのせたカシワガー（かしわがゆ）を、ユズリハ、モロバととも供えていたという。

春から田植え期まで

この時期の儀礼はすっかり数が減り、現在も行っている人は少ない。

西之表市上西、大花里では、先に述べたように四月初旬に集落中で「青田まつり」という田の神まつりを行っていた。丘の上にある田の神の石碑に田の数だけオニギリを持って行って供えたという

が、現在では田の神の石碑がどうなっているかもわからないとい
う。

また、水口にかかわる儀礼は全く聞けない状態であり、殆んど行
う人はいないようだ。

西之表市西之表、城集落では水田に水を引く為のイデ（井堰）を
清掃する際に、水神様をお祀りする。

この集落では、ガンジョウウを秋に行くと先に述べたが、氏神様
が未登録の神社である為に、春祭りは行っていない。そこで伊勢神
社（花里）の春祭りに参加している。昨年までは初を祀ることはな
かったが、熊野神社の春祭りを見に行った際に初を祀っていたの
で、今年からは初を供える予定だという。

この時期の儀礼がこれ程激減したのは何故であろうか。田植えの
季節が三月末から四月初旬という早い時期に移行したために、さ
うきびの収穫期に重なったことも一つの要因ではあるが、むしろ
機械化によって田植えの形態が全く変わってしまったことに起因す
ると考えた方がいいだろう。

稲作以外に関する儀礼

① コノミヤジョウウの現存状況

西之表市安納、下郷では現在もコノミヤジョウウを行う。コノミヤ
の木は、床の間、神棚、家の四隅にさし、子供たちがコノミヤの歌
を歌いながら各家をまわる。モチや金を与える。一月二十日にコ
ノミヤの木を取るが、モチは雑煮にして食べる。さとうきびの収穫が
忙しく、家によっては二年に一回位の割合で参加している。

西之表市現和、西保でもコノミヤジョウウを行っている。小、中学
生が主体となり、各家を歌（コノミヤジョウウの歌）を歌いながらま

わる。子供会や、PTAの行事の要素を多分にはらんでいるが、盛
んに行われているので、今後も続くと思われる。家によっては、ま
ゆ形のモチをさしたコノミヤの木があるという。昔と変わった点は、
男の子だけの参加であったものが、男女とも参加するようになった
ことだという。

西之表市上西、大花里や、西之表、城では、現在は行っていない。
家によってはコノミヤの木を作って刺す所が残っているとと思
われるが、調査した範囲では見られなかった。また、この二つの集落
でも昔は行っていたが、その際は男の子だけが参加したという。コ
ノミヤの木の先に、木をけずって作った花の形のかざりがついでい
たという。

他の地域で調査を行った者の話では、かなりの集落でコノミヤジ
ョウウが現存するという。もともと養蚕にかかわる儀礼であるはずの
コノミヤジョウウが、何故、現在も残っているのだろうか。その一つ
の原因は、子供主体の集落行事であった点にあるだろう。子供会組
織は、非常に強く地域の人々を結びつけている。年中行事の中
でも、子供たちが進んで参加できるこの行事は、保存されやすいもの
であろう。また、モチを使ったかざりものであるコノミヤの木は、
正月にモチをつく習慣がある為に、非常に気軽に作られ、家にかざ
っても美しい。人々がモチをつくたびに、コノミヤのモチも確保さ
れ、今後もこの行事は伝えられてゆくと思われる。

② ムギノハツアゲ（オガンアゲ）と（ヒダリマキ）の行方

西之表市上西、大花里では以前、麦を石臼でひいてだんごを作
り、神様に供えるムギノハツアゲ（オガンアゲ）を行っていた。こ
れは五月の五日か六日に行われ、集落民はそのだんごをもらって食
べたという。ところで、このオガンアゲの日を中心に、潮どきの良

い日に集落中で魚つりに行く風習があった。今でも行く人がいるらしいが、集落では酒宴だけを行っているという。この行事は、ムキノハツアゲと名のつくとも、麦に関連した儀礼であった。現在では麦を作る人は殆んどいない為、自然にこの儀礼は消滅したという。

西之表市西之表、城では昔、各個人の家で「ヒダリマキ」らしき行事を行っていた。各個人の家で、タブの若木を切ってくる。七、八の中皮をはぎ、その皮を再びタブの木に巻いてゆく。巻き方は斜めに間隔をあけて巻き上げるやり方で、交差させる。それをたいまつであぶり、皮を取る。出来あがった文様つきの棒でピワ等の果樹の幹をたたいてまわるが、そのとき「ナレナレナーランキハコイデキリタオス」と言っていたという。また、この棒は床の間や仏壇に供えたり、正月のカドキに用いたという。一種の「成り木責め」であるが、棒に鋸歯状の模様をつける点で興味深い。残念なことに、現在は行方ないという。土地の人は、昔ほど、ピワなどの果樹がなくなつた為だと考えている。

以上が調査結果であるが、農耕儀礼は予想どおり急激に減少していった。これらについて考察してみたい。

冒頭で述べたように、種子島の農業はさとうきびに主体が移行してしまっている。従って、その刈り入れにあたる十一月下旬〜四月上旬には、多忙を極める。その為であろうか、正月が二回訪れる小正月の感覚は次第に薄れつつあり、元旦に集約されているようだが、但し、コノミヤジョウウに関しては、先に述べたように、子供会が主体となって行っている場合が多く、学校のPTAが推進して行う例もある。共同で行う行事だけに、減少からまぬがれているようであ

る。また、各家々においても、これらのことをふまえて年末のモチつきの中から、場合によっては小正月のモチつきの時まで、都合の良いときにコノミヤのモチを用意しているようである。

稲作に関連する正月行事は姿を消しつつあるが、ホダレヒキの減少などは、炊飯器の発達などとも関わりがあるだろう。ただ、いくつかの例でもわかるように、カケホ、ハツホを大切にしている風習は残っている。床の間にかけたり、しめ縄にしたり、その形態は様々であるが、少なくとも、収穫した最初の稲穂を大切に祀るという感覚は失われていないようである。それぞれの家で、自分なりに簡略化しつつも、これらのハツホ・カケホを祀る習慣を忘れていないということは、非常に意義深いことであると考える。また、ホダレヒキが現存しているという事実も、大きな意味を持つのではないだろうか。細々と、しかし信念をもった人々によって延々と、この儀礼が続けられることを祈ってやまない。

意外なことに、田植え前の儀礼、特に鍬入れや水口祝いが現存しなかった。ただ一つ、安納の例で正月に田の水口を祀るものがあったが、苗代の準備の時に行うものはなかった。やはり、田植えの形態の変化が主な原因と考える。機械植えが苗代の形態にまで変化を生じさせた。共同作業の要素は消え、すべて機械まかせである。田おこしもトラクター等で行うものが、鍬入れなども必然的に消滅したものであろう。残念ながら、こういった傾向は今後も進むと思われる。しかし、城集落の例でもあったように、種初を神社に奉納しようという発展的(むしろ再生であろうが)な考え方も残っている。現在も昨年の初を祀った後に種初に混ぜる習慣は、他の地域にもあると予測される。これらの習慣が、今後も継続されるか否かは推測し難いが、神社の運営の仕方や、人々の意識によって、場合に

よってはまだ残るものであるかもしれない。

田の神に関する儀礼は個人的に行われるものが多く、減少している。ただ、安納では火の神様にオニギリを供えるという簡単な形で残っており、すぐに消滅するものではないだろう。集落で田の神の石碑をもつ場合、田の神まつりは残りそうなのであるが、花里の例を見る限り、他の地域でもその現存はあまり期待できない。稲作が、共同作業でなくなったことは、農耕儀礼の面から考えても、あまりにも大きな変化であった。

稲作以外の儀礼は、その作物の増減によって大きな影響を受ける。表が作られなくなり、果樹が減少し、すぐに「ムギノハツアゲ」や「ヒダリマキ」等が消滅している。では、さとうきびが主体になったからといって、さとうきびの儀礼があるかということ、これは全く無に等しい。今後は、新しい作物が増加したからといって、直接その作物に関わる儀礼が生まれることは考えにくい。従って、コノミヤジヨウが現存することは、重要な意味を持つのである。すでに養蚕が途絶えた現状で、これはと盛んに行われる行事なので、恐らく今後も子供会活動等の関連で伝えられてゆくと思われる。むしろ特異な例であろう。

全体の調査を通して感じたことは、機械化による儀礼の消滅、そして世代交代の際の消滅があるという事実である。今後、農業を受け継ぐ人々は、恐らく農耕儀礼を正確に引き継ぐことは少ないだろう。但し、各家々の風習として、何らかの形で残すことは不可能ではない。形態は変わってもその精神や感覚が引き継がれてゆくことが重要であろう。更に、現存する地域の行事としての儀礼は、大切に保存されることが望ましい。一度消えた伝統の灯を、再びともすことは容易ではないのだから。

(昭60・12、昭61・1調査)

伝承者名(順不同・敬称略)

榎本貞彦	(M36・4・16生)	西之表市現和下之町
鎌田正好	(T8・3・28生)	西之表市安納下郷
鎌田浩良		西之表市安納峯郷
園田一夫	(S3・9・20生)	西之表市現和西俣
蛟島新	(T13・8・15生)	西之表市現和西俣
遠藤惣八	(M35・8・31生)	西之表市現和西俣
洲崎ミヤ	(M34・3・10生)	西之表市上西大花里
上妻時香	(T13・12・10生)	西之表市城
上妻正子	(T13・11・20生)	西之表市城

漁村と漁撈習俗

神 國 博 人

種子島の風土と正月行事や漁業等を知るため、昭和五十六年十一月二十八日から昭和五十七年一月三日まで、文化人類学実習が行われた。

私も本実習に参加し、島内のあちこちを駆け足で見、また聞いてまわった。私のテーマは、「種子島における漁法と社会組織」ということであつたが、あいにく正月と重なつたこともあつて、どここの家でも忙しく、調査に長く時間をかけることはできなかった。特に漁法については、実際に漁具をどのようにして使用するのかを具体的に教えてもらつてもりだつたが、時間の都合上それもできなかった。又、その他の調査事項も極めて不十分で論をまとめるにはあたわらないが、今回は、私が実際に見聞した範囲内で、少々述べることとする。

テーマについて

私が聞いた話は、主に漁法の簡単な説明と漁業の責任者であるベンザシについて、また漁業に伴う各種の行事や信仰などであつた。これらは、漁業に関する習慣、風俗であるといえる。

今回の調査で感じたことは、種子島では現在もなお、昔からの習俗が残っている所が多々あるということ、例えば、漁業に関する役

付や各種の年中行事等である。しかし、その伝統も、近代化の波によつてだんだん薄れてきているのも事実である。現に、私に話をしてくれた漁師も、「近頃の若い者は」という言葉をよく口にしていた。

失われつつある習俗を、それがなくなる前に見聞できたのは幸いであつた。が、次に訪れた際はどうなっているだろうか。私がみた時点での種子島はその時だけのもので、二度とは触れることはできないのである。

漁撈習俗に関する聞きとり

1 西之表市洲之崎

① 「ベンザシ」

ベンザシともいう。弁指、弁差、弁済使などの字をあてる。本ベンザシ一名、ベンザシ六名で、一年交代、各戸持ち回りであつた。本ベンザシは、一年間神社の管理にあたり、漁撈の全てを統率した。そのかわり、漁具、特に網等の保管、修理などを全部一人で責任を持つので、支給されるわりあてだけでは到底足らず、本ベンザシがまわってきた家は、家族総動員で協力し、又、家計のやりくりも大変苦労したそうである。あとのベンザシは各集落の祭りや祝いを世話した。

② 青年会、処女会、婦人会

青年会は一応二十五才まで、処女会は、中学卒業後すぐから二十才まで、婦人会は五十才までである。また特別会員として壮年の中から役員五名を選び、これらの指導にあつた。青年達に対する指導は厳しく、たばこは二十才までだめだし、また、しいなどのま

きを下に置いて正座を二時間ぐらいたせたりした。その頃（昭和二十年頃）はみなはだして、カッパがないからみものをつけていた。又、帆船でザコ獲りに行く時も、年寄り達が火ばちを囲んでキセルできざみたばこを吸う横で、若者は一晩中働かねばならなかった。当時は焼き玉エンジンといって軽油から重油に代えるエンジンだったので、炭火で油をぬくめないとかからず、そのような仕事も、若者が一切しなければならなかった。そして「海にもぐれるようにならないと一人前ではない」と云われ、漁師の子は小学一年で二歳泳いだということである。これは、いつ海に落ちて自分泳げる体力をつける為である。

このように辛い修業を重ねて一人前の漁師へとなっていた。十六才から十九才までつとめ二十才から、配当も当たり前にもらえた。が、長男だけは三人前もらい、次男は半分で、三年間つとめないと長男のようにはなれなかった。

③ 漁 法

トビウオとり……馬毛島に小屋を設け、五月から六月集団で移住して行く。馬毛島は、能野、池田、瀬泊、洲の崎、住吉の五つの集落で権利を持ち、小屋も集落別にかたまって建っている。この小屋を基地に、昔は日没後二時間ぐらいたしてから沖に出て、トビウオがいたら水面が光ったのでその時網を入れてとったが、その後、夏は四時半が夜明けだが、それまで絶対にとらず、産卵のため来たメスが産卵をすまし、オスが海を真白くにごらした時に、ランプの合図でとる、という方法になった。これはトビウオの習性を利用したもので産卵したトビウオは全部表面に浮いてしまいオスもメスもどんでん網に入った。昭和二十九年か三十年にこの方法もやめようということになり、現在は沖引といって昼間とるようになった。その後

大漁はなくなった。ちなみに、昭和二十七年には二〇〇万匹獲れたが、一匹七円として八四〇万円になったそうである。又、昭和三十八年までは、ベンザシの下、共同作業で行われたが、今では瀬泊、住吉、能野以外は個人（六名）で行っている。

トビウオをとるために改良されたのが、サツマガタという船である。これは、かじが九尺ぐらいいあって、一年に二〜三本は折れる覚悟をせねばならない。山から白カシを馬で出してきて三ヶ月水につけてシブをぬく。後は大工さんにたのむ。かじやろの木は九〜十二月のうちに切るが、木の選び方は、小学生の時から、長老に枝のかたなどをならいにいく。木の真中は弱いので、両端から二ちようとする。つなをくくる方法や、みざおのとり方も青年組で初めて習う。船のオモテの人は、波が荒い時、上から相手の船をみざおでさして、はなしてやるのである。又、漁師は杉の木を大事に育てる。小さい頃から枝を落としてまっすぐにする。だから漁師は山の深いところに土地を持たなければならない。

キビナゴとり……昔も今もさし網を使う。さし網は月の九日から六人位で一人一反ずつ作る。一反は十一ヒロで、尺棒で計る。二十日程まで作る。九月にキビナゴを獲る。月に十二日しかできず、水がなかったので夜八時から九時にとって時間がたち朝になると赤くなってしまう。今は電気設備のおかげで、二人ですみ、一年中とれる。乱獲ぎみなので、鹿兒島から規制がきているが、昼に獲るものと夜のものとは二種類あり、夜の方がおいしいそうである。夜中の一時か二時頃に獲ると、ブランドトンをはいているからである。従って現在では二時以降にとり、特産として加工する。

④ 漁 具

昔は、漁具は殆んど自分達で作っていた。

「ビシ」……天草生まれの横林龜介なる人が、タイヤの赤チューブを切ったのが最初でワイヤロープに自分で作った竹の筒を、間隔を変えてつけたものに結びつけた。ブリ、ヒラマサ、アカジョウウ（クエ・アラ）など何でもつれ、その発展は県の試験場より早かったと云う。今はナイロンに船をつけたもので、ヒラマサが一日五十本ぐらい、アカクエは二十本ぐらい獲れる。横林龜介の発明はゴムビキの元祖となったのである。

針……昔は釣針も自分で作った。フカ用などの釣針は自分で作るが、小さなものは、針先のマチだけがどうしてもできないので、針だけ作って鍛冶屋さんへ持っていた。一人前の漁師になるには、この釣針と、ロープも作れなければならなかった。ロープは、にぎり飯などを包むシャリン（シャニン、月穂）の茎をたいて作るが、大変強いそうである。

「カツオのたてあみ」……農家の人に頼んで、はしごをもって畑に行つてシロを切ってくる。それを水につけてむき、水でといて強く強い繊維になる。これで一畝五、六〇疋のあみを作る。これをオウという。昭和十六年までは、カツオのたてあみは年寄りがつないでいった。網一つに半年もかかったが、一艘に六人ぐらい乗って仕事をするので一人二反で計十二反もいることになる。網を作るのには大変な労力を要したことがわかる。網の目は簡単なもので、丸い木にひっかけておいた。網作りは昭和十四年生まれの人までで、それ以後の者は、二十九年県の試験場からナイロン網が入ってきたので、やらなくなった。昔は、かかっている魚の半分は、網が切れましてとれなかったそうである。

⑤ 「船おろし」と「船霊様」

船おろしすなわち進水式は、絶対に満ち潮の時でなければならな

い。親戚中集合し、船大工の棟梁がトリの方から船霊を持ってきてオモテで祝いのモチを投げる。それから船を皆で海におろし、親戚の人を皆海に投げ込む。女性や子供は逃げまわるが、追いかけて投げ込む。かくれていても探し出す。

船霊は、女の神だといわれる。一人で乗るのをすくきらうので、人形もいっしょにのせるわけだが、人形は、生理のない小学生の女の子の髪を切って紙の着物を着せる。他に口紅と、銭を十二文（月の数）、より月につくった人は十三文をいっしょに船の中央の船張りに切りこんで納める。又、船には動物を絶対に乗せない。

⑥ 主な漁撈年中行事

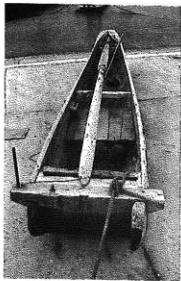
正月一日……船祝い。船持ちの人たちが過去に対して感謝し、無礼講で飲み歩く。各戸で御膳を用意してくれるので、いくらでも飲み食いできた。今は旅館で宴会を行う。

三日、四日……七草まで……初漁。魚を一匹か二匹釣ってくる。ハラビレ一匹分（二枚）と、塩、米、焼酎を、船霊に、ハラビレは切った方を前にして供える。家では縁故をよんで宴会を開く。

ベンザン交代……旧正月元朝。今は二月二日。本ベンザンの家で集落のモヤイ（總會）を行い、うど神宮まで行って神主に祈禱してもらい、お札もらってくる。

三月……願立て。

九月……ガンジョウジ。日取りはベンザンが選ぶ。正月に集落全体で願をたて、秋にその願成就を祝う。そして広さ六〇〇坪の網干場で、婦人会、青年会、壮年会、処女会の者たちが、すもや踊りで競いあう。踊りは劇が多いが、処女会や青年会は、そのころはやったものをテーマにして人気があった。最後にハイヤ節が始まるかと、全員で踊る。この日は皆エビス様へ参拜に行く。お供え物は、



丸木舟 堅固で、100年以上もつという。舟の長さは590[㍉]で幅65[㍉]、トモの高さ43.5[㍉]。ヤクタネゴヨウマツ製の舟で、櫂、みざおを使い、かいは使わない。

本ベンザシが用意する。まず最高の、つまり九月に一番とれにくい魚の、同じものを二匹対で供える。絶対無キズに限り、現在はタイやメバルを用いる。一匹では縁起が悪く、たくさんとれるという意味で、偶数でなければならぬ。それから漁師の食物を表す米、度払いとしての塩、ろのかわりの大根、それに神様に供えるもので一番良い大豆、これは米よりみそが大事という考えからきている。これらを供え、神主を雇ってベンザシが全員参加しておはらいをしてもらい、魚はおみやげとして神主にやる。船神は、家においては、神棚よりも高い所にあり、御飯を炊いたら、絶対最初に供える。

九月以降……各個人で漁をする。漁から帰ったら、その足でどこにもよらないで、まっすぐエビス様に行き、獲った魚のうち二匹を供える。常に身を清め、日に幾度か風呂に入る。特に飛魚漁の期間には夫婦関係もなかった。(西之表市洲崎 後庵一治氏より)

2 西之表市国上湊

ベンザシは一人で、投票によって決める。投票は正月元旦に神社で行われ、「ベンザシをせんば男でなか」といわれるぐらい、村のあらゆる面の総帥であった。ベンザシは、シヨクタイ二名とテツタイを指名した。今は十二月二十五日に、株主十四名が順番にひきうける。地引きがさかんで、カマス、メコン、サバ、アジなどが獲れ、川ではボラが獲れた。昔は丸木舟も七七八そうあった。

(西之表市国上湊 荒河長次氏より)

3 西之表市瀬泊

本ベンザシは漁業操業の最高責任者で、交代は、名簿順に、十二月のさるの日。トビウオのベンザシ二人。正月四日に仕事始めで、組合の神社に初魚の左のムナビレとモチ、米、塩、酒を供える。船おろしは、家族・ナナイトコまで海につかねばならない。造船所から試運転に出発、とりかじに二〜三回まわったあと、全速で走り、異常のないことを確かめ、船主を後ろからつきとばす。海に落ちた船主は、助けられず自分で陸へと戻る。最初に災いを被って、これ以上危険にあわないようにということである。

船霊は、女の神様で一人ではさびしいから二人いる。船主は海上安全を祈って、鏡、くし、口紅、おしろい、そして米、塩、大豆、あずきを二粒程ずつ、船の横げたに入れる。機械場の自分の部屋には、オツツという筒の中に、三才になる女の子の髪の毛を十本ぐらゐ入れて、かける。

(瀬泊公民館での船祝いにおいて)

調査を終えて

以上三つの集落についてみてきたが、その習俗に関して、幾つかの共通点と相違点があることがわかる。まず、共通点として、どこにも、必ずベンザシがいるということ、ベンザシは漁撈に関する最高責任者であるということ、船霊、船おろし、船祝いなどを行うことなどがあげられる。しかし、細かい点では土地によって違いがみられる。例えば、ベンザシ、特に本ベンザシの選出方法は、投票によるものと、帳簿の順に交代するものに分けられる。また、その権限についても、洲之崎と蘆泊では、主に漁業一般において、漁具の管理、共同作業の指導にあたったのに対して、蘆では、漁業だけでなく、集落の全てにわたり統率していた。これは、先の二者が一つの湾をはさんで隣接しており、蘆だけは地理的に離れているからであらうと思われる。

船霊については、女の神であるという点では一致しているが、女神が二人のところと、女神が一人に、人形を一体乗せるところがある。いずれも、一人ではさびしいからということだが、さびしいのなら何人でも乗せれば良いと思うが、二人だと決まっているのが不思議である。一人でさびしい女神に、男神を対にするのであれば納得できるのだが、ではこの船霊は何なのであろうか。

船霊を弁財天だとすると、ベンザシを弁財天の使い、つまり弁財使と表すのもわかる。先にもらしてしまつた重大な事に、船祝いの日には祝い歌が必ずあるということがあるが、これは弁財天が音楽の神ということに端を免したのではないだろうか。そして、船霊である弁財天を通して、海上、漁業の守護神であるエビス様に願を立て、航海の安全と大漁を祈つたのではないかと考える。

次に、船おろしの際、船主やその親戚を海へ投げ込むが、これは災害除けと同時に、体を清めるといふ禊の意味もあるのではないかとと思う。海と、その海の幸を陸へともたらず船は、神聖なものであつて、それゆゑ船霊の御身には、生理のない、すなわち汚れない女の子の髪を用い、四つ足の動物を絶対乗せないであろう。

今度は、疑問点であるが、それは、山の神の問題である。船を造るには、山から木を切りだしてこなければならぬ。山で粗形を造り、海岸に出してから仕上げた丸木舟にいたつては、山の神と何らかの関係があるのは当然である。ところが、船の中にも、家にも、山の神は祠っていない。航海が安全にできるのは、海上神の守護もあるであろうが、漁師の乗る船そのものは、山にある木で造っているのである。材料がよくないと、良い船はできないのにと思うと、漁村における山の神の意義については、全く疑問が残る。

以上、思いつくままに述べてきたが、勉強不足のため、まだまだわからないことはかなりある。次に訪れる機会があったら、さらに有意義なものにできれば、と思う。

(昭56・12・25～昭57・1・3調査)

漁村組織と採取物と水産加工

矢野真弓

一、はじめに

今日西之表市の漁業集落をみると、生活全般がすっかり近代化しているが、その反面昔ながらの信仰や行事その他が残存している。漁村組織においても、市漁協を頂点に構築された近代的組織の中にベンザシなどのような古い起源を持つと思われる役職があり、その仕事も古くからの信仰などと関連している。これらはどのように関連し機能しているのか、考えてみたいと思う。合わせて集落の行政組織や集団漁についても触れてみたいと思う。

二、概観

今回私は、西之表市の漁業集落の中の湊、浅川、田之脇、庄司浦、浜之町、洲之崎、池田で漁村組織の調査を行った。その概要は次のようである。

まず集落の行政組織だが、各集落には西之表市と集落の連絡役である市政連絡員（部落会長）がいて、彼を中心に集落の仕事がなされるわけだが、漁業にはほとんどタッチしない。漁業に関しては市漁協のもと集落ごとに小組合があり、集落の漁業を司どっている。実際の漁の上での役割分担は、個人漁が主体である今日、ほとんど

見られない。漁村におけるいずれの組織を見ても、いわゆる身分差といったものはほとんど見られず、平等を原則とし、年齢や実力を重んずる傾向があるように思われる。

三、集落の行政組織

西之表市の各集落には市と集落との連絡役の市政連絡員がいて、その下に集落の行政組織が成り立っている。さらに末端組織としていくつかの隣保班に分かれています。

① 庄司浦

十七班、百六戸（注1）。市政及び漁協の連絡係としての部落会長。副部落会長、会計、部落会長の小使いとして町頭。庄司浦は大きく二つに分かれ、それぞれに町頭がいる。道路関係の仕事をする土木委員一人、集落の話し合いをする評議員七人、班長、カンヌシ。カンヌシについては後で述べる。

② 浅川

部落会長は農事組合長を兼ねている。副組合長、会計、評議員五人、土木係一人、畜産係一人、町頭一人（カンヌシの補佐役で祭りや不幸があった時の連絡係である）。班長、カンヌシ一人。

③ 田之脇

七班、六五戸（注2）。部落会長は任期一年、選挙で決める。補佐が会計を兼任、評議員（班長）。

④ 浜之町

十班、九四戸（注3）。部落会長、副会長、評議員（相談役）五人、班長。

⑤ 洲之崎

十九班、二百九戸（注4）。部落会長は任期一年で選挙、交代は三月。会計も同じ。班長は任期一年で回り番。

⑥ 池田

七班、七三戸（注5）。部落会長と会計は任期二年で選挙、三月交代。班長は任期一年で回り番。

1 カンヌシについて

湊、庄司浦、浅川にはカンヌシと呼ばれる役職があるが、神社に仕えることを職業とするものではない。神社に職業として仕える者としては別にホイドンという神職がいる。三村落のカンヌシを比較してみよう。

① 湊

選挙で一年交代、この集落はかつて製塩を行っていた関係上マキ地があり、今日それを四十数人で所有している。このマキ地の所有者（カブヌシ）であることがカンヌシの条件である。役目は祭の日、毎月一日、十五日にエビス様をおまつりすることである。交代は十一月二日、ベンザシ交代と同時に行われる。カンヌシの禁忌としては肉食をしないことがあげられる。また昭和四十一年カンヌシをした人のノートによると、家族に不幸があったとき（父母、妻子は五十日、祖父母の場合は三十日）カンヌシとしての仕事はしないとあった。

② 庄司浦

庄司浦のカンヌシは世襲制である。交代のきっかけは隠居などになる。エビス様のそうじや六月灯、十月二十九日のエビス様の祭りの仕事をする。カンヌシは家族に不幸があったら一週間、カンヌシ

の仕事はしない。その間は漁協理事や本ベンザシがカンヌシの代行をする。

③ 浅川

一年交代で年長者から順々に回ってくる。農事組合で配っている浅波神社のそうじをする。また毎月一日、十五日にはシュエイ（潮井）をとってきておまいりし、神社を清める。祭りの際はホイドンの手伝いをする。

2 集落の会合

① 湊

委員会と総会がある。委員会は部落会長、農業・漁業の事業委員、婦人会、老人クラブ、青壮年部、教育指導部長、ベンザシが出席し、事業や予算、運動会等の話し合いをする。総会は五月に行われ、学校を卒業した人は全員参加する。年中行事の話し合い、各班でよいことをした人の表彰式が行われる。

② 洲之崎

集落会をモヤアともいう。重要なことは総会にかけられるが、これは年に何回か開かれる。また駐在員の召集する班長会もある。

四、集団漁について

『日本民俗事典』には、「漁撈の労務組織は、その目的を達するための技術面における協業関係と、社会的側面からするものに分けられる。」とある（注6）。ここでは前者の例として西之表市で行われた集団漁のことに触れてみよう。

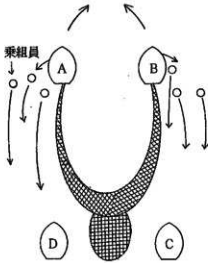
洲之崎ではトビウオをはじめとして、カマス、メコン、エバ、ア

ジの集団漁が行われた。八十八夜のころに男たちは馬毛島に渡り、帰ってくるのは七月十日ころであった。洲之崎には大きな船が四はいあり、組合員はその四はいの船に分かれて乗るが、誰がどの船に



図① 洲之崎のトビウオ漁の船の位置

乗るかが決まっていた。A、Bには主に若い人が乗る。それぞれの乗組員のうち五人は櫂を漕いで網を引き、浅いところに来たら船を



図② 洲之崎のトビウオ漁の船の位置

寄せる。それ以外の人は泳いでC、Dの船に移り、網をあげる手伝いをする。C、Dには年かきの人に乗っている。この漁での分配は、本人(乗組員)一、隠居〇・五、船主二である。

池田でもやはり八十八夜から七月中ころまで、馬毛島のトビウオ漁が行われていた。漁に行くときは午前一時〜二時に起きる。このとき組合員らを起こすのは本ベンザシと網一じょうに一人ずついるトビウオベンザシで、彼らは交代で起こし役をする。一つの船に六、七人程度乗り、二そうで一つの網を広げる。乗組員の内訳は潜む人(マッコミ)一〜二人、オモテに立ち船の指揮をするオモテ役が一人、船にいて櫂を押す人(トモ役、トモとり)一人でその他の人は櫂の加勢をしたり、魚を船に積み込んだりする。船の所有者(フナモチ)は収入が多く階層も上であり、船の乗組員(センチウ)は親族関係などで決まっていた。トビウオ網は浦中の所有である。トビウオ漁の分配は本人一、船一、本ベンザシ一、トビウオベンザシ〇・五、本人でない雇われ人〇・五、隠居〇・五である。

五、漁業組合

この漁業組合は、先の『日本民俗事典』の社会的側面からみた漁撈組織に当たると思われる。



図③ 西之表市の漁協組織

漁業組合の最大のものとしてまず西之表市漁業協同組合がある。市内の漁業集落を大きく四つに分け、そこから理事を九人出す。その内訳は西之表三人（洲之崎一人、大崎・池田一人、豊泊一人）、住吉一人、浦田・湊一人、東海二人である。そしてこの九人のうちから互選で市の組合長を決める。理事の任期は三年、交代は一月である。各漁業集落にはそれぞれ小組合長がいるが、集落により理事と小組合長が同一人物であったり、別であったりする。次に各集落の組合の組織を挙げる。

① 庄司浦

小組合長、副小組合長（会計を兼務）、ベンザシ二人（本ベンザシ一、助ベンザシ一）。

② 浅川

小組合長、会計、ベンザシ六人。

③ 田之脇

小組合長、会計（補佐を兼務）、ベンザシ四人。

④ 浜之町

小組合長、会計、ベンザシ一人、ムラギミ二人。

⑤ 洲之崎

小組合長、副組合長、会計、船主会長、エビス神社の世話をする人（名称は特にない）。

⑥ 池田

理事、小組合長（任期三年）、会計、ベンザシ一人。

① ベンザシについて

今回の調査では、どの集落でもベンザシという言葉を目にした。この言葉は弁指、弁差などいくつかの表記があるが、「弁済

使」がもともとの形であろうといわれている。弁済使とは荘園時代からの歴史を持つ言葉で、近世には庄屋相当の役人や漁村組織の指揮者のことをいった。今日は多く海村に伝承されている言葉である（注8）。では西之表市の漁業集落のベンザシとは一体何であろうか。その仕事、交代、禁忌などを見てみよう。

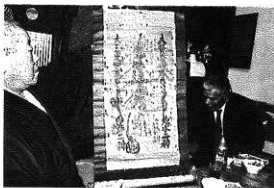
① 湊

任期一年で選挙。カンヌシと同じくカブヌシであることが条件である。仕事は集落財産の管理、湊神社のそうじ、祭りに関した仕事をやる。また集落の相談役でもある。

ベンザシの交代は十一月二日、湊神社で行われる。湊神社はもと製塩の行われていた場所で、後に湊神社が建てられた。祭神はアマテラスオミカミである。一月一日に神社に供えた系図（マキの書類）を置いておく。神社の系図は慶應以前に焼け、後に種子島家から写したとされるもので、日頃はベンザシの家にある。まず旧ベンザシがあいさつをし、旧ベンザシにめでた節が歌われる。そして新ベンザシのあいさつがあり、新ベンザシにめでた節が歌われる。昔のベンザシ交代はベンザシの家で行われたが、もてなしなどの煩雑さから、今日の神社で行われる形になった。禁忌としてはベンザシは肉食をしないというものがある。また前述のカンヌシと同じく、父母、妻子の死後五十日、祖父母の死後三十日はベンザシの仕事をしないこと昭和四十一年のノートにはあった。

② 庄司浦

任期一年、回り番。組合員で若くて元気な人がする。主な仕事は朝早く起き、海に潜って魚がいるかを見ることで、見つけたらバイクで集落中を走り連絡する。庄司浦のベンザシは組合長の補佐役といった性格をもつ。交代は一月五日、漁協の決算のとき行われる。



浜之町のベンザシの象徴「オマンダラ」
(井出 渉氏撮影)

任期一年で回り番。組合員であることが条件である。仕事は魚群を見つけたら組合に知らせる。仕事は魚群を見つけたら組合に知らせる。エビス様のそうじをし、魚を供えておまつりすること。浜之町のベンザシは漁業全般の取り締まりをする漁撈長とみなされている。交代は十二月三十一日、日陸上人が書いたといわれるオマンダラを旧ベンザシ宅から新ベンザシ宅に移すこ

特に儀礼といったものはない。禁忌としては死人があっても葬式には行かないこと、家族に不幸があったら一週間、ベンザシの仕事はしないことが挙げられる。

③ 浅川

任期一年。選出方法は選挙だが、またベンザシをやっていない人が自然に選ばれる形となり、ほとんど回り番に近い。誰かが魚を見つけた時、風の時に有線を使って集落に連絡するのが仕事である。

④ 田之脇

任期一年、回り順で、組合員であることが条件である。仕事は魚群を見つけたら組合に知らせる魚見の役と、五月の願立て、十月二十九日の願成就に役員として参加することである。交代は十二月組合の決算から一、二日余裕をもって行われる。

⑤ 浜之町

とよって行われる。そして明けて一月一日、組合員がみな新ベンザシ宅に集まり、祝いが行われる。ベンザシの象徴であるオマンダラがこの日だけ公開される。まず僧侶による折禱があり、次に組合員によって祝いの歌(じょや)が歌われる。この祝いはベンザシ祝いといわれる。それから宴会になるが、この方は浦祝いといわれる。禁忌としては肉食をしないことがあげられる。またベンザシの家に不幸があったら、オマンダラはよその家にしばらく預けなければならない。不幸があった家はケガれているからだという。

⑥ 洲之崎

洲之崎には現在ベンザシはいない。よってここでは戦前のベンザシとその変化を述べておく。

洲之崎のベンザシは他集落に現在いるベンザシと同じく一年交代で、回り番であった。仕事は夜明けにハコメガネを使って魚見をし、魚群を見つけたら、浦の人々に知らせることや、網修理をするとき組合員に通知すること(網修理はみんなです)、また水天宮(戦後なくなった)とエビス神社のお世話をした。六月六日のエビス祭り、九月の願成就に燈籠をはりかえたり、船の旗を集めたり、舟をとってきたりするのにもベンザシの仕事であった。交代は旧一月二日に行われた。それを漁業協会といった。神宮の折禱、僧の折禱が行われ、旧組合役員、新組合役員がいさつをし、新組合長のもとに一年間のことが協議され、船祝いの歌が歌われ、後は宴会となつた。

洲之崎のベンザシの仕事の中には網修理の連絡、魚見があったわけだが、これは今日不必要な仕事となった。まず網修理の連絡が必要なのは、集団漁の場合で、個人網の場合は、その人が思いついたときに修理すればよいので不必要である。また魚見役は今日、魚群

探知機がしてくる。つまり個人漁が主体になったことと魚群探知機の普及がペンザシを不必要とするようになった。では信仰上の役割についてはどうか。

ペンザシはかつて水天宮とエビス神社のお世話をしていた。水天宮は今日なくなったが、エビス神社は今もあり、お世話をする人がある。ただしこの人のことはペンザシとはいわない。特に呼称もない。一年交代で、毎日エビス神社のそうじをするのが仕事で、その人が行かなければ、彼の家族のうちの誰かが代りにするといった感じのものである。これはペンザシが消えてからの役割である。

⑦ 池 田

昔は本ペンザシとトビウオペンザシがいた。トビウオペンザシはトビウオ漁のときの役目で、任期は一年、一月五日の浦のモヤイの時に交代する。トビウオ網は二はいの船でひくわけだが、その二はい一組(網一じょう)に一人ずつトビウオペンザシがいる。よって人数はやや流動的なものであるが、一番多いときで五人いたという。仕事は前の集団漁で述べたように、本ペンザシと一人一人のトビウオペンザシが交代で組員らを寝かせたり起こしたりすることである。

本ペンザシは漁撈全体の責任者ともいえる役目である。仕事はトビウオペンザシの項で述べたことその他に、組員と相談してトビウオ漁をしに馬毛島へ渡る準備をすること、現在の新港のところに毎朝、魚を見に行くこと、網修繕、網干しの号令かけがあった。またエビス様のお世話があり、毎朝そうじをし、花や水差しの水を替えた。一月五日のトビウオのお願のとき世話をしたり、旧六月十日の願夏祭り(六月灯)のとき神官の手伝いをした。旧八月二十八日の願はどきときは、集落に相談したり、通知をしたりした。交代は十

二月で、四日以降の初申の日に行われた。新ペンザシは焼酎と腹をとった魚(ミザカナ)を持って、旧ペンザシ宅にペンザシのお守り(法華宗のオマンガラ、網を持ったエビス様の掛軸)を受け取りに行くことで交代となる。ペンザシのお守りは家の床に飾られ、花や水が供えられる。

現在はトビウオ漁がなくなったことから、トビウオペンザシはなく、昔の本ペンザシにあたる人が一人いる。エビス神社のそうじをし、六月灯には燈籠を出したり、ホイドンを手伝ったりするのが主な仕事である。一年交代で回り番、交代は昔と同じく十二月四日以降の初申の日で、昔ながらのやり方で行われる。

2 その他の役割について

① イオミ(羨)

任期は一年、交代は七月二日の浦始め(地曳き始め)に行われる。イオミは六人いる。仕事は言葉通りで、海に潜って魚群を探し、見つけたらマイクで放送する。昔は「イオがおんど」と叫んで通知したという。

② カマジ(羨)

製塩が行われていたころの役割である。昔の塩たきの釜は現在のような金属製でなく、竹を編んだもの上下に粘土をつけて焼いたもろいもので、これが割れないようにすることが大切であった。この塩たき釜を作り、管理するのがカマジ(釜司)の仕事である。釜つくりの火は堅木を尖らせ、キリにしてもんでおこした。二、三人がかりで半日はかかったという。火打ち石の火はケガしているが使わなかった。釜に海水を何度も入れ、二昼夜たくが、この釜乾かしの段階ではカマジは昼夜つきっきりで火を絶やさぬようにした。

カマジは釜がこわれぬよう身を慎しむ必要があり、在任中は女性と交わらなかつたという。

③ ムラギミ（浜之町）

ムラギミは村君と表記され、一般的には漁撈の指導者のことであるが、浜之町のムラギミは網の修繕や管理役でありまた、海に潜ったりハコメガネを使ったりして魚群を探す魚見役である。昔は五人、現在は二人くらいいる。任期一年で回り番、組合員であることが条件である。

3 組合の話し合いについて（池田）

緊急時には組合の総会が行われる。これをモヤアともいう。昔はあまり行われなかつたが、現在は陳情などのことがあって度々開かれていく。

一月五日には船持ちの総会がある。船主会、船祝いともいう。五、六年前までは船主会長宅、都合が悪ければ適当な組合員宅で行われたが、ここ数年は元組合員の経営する二軒の旅館が交代で場所を提供している。まず選挙で新船主会長が決められ、次に協議が行われ、あとは宴会である。

六、あとがき

今回私は、「西之表市の漁村組織」というテーマで調査を行った。最後にその結果を簡単にまとめてみたい。

まず集落の行政組織は集落によって多少の違いはあるが、大きくはどの集落も同じだといつてよいと思う。

集団漁は今日少なくなつて、個人漁が主体となっているのがうか

がわれた。

漁業組合の組織の小組合長、会計などほどの集落も変わりはない。集落ごとの変異に富むのはペンザシである。ペンザシの役目は漁撈上の仕事、神様のお世話にまとめられると思うが、各集落の事例をみると、これらの一方だけの場合と両方の場合とがある。またその地位についても、漁撈長の場合と、使い走りの地位があるといえる。近代化、機械化の時代に、系図やオマンダラといったもの、昔ながらの交代が行われている点は興味深く思った。しかしその一方では洲之崎のように近代化がペンザシを消滅させた例もある。エビスの管理者はカンヌシである集落とペンザシである集落とがあるが、前者は集落組織に、後者は組合組織に組み込まれている。以上のことから西之表市の漁村社会は「近代的なもの」と昔ながらのものがうまく融合し、機能している社会」といふことができるかと思ふ。

注1〜注5 注1、注2は集落の方のご教示による、注3〜注5は「昭和五十九年度西之表市政連絡員名簿」より引用。

注6 「日本民俗事典」（昭和五十八年、弘文堂）より引用。

注7 「日本民俗事典」（昭和五十八年、弘文堂）より引用。

注8 「日本民俗事典」（昭和五十八年、弘文堂）より引用。

参考文献

『日本民俗事典』（昭和五十八年、弘文堂）

下野敏見著『種子島の民俗』（一九八二年、法政大学出版局）

『西之表市百年史』

『中種子町郷土誌』

(付)

採取物と水産加工

一、はじめに

今回の調査のサブテーマは「食」についてであった。その中で私は海との関係から海から採取するもの及び水産加工について調査した。

二、海からとれるもの

「海からとれるもの」と一口に言っても、釣り、突き、網などあるが、ここでは「採取する」貝や海藻について述べる。

庄司浦で採取できるものにはトサコ、ナガラメ、ミナ、カラスガイ、プトがある。トサコはお湯をかけ酢の物にして食べる。ナカラメはゆでてナマスにしたり、砂糖じょうゆで煮たり、味噌漬け、塩漬けにする。また採りたてを浜で焼いて食べることもある。ミナやカラスガイは塩ゆでにして食べる。プトはトコロテンにしてしょうゆで食べる。

浜之町では昔はプト、ナガラメ、ミノガキ(セー)、ミナがとれた。今はプトはとれず、その他も昔ほどはとれないという。プトからはトコロテンがつくられる。プトを洗って干すと白くなる。それに酢を入れてたくとトロトロになる。それを布でこしてその汁を固まらせて作る。薄く切ってしょうゆで食べる。ミナは塩ゆで、ナガラメはみそ漬け、さしみ、味噌汁にして食べる。また刻み目を入

れ、そこにみそを入れて焼く食べ方もある。ミノガキは味噌汁にする。

洲之崎も前二者と同じくプトやナガラメがとれる。食べ方もほぼ同じであるが、プトから作ったトコロテンは酢味噌で食べる。その他にはマノリやアオノリがとれ、味噌汁にして食べる。またアオノリは「海苔」にしても食べるという。

三、水産加工、保存

水産加工には塩干、塩辛、ふしなどがあるが、本調査で聞いたものはほとんどが塩干であった。

塩干の仕方として浅川で聞いたものを記しておく。まず魚を入れ塩して一晩おき、それを水の中に入れ洗って塩を抜いて干すのだという。今思えば家々の軒先にいろいろな魚——例えばイカ、ウツボ、クレイオ(クロダイ)、キンゴダイ、グジダイなどが下がっていたもので、あらゆる魚が塩干にされている。乾燥した魚はカマスに入れて天井のところに上げておいた。これらの魚は水で炊いたり、焼いたりして食べる。

四、あとがき

私はいくつかの集落で採取されるものとその食べ方、加工、保存について聞いたが、どの集落も大体同じようである。そしてそれらは日々の食事に彩りを添えているのが見受けられる。

(昭59・12・25、昭60・1・3調査)

漁具と漁法

新名 祐史

種子島は、九州本土の最南端、鹿兒島県大隅半島佐多岬から約四〇浬南方に浮かぶ、南北五二浬、幅一二・四浬程の細長い島である。この種子島は、熊毛諸島に属し、その海域は、黒潮が日本本土に着岸し、太平洋と日本海に分流するところであり、しかも太平洋岸を南下する寒流と接触する区域でもあるため、古来より良い漁場として、沿海漁業が行われてきた。

昨年の暮れから今年の正月三ヶ日にかけて文化人類学研究室の演習により、この種子島の民俗調査を約六日間にかけて行った。本稿では、中でも島北部西之表市の西之表と湊集落で収集した資料を中心に、種子島の漁具と漁法の概観について述べてみたい。資料は種子島北部の二地点に偏るわけだが、漁具については、島各地から西之表市立種子島博物館に収集され保存されているものを参考としているので、凡そ種子島北部全体の古来の漁具については概略としてとらえらるると思う。以下、そのレポートであるが、記述の複雑化を防ぐため、項目ごとに分類して述べることにする。

一、網 漁

1 トビウオ網漁

トビウオは、種子島を代表する魚種であり、漁獲高が最も高いも

の一つである。大正時代は西之表市の中心漁業であった。トビウオの時期は五月の八十八夜頃から、七月中旬にかけての約三か月間で、西之表市の西方約二浬に位置する馬毛島周辺で行う。

現在、トビウオ漁は、トビウオ網で行われているが、慶長年間（一六〇〇年頃）から、明治二十年頃までにかけては、平網という袋部の浅い底敷網を使用していた。トビウオ網が種子島に伝わったのは、天草方面からの出漁者が、平網を改良して使用した明治二十年頃からであるという。

トビウオ網は、ソウケ（ \cup さる）型のいわゆるすくい網だが、袖網があり袋部の深いもので、形態はざると云うか、箕に似ている。二艘の舟で網一張りを使う。

出漁は朝早く日も明けぬうちで、漁が始まるのは日の出前である。トビウオを捕る操業中は、エンジンを止めて櫂でこく（櫂をたてる）。魚は潮の流れに逆らって泳ぐ習性があるので、二艘の舟の間に網を入れたら、潮の流れに沿って舟を進める。魚が網の中に入り込んだら、舟はお互いに引き寄せて、網の袋部に魚を閉じ込めるようにして、網を一方の舟に引き上げる。この時、群れの先頭にいる魚が網に行きつく前に網を引き上げないと、魚はすぐ方向を変えて逃げてしまう。だが、産卵時のトビウオは、網につきあっても方向を変えずにまっすぐ進むので、一度入ったら逃がすことなく捕れるという。

網を入れる時、舟はトビウオの群れを取り囲む形に集まって効率を上げる。産卵期のトビウオは一匹二匹の動きがバラバラで、一定方向ばかりに偏ることはないからである。漁では、ポリ袋の切れはしを多数ロープにつけて群れを追いまわし、舟から引いた網に追い込む方法が行われているが、昔は芭蕉の茎を藁縄にたくさんつけて

おどしにしていた。

トビウオ漁は、トビウオ網によるもの他に、刺網を使う漁もある。トビウオ流刺網であり、琉球から伝来したものだ。流刺網の漁期は、トビウオ網が、産卵期の五月七月にかけてであるのに対し、トビウオの北上する時期である十一月～五月である。夕方から夜中にかけて行われる。六反～十反の網を舟から流し、網の両端には目印にガンドーをつけて灯しておく。しばらくして巻き上げると、トビウオが網目に絡まって引き上げられてくるわけである。

同じトビウオの網取漁法で、トビウオ網は本土系のもので、漁期が初夏～夏で明け方に行うのに対し、流刺網は琉球系で、漁期も冬～春で夜半に行くと、対照的な網漁が行われているのが興味深い。南西諸島の北端である種子島においても、このような本土、琉球圏の文化の複合が見られるのだ。

2 刺網漁

刺網は主に、キピナゴ、ブリ、メコン（アジの一種）などを目的としたものである。

キピナゴの刺網などは、昔は、月夜の晩に集まった頃出漁していた。サオの先を海に入れておくと、キピナゴがそのサオに当たる手応えで居るのがわかるという。網は一方の端にウケをつけて海中に張る。また、二艘の舟で互いに網の端を持ち合って湾状に網を張る。そして、海面をサオで叩いて魚を追い、追われた魚はささるように網にかかるのである。捕れた魚は網ごと舟上に引き上げて振り落とすが、大きいブリ、メコンになると、一匹ずつ抜き取らなければならぬ。

3 イセエビ網漁

エビ網漁が行われるようになったのは、大正初期に鹿児島本土からの技官が技術を伝えてからであり、それ以前はエビは漁獲の対象外であった。

イセエビ網は、高さ一桁程で低い。昔は一重網であったが、今は大きい目の網の間に目の小さいものをはさんだ三重網を使う。網は夕方、海岸近くのエビのいそうな所へ入れ、翌朝上げに行く。網は、すっかり海底へ沈められ、両端に目印のウケをつけ、海面へ浮かべておく。伊勢エビは網に絡まって身動きが取れない状態で捕獲される。

イセエビ網漁の時期は、冬を除くほぼ一年中で、夏が最盛期である。

4 地引網

地引網は、非常に長い翼網の間に袋網がついたもので、翼網の両端についた長い網を引き、袋網に魚を追い込む漁法を行う。漁獲するのは、イワシ、ムロ、メコン、キピナゴなどである。

網は、二艘の舟で、魚群より沖合に張り、両翼端の引網は陸にいる人々に手渡される。翼網は網を何十反かつなぎ合わせたもので、長さは一〇〇疋を超える。この翼網のところどころには幾艘かの小舟が付き、箱めがねで網や魚群の様子を観察し、浅瀬などがあると、網がひっかからないように網を持ち上げる。最後は、潜水手が魚群を袋網に追い込み、袋網の口を海上に上げて魚を引き上げる。

5 その他の網漁

立て網……三重の網であり、大きい目の網の間に目の小さいもの

が挟まれている。P型に張っておき、瀬魚、ブリなどを捕る。
打ち網……舟で魚群を追いかけて、網を打って捕る。

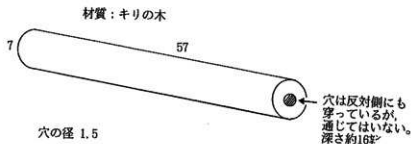
6 網の付属品

網の付属品としてはウキとオモリがある。

ウケダル(図①)は、プラスチックやガラス球のフイが使われる以前に使われていたウキ用の樽である。イワシ漁など大きな網を使う時のウキとして、また、イケスや網入れの場所を示し、同時にそれらのものを海中に吊るす用途に使われた。樽は安定がよいように下部が広く作っており、網のウキとして使用する時は口にフタをして密閉した。材質は杉で、口径は約二五センチ、高さも二五センチ程度。ハエナワや、トコブシ、海苔などを捕る網にも使われる。

網につけるウキはアバ(図②)といい、桐

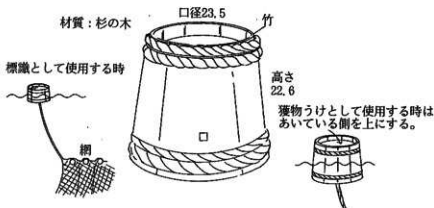
図② アバ



(所蔵、開発総合センター)

アバは小さい網の浮きである。

図① ウケダル(浮き樽)



(所蔵、開発総合センター)

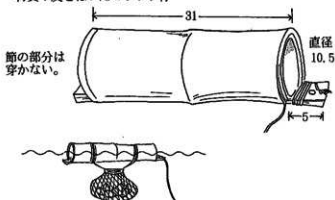
いけす、アミなどのウキ。

標識として、イケスや網入れの場所などを示し、同時にそれらのものを海中に吊るす。また、海にモグリ(潜水)魚や貝、ノリなどをとる時、獲物が多くなるとそれらを体につけていると身動きが不自由なので、ウケダルを海上に浮かしておき、その中に獲物を入れ、潜水行動の自由をはかる。ハエナワで魚を釣る場合は、夜でも入れた場所がわかるように、タルの中にヒモを張って瀬戸物のかけらをいくつか下げておき、波で揺れると音がたつようにしたり、またがん燈や石油ランプを入れたりする。

網の場合、上下の口とも板でふさいでおくが、ハエナワはすぐ上げるからフタは不用。

図③ ウケ

材質：皮をはいだモウソウ竹



ククリを下げる。
アワビに似たトコブシなどを入れる。
(所蔵 開発総合センター)

下にククリをつけ、縄をつけて海上に浮かしておき、海底から獲ってきた貝を入れておく。海中での行動の便を計ったもの。貝は、おもにトコブシという小型のアワビに似た貝が獲れる。

の木で作られる。アバをつける藁縄をアバ縄といい、アバには、アバ縄を通すための穴のあるものと、アバ縄をくくりつけるための溝のあるものの二種がある。くくりつけるタイプは、より大きな網のためのものである。現在では、木製のアバの代わりに、プラスチック製のウキが使われている。
アバよりやや大きめのウキとして、モウソウ竹で作るウケ(図③)がある。主に立て網に使われ、網の重さに応じて大きさが決められる。海水に浸ると割れてしまうため、表面の皮はむかれていく。このウケは、どちらかというと網漁より、専らトコブシを捕る

時にククリを浮かすウキとして使われる。

さて、網のオモリは、鉛が高価だったつい最近まで、いわゆる土鍾が使われていた。土鍾は、粘土を竹に巻きつけて攪り固め、竹を抜き取って乾燥させ、藁縄に通して焼いて作る。この土鍾の使用は、昭和三十年代まで続いた。

土鍾の他に、網を海底に沈めるためのオモリとして、今も昔と変わらず石が使われている。程よい大きさの石に溝をつけて、縄を巻きつける。アバ縄に対してオモリをつける側の縄をイワ縄という由縁である。石のオモリは、穴に入り込んでも引き抜き易い形の丸いものが良いとされる。

7 網染め

網は、昭和三十年代に化学繊維網が使われるようになるまでは、木綿製の網が使用されていた。

網染めの染料は、クヌギ、ナラの皮が使われた。皮は、大なべで長く煮て、煮た汁に網を漬けて染める。昔は丸木舟に汁を溜めて漬けていたこともあるそうである。

二、釣 漁

1 一本釣

一本釣で狙うのは、アカバラ、ムロアジ、クイ、マグロ、カツオなどである。

手で直接糸を操作する手釣と、竿を使う竿釣とがあり、針は一本(一〇本程つける。手釣は、夜、深いところにいる魚を狙い、竿釣は、浅いところにいる魚を狙う。

餌は、切り餌、生き餌、死に餌がある。いずれも、魚群に撒いて、魚をおびき寄せるものであるが、生き餌は、キビナゴを生きたまま針につけて泳がせて、魚に食いつかせる。その他、餌にはサバ、アジなどが使われ、現在は擬似餌を使ったりもしている。

2 ムロピス (図⑤)

ムロピスはムロアジ釣り専門の漁具であり、木製の短い柄が二又になってその先に細い竹が二又になるように結びつけられている。竹の先には、輪にしたテグスがついていて、これに二寸程の針つきのテグスをつける。股になった部分には鉛製のオモリと、木綿製の小さなコマシブクロがつけられる。コマシブクロの中にすりつぶした餌を入れ、群れでかたまっているムロアジをひきつけて釣るわけである。餌は釣ったムロアジを叩いて作る。赤身の魚がよく、白身のものを使わない。沿岸で手釣りで行う。

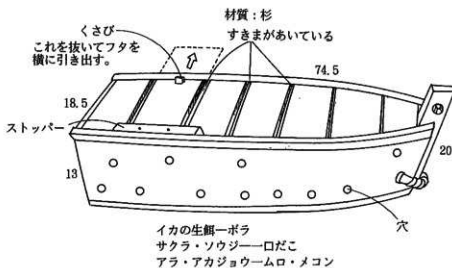
昔は竹製だったが、現在は一〇番線のハリ金を使って作る。錆ないように銅線を使う。コマシブクロとオモリが一体になったオモリアンドンもあり、オモリの間ハリ金の網で囲まれた隙間があつて、そこにエサを入れるようになっていて、これは屋久島で作られたもので、新しい。最近では生き餌の方がよいとされ、ムロピスはあまり使われない。

3 ハエ縄漁

ハエ縄は、長い幹縄に針のついた多数の枝縄をつけたものをしばらくの間海中に吊り下げておき、瀬魚を釣るものである。

ハエ縄は、普通、月の出ない日没時から早朝に行う。先に餌つけを投入しておいてからハエ縄を延べる。幹縄の水深を調節し、またハ

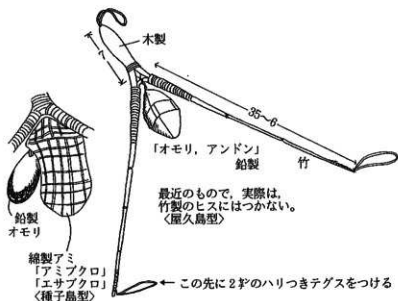
図④ イケスブネ



(所蔵、開発総合センター、元所有者は住吉、山下孫徳氏)

引いて走る一曳航用は舟型をしている。
イケスブネは、1本釣りの餌を生かすためのものである。

図⑤ ムロビス



(所蔵、開発総合センター、元所有者は西之表市、浜口年三男氏)

ムロ釣り用ジャンビス、湾内、沿岸ととる。釣ったムロをたたいてエサブクロ（またはオモリアンドン）に入れ、群れでかたまっているムロをひきつけて釣る。エサは赤身の魚がよく、白身のもの使わない。柄は、昔は竹製だったが、現在では、10番線ぐらいのハリ金を使う。亜銅だと錆がくるので銅線を使う。柄はよけいにつけると釣糸がもつれるので、二又が原則である。

エ縄の場所の指標とするために、ウケダルのついた縄を、幹縄の両端に一本ずつつける。ハエ縄は、三〇分程で上げ始めるから、ウケダルにフタはしない。夜に行うことが多いので、音で場所がわかるように、ウケダルの中に糸を渡し、瀬戸物のかげらるをいくつか下げ、波で揺れると音を出すように工夫したりする。がん燈を入れて、灯りでわかるようにしたりもする。

餌は、アジ、イカ、イワシ、トビウオ、キビナゴ等を使う。小さい魚は丸のまま、大きいものは半分に切ってハリにかける。深いハエ縄ほど大きいエサを使う。

4 イカ釣り

イカ釣りは、風の月夜、馬毛島近海で行われる。エツケという、桐製で炭焼きされた擬似エサを使い、これを海中へ入れ、樽漕ぎの舟で引く。時期は冬から春にかけてである。

5 昔の釣具

釣糸は木綿製のものを使った。ハエ縄に使用するのは麻製である。漁師が自分で捻って作った。木綿の糸は腐るので、一年ぐらいしかもたなかった。

釣針は、材料を金物屋から買い、自分でやすりをかけて作ったり、また鍛冶屋でも作っていた。

オモリは鉛が高価だったので、ハエ縄などでは石を幹縄にくくりつけてオモリにしていた。釣には、鉛板を金床で延ばし、ハサミで切ったものを使っていた。

釣竿は、コサン竹という、あまり大きくならず、節の近い竹を使って作る。曲がっているものは火であぶって直した。

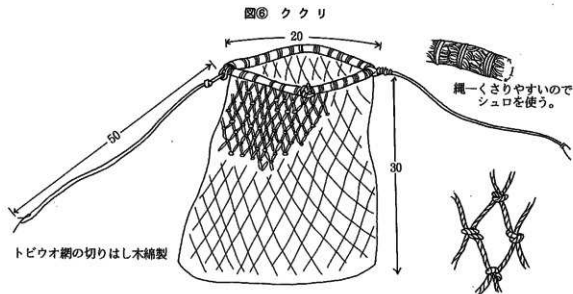
三、スミ突き漁

標潜りのことをスミ方と言う。六月～九月にかけて、オーツキという矛を使って、標潜りで瀬魚を突いて獲る。昔、オーツキは三ツ又や二又であったが、現在は、魚にあまりキズがつかないように、ネジつけの本矛を使う。柄が竹製のもので大きな魚を突くと折れたりしていたが、四、五年前から鋼製のものを使っている。鋼製の矛は水の切れもよい。オーツキは、長さ二～三びで、柄にゴムをつけ、その弾力を利用して飛ばす。ゴムを利用し始めたのは戦後からである。狙う魚は、主にモハミ、キンゴダイ、アラ、アカジョウウ、ココグダイなど。海底の岩穴にいるものなどを狙う。最近では、ウェットスーツやコンプレッサの導入で、潜水も長時間になり、能率も向上している。

四、ナガラメ捕り

ナガラメとはトコブシの方名。アワビに似た小型の貝である。解禁となるのは五月で、八月一杯までが時期である。テングサやノリと共に採った。

海中に潜り、海底の石を引き起こし、その裏に付いているものや、また石に付いているものを、先がカギ状に曲がった鉄棒であるクシを使ってかき落として捕る。捕ったトコブシは、腰につけた、又はウケにつけて海面に浮かしたククリ(図⑥)という入れ物に入れる。

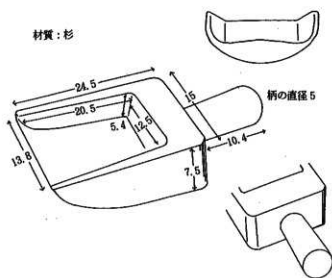


底のはしを持って左右一杯にのばすと54cmまで広がる構造のもの。

(所蔵、開発総合センター)

魚、テングサ、ナガラメ等をいれる。底にゆとりがあり、相当量はいる。

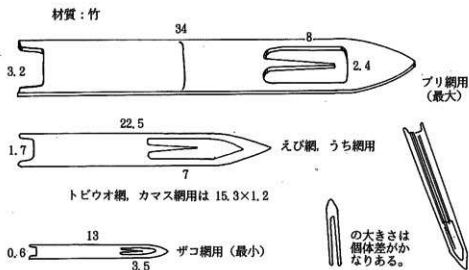
図⑦ アカシヤクリ



以上が、今回の種子島実習において採集した海における漁法、漁具の資料レポートである。何分、時間的制約があって十分な資料収集が行えず、また、こちらの質間も非計画的で目的意識に欠けていた為、レポートとして不十分なものになってしまった。だが、今後民俗調査を行う上で一つのいい体験になったと思う。

最後に、実習調査に当たって、いろいろと骨を折って戴いた諸先生方と、快く質間に応じて下さった地元の方々に感謝の意を表して本レポートを終わりたい。(昭56・12・25〜昭57・1・3調査)

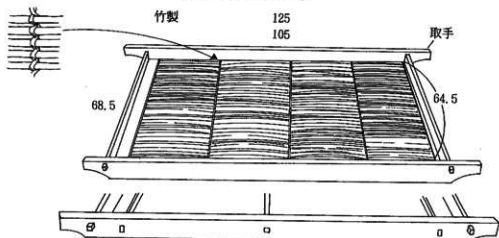
図⑧ ヘリ



(所蔵、開発総合センター)

必要な糸をまいて、網をすく。魚網をつくったり、修繕したりする時使う。

図⑨ セイロ (セーロ)



(所蔵、開発総合センター、元所有者は西之表市、浦崎浅吉氏)

ダシザコをつくる時、ザコをゆでる。

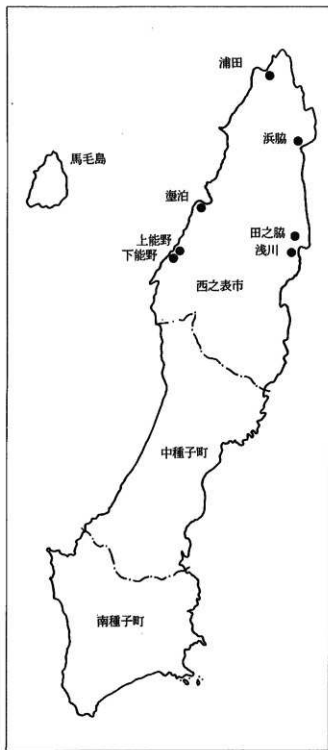
ザコは以前は冬季の月夜によくとれた。いわゆるキビナゴのことである。このザコは秋から冬の鳥民の重要な蛋白質源であった。150 \times 80 \times の平鍋に、生ザコを並べたセイロを入れ、潮水でたき、数分して上げ、そのまま日に干し上げる。魚に手をふれないので、形がこわれず、色もきれいに干し上がり、立派な製品となる。

北部漁村の刺突漁法

久保 禎子 (旧姓 田中)

はじめに

種子島北部の刺突漁法には、船で突く場合と潜水で突く場合の二種類があるが、今回は潜水で突く漁について調査した。調査期日は



第1図 調査地区図

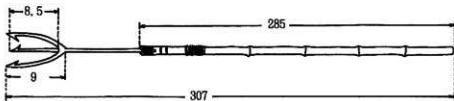
十二月二十五日から翌一月三日までで、調査地は行政区画上は西之表市に属する種子島北部地方であり、その地区名を北から順番に示すと、東海岸では浜脇、田之脇、浅川で、西海岸では浦田、蘆泊、上能野、下能野である。今回聞き取り調査を行った潜水による刺突漁には二種類あり、それに付随するものとしてナガラメとりと天草とりを加え、潜水による刺突漁を比重の高いものから見ていくと、一、瀬魚漁、二、ナガラメとり、三、天草とり、四、カメノイオ漁となる。そのそれぞれについて、各地区ごとに聞き取り調査の結果を示す。尚、種子島ではふつう、女は海には潜らない。これはこの地方の大きな特徴といえる。

一、瀬魚漁

東海岸

①浜脇……浜脇は農業中心の地区であり、漁業はその副業的存在にすぎない。瀬魚漁は正月用の魚を捕るため、特に十一月から十二月にかけて、潜水せずには浜から魚を突いて捕り、潜水して魚を捕るのはたまたまであった。魚を突くのに用いるのは、オオツキと呼ばれるヤスである。それは約三層の長さのもので、浜から突く時は三ツ又、潜水して魚を突く時は二又のものを使用した。そのオオツキの鉄の部分は、西之表の合同庁舎の下にある鍛冶屋に頼んで、作ってもらったものである。柄の素材は自分で切ってきた竹で、一方の端を半分に割り、鉄の部分を差し込んだ。そして、抜けないように針金で巻いた。オオツキで捕った瀬魚の種類はクロイオ、タコ、モハミなどで、イザリシタミと呼ばれる背負うかごに入れて浜からもち帰った。その魚は、売ったりせずに自家用とした。余れば親類に分けたりもした。

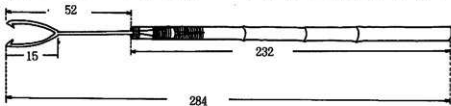
②田之脇……潜水して行う刺突漁のことをすもぐりといひ、八月から十一月半は



第2図 三ツ又のオオツキ略図 (浜脇)

(単位: 釐)

まで(タコのみ一年中)行った。魚を突くのに用いるのはオオツキあるいはホコと呼ばれるヤスで、もともと三ツ又であったものが、突く時に多大な労力を要すること、突いた魚の身を傷つけ易いなどの理由から、二又に変わったものである。現在使用しているオオツキは全長約三層の二又のもので、柄の先にはゴムがつけられている。鉄の部分は、西之表にある次郎鍛冶で作ってもらったものである。このオオツキで突く瀬魚の種類はタコ、ハチキ、モハミ、イシダイ、アラ、アカジヨウ、クレイオ、ヒツなどであったが、アラなど七、八キログラムの大物があり、そんな大物を突く時には一人では無理で、二番突き、三番突きが突いて捕った。すなわち、すもぐりは一丁櫓の丸木舟か、二丁櫓の萩舟で数人で行った。もちろん陸から一人でも入ることもあったが、その時は体にうきをつけて海へ入った。漁場はだいたい十八尋の深さのところであり、八、十尋潜ると漁師の皮膚がくらげのように揺れて見えるという。魚はまずおどしをかけて家(魚の寝ぐら)に追い込んで突く。見失っても魚は必ず家に逃げ込んでくるから、心配はいらない。オオツキで魚を突いたら、すぐ手を放す。柄から手を放さなければ、



第3図 二又のオオツキ略図 (田之脇)

(単位: 釐)

魚が体をねじると同時に竹の柄が折れてしまうからである。ガマ

(穴)にもぐり込まれて取り出せない魚はカケバリで引つ掛けるか、最終手段として自らがガマへ入って魚を引き出した。昔はオオツキの手にゴムが付いていなかったため、ゴムの反動力を利用して、オオツキの飛距離が出せず、その分竹の柄が長かった。魚を一匹獲るごとに舟へあげる。こうして捕った魚は、女がイナイザルという珍竹か孟赤竹を編んだザルに入れて現和地区の農家を訪ね、米や野菜と交換してもらった。女の仕事も大変で、捕った魚は先を争って売りに行ったという。もちろんお得意さんもおり、他の売り手が来ても、「もう買った」と嘘をついて、待っていてくれた。最近では、東海岸と西海岸を比べると、東海岸の方が波が荒いため魚の身がしまりおもしろいので、高い値で売れる。

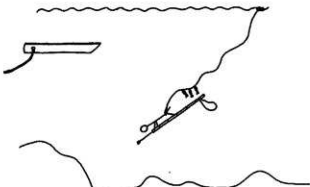
③浅川……瀬魚漁は一年中行う。魚を突くのに使うオオツキは三ツ又の角型である。まち(かえし)は三本とも内側に向いている。その後オオツキは平型の二又となり、鉄の部分は池田の鉄鍛冶に作ってもらった。柄はコサン竹かニガ竹が使用されていたが、コサン竹は浅川にはないのでほとんどニガ竹が使われた。現在は自動車のスプリングを加工し、ビニール製の柄を付けた市販品を使っている。オオツキで突く瀬魚の種類はモハミ、ヒサ(イシダイ)などで、カツオやムロ以外は何でも突いた。漁場は陸から五百坪先の、深さ七尋(一尋は、大人が両手を左右に伸ばしたときの、両方の指先までの距離)のところである。魚は個人で、陸から泳いでいって突く。突いた魚はツナギ(ツナギというのは、竹を縦に割ったもの先を削り、もう一方の端に穴をあけ、その穴に縄をつけたものである。縄の先にはうきが付いている)に通しておいた。捕った魚はザルに入れて隣近所に分けたり、売ったりもした。仲買人に売ることもあ

った。

西海岸

④浦田……刺突漁をすることをはだかもぐりという。そのはだかもぐりの時期は夏であり、ちようどトビウオ漁の時期と重なる。この時魚を突くのに使うのは、長さ三尋から四尋のホコであり、これはもともと三ツ又であったものが、二又になったものである。ホコの鉄の部分は、国上にあった二軒の鍛冶屋のうち、静鍛冶で打ってもらったもので、その形態は個人の好みにより、それぞれが鍛冶屋に注文した。柄は自生している竹を切り、使い易い長さに自分で加工して付けた。昔は浦田に、潜りのうまい人が十四、五人は自分であつた。それを専業としているわけではなく、暇をみてはする程度であつた。突いた魚の種類はメジナ、ホタ、コーメ、クジダイ、ハチキ、アカイオ、イシダイ、メコン、ムロ、モハミ(イガミ)などであった。獲った魚は西之表の商人に売るか、あるいは雇い百姓に分けてやった。

⑤豊泊……瀬魚漁で、魚を突くのに使用するのはオオツキであり、



第4図 ツナギの利用法(左上、ツナギの拡大図)

オオツキで魚を突くことをホコツキという。オオツキはもともと三ツ又であったものが二又に変化し、その約二尺の鉄の部分は、池田のヒラセ鍛冶で作ってもらったものである。魚があげれるとその鉄の部分が曲がることさえあったという。柄はヤイ竹製で、約四尋の長さである。突いて捕る魚の種類はモハミ、ヒサノイオ（イシダイ、アラ、アカジョウ、タコなどである。これらの魚は瀬魚と呼ばれる。陸から一五呎以内の、近岸の岩場やサンゴ礁の間に生息している。漁を突きに行く時は船で行ったり、陸から泳いで行ったりしたが、二、三人でペアを組むこともありその時は、魚を誘って家の方へ追い込み、魚が家に逃げ込む瞬間を狙って突く。家の位置はアテ（山アテ）でわかっており、たとえ感した魚を見失っても慌てたりはしない。タコについては、「突き上手の引き上手」といって獲るのが難しかった。捕った魚は、船で行った時はそのまま船からあげる。個人で泳いで行った時には、つなぎに刺しておく。つなぎは孟宗竹製で、竹の穴に通すヨマ（ヒモ）をブラシと呼んだ。浜へも帰った魚は市場に卸した。

⑥上能野……海に潜って漁をすることを、はだかもぐりともすもぐりともいう。はだかもぐりをする時期は九月から十月にかけてであり、潮の早い時は断念した。魚はオオツキ（ホコともいう）で突いて捕った。使ったオオツキは二又で、西之表の次郎鍛冶で作ったものだったものである。突いて獲った魚の種類はイシダイ、アラ、アカジョウ、コブダイなどである。タコは、カケバリで引っ掛けて捕った。すもぐりに行く時はサツマ型の船で行き、一人が船に残って待つ。丸木舟は少ししただけで、使いものにならない。だからほとんども板舟で行く。そして潜り手は、昔は木綿、のちにはポリエチレンの命綱を付け、海へ入り魚を突いた。突いた魚がガマから出ない

時はカケバリに引っ掛けて取り出した。明治の頃、潜り手は目をあけて潜ったのだが、その後桐の木にガラスをはめ込んだ眼鏡となり、時代とともに二ツ眼鏡、一丁眼鏡へと変化したという。上能野には市場がなかったため、獲った魚は西之表に直接持って行った。能野地区はもともと焼物と製塩で暮らしを立てていた。そのため、当初漁業権がなく、入漁料を住吉（地区名）に払って漁をしていた。すもぐりが盛んになったのは、戦後昭和二十年代からで、木綿の網が手に入らなかつた時期であり、網が手に入らないから、魚は突いて獲るしかなかった。

⑦下能野……ヘコギ（ふんどし）だけで海に潜り、漁をするのをすもぐりという。すもぐりは七月から八月にかけて、ヒョングルミ（干潮を指す。満潮のことをダルミという）の時に往く。潮魚はオオツキで突き、そのオオツキはもともと三ツ又で、柄は長さ二尋ぐらいのニガ竹製である。まち（かえし）はナカデ、ソトデいづれにもついており、三本とも片鏡である。しかし、今残っているものは二又で、西之表の次郎鍛冶で作ったものである。戦後、オオツキの手元にゴムが付くようになった。オオツキで突いて捕った魚の種類はモハミ、イシダイ、アカジョウ、ハタ、ココダイ、タ



(単位：寸)

第5図 カケバリ略図（下能野）

コなどであったが、タコはあまり捕れなかった。その他深さ百餘くらいのところには、タルメと呼ばれる美味な魚が生息していたが、めったに捕れなかった。下能野の漁師は、馬毛島までもぐりをしに行つたこともある。マブシ（漁場のこと。人に見つからないように工夫した）は深さ十二尋ぐらいのところで、そこまでは陸から泳いで行つたり、五人程の組を作り船で行つたりもした。船の大半は板舟であったが、丸木舟で行く人もあった。しかし丸木舟に乗れるのは、三人が限度である。捕つた魚はツナギに刺しておく。ツナギの竹は、ヘコギに差し込んでおくため、鋭く削らなかつた。こうして捕つた魚は下能野の市場に卸した。

二、ナガラメとり

東海岸

①浜脇……ナガラメ（トコブシ。浜で拾い集めた貝殻の中にはトコブシとフクトコブシが、含まれていた）は五月から潮とき（潮がひいた時）に、男が潜って捕つた。身だけをとりて煮干しにして西之表の親方へ売り、そこから内地へと出荷した。

②田之脇……ナガラメは五月一日から八月の終わりまで捕る。商人のいない時には、捕つたナガラメは針金をナガラメの穴に通し、三個一組にしたものをソーケに入れて売って歩いた。

③浅川……ナガラメは五月一日から八月いっぱい、潜ってクシで引つ掛けて捕つた。

西海岸

④浦田……ナガレコ（ナガラメ）は、紀州にもあるが、種子島のもの

のより小ぶりで身が小さい。昔は一人で三、四貫は捕つた。捕つたナガラメは、孟宗竹を割り先をとがらせたもので身だけを取り出し、一晚塩漬にしてから干した。干したものは中国向けの貿易品となった。鰯は塩辛にしたり、煮たりして食べた。

⑤鹽泊……ナガラメは手で捕つたり、クシで捕つたりした。クシは引つ掛け易いように曲げてあつた。

⑥上能野……ナガラメは真夏の六月から八月にかけて捕つた。捕つたナガラメは、昔はうす塩にして中国への貿易品としたが、その後には生のまま、親方である丸山水産へ売り、そこから関西に出荷した。

⑦下能野……ナガラメは、潜ってクシで引つ掛けて捕つた。クシの柄は松の木で、一〇センチ程度のものである。捕つたナガラメは、生のまま出荷した。

三、天草とり

東海岸

①浜脇……天草は、乾燥させて浦（組合）が集めて西之表に出荷した。

②田之脇……天草はふつう男が潜って採る。しかし、女は潮がひいた時に、浜で潜らずに天草を採ることはある。

西海岸

③浦田……天草は男が潜って採つた。もともと女は海には潜らないが、一人や二人はいたかもしれない。濱州島の海女に天草をとらせただけのことであつたという。

④ 瀬泊……天草は、ふつう男が七月から九月にかけて潜って採る。しかし、女の人の中には、メリヤスなどを着て、潮のひつたときひいたときだけ潜って採る人もいた。採った天草は内地へ出荷した。

四、カメノイオ漁

東海岸

① 田之脇……カメノイオは夏、カメノイオが天草を食べにくる夜明け前と夕方に、沿岸で網を張って捕る。冬も網にかかるが、これは臭くてまずい。戦前は二三日がかりで、中種子の海岸にカメノイオを捕りに行った。捕るカメノイオの大きさにはいろいろあり、カタテガメ（片手で持てるという意）、モロテガメ（両手で持つ意）、シイカシラ（二人で尻と頭の前後を持つという意）、オートーガサ（四人で持つ意）などと呼び分けていた。カメノイオの肉は、味噌焚きにした。その時使う味噌は、大豆と麦を混ぜて作ったものであるが、大豆は買わなければならず、ほんの少しだけ混ぜた。しかし、味噌は大豆を入れると味が良くなったという。麦は自分の畑で作った。味噌焚きにする際には、カメノイオの臭みを消すために、クサギという植物の葉を入れた。ここまでは浜元寒美氏のお話であるが、田之脇ではもうお二方にお話を聞いているので、ここに補足したい。田頭長助氏によれば、カメノイオ（アカガメ）は、日に二、三回呼吸をするために海面にあがってくるところを、陸から二里か三里のところで、長さ約一尋のカメノイオノモリ（ツバメモリ）で船から突いて捕る。そのモリの柄はユスの木で、曳縄は木綿であった。又、平園末次氏の話によれば、カメノイオは十月頃から佐多岬の方で突いて捕ったということである。その時使ったモリは

一本モリであった。

② 浅川……カメノイオは網で捕った。小さいものなら潜水して、ガマに手を突っ込んで捕った。

西海岸

③ 浦田……真夏七、八月のなぎた（波のないだ）晩、アカガメ（アカウミガメ）は産卵のために浜にあがって来る。その卵は貴重な栄養源となったが、あまりおいしいものではなかった。カメノイオは、潮流の加減で海面にあがって来るところを、突きザオ（モリザオ）で突く。これは一本モリでの打ち抜き式である。曳縄は麻のヨマ（糸）製のもので、材料の麻は自分のところで作ったものである。捕れるカメノイオの種類はほとんどアカガメであるが、たまに捕れるクロガメ（アオウミガメ）の方がおいしい。カメノイオは、生きたままつないでおき、時々殺して食べた。その食べ方は、すきやきや焼肉にした。

④ 瀬泊……カメノイオは、モリではなく三人組みのカケバリで引っ掛けて捕る。カケバリのヒモがうきにつながっており、一人がうきをもち、一人が船で待つ。潜り手がカメの首をカケバリで引っ掛けると、うきをもっている人にそのことを伝え、その人が今度は船へ合図する。遠くで待機していた船は、寄って来てカメノイオを引き上げる。捕ったカメノイオはクロガメで、臭みを消すためにセリを入れ、味噌と砂糖で煮て食べた。

⑤ 上能野……上能野では、もともとカメノイオを食べる習慣はない。しかし、洲之崎の人々の影響を受けて食べるようになった。カメノイオは馬毛島の岬の方に行つて捕った。食べ方は、シヨウガなどで臭みを消して、すきやきにした。

⑥下能野……カメノイオは、シンゾノ(すみ家)で眠っているところを探して、カギで首か脛を引っ掛けて捕る。カギの柄の用材は何でもよかった。

※種子島にはアカガメ(アカウミガメ)とクロガメ(アオウミガメ)が生息している。

おわりに

以上種子島の刺突漁法について聞き取り調査の結果を示した。ここで知り得たこと今後の課題として残された問題を整理すると、①はだかもぐり、すもぐりという名称については、田之脇、下能野ではすもぐり、田之脇でははだかもぐり、上能野でははだかもぐりともすもぐりとも言った。このことより、東海岸、西海岸どちらかに限って、一方の名称を使うわけではないことがわかった。しかし、浜脇、浅川、蘆泊については、はっきりと確認していない。②時期はおおまかに言えば、浅川を除いて夏、浅川は一年中。夏といっても各地区でその期間にずれがあり、網漁など他の漁の時期とのかかわりの問題が、今後の課題として残った。

③魚を突くのに使った漁具の呼び方には三通りあり、浦田ではホコ、その他の大部分の地区ではオオツキと呼んでいる。しかし、中でも田之脇と蘆泊ではホコともオオツキともいう。又、浦田についても、オオツキとは呼ばないのかどうかについて確認していないので、他地区と違うとは、ここでは言えない。

④オオツキは、昔三ツ又であったものが二又に変化した。しかし浜脇で、浜で突く時は三ツ又、潜水する時は二又を使うということを開き、二又と三ツ又との機能上の違いを明らかにして、時間的推移

についても将来検討してみたい。

⑤オオツキの鉄の部分を作ってもう鍛冶屋は、浜脇で聞いた西之表の合同庁舎の下にある鍛冶屋を除いては七例あり、そのうちの三例が西之表の次郎鍛冶であった。鍛冶屋は他に現和の鈴木という鍛冶屋、同じく現和の長平鍛冶(両者同じ鍛冶屋かも知れない。この点は調査不足)、国上の静鍛冶、池田の平瀬鍛冶の名前を聞いた。この鍛冶屋についても事例数が限られており、ここでは比較検討することができない。しかし、各鍛冶屋とその漁師の関係が、漁師個人のものなのか、地区単位のものなのか、今後調べてみたい。

⑥捕った魚の種類は、船に乗って行く時、陸から潜る時の違いについて、調査不足で明確には言えないがモハミ、イシグイについてはどちらも六地区で名前があげられている。しかし、種類の違いもある。これは潜る深さの違いもあろうし(実際違いが生じている。田之脇で十八尋、浅川で七尋、下能野で十二尋など)、魚の生態の問題ともからみあわせて、もう少し時間の欲しいところである。

⑦捕った魚を海中でどうするかという点について、ツナギと呼ばれる漁具を二地区で聞いた。この地区はいずれも西海岸で、東海岸の浅川では構造は同じものだが、竹のクシとしか聞いていない。ツナギは陸から行く時に使うもので、船に乗って行く時は一匹ずつ船へあげる。しかし、これについても浜脇、浦田、上能野について調査不足で、東海岸と西海岸との構造の違いはないが、ツナギの名称の違いについては今後調査をすすめなければならない。

⑧もち帰った魚の処理の仕方には、時代によっても差があるが、浦田や下能野のように、その地区に市場があればそこへ卸す。しかし、市場のない上能野などは、船でそのまま西之表までもって行った。浦田には西之表の商人が買いに来たし、田之脇、浅川などは、

女が売って歩いた。このように、市場のある、ながし売り方にも大きな変化をもたらしている。

④ナガラメとりは三地区についてクシで捕ることを確認した。昔は浦田では一晩塩漬けをして干して、上能野ではうす塩で中国への貿易品としていたが、その後は生のまま内地へ出荷するようになった。身のとり出し方も昔は竹のクシだったが、今では市販品を使っている。時期は五月から八月末まで捕り、上能野では六月からと聞いた。ナガラメについては調査不足で今後の調査課題の一つである。

⑤天草とりについては調査不足で今後の調査課題の一つである。これについても調べるべきであった。これも今後の課題。

⑥カメノイオ漁は、モリ、カケバリ、カギ、網を使うという四つの方法があることがわかったが、なぜその違いが生じるのかは調査不足で今後の課題である。それは、対象物（アカガメかクロガメか）の違いか、時期の違いかという点についてである。又、カメノイオを食べる習慣が、各地区もともとあったものなのか、他地区の影響を受けたものなのかという点についても今後調査してみたい。カメノイオの食べ方は、田之脇と瀬泊では味噌煮であるが、臭みを消すために入れるものが多い。田之脇ではクサギ、瀬泊ではセリである。又、浦田、上能野ではすきやきにして食べた。このことから東海岸と西海岸で食べ方が違うとはいえないようである。

⑦女が海に潜るか潜らないかという点については、調査不足で不明な点が多い。浦田ではもともと女は潜らない。瀬泊ではメリヤスを着たりして、干潮時だけ潜って天草を探る人もいた。田之脇では、潮がひいた時には女が浜で天草を探った。浜脇では男が潜るだけである。これだけのことから、女は潮のひいた時だけ潜るという判断はできないが、女が昔から潜っていたのか、天草を探る時だけ潜る

のか、又サザエ、ウニなどを採ることはないのかという点を明らかにし、なぜ干潮時にしか女が潜らないのかという点をも明確にしていくのが、今後の課題である。それには潮流の強さが関連するかと思う。

以上のように調査不足の点も多く、今後問題とすべきところも多く残った。再び種子島で調査する機会が与えられるなら、これらの問題を明らかにしたいところである。

今回の調査に協力していただいたのは、浜脇では餅田定範氏（昭和四年生）、田之脇では浜元美実氏（昭和二年生）、田頭助義氏（昭和末次氏）（明治三十五年生）、浅川では新内義彦氏（明治四十年生）、中山哲政氏（昭和七年生）、浦田では柳田喜草次氏（明治三十二年生）、瀬泊では岩坪孫四郎氏、上能野では瀬下安美氏（昭和四十年生）、下能野では浦上満助氏（大正十一年生）、山下助三郎氏（明治四十年生）といった方々で、その他に浜脇では長野秋彦氏（明治二十一年生）、園上では中村義教氏にもお話をうかがった。

追記

この種子島における調査は、考古学専攻でありながら、現在民俗担当の学芸員として博物館に勤務することとなった私の研究の方向性を位置づけた最初のきっかけである。大学へ入学して初めての恩師に連れて行っていただいた民具学会（横須賀）で下野先生に声をかけていただき、無鉄砲にもその年末に出かけていった調査である。稚拙な調査記録であるが、そのときの思い出として今回手直しをしないで掲載していただいた。このような機会を与えて下さった下野敏見先生、そして無鉄砲な一年生を調査に送り出し、あたたかく見守って下さった恩師渡辺誠先生にここに感謝の意を表したい（平成九年二月二十二日）。（昭59・12・25〜昭60・1・3調査）

漁村探訪(船・漁法・組織・信仰)

鹿児島県民具学会員 海江田 義 広

一、はじめに

今回の種子島実習では西之表市を中心に、北から浦田・洲之崎・蘆泊・住吉・浜津脇の五つの漁港の漁業に関する民俗を調査した。全体的に見て種子島の各漁港とも天然の港とでも言うべき入江のうちこじんまりと造られているものが多く、近くに田畑の広がっている例も見受けられることなどからも漁業でなりたっている町、という印象をあまり受けない。ただし田畑にするような平地の少ない洲之崎などでは多少事情は異なっただけであらうが。また種子島の人々が話す方言にも港などの荒々しさよりも内陸的な穏やかさが感じられる。確かに「申す言葉」は、日本古来の古語の名残で聞き取る者にとっても大変印象の良い言葉で種子島人の気質を表しているように思える。このような溫和で和やかな土地柄であるからこそ、民俗も昔ながらの伝統を比較的良く残しているのではなからうか。

二、種子島の漁村

①洲之崎……昔から漁業が主体であつたらしく狭い畑で、菜種・甘藷・落花生などを作って、水田もほとんど無い。種子島三ヶ浦のひとつでいかに漁業が盛んであつたかが伺われる。昭和初期までは丸

木舟と板舟が(二挺立)が主であつた。丸木舟は三厨(五厨)ぐらゐで、五葉松の太木をくり抜いて造り洲之崎には現在でもプラスチックで舟体を包んであるものの現役の漁船として活躍している。丸木舟は手入れをして使つてさえば五十年ぐらゐは持つ。この洲之崎の丸木舟には船外機が取り付けられてあり外見上はまったく普通のプラスチック船と変わりが無い。手漕ぎで漁をするときには、丸木舟は船体が重たいために三分の一以上が海面下に沈み、水切りが良く操作しやすいが船外機を取りつけるようになるとその重さがかえつてあだとなつて水切りも悪くプラスチック船のほうが使い勝手は良かった。この洲之崎では大正から昭和の初期に掛けて丸木舟から板舟へ移行し、戦後すぐに動力船となり(ボンボン船)、その後現在のディーゼル船が一般的に港で見られるようになっていた。(後鹿拾信さんより)

②浜津脇……南種子町の北西部に位置し東シナ海の荒波が洗うこの浜津脇では、昭和二十年ごろまで株主が五十人ぐらゐいたにはいたが専業の漁師は十五、六人ぐらゐのもので半農半漁で若干漁業のほうに重きを置かれていたようである。特に冬は季節風が強く一月、三月まではほとんど漁に出られない日が続く。丸木舟は昭和三十年代の後半まで使い、それと並行して五挺立ちや三挺立ちの板舟が見られるようになり、戦後すぐに少数だが動力船も入ってきた。櫂を使って船を操るときには丸木舟は、水切りが良く大変操りやすいものだった。(田中利秋さんより)

③浦田……浦田港は種子島差異北端の港で小さな山川が海に注ぐ谷間の狭い地域に民家が肩を寄せようように一か所に固まっている村落であり、そのため天然の漁港を擁している。浦田で大変お世話になつた国浦勇吉さんは、(M43・6・15生まれ)小学校時代に漁師だ

った父親に連れられ、丸木舟に乗せられて漁に行き、それ以来漁と関係してきた。氏が小学校を終わるころから丸木舟が姿を消し始め、その後サツマ型の板舟を使うようになりほとんどの漁師がこれを終戦までは使っていた。浦田では三挺立ちがほとんどで、その後動力船が入り、現在のディーゼル船に至っている。昭和初期には三十人ほどであった漁師も現在では五十人ほどとなり、発展型の漁港である。また浦田には山を越えると田畑もあり、半農半漁で収入としては漁業によるものがやや大きいという。

三、漁法

①洲之崎のイカ引き……イカ引きは月の晩でなければならぬ。これにはキリ・アマギなどを材料として自分でエビ・小魚に似せた形に削りそれを火で焼いて色をつけたり(エツケ)少しの光でも反射するような素材の布をかぶせたり、小さなピンで目をつけたりして、餌木を作る。この餌木を一本の糸に一個ずつ付けて海底まで沈めるのである。餌木の腹の部分には五〇号程度の錘がはめ込んであるので糸には特別錘などはつける必要はない。これが海底に沈むと波に揺られている船の影響でユラユラとまるで生きているかのよう動くのである。これにイカが食らいつくという寸法である。

この餌木を機能的な面から見直すとおもしろい。そこには長年培われた漁民の生きるための知恵とでも言うべきものが感じられる。それは餌木の腹つまり小魚の腹に当たる部分になぜ錘をわざわざ付けなければならなかったのか、ということである。イカは、中には泳いでいるものもあるがほとんどの場合に、漸もしくは小石のころころしているようなところにいる。するとそこにいるイカを

針で釣るためにはどうしても海底に餌木が近いほど良いに決まっている。

ところが小石や潮に針が引っかかってしまふのである。しかし餌木の腹の部分に錘がついていると針が潮などにかかるとなくいわばつかえ棒のような役目をしてくれるのである。餌木で捕れるイカは、ミズイカ・コブシイカ・コウイカなどである。

②洲之崎の地曳き網……洲之崎では、主にカマスを捕るために地曳網を使った。村落内の各戸で網を出し合ってみんな繰出で曳き、捕れたカマスは、本人が三人前、隣居が本人の半分、スミテは本人と同じ、船主は本人の二人前、というふうに決められていた。またカマスがたくさん捕れたときなどは舟渡師が「今日のシオギリは、一人当たり十匹」などといって捕れたその場で頭と内臓だけ除いて潮で洗って丸ごと食べるものだったそうで、一仕事した後のこの味は忘れられないそうである。

昔は瀬泊沖にもよくカマスが来ていたが現在はあまり来なくなつた。

③洲之崎のブリ曳き……ブリ曳きは、瀬魚を捕る方法である。ここではまず二層間隔ぐらいに芭蕉の幹や葉を削いだものを括り付け、二隻の船でこの網を半分に分けて積み込み沖へ出る。この二隻は陸に向かって網を海中に垂らしてゆく、この時二隻は互いに気を揃くように網を流すのである。円形に広がった網の外側には潜み手(スミテ)が潜っていて網が潮に引っかからないように浮きで調節している何隻もの伝馬船に網の状況を伝えたり、中に追い込みつつある魚を、自分たちが目指している海岸まで追い込んでゆく役目を果たすのである。そしてある程度海岸も近くなり網の円もせままってくると、網の内側に網を敷いて、追い込んだ瀬魚を一網打尽にするの

である。その後船に上げてみんなで分けるのである。このブリ曳きはお盆前によくやっている。……④の⑥

④洲之崎のキビナゴ捕り……キビナゴは海が荒れ風の冷たくなり始める十月から二月までの間行われる。キビナゴも月の晩でないといふと良く捕れない。キビナゴは群れを作って行動する習性があるので月の光りにもまれてキビナゴの「シキイ」が立つ、それを探して網を打つのである。また、ただ単に「シキイ」が立っているのを見つけてだけではなく、かねてキビナゴが良くくる所やいそうな所には、長い竹ざおを海中に差し込んでみてキビナゴを探したりした。この時、キビナゴがもしあれば竹ざおにコツコツと当たるのが手に伝わってくるので網を打つことができる。

昔キビナゴ捕りには六人位が一隻の船に乗り込み月夜の夕方位に沖へ出た。この時使う網は刺し網で目の小さな木綿網であった。ある程度キビナゴのいる所が分かると、持ってきた竹ざおで海面をたいてキビナゴを脅し、あらかじめ打っておいた網のほうへ追い込むのである。キビナゴは首だけ突っ込んだ形で船に上げられるわけであるが、この小さな魚を網から一匹一匹はずすわけにはいかなないので網を力一杯上下に振ってキビナゴを振り落とすのである。不思議にもこれでキビナゴは見事に落とされてしまうのである。ただしキビナゴが少ししか網にかかっていたときにはなかなか落ちないそうである。キビナゴはエラの柔らかい魚であるためこれもその性質を良く知り尽くしたうえでできる方法である。

捕れたキビナゴの分配は、船に特別に一人前付くだけで後はみんな平等であった。当然のことながら昔はナイロンを使っていないため木綿網であった。木綿網は使って放って置くと腐りやすくて手入れも面倒であった。その腐り止めのためにナラの木の皮を削いで大

きな鍋で煮て煎じてその煮汁で網を染めた。また使った後は風通しの良い陰に干して乾燥に努めたものだった。一本釣りやイカ曳きの糸などは、柿の渋で染めぬくと良く水を切るそうである。

⑤洲之崎のブリ建て網……ブリ建て網は網の目が五寸九尺で幅六尋、長さが二十二尋のものを七枚ぐらいつなぎあわせて作る一種の定置網に似た種類の漁法である。網を設置したときの形は上から見てちょうど釣針のように網の一端が巻いてある。この網の目の大きさの測り方もおもしろい。網の目は網を張った状態であれば正方形なのであるがこれの隅と隅を引っ張ってひしゃげた状態で網の目の大きさは測るのである。……④の⑥

このブリ建て網は、だいたい三月から五月にかけて行われ、五月も飛び魚のシーズンを迎えると漁師たちは飛び魚に専念するためやらなくなってしまう。この網では回遊魚といわず瀬魚といわずそこを通りさえすれば何でも捕ることができた。結構大きな網を大量に使い、設置も手間がかかり網を上げるのも個人ではできないため、六、七人で共同で行われていた。網は夕方方入れて翌朝上げに行って、またすぐに入れてその夕方には上げるといった具合に、一日に二回上げ、ブリ建て網の装置自体は取りはずさない。そのため前記で定置網の一種のようであると述べた。それで網は一か月以上も海中に浸かりっぱなしになるので、網の装置をはずした後では市販の染料(カッチ)で染め直して陰干しして来年に備えた。この染料の色はカバ色であったそうである。

またこの網の上げ方もおもしろい。いくら定置網のようだといってもこのブリ建て網には底に敷いてある網がなく、いわば海中にカーテンが降りているような格好になっているわけであるし、もちろん潮に流されないようにしっかりと固定して海中に固定してあるの

で、網を上げるのにも特徴がある。上げるときには網の下の端をまくりあげて上端と下端を同時に平行になるようにして船に取り込むのである。つまり普通の位置網のように網の中で泳いでいる魚を捕るのではなく、網に刺されている魚を捕るものであることが伺えるのではなからうか。

捕れた魚の配当は、まず船の油代などの経費を落とし、残りを半分に割る。この半分は網や装置にかかった資材分に当てる。残りの半分の中で、船のあたりが二人前、後はみんな均等に分配した。ここの洲之崎がブリ建て網では最も古くからあり、昭和四十年ごろからはかの港もやるようになったそうである。……図の⑥

⑥洲之崎のカマス追い込み漁……前記したように初めはカマスも陸上からの地曳き網で捕っていたのだがそれがだんだん捕れなくなり、刺し網状のものを使って追い込み、袋網で船に上げるといふ漁法が変わってきた。カマスは集団で群れをなし、ぎっしり詰まった状態で行動する習性があり、株主の間で巡り順に弁済師と、浦見が決めてあって、この弁済師と浦見が箱メガネを持って朝早くこのカマスの群れを捜しに出かけた。もしカマスがいれば、急いで港に帰って「カマスがおんろー、カマスがおんろー」といって叫んで回った。するとかねてからそろそろカマスがくるころだと思って網の準備をしていた漁師たちは一斉に一人一つずつ「アラチ」と呼ばれる網を出し合って沖へ漕ぎだしていくのであった。そしてカマスの集団を二隻で網を出しながら囲んで回る。この流し網の範囲を縮めて交差するようにして、反対側から袋網で掬い捕るのである。

この時捕れたカマスは、本人が三人前、船が五人前、隠居が本人の半人前であった。またカマスは六月から九月にかけてよく捕れ、カマス漁に使った網は次の十月から二月にかけてのメコン漁にも使

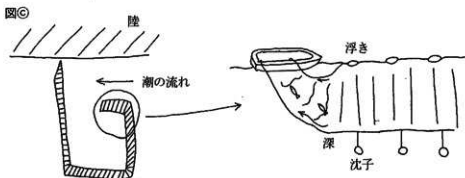
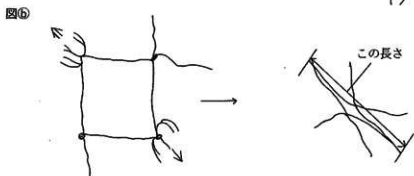
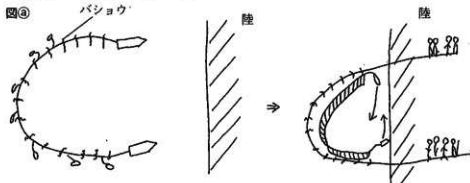
えるので大変都合がよい。

⑦馬毛島での飛び魚捕り……洲之崎、瀬泊、住吉、浜津脇などで、聞かれた飛び魚捕りの話について馬毛島での飛び魚捕りと題うってまとめて記すことにする。まず馬毛島の位置であるが西之表市から考えると北東の方向約十三段の海上に浮かぶ小島である。この島に八十八夜が聞かれるころになると南からの黒潮に乗って飛び魚がやって来るのである。

馬毛島では初めのうちは、種子島の三ヶ浦である池田・瀬泊・洲之崎の港が漁業権を持っており、飛び魚捕りも独占していたが、昭和三年に馬毛島の権利獲得のために能野と争って、その結果住吉も権利を持つことができ、後になって能野も持つことができた。元々能野は種子島公から製塩に従事するようになると、牧をいたっていた港もあった。これに加えて浜津脇の六つの港の漁師たちによって馬毛島の漁業（飛び魚捕り）は行われたのであった。ただしこの中でも池田が馬毛島に持っていた港は、天然の地形を利用した玉籠りであり、瀬泊まりの葉山・洲之崎の高坊・住吉のミソノ立て・浜津脇の垣瀬・能野の能野港などはいずれも人工の港であることから一番初めに馬毛島で漁を始めたのは池田ではないかという伝承も聞かれたが、西之表との地図を広げてみると西之表から見て裏側となり、地形的には玉籠りのほうがいいかもしれないが地理的には何と云っても葉山が一番いいような気がする。

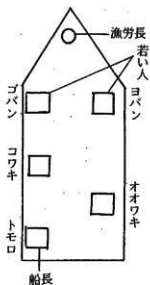
馬毛島は、平坦な島ではなく簡単に言えば一つの山が海に浮かんでいるようなものである。その丘の部分に「岳の越」（タケノコシ）と名づけられた飛び魚捕りに非常に重要な役目をする所がある。前記したような馬毛島の各港には、漁師たちが常住したわけではなく、五月から六月一杯ぐらいまでの間集団移住するのである。

「漁法・漁具の図1」



「漁法・漁具の図2」

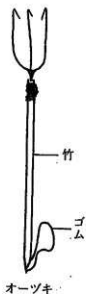
図⑥



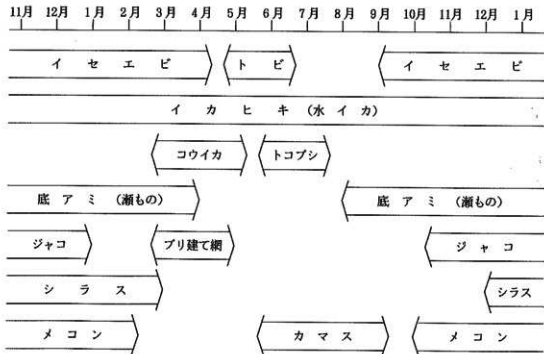
図⑦



図⑧



図⑨



この時期には漁師だけでなく郵便局や学校までもが臨時に設置されたほどであった。移住した漁師たちは港ごと、村落ごとに小屋を作りそこで生活した。浜津脇などは村落が田中・町・平石という具合に三つの地区に別れていたため、馬毛島にも三つの小屋を立てそれぞれが住んだ。

また浜津脇は中種子町にあるためにすぐに馬毛島に移っていくというのではなく、西之表の三ヶ浦が移った後でも大丈夫必ず捕れるとなつてから移っていた。馬毛島の採集物は西之表の三ヶ浦が権利を持っており、浜津脇などは飛び魚しか捕れなかった。

飛び魚を捕りに出かけるのはだいたい朝の三時頃からであった。各港の漁師が全員で飛び魚のいそうな所を探して廻るのである。この飛び魚という魚も集団で行動する習性を持ち、そのため「シキイ」がきらめいて、いる所が分かるのである。

飛び魚はまず雌が産卵する場所を求めて岸のほうに近づいてくる。そして産卵が始まると今度は雄がその卵目にかけて射撃するのである。飛び魚は、いったん射撃・産卵してしまつてパカになつてしまふ行動も鈍く全部一定の沖に向かって泳ぎだそうとする。そこに漁師たちが、待てましたとばかりに網を打つのである。この網を打つにも約束があり岳の越からの合図がなければそこに飛び魚がいたとしても捕つてはならないのである。前記の岳の越には各港から一人ずつ見張り役を出しており、そこが合図を送るのである。合図は馬毛島の周囲を四等分してそれぞれの場合に番号を付けてその番号に合わせてランプの灯を掲げるのである。……図の④

ただし例外もある。飛び魚の雌が産卵をして（これを漁師たちは「アゴ」と呼ぶ）それに雄が射撃する（これを漁師たちは「アゴを立てる」と呼ぶ）のであるがすでに産卵が終わつてしまつてから網を入

れても飛び魚は逃げてしまうので、岳の越の合図がない場合でもアゴを立て始めていたならば勝手に捕つてよかつたのである。であるからかねては飛び魚の群れがいても合図があるまでは捕れないため全部の漁船が同じところに集まつてしまひ、ほとんど喧嘩で漁をしたものだった。特に産卵が始まるのを待つて網を入れている船のその前に他の船が網を入れたりすると、「前網だ」といつてよく喧嘩が始まるものであつたらしい。

それでは実際にはどうやって飛び魚を捕るかということ、かねてからよく飛び魚のくるような所に潜み手が何人も入り、船上からは、船の所に漁労長がたつてシキイを探す。いったん見つけると片口箕状の網を敷いておき、そして岳の越からの合図を待ち、あるいはアゴが始まるのを待つのである。そしてアゴが立ち始めると潜み手たちが船を誘導して飛び魚が沖に出ようとするところを網に入れるわけであるが、飛び魚が全部網に入つてしまつてから「アギー」と合図を送つたのでは、最初に網の中に入っている飛び魚は網の縁を一周して入り口から出てしまふ。だから魚の泳ぐスピードを考えて、三分の二ぐらい網の中に入つたときには網を上げる合図を船に送らなければならなかつた。その点からも潜み手は重要な役目を持つていた。

また船の上での役割分担もそれぞれの漁師の経験などから決まつていて、船に向かって左側より、船長の操るトモロ、次に小脇、若い人に漕がせる五番、右舷の手前から、大脇（オオワキ）、これも若い人に漕がせる四番となつていた。この例は五挺立ちの板舟で洲之崎の事例である。……図の⑤

また洲之崎の場合はこの板舟を二隻一組として五組作りそれぞれ組ごとに飛び魚を捕つた。だいたい四時頃からは産卵が始まり、ま

あ産卵する飛び魚の数にもよるが七時ぐらゐまで時間的にはかかった。このようにうまく飛び魚のアゴが立ち始めれば言うことはないのだがたまには、せつかく産卵に岸近くまで飛び魚がやって来ても、うまく産卵をせずに沖へ帰ってしまうときがある。そんなときには飛び魚もバカにもなっていないし、動きも早いので四時ぐらゐから捕り始めて昼の十時ぐらゐになっても少ししか捕れないということもある。

さてここで捕れた飛び魚は、ほとんどが島に上げられ、内臓を出し開いて塩漬けにしていた。たまに鹿児島からの鮮魚船が来ている時にはそれに渡していた。また一部は西之表市へも鮮魚のままで送っていた。

これだけ飛び魚漁が盛んになると、やはり予期していなかった事故も起こってくる。これは後述する事故で幸いにも救助された一人であり、住吉は浜之町にまだ現役の漁師として活躍されている浦添孫八氏(M42・10・4生まれ)から聞き書きしたものである。下関から飛び魚捕りに来ている人の船を借りて漁をして、いざ帰ろうという時にはもうかなり天気が悪くなっており、馬毛島までは燃料が足りなくなった。そこでドラム缶で給油しようとしたところ、一人で作業すれば良かったのだがあいにくの天候のため、数人で給油しようとしたところ、船は折からの波風におおられ船員連の体重、ドラム缶の重さでバランスを失い転覆してしまった。このため二十三人が亡くなり助けだされたのは、僅かに二人であった。昭和二十一年の初夏のことであった。飛び魚捕りはこのような悲しむべき事故の犠牲の上に成り立って来たのである。

⑧飛び魚の分配……さてこうして捕られた飛び魚の水揚げをどうやって分配していたかを各港ごとに見てみる。

洲之嶺では、飛び魚捕りに直接参加するのは本人、臨時雇いのカコとして脇人(ワキニン)であり、本人が三人前、脇人が一人前、あと船のあたりが五人前、隠居のあたりが本人の半分であった。この脇人は、佐多の方から加勢をもらっていた。

浜津脇では、本人に一人前、漁に行かず隠居している株主に本人の三分の一、船のあたりが二人前、飛び魚漁の時だけは舟渡師が臨時に、六人に増やされるので彼らには一人前を六人で分けたあたりが付く。

浦田では、もともとは馬毛島の漁業権は持っていなかったのだが、漁業権を持っていた池田にかけ合せて飛び魚を捕らせてもらっていた。であるから馬毛島の小屋も池田の小屋を使わせてもらっていた。捕れた飛び魚は、まず半分に分けてその半分を網株を持っている人で均等に分ける。残りの半分を船のあたりが二人前、本人が一人前という具合に配当していた。

⑨洲之崎の潜水漁……潜って魚を突くことを「スミツキ」と呼んでいて、ハチキ・アカジョウ・モハミ・グジグイ・メコン・タコなどの主に潮にいる魚をわらって潜った。

潜る時にはオオツキと呼ばれる三叉に割れたヤスで、柄は火で炙って真っ直ぐにした竹を使い、普通は使用する人の身長に見合った長さにしたが、だいたいは一尋位であった。オオツキも初めのうちは人の手でじかに突いていたが次第にタイヤのチューブなどを竹の柄の尻の部分に結わえ付けて、ゴムの輪っかを作りその輪に親指をかけて伸ばし、その戻る反動を利用して突くようになった。

浅いところで突く場合は一人で出かけていたが、深いところで大物をねらった時などは三人ぐらゐで組んで出かけた。一人は船の上で船頭である。あとの二人は交互に潜って獲物を探し、見つけると

二人がかりで魚の隠れ家に追い込むのである。この隠れ家も漁師達にはちゃんと知っていて突き易いようにそこへ追い込むのである。ところがそうして追い込んだ魚は魚体も大きく、突いても引き出すのに手間がかかり、息が統かなくなり逃がしてしまふこともままある。それを防ぐために、柄の尻に綱をつけてつくと、引張り出す役と別れて滑るのである。また、たまにはオオツキの使えない場所には魚が逃げ込んでしまう場合がある。そんな時はカケバリと呼ばれる竹の一節の中に番線を通して、柄の尻で一方は結び、もう一方は釣針の大きなやつを付けたもので魚の逃げ込んだ穴に差し込んで引っかけで捕るものであった。……図の①②

③洲之崎の延縄漁……延縄の種類にはサバナワ・オオナワ・コナワ・フカナワなどがあり、サンマ・イワシ・ムロ・イカ・キビナゴなどをえさに使い流した。一尋間隔に針の付いた子縄を四十本付けて木製の箱（ヒトコシキと呼ぶ）に入れ、これを三鉢ぐらい流した。するとだいたい百八十尋ぐらいの長さの縄を使っていたことになる。

さすがにフカナワだけは特別で、三十尋の間隔で針を三十本付けて、長さとしては九百尋の綱を使っている。また生きたタマミ・モハミ・コウメノコなどを餌としていた。普通の延縄は、流し終わって二十分ぐらいたるとすぐ上げるが、フカナワは夕方沈めて翌朝早く揚げにいた。捕れたフカはヒラガシラ・トンガリブカ・ミミブカでこの中でトンガリブカが一番お金になった。捕る時にも、フカともなれば簡単に釣り上げるというわけにはいかず、船のそばまで綱をたぐってモリで突いて弱らせ、更にたぐって口にカギを差し込み、引かけてフカの頭を海面まで揚げたところで、今度は船に積んでおいた木の棒で頭をたたいて息の根を止める。へミングウエ

イの「老人と海」ではないが、正に自然と漁師との格闘であった。

④洲之崎のカメノイオ漁……種子島ではかめのことをカメノイオと呼ぶ。かめを捕るのは文献にもみえて有名なのは、南種子町の竹崎である。西之表ではもう伝承が残っていないのではないかと、またもともと亀は捕っていなかったのではないかと思っていたのだが、こ洲之崎では、丸木舟を使っていた時代まで、もしかすると板舟を使っていた時代までもう飛び魚捕りなどの激しい漁ができなくなった老人達が、カメノイオを一本釣りで捕りに行っていたらしい、ということを知ることができた。大隅半島の佐多の港や馬毛島で良くカメノイオを捕っていたらしいが、こ洲之崎では老人が捕っていたという。しかし亀はかなりの力があり現役を引退した老人達にはまだ普通の一本釣りや、流し網のほうが楽でいいはずであり、いくらカメノイオが好きでたまらないといっても、それは若い人も同じはずである。すると、老人達が何人か連れ立ってカメノイオを捕っていたというのは体裁を整えるためであった、実は近年まで地元の漁師達の間では網にかかってきたカメノイオをひそかに船に上げて処分してしまったり、実際にカメノイオを捕りに行くということが行われていたのではなからうかという疑問が出てくる。

カメノイオの中ではクロガメが一番味が良く、少し匂いがあるものの、淡白で栄養もありおいしかったらしい。また昔は病気に効く良い薬がなかなか手に入らなかったためよくカメノイオを食べさせたものらしく、武士の家の人などがカメノイオを捕ってくと頼みにくるほどであった。これを商売にする人も中にはいたようで西之表にカメノイオが捕れると、売りに行っていたらしい。カメノイオは、捨てる場所はまったくくないもので、甲羅から何から、果ては血液まで煮詰めて売られていて、この血液は煮詰めると寒天状にな

り大変精力が付くとかで、栄養満点であるらしい。私はまだ若いがぜひ一度試してみたいものである。

⑫浦田のキビナゴ地曳き網……浦田ではもともと他の漁港と同様に丸木舟で沖まで出て差し網などでキビナゴを捕っていたのであるが、坊津から種子島に来ていた原捨志氏からこの浦田は良い浜を持っているので、この地の利を生かして地曳き網でキビナゴを捕ってはどうかと通められ、それ以来曳き網でキビナゴを捕っている。これも船の場合と同じ様に風の冷たくなった十月から一月の月の晩の仕事で、五挺立ちの船、二艘が沖に漕ぎ出し、左右に弧を描く様に別れて後ろに袋網をくつつけたような網を広げていく、だいが陸に近づいてから、陸で待っている人達に網の綱を渡し、陸から村落のみんなで曳くのである。前記のとおりこの地曳きは砂浜で行うので、綱を渡す時に何人か海に入らなければならないだけで、他には全く潜る必要もなく、女子供も十分戦力になった。ただ、網には浮きがあれば沈んでしまうので、伝馬船が出て浮きの代わりをしていた。この時集まった人数はだいたい二百人ぐらいになった。網などは村落全体で負担していたので捕れたキビナゴは、みんな均等に分けた。

⑬洲之崎の一本釣り……昔は潮が引くと潮溜まりの岩と岩の間に、小さな網が何匹も隠れているものだった。この網のことを「オエズ」と言っていた。手で引張り出そうとしてもなかなか捕れないので、小指大の大きな竹の節を抜いて筒状にして、その先のほうに塩を詰めてオエズの穴に吹き込んでやるとオエズはたまらずもがいて穴から出てくる。そこを捕まえる。また干潮が闇夜とかさなる時、潮溜まりにはオエズがいっぱい出てきており、それを捕まえる。こうして捕まえたオエズを一本釣りの餌として使うのである。

昼間だけでなく夜にも一本釣り（イザリ）に出かけた。狙った獲物は主にアカイオ・メバル・ツルブクなどであった。他の餌としては、小麦のどんこも使いはしたが、これはアカイオしか釣れなかった。

⑭洲之崎のイセエビ刺し網……昔はそれほど沖に出なくてもイセエビやモハミ・ハチキなどの瀬物もよく捕れていた。夕方、いつもイセエビが隠れている穴の近くに刺し網を入れておく。上から網を降ろしただけではどうしても海底の岩と岩の間に透き間ができてしまいイセエビを逃してしまふ恐れがあるので若い人などは、網を打ったあと潜って透き間が空かない様にしていった。この刺し網は高さが一尋もないぐらいで、長さは各個人で何枚つなげるかで違っていたが、瀬物であれば大体は捕ることができた。昼間にこの網を使う時には、網をいったん敷いておいて岸のほうから沖の方へ石を投げ込んで瀬魚を網のほうへ追い込んで捕ったりもする。

四、漁村組織と信仰

ここでは漁業という視点から組織と、漁業に関する信仰とを見ていく。

①洲之崎の組織と信仰……一人前の株主と認められるのは、長男の場合であれば、どんなに腕が悪くても父親が隠居した時で、次男、三男は三、四年その下で働いた後に認められる。この株主の中から廻り順番で弁済師を選んで、洲之崎村落の恵比寿様の管理や、浦祝いの世話などを主に受け持つ。他の役員としては、組合長（ジジ）、幹事、会計をそれぞれ一人ずつ選ぶ。ほとんどの仕事が市漁協とのパイプ役と、漁村での共同作業に関することである。恵比寿

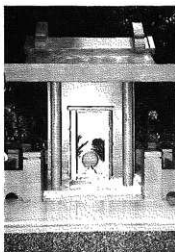
「漁業に関する信仰」



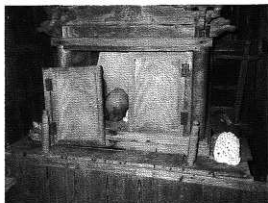
A エビスのご神体石
（洲之崎）



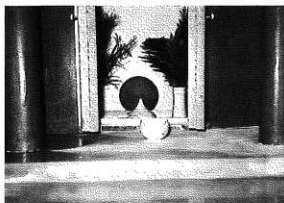
C 神棚



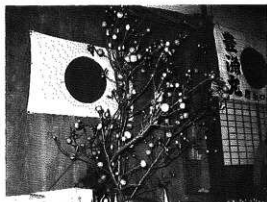
D エビス（浦田）



B エビス（洲之崎）



E エビスのご神体石（浦田）



F 船祝いの飾り（瀬泊）



G 船祝いのエビスへの供物（瀬泊）

様の祭りはガンジョウウジといって八月に漁村全体でお祭りをする。

また弁済師は漁がふるわない時には、ホイドンのところに行つて祈願して、「シオオナシ」と言つて酒盛りをする。今度は逆にたくさん取れた時には、「イザケ」と言つてまた酒盛りをした。この「イザケ」の魚は恵比壽様にもあげた。洲之崎の恵比壽様の御神体は丸い石である。……写真のA、B

また個人で屋内に神棚を作つて拝んでいるところもある。……写真のC

②浜津脇の組織と信仰……父親の家督を継いで株主となるのは一戸に一人だけであった。また申し出る日は一月四日の浦祝の日でなければならなかった。長男以外の者が株の権利を持つためには新たに買い取らなければならなかった。またそれに加えて網の修理、潜りなどが一人前であるか他の株主に認めてもらわねばならなかった。この株主の中から廻り順に弁済師を四人選ぶ。彼らの主な仕事は共同作業用の網の手入れと船の手配、神事の段取りなどであった。他の役員は評議員十二人ぐらい、ウラチョウ(組合長)一人、会計一人、幹事二人という具合に組合員による選挙で選ばれた。

新しく船を造つた時には、進水式のお祝を近所親戚を呼んで行う。初めて船を港に着ける時には舳を真っ直ぐ陸にむけて着ける。初めから沖を向けておくと行つたきり帰つてこないといけないからである。船の上には大漁旗や船名旗がたくさん立ててあり、船主や家族の者を海の中に放り込む。これは船が事故に、もしもあつた時には救助されるようにという事である。浜津脇では進水式の時にホイドンもボンサンも呼ばない。一方お祝いの席では、みんなで正座して祝いの歌を歌い、その後酒盛りとなる。この新造船には船大工が船置様を誰も分らないうちに入れる。御神体は楯・女の子の

髪・鏡ではないかと言ふ事であった。

③浦田の組織と信仰……浦田の恵比壽様は村落へと下つてきた道のつき当たりの岸壁の左手にある小高い山の上にある。元は港のすぐ脇にあつたらしい。社はコンクリートで御神体は丸い海石である。……写真のD、E

この恵比壽様の管理や共同用の網の手入れは株主から順送りに選ばれた弁済師が行う。この恵比壽祭は三月十五日と、十二月十五日に行う。またこの日にはホイドンも呼んで祝詞をあげてもらう。

以前は浦田にホイドンが一人いたのだが亡くなつてしまひ、現在では園上から来てもらつている。この祭りの時供える物は海の幸、山の幸を十品目位・餅・焼酎・塩・果物などである。まずホイドンに祝詞をあげてもらひその後みんなで恵比壽様にあげた物をいただく。

④洲之崎の船祝い……一月の二日に船主が自分のところで働いてもらつているカコの人達や親戚の者達を集めて漁業安全と豊漁を願つて行つていた。浦祝いは弁済師が一切の事を取りしきつて行われ、一月の三日である。弁済師は二日に他の漁師達と一緒に沖へ出てアミウチをし、次の日の浦祝いに備える。(海がしけたり天気が芳しくない時には別であるが)また焼酎などの準備もする。三日の日には弁済師はホイドンを呼んで祝詞をあげてもらひ豊漁を祈願する。この時は弁済師だけである。そうこうしているうちに、各々恵比壽神社に詣つた漁師達が公民館に集まつてくる。みんなだいたい集まつたところで、みんなで船歌を歌ひ酒盛りとなるのだが、この歌の時までは膝を崩す者は無く正座したままでみんな歌ひ、厳粛な儀式といつた感じである。

栗原裕「物語の遠近法」の言つているように(少し脇道にそれる

が、「儀式において表されるのは現実に対する直接行為ではなく、媒介者を通しての間接行為であり、その信頼関係、つまり実効に對しての信頼関係が崩れてしまいその儀式自体を行うこと(行為)として(レモニーとして)に意味を見いだし得たならば、その儀式は、もともとの現実への願望から起こった儀式から自立し、その儀式を行うという行為自体に重きが置かれるように変化してしまい、儀式は芸能に転化する契機を得る。」という部分を思い出さないではいられなかった。

またこの浦祝いで準備される物は、前日のアミウチで捕った一対の魚を腹合わせにした物・こんぶ・塩・焼酎・米・吸い物・刺身などで、料理のほうは、弁済師の奥さん・船主の奥さんなどが世話をした。

⑤住吉浜の浦祝い・船祝い……昔から一月の一日に浦祝いを、二日には船祝いをやってきた。浦祝いではホシヨウサンを呼んでお曼陀羅を降ろし、お経頂だい、そしてサンコンノハイというのを参列者に回して、あとみんなで正座してジョヤという船歌を歌う。この後参加者全員で宴会となる。出される料理は、魚の吸い物・煮豆・お刺身・焼酎である。

ちょうど私たちが見学にいったのが十二時を回ったころだったと思うが、もうすでに浦祝いは終わって、御曼陀羅もしまわれて宴会の真っ盛りであったにもかかわらず、再び御曼陀羅を聞いて頂き、大変ご迷惑をかけてしまった。今年も豊漁である事を陰ながら祈りたいと思う。

もともと浦祝いは弁済師の家で一月十八日に行っていた。二日の船祝いは昔は個人の家を廻って行っていたが現在では公民館で行っている。この時にはツナザラエ・ロウタ・ジョヤを歌う。

⑥豊泊の船祝い……一月の二日に公民館で漁師・漁業関係者・西之表市の役員など多数参加して盛大に執り行われる。まず前年度の役員を引き継ぎなどが簡単に行われて一同正座して船歌が歌われる。一人が音頭を取り他の物がその後につけてはやすような形になっている。まず「祝い年」、次に「綱ささえ」、最後に「樽歌」が歌われる。そして乾杯の合図と共に宴会が始まる。会場正面の床の間には木の枝に餅・みかん・お菓子などを差したコーライと花瓶に生けた松の枝、一段下がったところに三角錐に切った大根とにんじん、焼酎、各船から船霊様によげられた海の幸を盛り合わせたお膳、という具合に並べてあり、宴会が始まるとそれを下げてみんでいた人だのである。……写真F・G

昔は船主が数名いてその人達がそれぞれの家を廻って船祝いをし、弁済師は組合員全員を招待して行っていた。これももともとあった二日の船祝いである。三日は浦全体の祭りで浦祝いと呼んでいたが、現在はこの二つを一緒に行っている。

五、おわりに

今回の調査は漁法を重点的に聞き書きしてきたわけであるが、でき上がった漁業生業歴を眺めてみて、おもしろい事に気づくのである。(まあ私の思い違いかもしれないが)まだ種子島の農業について見識が浅いのではつきりした事は何も言えないのであるがもしかするとこの漁業歴の上に農業歴を重ねてみると、農業の一番忙しい時期には長い期間の漁獲の期待できる物が当てはまっているのではなからうか。(つまり忙しい時にはそれが終わってから漁をすればいいのである。)もともと種子島は農業の島である。つまり農業を

基本として漁業歴が自然と漁民の中にも入っているのではなからうか。もちろんトコブシやイセエビのように本当は一年中捕れるのが資源保護のために、漁期に制限のある物もあるにはあるのだが、もしこれらの制限がなかったとするならば、農業で生きてきた人々は農業を基本にして漁業を少しずつ始めるのではなからうか。ここで問題としているのは本土にいる人々と種子島にいる人々の食べる魚は同じようにして生まれてきたのか、または全く同じで、それぞれの魚に対する価値観まで同じなのだろうか、もしも、もしも違うとするならば（もちろん地域によって捕れる魚が違うではないかと、切り返されるかもしれないが、蛸は洋の東西を問わずいるし、鯛だってそうである。それなのに漁の対象とする魚も違えば、それぞれの魚に対する価値観も違う。）それは何に原因があるのか。これはこれからの私のテーマかもしれないが、他の南西諸島はどうなのだろうか。種子島と本土が同じであり南へ調査を進めても、同じ結果しか得られないのだろうか。いろいろ考えるところに分からなくなってくる。縄文人も弥生人も確かに魚介類は生活の糧として用いている。これは考古学的にも動かし難い事実である。しかし南から、柳田國男が考えたように鳥つたいに上がってくる人々などは弥生人縄文人と同じはずはない。古代に農業も漁業もはっきりした認識があるはずはないが、どちらかがメインのはずである。この辺で私の知的レベルと資料がとどえて行くのを感じる。今回のテーマはとてつもなく大きいだけに少し背伸びをしたような感じの問題の捕らえ方だったかもしれない。……図⑥

また前記の文中でも触れたが船歌は祭式と言う捕え方をすれば、まだまだおもしろい問題だと思う。中世風の歌ではあるが、明らかに豊漁を願う祭式である。ではなぜ他の祭式は芸能としてその行為

自体が自立し、意味をなしていくという歴史をたどる物が数知れず存在するのに、船歌は芸能化し切れずにかえって、その実効のない祭式さえもたえつつあるのか。他の祭式と同じ様に芸能化してもいいはずなのに、（ここでも身勝手な意見ではあるが。）それは祭式をセレモニー化する、嘘でもいいからいい神様との媒介者たるべき祭司の長、まあ神官でも、ユタでもボンサンでも誰でもいいのだが、媒介者の不在が原因ではなからうか。民俗学的に貴重だから今のうちに録音でもしなさいというよりも、もっと別の視点から民俗学的な示唆なりをするという考え方もあっていいのではなからうか。最もこれでもとの形と全く違う船歌になってしまうのも困りものではあるが。

今回の実習は大変乗り多き物になったのではないかと自分では思っている。ただ残念でならないのは最初の巡検に都合で参加しなかった事であった。

参考文献

- 下野敏見著『種子島の民俗Ⅰ』（一九八二年、法政大学出版局）
 下野敏見著『トビウオ招き』（一九八五年、八重竹書房）
 下野敏見著『タネガシマ風物誌』（一九八三年、未来社）

北部漁村の網漁法と

配分、葬制と漁村

高山 由美子

一、はじめに

本稿は昭和五十九年十二月二十五日から昭和六十年一月三日まで、種子島北部を調査した結果報告である。種子島は全島を海に囲まれ、豊かな漁場と網漁を持った島である。そこに生活する人々もまた漁業に関する豊富な知識・伝統をもっている。その漁法は東海岸と西海岸においてどのような差異がみられるものであろうか。

二、概観

種子島の漁村は殆どが半農半漁村である。今回私が調査した時も、冬、漁のさかんな時期でなかったため、老人は畑仕事に出ているところが多かった。かつてやはり規模はさほど大きくはなかったが、夏の間、集落中の男達が馬毛島に渡ってトビウオ漁を行うなど、さかんな面もあったようだ。本稿では種子島北部の網漁業を刺網、浮敷き網、地曳き網の三つに分類し、地域別に述べていくことにする。

三、本論

1 刺網漁について

モハミ（フダイ）、ハチキ、クレイオ（メジナ）、キビナゴ（ザコ）を刺網で捕った。

① キビナゴ

キビナゴの漁期は旧暦七月初旬〜三月末である。闇夜だとウミボタルが網にかかり、網の所在が魚に知れてしまうので、月夜に出かけた。漁では、ほぼ一年中捕れた。

長さ三、四〜五肩の竿を、船の進む方向に差してみて、魚に当たったら網をさしかける。五〜六人の男が船に乗りこみ、岩場を囲うように網を掛けるのである。網の広さは、反二〜三ヒロ（沖ヶ浜田）、巾四肩、長さ七〇〜一〇〇肩、目の大きさ五分（澳）である。澳では、かつて帆船の頃は、代々漁業を経営している権力者である網元がフナゴを三〜四人連れて出漁した。

澳泊では、建網式のものや、打ち回して掛けた。このときは船の両弦に孟宗竹（直径四寸、長さ三ヒロ）をつけ、竹と海を一緒にたたいて魚を追いこんだ。網には、五寸四方長さ二四寸くらいの桐の木をウケとして四〇寸程海につけた。沈子は石（二割程度）を、稲藁製の縄でくくったものを二〜三程海につけた。

② モハミ

浜之町では、モハミをとる網は長さ一〇〇肩、目二寸五分である。ほぼ一年中とれ、魚の大きさも変わらない。一匹が五〇〜一〇〇g程である。二人乗った丸木舟二艘一組で出漁し、朝八時から夕方四時まで操業する。この場合はホコ、石でおどして追いこむ。冬は三〇〜四〇回、夏でも二〇〜三〇回網を打てる。

③ イセエビ

漁では、漁に使われる網は、昭和三十年頃ナイロン製の網が普及するまでは綿製の一枚網であった。目の大きさは三寸五分。現在はその両側に一尺目の網をつけた三枚網を使用している。この外側の網を浜之町ではジゴクアミと呼ぶ。漁期は新九月〜四月に限られている。一反の丈四尺、長さ一〇呎の網を三、四反丸木舟に積み、夕方五時頃掛けて朝七時頃とりに行く。

漁業の盛んな瀬泊でも漁期は同じである。個人漁なので漁場は早い者勝ちである。この網は建網で、巾一・五呎、長さ二・五〇呎の網に直径一・五呎、長さ五〇呎の桐の木又は孟宗竹(約二節)を両端につける。これを水深一〜一〇呎の、岩礁地帯に掛ける。浜之町では、巾一ヒロ、長さ一三ヒロで一反の網を少ない人で三〇反、多い人は一〇〇反持っている。目の大きさは二寸八分と決められており、これ以下の目の網を使用してはならない。瀬泊と同じく競争が激しいので、早い人は朝十時頃網を掛ける人もいた。多いときは二〇登〜三〇登、少ないときでも三登〜四登の漁獲があった。

④ トビウオ

西之表に於いて、トビウオ漁は新暦三月〜七月初旬まで行われたが、このうち三〜四月にとれる。全長三〇〜四〇センチ程のトビウオも刺網で捕獲された。これはオートッピー(大トビ)と呼ばれるものである。オートッピーを獲る網は流しトビ網と呼ばれる。この網は個人所有である。沖ヶ浜田のある老人はかつて二反(二二〇〇ピロ)持っていたが、漁に出なくなっただので庄司浦の知り合いに売ったということだった。昼間のうち一五〇〇ピロ沖に出ておき、太陽が沈んでから網を流し始めた。三回程流すとイノミサキが見える所まで出るので、引き返してきた。網にはガンドウという、風が吹

いても消えない灯を一反に一つの割合でつけた。これがないと潮の流れに寄せられて他の船の網と絡まってしまふからである。

漁で使用されていた網は巾一・八〜二呎、長さ一〇〇〇ピロ位、目合一寸のものである。この網は昭和五、六年頃から使用されていた。明治初期沖繩から約一〇艘の漁船団が魚群を追って種子島までやってきたことから、この島でもトビウオ漁が始まったそうである。

2 浮敷網について

五月以降のトビウオ漁は、西海岸と東海岸では漁法に於いて差が見られる。

① 西海岸のトビウオ漁

まず漁業のさかんな瀬泊では、二十年程前まで新暦五月二日即ち八十八夜から七月十日まで男達は馬毛島に渡り、集中的に漁を行った。この時期にとれるトビウオはオートッピーよりもやや小柄で、五匹で一登程なので、コトッピーと呼ばれた。産卵のため接岸した魚群を見つけると、それらが産卵を終え沖合に逃げるときを見計らって網を投げ入れて中に追い込む。一艘に七人乗りこみ、二艘一組が五組できた。各組にトビウオベンザシという、漁の世話係が一人ついており、任期は一年で全員に回ってきた。一組に一張の網(開口一五ヒロ、奥行き一五〜二〇ヒロ、目八分)が積まれた。瀬泊の五組の他に洲崎、池田から五組ずつ、又大崎、浦田、大久保等からも数組来ていた。操業開始は午前四時頃で、遅くとも八時には終わった。トビウオの産卵はシオのたるみ(干潮が満潮に変わる直前、又はその逆の、潮流の停滞しているとき)に多かった。網の目の大きさは三・五センチである。漁期に男達が宿泊する家は馬立の小

屋と呼ばれる九尺一間の小屋で、個人用の一戸建てだった。

浜之町ではこの馬毛渡りは昭和三十五年頃まで行われていた。乗落の船は二艘出て、カコの人数が不足するときは佐多に二〇人位応援を頼むこともあった。船にはスミテ（漕手）が各一人ついていた。現在燈台のある場所は、かつてヒタテガムネと呼ばれていた。馬毛島に男連がいる間、乗落に死人が出る等、不幸があったときは一つ、魚群が見えたとか祝い事がある等のときは二つ、その場所に火を焚いたからである。火を焚くのは組合員の女で、麦藁・稲藁を一束ずつ燃やした。火が見えてから一〜二時間位で船が帰ってきた。

浦田でも漁法は同じだが、前述の二ヶ所が必ず馬毛島に宿泊するのに対し、夜中の十二時に出発し、三時頃から漁を行うといった形態である。しかし漁の忙しい時期には馬毛島に泊まりこむこともあ

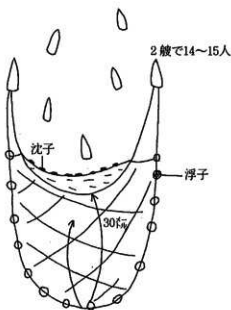


図1 浮敷網

った。二艘一組を一統と呼び、スミテが魚群を網に追いこんだ。

② 東海岸のトビウオ漁

東海岸の沖ヶ浜田、湊でも、浦田同様馬毛島に泊まり込むことはあまりなかった。この地域ではトビウオをとる浮き敷き網のことをヨリトビウオアミと呼んだ。巾二・五尺、長さ一〇〇〇〜二〇〇〇尺、目合い一寸ちよつとの網である。夜中一〜二時頃海岸線を見て回ると、鱗が光るので魚群のいることが確認できた。そこへ網をまわし、四人のスミテが石を投げながら魚群を網に追いこんでいて、網を次第に引き絞りがら捕獲した。(図一)

五月以降のトビウオ漁は、東海岸よりも西海岸においてさかんだったようだ。

3 地曳網について

① カマス漁

湊では、新暦七月二日を半夏生（ハンゲショウ）の日といい、この日から地曳網漁が始まる。六人の魚見役があり、一年に二人ずつ当番になる。この魚見役が朝、魚群の様子を見に出て、いと確認すれば集落中に通知する。時化の続いたあとの風の目、即ちシケワキの日に集中してとれた。各戸一ヶタ（巾四尺長さ五尺）の網を出し、連結する。集落中のものを連結させると七〇〜八〇尺の長さになった。これは袖網として使用された。袋網は集落共同のもので、網小屋（会宅）に収納されているので、ベンザシの指示に従って魚見役がこれを準備した。帆船二艘に三人ずつ集まり、陸の方に向けて網を打ち、そのまわりを一〇艘の釣り舟がとりかこみ、モグリが各一人ついた。陸の方から、こがし大の石を投げたり、追いかけたりして魚群を袋網に追いこんだ。(図二)。七月二日は初網の祝い

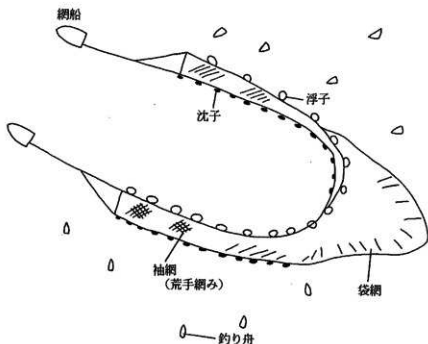


図2 地曳網

日でもある。魚群のいないときには、エビス様にその時期の豊漁祈願をして酒を飲む。魚見役が魚群を確認したら漁に出て、そのあと初網の祝いをした。

浜之町では、朝六時にベンザシ二人がハコメガネをつけ魚見に行き、いとわかれば通知する。各戸の網は巾五尺、長さ九尺で五〇戸分連結すると一〇〇疋の長さになった。この袖網二つを五丁立ちの船二艘で運び、浜同様打ちまわして三〇人位で魚を追いこみ浜の方へ曳く。

② プリ曳き網

プリ曳き網漁は、オドシをつけたプリ網(図3)と地曳網で捕獲する漁法である。

浦田では、シユロ又は芭蕉のロープに二疋おきにオドシをつける。オドシは昔芭蕉布を用いたが、二十年程前から白いひもに変わった。現在では白板(長さ二尺、巾一尺)になっている。このロープに直径二疋深さ一・五〜一疋のウケ(浮樽)を、約三〇疋おきにつけ、スミテが各一人ついた。沿岸近くに魚群を追いこみ、プリ網の外側に網を打って曳きあげた。この網はプリアミ又はアイテ(荒手、袖網のこと)アミと呼ばれた。

浜之町のプリ曳き網漁は一里沖からプリ網を引きこみ、陸にひきつけ、スミテ三〇〜四〇人がプリ、クレイオ(めじな)、コーメ(ひらそうだがつお)等を追いこんだ。モハミ(ぶだい)はかからなかった。夏、特に七月が漁期に最適だった。プリアミはトビウオ網を使用した。

沖ヶ浜田では、プリ曳き網漁をするのは夏の間、主として八月頃一、二回だけだった。コーメ、ハチキ、モハミ等がとれた。

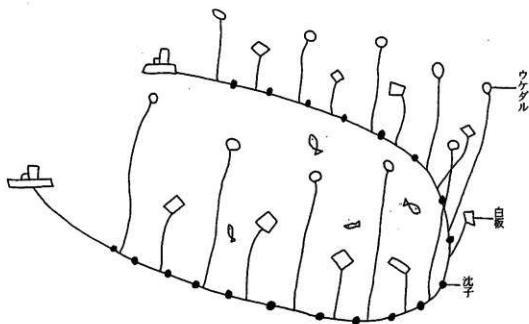


図3 ブリ網

4 配分について

西之表では集落共同の漁獲物を分配するさい、漁獲物の半分を網株によって、残り半分を人頭によって分配した。網株とは集落共同の網(トビウオ網、袋網) 作製時の出資者がもつ株のことで、出資額に応じて配当もかわる。他所からの移住者は株を持つことはできない。従って正式な漁協の組合員ではなく、準組合員になる。人頭割り網、船の規模(釣り舟、網船等)、役職(ベンザシ)によって決まっていた。以下、人頭割りによる配当について述べる。

漁では配当のことをアタリという。地曳き網漁に参加した十五才以上の者なら、男女平等に一人前もらえた。スミテを務めた人は二人前、魚見役一人前(漁には魚見役が六人いるが、これはその年の当番でない残りの四人も平等にもらった)、隠居は網編みだけでも参加すれば一人前、大漁なら仕事をしなくても一〇分の一人前もらえた。また大漁のときは三才以上の子どもにも三分の一人前与えた。これは「子どもに食べさせる」の意味で「子どものアタリ」と呼ばれた。釣り舟は二人前、網船は三人前もらった。

浜之町では、配当をマエ、マエテという。カマス漁の場合、ベンザシ一人前、網を出さない者、準組合員〇・五人前、網だけ出すもの〇・五人前だった。〇・五人前のことをゴングー(五合) マエと言った。即ち網と人間で一人前というわけである。トビウオ漁の場合、正組合員二人前、準組合員一人前、スミテ〇・五人前、船二人前、佐多からの助力者は網を出すわけではないので一人前だった。ブリ曳き網の場合、漁獲物は全て換金してから分配した。成人男子は一人前、隠居は船に乗るだけで〇・五人前、船のマエテはなかった。家に不幸があると一週間は漁に出られなかったが、それでもカマス一人前、トビウオ二人前、ブリ曳き一人前もらえた。

瀬泊では配当をマエテという。カマス漁の場合、正組員一・二人前、漁に参加しなくても〇・二人前もらうことができた。これはチカラマエテと呼ばれた。準組員、隠居は〇・五人前、アイデー（荒手）網〇・二人前、ベンザシ〇・五人前、釣り舟（丸木）〇・五人前、網船一・五人前もらった。大漁のときは女性や子どもにツナヒキマエテがわずかだが与えられた。戦争中、一家の本人が不在でも半マエ（〇・五人前）が配給された。

正組員のことを本人（ホンニン）といい、本人株を持つが、これは他所からの移住者が持つことはできなかった。しかし他家のものを譲り受けることはできた。一家の長男が成人し、一年程漁業に就けば親の跡目を継いでよく、親は隠居することになる。ただし次男、三男は三年以上組合に奉行しなければ正組員になれなかった。一家に男親がない場合は、その家の長男が十五才になればいつでも本人になることができた。

5 漁 具

① 網

現在網はナイロン製、クレモナ製が始どだが、以前はオ（麻）を細く裂いて糸を紡いで網に仕立てた。糸つくりは女性の仕事だった。昭和初期に綿の網が普及し、網は購入するようになった。植物製の網はそのまま海水に浸すと腐るので、クリゲ、ナラの木の皮を舂、芽立つ時期に刺いで煎じた汁で染めた。瀬泊ではカッチという染料を使用していた。集落共同の網を染めるときは各戸からバケツ一杯の染料を出して、その年のベンザシが染められた。昭和四十年頃、ナイロン製の網が普及したため染める必要がなくなった。

② 浮 子

浮子のことをアバと呼ぶ。瀬泊ではトンゴともいう。五、六年の桐の木で作る。芯に穴があいており、軽いので最適である。網に応じて大きさもかわるが、地曳き網用は長さ三〇㍎、建網用は長さ二〇㍎位でこれに穴を二つあけひもを通して使用した。ウケ（浮樽）は五、六年のダナの木で作った。

③ 沈 子

イワ、イワイシと呼ばれる。鉛製の沈子が普及するまでは自家製だった。瓦用の、粘性の強い粘土を臼でつき、竹に適当な大きさに握りしめて成形し、抜き取って一週間陰干し、次に日に干して完全に乾燥させる。次に、巾一尺、長さ三・五尺の俵に藁をのせ、その上に乾燥させたイワイシを並べて端から使こまいていく。両端と中間を三、四ヶ所括って風の吹かない日は庭の木の下に、風のある日は蔵の中につるして下から火をつけ、三、四時間かけてゆっくり焼く。やがて下から焼けた順にポツリポツリと落ちてきた。イワイシ作りは主として男性の仕事だった。

四、葬制と漁村

七、八年前まで土葬を行っていた。死人が出るとその日のうちに杉の板で箱を作ってもらい、その中に死人を納めた。箱は班の人四人が担いだ。墓地へは身内・親戚の列と和尚・他人の列の二列になり歩いていった。身内の人間は二人分の草履を履いていき、墓地の山に捨て、裸足で帰った。四十九日間は祝い事や旅行に行ったりしなかった。浜之町では、正月（一月）に女が死ぬと一年間に浜の集落で七人死人が出る、といわれた。

漁村では葬式があると一週間漁に出ることはできなかった。その間他家を訪れるのはかまわなかったが、そこでお茶は飲まなかった。また男性は髭を剃らなかった。漁に出て遭難することはめったになかった。あっても死体がないので死亡の確認がなかなかできなかった。死体のないときは着物を棺の中に入れて埋葬した。葬式に履いていった草履を漁に履いていくと、マンがよくなる、とは言ったが実際は墓場で焼いていた。

五、結 論

種子島北部の網漁の特徴を以下に述べてみたい。

まず、東海岸より西海岸の方が漁業はさかんだった。代表的な例が五月〜七月のトビウオ漁である。西海岸の集落では漁民は殆ど馬毛島に渡っていたが、東海岸では夜中に出漁するだけで移住することとはあまりなかった。位置的な問題もあったかもしれない。

次に西側は海岸線が比較的なだらかだが、東側はごつごつと男性的で、砂浜が少ない。従って地曳き網漁はあまり行われなかった。

配当の呼び方も異なっている。東海岸の集落（湊、沖ヶ浜田）と浦田ではアタリ、西海岸の集落（浜之町、釜泊）ではマエテといった。マエテは屋久島でも用いられる。おそらく西之表の大きな漁港を窓口として、本土の文化が混入してきたものだろうと思う。

マエテに関して、漁撈組織の発達した釜泊でチカラマエテという、漁に参加しなくても与えられる配当のことをきいたが、話者は「正組員のチカラ（権力）のマエテだ」と言っていた。いわば正組員マエテといったところだろう。

短期間の調査であったが、興味深いテーマのおかげで網漁一つに

しても様々な問題点が含まれていることを知った。これに予備知識と調査技術が充実にあればと、今は飽きしりする思いである。今後、共同漁業の規模や配当の問題等、本土、琉球と比較するといった種子島の特徴が明確になるのではないかと思っている。

(昭59・12・25〜昭60・1・3調査)

種子島南北の

各種漁法と漁村習俗

古川 泰生

一、はじめに

種子島は、鹿児島島の南端・佐多岬から、約四〇㎞ほどの南洋に位置し、南北五七崙、東西四一・二崙、面積四四五平方メートルのひょうたん型の細長い島で、高い所で二八〇㍉程の平たんな島である。東は太平洋に、西は東シナ海に面し、黒潮が流れることもあって、昔から漁業が盛んに行われてきた。しかし、年々減り続ける魚量と、近代化の波に押され、種子島の漁業も変わりつつある。そのような状況の中で、種子島の各集落の漁業はどのようなものであるか、また、北部と南部ではどのような差異があるのだろうか。また、人々はこのからの種子島の漁業を如何に考え、どのような工夫をこらしているのだろうか。

二、概要 — 各集落の概説 —

1 庄司浦

庄司浦は、種子島の西之表市・東海岸側にある半農半漁の集落である。漁業組合は、庄司浦港を基地として、西之表漁業協同組合に属し、現在、四五名の組合員が加入している。

組合組織には、陸の生活とは全く異なり、小組合長・会計他、ベンザシ二名がいる。

組合員には、庄司浦在住者は誰でもなれるが、長男は戸主として親の権利を受け継ぎ、次男以下は三万円、その他は六〜七万円を、組合加入時に支払わなければならない。

2 川 脇

庄司浦と同様に、西之表市・東海岸側にある半農半漁の集落で、西之表漁業協同組合の中の東海地区安城漁業協同組合に属している。現在、組合員は四二名で、小組合長以下、会計・船持ち・班長他ベンザシ三名で組合が成り立っている。

組合員には、川脇在住者は誰でもなれるが、各自、組合加入時に三万円支払わなければならない。他に、カマス組合等も作っている。

3 大 野

川脇と同じ安城漁業協同組合に属しており、やはり半農半漁の集落である。

小組合は組合長・会計他ベンザシ三名（川脇と組織を一つにする。）で成り立ち、組合員は、加入時に三万円の出資金を支払わなければならない。

4 本 村

本村は、種子島の最南端である門倉崎の近くの港を基地とし、南種子漁業協同組合の中の西之地区漁業組合に属しており、現在、組合員は五七名である。現在は小組合長他、会計、ベンザシ五名の組

織であるが、昭和三十年頃は、ベンザシは三名で、他にムラギミ二名が存在した。ムラギミは集落の役員として、諸連絡や祭り等の行事を任されていた。

組合員は正組合員、「タキ」と呼ばれる準組合員の他、「パー」と呼ばれる隠居があり、正組合員は一戸一人、長男だけがなり、次男以下は「タキ」となる。

5 瀬 泊

瀬泊は、西之表漁業協同組合に加盟し、瀬泊の港を基地とする半農半漁の集落であるが、漁業を専業で行う人が多いのが特徴的である。

組合員は、現在六二名で、そのうち五〇名程が専業で漁を行っている。

小組合は、小組合長、会計、会計監査他、ベンザシ一名で構成されており、西之表漁業協同組合に総代として七名、選出している。

組合には、瀬泊在住者は誰でも加入できるが、加入時に八万円支払わなければならない。

6 浦 田

浦田は、西之表市の北部にある、漁業中心の集落である。漁業組合は、西之表漁業協同組合に属し、天然の良好である浦田港を基地としている。組合員は、現在六〇名、うち正組合員三七名である。小組合長・会計等からなる組織で、昭和二十年頃からベンザシを置く習慣はなくなっている。

組合員には、浦田在住者は誰でもなれるが、加入時に資金金として二万円支払わなければならない。

三、海の漁業

1 漁業暦

(新暦で示し、魚名は方名で表記)

魚名 月	アカダイ メバル	トビウオ	カマス	イセエビ	ミズイカ	ソウダ ガツオ	キビナゴ (ザコ)	キイサ チクロ ハクヒ
1								
2				↓				
3		↑						
4	↑	↑						
5								
6								
7								
8	↓							
9				↑				
10					↑			
11								
12								

〈夏の間〉

〈夏から秋〉

2 漁 法

(1) 潜水による漁

① オオツキを使用する刺突漁業

竹筒（琉球竹）の先に鉄製の矛をつけた漁具を持って海中に潜り、魚を突いて捕る漁法で、矛には二股や三股のものがあるが、魚の種類で使い分けられる。

船で沖合まで行き、昔はフンドシ一枚だったが、現在はウェットスーツを着て一〇分から三〇分くらいまで潜ることもある。魚種は主にタコやヒサ（石垣タイ）であるが、夏には、モハミ（フグイ）やクロダイなども捕る。

魚を突く時は、魚の進行方向に、魚の頭から五〜一〇センチくらいの所を狙って突く。これは魚が逃げ出すのと、オオツキが到達する時間のズレを計算して突く為で、熟練の漁師でも動いている魚を突くのは難しいと言う。

タコ突きは一年を通して行われるが、特にイセエビが不漁の真冬時に多く行われる。

タコ突きは三ツ股のものが使い易い。

タコは、浅瀬にいて、満潮時でもせいぜい四尋ぐらいの海底に棲息している。干潮時などは、岩場から狙うこともある。タコはミナ（巻き貝）やエビを食べるので、海底の岩を見ると隠れ場所がすぐ分かります。また、あまり動きも遅くないので突き易いが、澄んだ水をおむるので、雨ふり時や時化時は捕れにくい。タコ突きは各地で見られるが、川崎、大野、本村などで漁を行っていた。

以前は、旧十月から十二月にかけてのサワラ捕りや、旧三月から旧五月のナガシ（梅雨）にかけてのアカガメ捕りなども、刺突漁で行われていた。

オオツキの先端には「とめ」とよばれる返しがついていて、魚を逃がさないようにしている。

現在は、オオツキの代わりに水中銃を用いる人も出てきた。

② クシを用いる漁業（ナガラメ漁）

種子島の沿岸は、天然のナガラメ（トコブシ・アワビの一種）が豊富で、特に西之表の東海岸側では、一、二年に一度、稚貝の放流を行っており、六〜九月の間に素潜りによってナガラメ漁を行っている。

ナガラメ捕りは、「クシ」とよばれる木の柄のついた鉄製のカギ針状のもので、海底の石にはりついたナガラメを、石を引き起こし乍ら、素早くこさき取り、「ククリ」とよばれる腰につけたカゴに入れる。これを「カエシ」といっている。

また、浅瀬にある海中の石の裏側を手で探すと、ナガラメがついていて、これをクシを使ってこね起こして取る方法もある。これを「させる」（手で探るの意）といっている。

ナガラメは乱獲を防ぐ為に、漁協や組合で毎年の漁業水域を決めている。

(2) 釣りによる漁

① ソウダガツオの一本釣り

黒潮に乗ってカツオが北上してくる。五月から十月くらいまでの間に、四ノ級級の船（種子島の漁船としては大型の方）で漁を行う。カツオは、網で捕ることもあるが、庄司浦や本村では、一本釣りが行われている。

カツオ漁はマギリ漁ともよばれ、キビナゴを生き餌にし、コマセとしてまき、カツオの群が逃げないようにして、イカやタコの擬似餌を用いて釣る。昔は頭を焼物で作り、トリの羽をつけていたが、

今では、ゴム製のもが主流で、頭はゴムか人工石、羽はナイロン製である。ハリは一本で、昔は竹さおであったが、現在はプラスチック製のサオがほとんどである。

他に、一本釣りとしては、ブリ、コセンアジなどがある。ブリは、やはりゴム製の擬似餌を用いるが、魚量が小さくなる（少なくとも）と、生き餌を用いることもある。

ブリはサオは使わずに、ナイロン製の糸に擬似餌とハリをつけ、長さ三〇ㇰ、直径一五ㇰほどの竹筒に糸を巻きつけて用いる。

コセンアジは、アマ木をあぶって作った擬似餌を用い、ブリと同様に、サオは使わずに釣る。コセンアジの擬似餌は、ブリやカツオのそのれ、およそ十分の一くらいの大きさである。

② ミズイカ釣り

十月から六月くらいまでの秋から梅雨時の間に行われる。

ミズイカは夜行性なので、月夜の晩に漁は行われることが多い。ナイロン製の糸の先に、「エギ」とよばれる、長さ一五〜二〇ㇰくらいのアマヤクサギに、色を塗ったり、布をまいた擬似餌のしりに、「カナ」とよばれる返しのついた針を十数本とりつけ、または、最近では、「ロケット」とよばれる鉄製の長さ二〇ㇰくらいの針を用いて、サオを使わずに、手で糸をたぐりながら漁をする。これは、ミズイカは逃げ足が早いので、サオではミズイカの触手に針を上手く引っかけることができないためである。

漁師は、糸を手でたぐりながら海底から一〜二ㇰくらいのところまで静かに降ろすと、一分おきくらいにサオを用いて、糸をしゃくりあげる。こうすると、海中では、エギやロケットがあたかも生きた魚のような動きをするので、ミズイカはこれに触手を伸ばし、そしてハリに引っかかって釣れるのである。この漁法は瀬泊や庄司浦

でみられた。

(3) 網による漁

① カマスの追い込み漁

カマス漁は、小組合全体で行われる組合漁の一つで、夏から秋にかけて行われている。

早朝、ベンザシがカマスが来ているかどうかを見に行き、(本村では、海岸に見張り用のやぐらが組んであった)、カマスの群を発見したら、ホラ貝を吹いて知らせたり(川脇・大野)、大声で、「オーイ、カマス捕りやろー」とおらん(叫ぶ)だりして仲間を集める。カマスは、大体沖合一〇〇ㇰ〜二〇〇ㇰくらいの所にいる時は、人が海に潜って、芭蕉のついたわら縄で、一〇〇ㇰくらいのところまで追い、二艘一組で、カマスの群を、網で囲む。網の長さはその時の人数で決まり、最後に袋網で船に上げる。川脇や大野では、カマス捕りは地曳き網で行われる。

② イセエビの建網漁

九月一日から三月三十一日まで行われ、それ以外は、繁殖保護の為、禁漁となっている。実際には、九〜十月、二〜三月が漁期で、その他の月は不漁である。

夕方に、沖合一〇〇ㇰくらい、水深五〜六尋のところに潜って網を仕掛ける。

網は、高さが一〇ㇰくらい、幅が一〜二ㇰのものを一セットとして、大体四〇ㇰ前後の長さである。戦後くらいまでは麻や最近まで木綿のものが使われていたが、現在はナイロン製で、外アミ(目が大きい。一辺一五〜二〇ㇰくらい)と中アミ(目が小さい。一辺五〜八ㇰ)とよばれる三重構造の網が用いられている。この網だと、網が丈夫になり切れにくく、イセエビを逃さない。また、イ

セエビは動けなくなるので、傷つきにくい。

捕れたイセエビは、沖合一五〇呎、水深四〜五呎のところに設置された生簀の中に入れ、二〜三〇鈴単位で出荷する。

イセエビは、特に北部の岩場やサンゴ礁の多いところでよく捕れる。

③ キビナゴの刺し（流し）網漁

十一月から四月までの間の、月夜の明るい晩に行つた。昔は、船の船先に一人立って、二〜三呎くらいの竹ザオを海中に差し入れる。流しながら、竹ザオに伝わる感触で群を見つめる。群を見つけると刺網で囲み、一網打尽にする。網の長さは八〇〜一〇〇尋で、高さは四〜五尋くらいのもので使用した。

網はナイロン製のものが多い。

④ トビウオの追い込み漁

トビウオは、昔は、ウケシキ網とよばれるトビウオ専門の網で捕った。夜中の一時頃、三艘一組で網をもち、馬毛島から沖へ向かい、トビウオを探す。トビウオを見つけたら、産卵が終わるまで待ち、朝四時頃網を入れる。網は箕のような形をしていて、船を動かすと網についているオモリが、トビウオの群の下にもぐり込んで、網の中に群をとじ込める。群が入ったのをみて、網をまくり上げ、魚を一網打尽にしてしまい、一方の船に引き上げる。

現在は、トビウオ漁の時期の五〜七月になっても、馬毛島には移住せず、朝夕、それぞれの港から漁場へ向かう。魚量が減少したので、ウケシキ網で漁を行うことはなく、追い込み漁が中心である。二艘の船で、長さ数千呎になる網を引き、ロープにビニールをつけたもので魚をおとして、網の中に魚を追い込んで捕獲する。

漁泊でこの漁法を行っている。

南部では、トビウオ漁はあまり行われていない。

⑤ その他

○ ホロ引き網魚

船の両側に長さ一〇〜二〇呎くらいの竹ザオを手を広がたように取り付け、ホロ引き網を両端にかけて、船で引く。

漁泊では、主に、アサヒガニ漁に用いていた。

○ プリ建網漁

陸に対して、の字を書くように網を建てる。網の目は大きく、三重になっている。

夕方に入れて、朝上げる。

○ 他に、磯建網・地曳き網などがあるが、最近、若者の漁師が減ったので、地曳き網などは行われなくなった。

○ 網の修繕

網の修繕は、漁師が自分で、漁の合間を見て行う。

修繕には、「ハリ」と呼ばれる、モウソウ竹を舟状にけずって、中をハート状にくり抜いたもの（漁師が自分で作る）（織り機飛びに似ている）を用いて、一つ一つの破れを手作業で繕う。

大切に扱えば、網は十年近くもつが、手入れをしなければ、一〜二年で、使いものにならなくなる。

3 漁業信仰

(1) 船霊様

船の守護神として信じられている。船霊様は、船大工が船おろしの前日に入れ、船主には見せない。船のとりかじ脇に祭壇を作り、その中にしまっておいた。

船霊様は、海の天候を船頭に教えてくれると考えられ、海が時化

る前になると「キリキリ」と鳴くといわれ、これを、船霊様が「いさむ」という。

また、家の上座の部屋の柱の間の天井近くに、船霊様を祭り、大漁時には、魚を刺身にして、御神酒といっしょに供えた。

船霊様は女神であるともいわれ、船に女が乗ることを忌み、また、漁師たちは、漁に出る時は四つ足の動物を食べない、四つ足の動物を船に乗せない、などの禁忌を守っている人がある。しかし、北部では、近代化と共に船霊様を顧みなくなる傾向も一部に見られた。

(2) エビス様

種子島の漁村には、必ずといっていいほど、エビス神社が存在する。祭りがたは集落によって異なるが、大野では旧十月十日にエビス祭りを行い、昔は戸主だけであったものを、昨年から家族総出のものに変わった。この日は、エビス様に刺身、御神酒を供え、漁港の倉庫で盛大に祝う。本村では旧二月十八日に二月祭りと称するエビス祭りを行う。この日は豊漁祭も兼ねていて、本村の三大祭りの一つである。また、この日と旧九月二十八日の九月祭（豊漁祭）、正月三日には坊さまを呼んで、船霊様に祈禱してもらう。

エビス様の神体は、ほとんどが網に何度もかかってきた石やサンゴ礁を祭っており、そのホコラは、必ず海の方を向いて建てられている。

4 年中行事

(1) 漁泊の船祝い

正月二日に行われる漁泊の盛大な祭り。この日、スズリブタ（魚の料理や菓子・果物などの御馳走を膳に盛ったもの）を、ベンザシ

は五膳、船主は二膳、丸木持ちは一膳、公民館に持ち寄って、式を行う。船霊様には船主が二日の朝、飾り餅、焼酎二瓶、米二合をハタゴとよばれるマスに入れ、赤飯、刺身（九片、又は十三片）を皿に二皿、これに塩を船に持って行き、船霊様を祭る。式が始まると、祝賀歌を歌い、参加者は御神酒（焼酎）を飲み、祝宴になる。祝賀歌は「つなざらえ」「祝年」「楳歌」の三つからなるが、現在は「つなざらえ」「楳歌」しか歌われない。

(2) 住吉、浜之町の船祝い

正月一日に浦祝いを兼ねた、ベンザシ祝いが行われ、この時、ベンザシ交代がある。新しくベンザシになったものは、坊さまからお経をちょうだいし、洗米をもらう。この時、家の上座には、オマンガラ（絵マンガラと書マンガラがある）を床の間にかけ、坊さまのお経をちょうだいするが、オマンガラには仏像と同じ威力があると考えられ、お経は「南無妙法蓮華経」が中心である。

正月二日には船祝いがあり、この日、船主はイザケといって、赤飯を炊いて刺身を作り、皿に塩と里芋を盛って床の間に飾る。船霊様にも御神酒を供える。やがて祝宴に入るが、この時、祝賀歌として「つなざらえ」「じよ」が歌われる。

その他、漁村では、大漁の時の浦祭り（イザケともいう）、六月灯や船おろしの祝いなどが行われている。

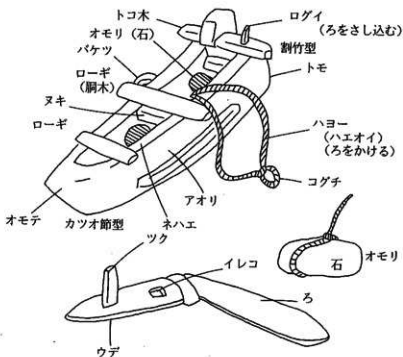
5 船の名称

島間の港で丸木舟を見かけた。現在はその数が減少し、ほとんど見られないが、その概要と名称を記しておく。

ヤクタネ五葉でできている。丸木をくり抜いた舟。

四、種子島の漁業と現状

種子島は、かつて、その恵まれた天然資源によって、盛んに漁業が行われていた。しかし、近年になって、沖合の魚量が減り、漁業人口も減少してきている。そのような状況の中で、南種子町よりやや早く近代化を漁業に採り入れた西之表市が、その漁業生産高を著



実に伸ばしてきていることは、注目すべきことである。

全国的に捕る漁業から育てる漁業へと変わりつつある中で、種子島のこれからの漁業もまた、養殖を考えずにはおれないであろう。そこから生まれる漁業文化は、これまでの漁業文化と相い交えることができるであろうか。

近代化を押し進める北部と在来の漁法が多く残る南部とでは、そこに漁業信仰等においても差異が生じ、やがては、南北で、異なる二つの漁業文化が生まれてくるかも知れない。

伝承者

- 一、榎本貞彦 (M36・4・16 83才)
西之表市現和下ノ町六一八三番地
- 二、山野孫七 (T7 68才)
西之表市庄司浦七〇三番地
- 三、川原マルヤ (T10 65才)
西之表市川脇
- 四、江口良光 (S6 55才)
西之表市大野
- 五、長田実 (S2・10・5)
南種子町平山浜田
- 六、山野子エ (M34・1・20)
南種子町平山浜田
- 七、宮里重治 (M39・3・28)
南種子町寒水六三九一二
- 八、小川親義 (T11・2・16 64才)
南種子町西之八二一三

- 九、牛野 春 芳 (T 7・3・15 68才)
南種子町島間牛野
- 一〇、河 東 不 凡
南種子町島間上方同方
- 一一、久保田 ウラ
南種子町島間上方
- 一二、磯 川 次 夫 (S 9・3・15 52才)
西之表市瀬泊
- 一三、船 本 ツヨシ (T 8 67才)
西之表市瀬泊
- 一四、伊 藤 安 年 (S 2・4・7 59才)
西之表市国上三四四
- 一五、江 口 安 雄 (S 16・11・5 45才)
西之表市野木之平三八六四
- 一六、渡 トヨノリ
西之表市住吉浜之町
- 一七、浦添孫七
西之表市

潜水漁法と採取漁法

井出 涉

一、はじめに

種子島は、沖合を黒潮が流れ、沿岸は、透明な岩礁地帯を形成している。潜水漁法は、古代より幾つかの文献に記述が見られるように古くから行われている原始的漁法である。

簡単な道具で手軽に漁ができる反面、魚介類の生態、漁場の様子、海底の地形などに関し、深い知識と経験が要求される特殊な漁法であると言えよう。逆に、採取漁法は、磯や浜などで海藻や貝類を採取し、特に技術的にむずかしくなく、誰でもできる漁法である。

今回は、種子島北部地域（現在の西之表市）を東海岸、西海岸に大きく分けた。東海岸側の集落として、沖ヶ浜田、湊、庄司浦の三ヶ所を、西海岸側の集落として、池田、上能野、下能野、蘆泊の四ヶ所を調査した。本稿では、これらの集落において、潜水漁法及び採取漁法はどのように展開されているだろうか。その実態を明らかにし、特色を述べてみたいと思う。

さらに、東海岸側の集落と西海岸側の集落の比較についても触れてみることにする。（現地で使われている魚名は、カタカナで表記し、その和名は（ ）の中にひらがなで表記する。ただし現地で使っている魚名が和名の場合にはカタカナ表記にする。また旧暦は月の

上に旧をつけ、新暦はそのまま月を表記する。）

二、概 要

今回、調査した集落において、潜水漁法だけに従事している集団はない。潜水漁法以外にも、網漁法、釣漁法などを行っている。

また各集落においても集落の形態は多少違う。漁業を生業の中心としている集落、半農半漁の形態をとる集落等さまざまであり、共通して言えることは、海に面しており、程度の差は多少あるにせよ何らかの形で漁業を営む人々が居住している点である。無論、海と一口に言っても、潮流、潮の干満、地形と言った自然的条件はもちろん、集落により歴史的条件、社会組織等多少違いはあると思われる。

本来ならば、こうした点を踏まえた上でテーマを明らかにしなくてはならないが、筆者の力量不足により、できずに終わった。この文で述べられていることは、単に外面をなぞったに過ぎないことを一言お断りさせていただきたい。種子島では、海に潜ることをスムと言い、潜る人をスミ（潜水）手と呼ぶ。

海に潜って魚を捕ることを、スモグリ（庄司浦、下能野、田之脇）、はだかもぐり、スミズキ（池田）、スミカタ（下能野）などと呼ぶ。

次に各集落の歴史について、簡単に触れると、昔、沖ヶ浜田、能野、湊は製塩を営んだ塩屋集落であり、塩屋敷を有し、現在でも一部共有地として残っている（註1）。湊集落では、大正年間に共有地を個人に配分したが、海岸地帯の松林、村の背後の丘陵にある耕作地帯を、海岸から吹くコチの風（東風）から守るタテヤマと呼ば

れる山林を共有地として残している。

上能野では共有地として、二町歩程の山林があり、集落で所有管理している。この山林の株の権利は親ゆずり（家の跡とり）以外の人には株を与えられず、分株することはなかった。なお、共有地の株の権利と漁業権について、直接関係はしていない。漁業権は組合員であれば平等である。ただし、組合員の資格については、昔は各集落ごとに多少の違いがあった。

組合に入ることを浦はいりと呼び、地先漁場で採取するテングサ、ナガラメ（とこぶし）、フノリ等の採取においては組合員の資格の有無が問題となる。これについては改めて述べてみたい。池田、瀬泊、庄司浦集落は漁撈中心の浦であった。現在は、西之表漁業協同組合として組織されている。

テーマとは少しはずれたが、以上を念頭において本論を述べることにする。

三、刺突漁法

今回の調査地域において、竹筒の先に突針をつけた漁具、竹筒の先に鉗をつけた漁具、この漁具については、魚に刺した瞬間に鉗だけはずれる構造、鉗が固定されている構造の二種類がある。また、先端が折れ曲がっている形をした鉤と呼ばれる漁具が使用されている。

このうち、鉗をつけた漁具は、水面上よりの突きにおいて使用され、その他は、水中の魚を対象とした漁具である。これら三つの漁具について、それぞれ、述べることにする。

1 オーツキを使用した漁法

竹筒の先端に鉄製の突針をつけた漁具を使用する漁法。

① 時期、服装

海に潜る際の服装としては、マワシと呼ばれる六尺程の白い布をしめる。昔、フカに追われた時、フカは自分の身体より小さいものにしかかみつかないという言い伝えがあり、万が一の時は、マワシをはずして、フカ除けにしたという。また、白は海中において目立つためであるとも言われる。時期であるが、前述したように、マワシをしめるだけの裸体であり、海があたたかく、潜りやすい季節を選んだ。

四月頃から九月頃にかけてであり、冬場は海が冷たいので潜ることはしない。現在はウエットスーツと呼ばれる潜水着の普及により、冬場でも、海に潜る人がいる。しかしながら、刺突漁法を専門にやる人はおらず、網漁法、釣漁法などをやり、一年を通して刺突漁法のみを行う時期は特に定まっていない。半農半漁の集落では、暇を見て突きに行き、池田、瀬泊といった漁業を中心とした集落においても、主流にはなり得なかった。

一例として、池田集落を挙げると、旧九月十五夜頃から旧二月までは、刺し網によるザコ（きびなご）捕り、そして旧四月まではイセエビ、そして五月から七月にかけては馬毛島に住居をかまえ、トビウオ漁を中心にする。これが、大体の概観と言えよう。

そして、刺突漁法は、この周期の中で、夏という季節においてなされた。他の漁法のように、思いがけない大漁も望めず、規模も大きくない個人的な強い漁法であるとも言えよう。

② 漁場

瀬魚を中心にして捕るため、魚のいる場所は決まっており、集落

に面した地先の海を漁場としている。瀬泊、池田、能野といった西海岸集落は、馬毛島沿岸を漁場としている。

馬毛島は西之表港から西方一二島の三角形の小島である。宝曆年間よりは池田浦、洲之崎浦、豊泊浦の三ヶ浦の漁業基地でもあった。後に住吉が入り、能野も加入している。潜水漁法は冒頭でも述べたように海底の地形、潮流、魚の生態等深い知識を要求され、海上で船の位置を知る山アテと同じように、海底においても、潮には必ず名前がつけられた。また、魚が集まっている場所をヤと呼び、(田之脇、池田、下能野)又はマブシとも呼ぶ。(庄司浦、池田、能野)。

岩と岩の間にはさまれた逃げ場のない所をヤツキ(沖ヶ浜田)と呼ぶが、これは「ヤナツキ」よりツキはオーツキのツキで、魚を追いつめる場所を意味するのではなからうか。網を入れやすい、海底が比較的平板な地形をアジロ(網代)と呼ぶ。(庄司浦、下能野)。なお、アジロをサカナの通り道、サカナがたくさん捕れる場所とも言う。(池田)。魚を待ち伏せする場所をアミバと言う。(庄司浦)。この中で、マブシは間伏とも書き、「分類山村語彙」によれば、鹿、猪の逃げて来るのを待ち受ける一場の場所であり、漁業においても使われる点で興味深い。

潜水漁法においては、こうした場所を中心として潜る。また、魚種により、陸近くまで来遊したり、水深の違いにより魚も違った。ハチキ(ぶだい)は五尋から七、八尋、クレウオ(めじな)は三、四尋等、ほんの一例に過ぎず、水温、潮流、湖の干満、季節で魚の条件も変わる。次に捕れる魚名について列記しておく。

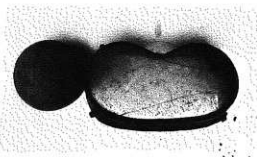
ハチキ(ぶだい)、モハミ(ぶだい)、コウメ(ひらそうだがつお)、クレウオ、ヒサノイオ(いしだい)、アラ、メバル、コウコダ

イ(せとだい)、グチガイ(こんすい)、クロダイ、イセエビ、ヒタリマキ(たかのはだい)、アカジョウ(うめいろもどき)、シツオが主であり、潜って、出会った魚はすべて対象とされた。

人により個人差はあるが、一〇尋まで潜ることができ、魚種もその水深までに生息しているものに限られた。どれだけ深くもぐることができるかという肉体的条件の要素が大きく、深く潜れる人程、余計捕ることができると言えよう。

③ 道具

オーツキはもちろん、眼鏡をつけて、海に潜る。眼鏡については、串を使用した漁法の項目で詳しく述べるので、ここでは、オーツキについて述べる。鉄製の突針を付けるが、突針には三ツ股、二ツ股、一ツ股の三種類がある。



① メガネ (一ツガン)
(長山清吉氏所有)
淡村落にて12.8寸、縦の長さ最大幅6.7寸、最
小幅5.9寸、ゴムの直径6寸、枠は真鍮
できている。

西之表のジロウ鍛冶は有名である。突針の先端には、魚を突いた時、抜けないように返しがついており、この部分はマチ(沖ヶ浜田、庄司浦、下能野)、カギ(渡)、マタ(池田)と呼ばれるが、作りはすべて同じである。

昔は、三ツ股の突針で突いたが、集落により多少の時間的ずれはあるが、大体におい

て、終戦後ぐらいいから二ツ股の突針に変わり、現在は二ツ股の突針がほとんど使用されている。三ツ股の突針と二ツ股の突針の違いについて、誰もが言うには、三ツ股の突針で魚を突く際、真中の一本が魚にあたり、魚がころぶ（逃げる）ことがあり、当たりが悪い。二ツ股の突針で、魚を突いた際、通りが良く、一本分余計に力を入れなくて突くし、傷も少なくてすむ。

一ツ股の突針は、俗にイッポンゴ（一本こ）と呼ばれ、岩穴にいる魚を突く際、使用した。一本こは、魚の急所に突いた場合は別として、その他の部分だと、魚が反転したりして、突かれた肉を返しに押し、逃げられることがあった。昔、沖繩の人々が使っていたのを見たことがあると古老の一人が話してくれた。（沖ヶ浜田）。

昔は、手づきと呼ばれ、右手に竹筒を握り、手の力だけで魚を突いた。現在は、竹筒の柄の部分にゴム紐を通し、魚を突いた瞬間、ゴム紐を離し、突く。手づきに比べ、突く速度が早いという利点がある。魚を突きそこねると先端の突針が、岩礁等に当たり、つぶれて、使いものにならなくなり、そのたびに、注文するが、金も結構かかり、突く際、そうしたことも頭に入れ、慎重さを要した。

オーツキは構造的には同じであるが、竹筒の長さ、突針の太さ、大きさ、返し間の幅等、違いがある。対象とする魚種や海底の地形等により、使い分け、それに個人の使いやすさといった好みがあり、それぞれ、個人が注文した。

突いた魚は、腰の部分にあたっているマワシの結び目にクシと呼ばれる四、五寸程のヘラ状の竹をさしておき、もう一方には、唐竹や桐の木で作った海にうかぶ、うけを作り、両方を棕櫚縄で五尋から七尋ぐらいの間隔を置いてつなぐ。捕れた魚は、おさから口に通過してつなぐ。逆に、口から通すと魚がさかしま（さかさま）にな

り、潮の流れの抵抗があるので、潜る際、負担になり、おさから口に通す方が少しでも動きやすくする。これらは、すべて自分で製作し、うけの長さ、クシの形状も人により違う。

またクシを使わず、直接棕櫚縄を、マワシの結び目に結び、うけだけを使う人もいる。棕櫚縄は棕櫚の木の子の繊維をとり作るが、水に浮くためであり、他の縄だと、沈んで、岩礁に引っかかりやすい。時には動きがとれなくなり、身の危険にもなる。うけは、網漁の際使用されるアバと呼ばれる合成樹脂でも代用されている。

④ 方 法

②で述べた漁場を中心にして潜る。主に魚を見つけ、追いかけて突く場合と、魚を待ち伏せる場合があり、さらに追いこんで、逃げ場をなくした魚を突く場合等さまざまである。潜る際、東海岸集落においては、個人を単位とするが、時には、二、三人連れだっている。西海岸集落の上能野においては、個人単位でとるよりも、すみづきがいしやと呼ばれる五、六人の集団で潜り、共同で魚を捕った。馬毛島沿岸を漁場とし、飛魚漁を終えた後、本格的に行う。

上能野においては、こうした組は二組から三組ぐらいいあった。組のリーダーはすみ頭と呼ばれ、指揮から漁獲物の売買、会計を扱った。船で出漁し、船には、魚の住むヤの地形、魚種により、オーツキを使い分けた。そのため、船には、突針の太さ、大きさ、竹筒の長さが違うものを十本ぐらいい積みこんでいる。捕れた魚は西之表に水揚げし、得た利益は全員平等に分配した。

主な魚種として、アラ、イシダイ、モハミ（ぶだい）、クロダイ等があげられる。場所については、仲間以外に口外することなく、同じ漁師から「今日はいい魚がとれたみたいだけど、どこで捕ったか。」と聞かれても、マブシで捕ったと答えるにとどめ、相手も無

理にそれ以上聞くことはしない。海に潜って、魚を刺突する以外にも、陸上からオツキを使用することもあった。

津葉落においては、昔は、岩の上から突く程、魚影が濃かった。池田集落では、セダチといって、潮に立って突くことから由来する漁法があった。潮に立ち、柄の長さ三尋の三ツ股のオツキで、来遊したボラ、ハチキ(ぶだい)を突いた。突く場所は大体決まっていた。

漁法と関連するものとして、潮の干満も重要である。海に潜る際、必ず、潮の流れ、潮の干満を見て入る。種子島では、潮が引くことをシオトキ、潮が満ちることをシオミチと呼び、干潮で潮がこれ以上引かないことをヒイズマリと呼ぶ。潮が引きはじめると、魚は、沖合の方に一ヶ所に固まっており、満潮時は陸近くまで来遊し、バラバラに散乱している。

タコなどは、干潮、満潮用のタコ穴をそれぞれもっている。そのため、潮時を見て、魚の生息している場所に潜る。また、潮が引けば、満ちている時に比べそれだけ浅くなるため、普段、潜ることができない場所に潜ることができるので、引き潮時を見計り潜りに行くこともある。また、漁場によっては潮の流れが速く、危険な箇所もある。

馬毛島周辺には、何ヶ所か潮がよくむ所があり、好漁場となっている。そうした場所は、それぞれ名前がつけられている。一例を挙げると、クソノ一(馬毛島下之岬から一里ぐらい浅くなっている)。馬毛島沿岸で、一番潮がよくとむとされているマゴノウラ、南端の折瀬、抗瀬等がある。

クソノ一は、普段、潮の流れが早く、近寄れないが、月の旧九日、旧十日、旧十一日及び、旧二十三日、旧二十四日、旧二十五日

の合計六日間だけは、潮がよくむ時間が長くなり、潜ることができ。他に、潜る際危険なこととして、日により水温が変わり、また急に冷たくなる場所がある。

また、裸体であるので、イラ、セイラと呼ぶプランクトンの一種が身体について、かゆくることがある。グングウ(こしんずい)、アワノイオ(和名不詳)、ナベフタ(えいの一種)のけんに刺されると痛く、人によっては、寝こむこともある。現在、ウェットスーツの普及により、長時間潜ることができるようになった反面、職業病に悩まされる人もいる。昔は、自分の肉体の限界がきたら潮を引いて、海から上がり、身体を休め、決して無理はしなかった。

2 カケバリを使用した漁法

カケバリは鉄製で、先端が湾曲してかき形になっており、魚を引つけてとる漁具であり、オツキを使用した漁法に比べ、攻撃的とは言えず、敏速な魚を捕るには不向きである。むしろ、逃げ場を失なった身動きのとれない魚を捕るのに使用される。魚を追い込んで、穴の中からひきずりだしたり、オツキでは突けない曲がりくねった岩穴に隠れた魚をとらえる。大きな魚には太いハリを、小魚には細いハリと言つ具合に、魚の大きさに応じて、使い分ける。主に魚の腹の下からハリを引つける。オツキ漁法の際、必ず、カケバリを携帯していく人も多い。

3 蛸を使用した漁法

蛸を使用する場合、船上からの刺突であるが、主にカメとりにおいてみられる。蛸を使用する魚は赤魚、黒魚の二種類であり、ここではそれぞれの魚ごとに述べてみる。

① 赤亀とリ

クリ舟に二人のり、出漁する。時期は四月から五月にかけて、沖合五〇〇呎、水深一五、一六尋ぐらゐの海域で、亀が海面に姿を現した一瞬を狙ひ、船上から鉋を、亀の尻に目にかけて投げる。

鉋は刺さった瞬間、柄からはずれ、五尋ぐらゐの棕櫚縄で結ばれ、亀が弱った頃、船上に引き上げる。亀肉は食用として、とても美味で、刺身にしたり、湯がいた後、生葉、ねぎを入れ、味噌と油で炒め、砂糖を入れて味を整え、食べる。亀肉は集落の人々にも少しずつ分けた。(澳)。

② 黒亀とリ

黒亀は鉋で突くよりも、スミ(潜水)手が亀を網に追い込んでとる。庄司浦で聞き書きしたものを記す。

季節は五月から九月にかけてであり、陸の満潮時概五〇〇呎から七〇〇呎、水深一〇尋から一五尋程の海域であり、クロガメがいる場所は大体決まっている。網を使用するため、アジロを選び、そうした場所、五、六ヶ所を順々に見回る。一日で、日の出前と日没前の二回、満潮時を見計らい、出漁する。クロガメは満潮の時、陸近くまで餌を求めて来るという。

四丁櫓もしくは、五丁櫓の船に六、七人乗り込み、別に、スミテは六人いる。クロガメが、海面に息づくに浮上したのを確認してから網をうちはじめ、網の目は一尺目、高さ五、六尋、長さ七〇尋であり、網を海に入れるまでは、カメに気配をさせられないよう、合図は、すべて手でする。

最初に、カメを見つけた人が、その場所を指差す。一人だと見まぢがえる場合が多いので、何人かが、確認してから網を入れるのが原則であるが、経験豊かな人が確認した場合は、そのかぎりではな

い。

まず、カメを発見すると、二艘の船が並んで、網をカメの行手をさえぎるようにして、V字型にうつ。そして、船上から、石を投げて、カメを網に追い込む。船を指揮する船頭は、ともがしら、おもてがしらと呼ばれる。

一方、網の周囲に、スミテがおり、経験豊かで腕がたつものの際に、フクラツミ、マガリ、テサキと呼ばれる人々が二人ずつ、計六人待機しており、スミテを指揮する責任者は別に、トウジリと呼ばれる。カメは追い込まれ、網にからまった時に、一番近くにいるスミテが、ツリと呼ばれる長さ二〇呎程で、先端が湾曲したカギ状のもので、カメの後足をねらってツリを打ち込む。ツリにはヨマが付いており、スミテの合図で、船に引き上げる。

この際、スミテは網にからまったカメと格闘せねばならず、時によくと、スミテ自身、網にからまり、命を落とす危険もあった。カメは大抵、フクラツミが待機している場所に追い込まれ、テサキの場所にはめったに来なかった。クロガメとリは船とスミテによる共同作業であり、気の合った仲間同士、組んで出漁する。

亀肉の中で、一番上等とされる首の肉は、カシラミと呼ばれ、ツリを打ち込んだ者に、優先的に与えられる。亀肉の配分には、ちからまえがあり、スミテは三人前、ともまわり、おもてまわりは余分にもらえ、船は二人前、網は三反で一人前、(庄司浦においては、網は一人一反もっている)カメとリに行かない人も、網だけは出したという。

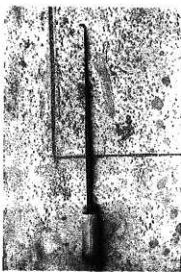
カメとリは、集落の地先の海に亀が来遊するかどうかで、とる集落、とらない集落があり、わざわざ、カメを追い求めてとりに行くことはしない。またカメとリは簡売にならず、亀肉が美味なるが故

に、捕るだけである。沖ヶ浜田の浜には、アカガメが卵を生みにくるので、その卵を捕って食べる人もいた。

4 串を使用した漁法

代表的なものとしてトコブシ採りがある。種子島ではトコブシをナガラメと呼び、以下ナガラメと記す。

ナガラメは、海岸から、五〇センチから五〇〇センチの海域に生育している。海底の岩の下にくっついており、岩を引き起こし、岩とナガラメの間に、クシをさしこんで根のようにして、引き離す。ク



② クシ(串)
沖ヶ浜田村落(沖田善三氏所有)
全長54 cm 、刃の部分は鉄製長さ35 cm 、柄はマツの木、柄の直径2.8 cm 、先端の横の長さ1.9 cm 、厚み0.2 cm

シの刃は、ナガラメの大きさにより使い分け、刃の長さの違うクシを何種類ももっており、場に応じて使い分けた。ナガラメ採りは、主に男性が潜って採る。個人単位で採るが、ナガラメの採れ方が、芳しくない時は、仲間一、三人と組んで、一人では引き起こせないような大きな岩を共同でおこし、採りに行くこともあった。

ナガラメ採りは、東海岸の集落では、陸から泳いで、採りに行くが、馬毛島周辺では、ナガラメ採りの際、船を出して、海に船を下

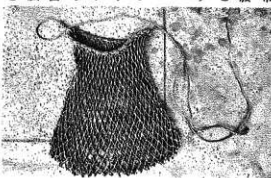
ろし、潜って採る。引き潮時を見計い、潮が満ちるまで採った。東海岸の集落では、昔は禁漁期がなく、海がたたたく入りやすい時期に潜っていた。しかしながら、馬毛島周辺では、採取する時期を制限する口明けがあり、口明けの日は、馬毛島の共同漁業権をもつ各集落の漁業組合長が、その年の状況により、話し合いでとり決めた。口明けに対し、期間が終了することを口がつかまると言う。

ナガラメのとれる期間は五月から九月にかけてである。現在は、西之表市漁業協同組合が、資源保護上の立場から、九月一日より、四月三十日まで禁漁期としている。ナガラメ採りに行く服装は、刺

突漁法同様、六尺の白い布製のマワシ一つであり、腰の結び目に、クシをさしこみ、ナガラメを入れるククリと呼ばれる袋をつけて、潜る。

ククリは、昔は、棕櫚の繊維の縄で編んだ。ククリには、ナガラメの他にウニ、エビ、ミナ(巻貝)なども入れる。伸縮性に富み、物を入れる程、底が広がり、七、八センチ入ることができる。また、水中に潜る際の眼鏡は、昔は、二眼であり、自分で作製していた。眼鏡の枠は樟の木で作り、その中に、ガラスをはめこんだだけの簡単なものであった。

その後、緑の材質が木製から真鍮に変わり、昭和になると、構造



③ ククリ 沖ヶ浜田(沖田善三氏所有)
高さ43 cm 、幅30 cm 、ひもの長さ90 cm ×2本

そのものが二眼から一眼へと変わった。一眼は、顔の上半部を覆い、使用する人の顔の輪郭、骨格に合わせて作り、空気袋と称する丸いゴムマリをつけており、潜る程、気圧の関係で、一眼の中に、ゴムマリの空気が入り、マリは逆に、しばんでいく。深く潜る人は、マリをもう一つ余分につけた。

一眼は二眼に比べ、目の部分が、気密性に優れている。二眼使用時は、二、三層の水深はともかく、それ以上になると、気圧の関係上、目がすぼみ、みにくくなるが、一眼だと、かなり深くまで潜ることができ、効率が良い。一眼は、西之表にトタンで作る職人がおり、そこへ行き作ってもらう。現在は、ゴム製の一眼の眼鏡が出回っており、手軽に入手できる。ナガラメ採りは、生息している場所は決まっており、各自、自分の秘密の場所を持ち、他人には口外しない。潜って採る点で、息の長い人、すなわち、長時間もぐれる人程、採れる量も多く、刺突漁法に比べると、ある一定の技術をもてば、運動性のある魚と違い、ナガラメは固定しているので、一定の水揚げは可能と言える。採れたナガラメは、塩漬けにして自家用の食料として貯蔵したり、後に、中国料理の材料となる名産として、仲買人と売買する時期もあった。現在は、漁協を通じ、出荷している。

四、採取漁法

1 テングサ捕り

テングサも、ナガラメ同様、馬毛島周辺では、口明けがあり、その期間しかとることができない。馬毛島周辺では、女性が、テングサをとりに、海に潜ることがある。テングサは手でもぎり、天日で乾燥させた後、仲買人と売買する。馬毛島周辺でとれたテングサ

は、直接、西之表の市場で人札する。

2 その他

岩についたフノリを手でとったり、また、貝類が豊富にあり、海岸に出て、女、子供が採りにいく。アナゴ（ナガラメに似ているが、小さく、陸近くにいる）、アカガイ、ミナ（巻貝）があり、ミナにも形、色等でいろいろな呼び名があり、一例として、コロビ（小型のミナ）、ツメミナ（爪の形をしたミナ）、チョウチンコウ（法螺貝に似たミナ）、アカミナ、タカタロウ等がみられる。（漢）。昔、バカと呼ばれるタニシに似た貝が生息し、船上から網でとったこともあるらしい。（沖ヶ浜田）。

海藻として、ミル、マツバミルも、はえており、湯がいて、酢味噌で食べるとおいしい。

五、信仰

海という自然を相手に生業を営む人々には陸で生活する人々とは違った、独自の信仰が見られる。今回調査した村々には、必ず、恵比須神社がおかれ、弁済使と呼ばれる役員が一年交代で、その世話をする。潜水漁法、それ自体、何か特別な信仰があるかと言っと、何も聞かれない。潜水漁法で捕れた魚を、恵比須様に供えたりすることはしない。飛魚漁の際、ヤクブンと呼ばれる役員があり、その者は、恵比須神社の管理、世話、祭りの準備等をし、その役目に対し、二人前もろう。

そして、捕れた飛魚は必ず、神社に供える。（上能野）。海に潜る際、折ったり、特別な事はせず、不漁だからと言って、特別なもの

はしない。釣漁、網漁に比べ、信仰に深くない。無論、今回の調査では、潜水漁法だけをする人々はおらず、他の漁法もしており、漁民一般に見られる信仰、俗信は幾つか聞かれた。

黒不浄は、人の死に対する忌であるが、黒不浄の際、漁には行かない。各集落の聞き書きを記す。

自分の子供、親兄弟の死では、三ヶ月間、海に入らない。自分の縁故関係は二週間、海に入らない。(沖ヶ浜田)。黒不浄はあり、一年間、門木を立てない。(渡)。黒日と言ひ、三日間から一週間程度出漁しない。(浦田)。身内の人が、死んだ時、ミノカ(二十一日間)過ぎないと、海に出ない。(上蔭野)。

その他、俗信としては、つるべ(船に備えてある掃除用のバケツ)を常にたてておけと言われ、決して、ころばしてはいけない。これは、ころぶとマンが悪いといって、船が転覆するのを戒しめる意味である。出漁の際、しるかけ飯を食べてはいけない。流れ仏や葬式の夢は縁起が良いとされ、満潮の夢を見ると、大漁につながる。逆に、干潮の夢を見ると、不漁になると言われる。初魚上げと言って、今年、初めて捕れた魚を船霊様に供える際も、満潮の時を選んでするように、満潮は大漁と関係が深いとされている。

網漁法、釣漁法というのは自分の目には、直接見ることができない魚を対象とし、運、不運の要素も強い。これに反し、潜る漁法は、自分の目で魚をとらえ、技術的要素がかなり強く、個人的活動が主であり、自分の実力が優先される攻撃的な漁法であり、魚が来るのを待つといった要素は少ない。こうした漁法の違いが、心意、そして信仰にも結びつくかもしれないが、これは、あくまで推論であり、もっと細かに検討する必要がある。

六、交 易

この章では、捕れた魚をどうするか、各集落ごとに聞き書きしたものを記す。

1 渡 集 落

昔、捕れた魚は、あくまで、自家用の食料として、保存・加工され、売りに行くことはほとんどなかった。たくさん捕れた時は、隣近所に配った。たまに、雑魚を、馬に糞をつけ、奥、中目まで売りに行くことがあった。

2 庄司浦集落

魚は、女性が、軍場、安納、近政、川氏、西保等の集落に売りに行った。

3 池 田 (西之表市の一町名)

戦前は、女性が主に、キビナゴ、イワシなどの小魚を売りに歩いた。漁協を通して出荷するよりも、売りに出た方が、儲けも大きい。城、桃園、今年川、竹鶴、小牧野等の集落に行く。

各集落の顔なじみを訪ねた。ニナイ棒(天秤棒)にニナイザルと呼ばれる孟宗竹で編んだ竹籠を吊し、魚を運搬した。物々交換も時々し、池田は畑地はあるが、田がないため米がとれず、米と魚の交換が主である。「ゼニがなしーもやー、米と変えてくれーや」と言いながら、売り歩いた。

4 上能野集落

女性が売りに出ることではなく、捕れた魚は、船で西之表港まで運搬し、おろしば（漁問屋）に直接売りに行った。

5 国 上（小字は寺之門にて）

寺之門は農業集落であり、浦田集落から女性が、ニナイ棒（天秤棒）に籠を掲げ、魚を売りに来る。売る際、一升拵で、魚を計ったという。

以上、事例をあげたが、何点か気づいたことを記す。まず、魚の行商は、女性がその担い手であり、男性が魚を捕り、女性が売り歩くようである。また、天秤棒で運搬するが、集落により、馬が飼育されていた村は、馬も使用された。背後の農村に売りに行き、自分の集落でとれない物との交換、特に米と魚といった、不足分を互いに補うことが目的といえよう。運搬については、頭上運搬により、魚を売りに行く姿も昔は見られたと聞いたが、昭和以前の話し（沖ヶ浜田）。

七、まとめ

次に、潜水漁法及び採取漁法について、特徴を記しておく。潜水漁法は、男性が行い、女性は、馬毛島沿岸でのテングサ採りのみ、行う。女性の役割として、魚の行商、また東海岸集落のように、農業もする村では、農作業にも従事している。また、東海岸集落では、潜水漁法では、個人で潜ることが主であるが、西海岸集落のように、すみづきがいしに代表されるような五、六人の集団による

共同作業の違いがみられる。

また、共同作業において、配分はすべて、平等であり、庄司浦集落において、魚を等分に切ることをタードリと呼び、二、三人で共同で魚を突く時、突いた人も突かない人も分け前は同じである。徹底した平等制に基づいている。こうした背景には、社会組織の面からのアプローチも必要であり、漁務組織の検討も必要である。漁務組織に限れば、漁業が生業の中心となる集落程、漁業組合員の資格、加入が困難である。

馬毛島沿岸を漁場とする上能野では、組合に加入する際、入株とあって、組合に金を払うが、いりびと（移住者）の場合、十年くらい奉公しなければ、昔は入れず、また、配分においても家の跡取りは一人前すぐもらえるが、次男以下は、分家独立して、三年過ぎねば、一人前もらえないという。組合員にならないと、テングサ、トコブシ、フノリ等の採取権は、もらえず、規則がうるさかった。

次に、魚介類の交易という面から比較すると、東海岸集落では、仲買人が来て、商品価値の高いナガラメ、テングサを売買し、西海岸集落のように、漁協の市場で入札することはしない。一つの推論として、現在のように、西之表市漁協として一括して組織される以前は、各集落ごとに、漁協が組織されており、漁協の規模も、西海岸側の方が大きく、扱う量も差がある。これは、消費地として、離集落があり、東町、西町という商工を営む町が近接し、しかも西之表港を控え、物質の集散が盛んで、早くから、漁業が商業という経済として重くみられ、魚介類の商品化が早く進んでいたのではなからうか。

また、馬毛島という好漁場が近くにあり、船による運搬も可能であり、交通の便も、格段に良い。池田、洲之崎、渡泊は、早くか

ら、漁業を中心に発展したが、東海岸集落は半農半漁の形態もみられ、魚介類を商品経済として重視することは、あまり考えていない。漁場の秘密性についても、東海岸集落では、誰もが知っており、そうしたものはないと聞かされた。

もっとも、東海岸側は、各集落が離れ、漁場も近接しておらず、馬毛島周辺のように、幾つもの集落が入り、共用していないため、漁業に対する意識の違いもあるかもしれない。

東海岸と西海岸の比較については、問題点の調査の結果を検討しながら述べるのが本来の形であるが、こうした形で終わり、結論が出せなかったのは筆者の怠慢さである。ただ、年末、年始の多忙の中、色々話して下さった伝承者の方々のあたたかい心に接し、またいろんな民俗知識を得ることができたことは非常に幸いであり、ここに記して感謝する次第である。

(昭59・12・25―昭60・1・3調査)

注1、参考文献

- 『西之表市百年市』西之表市史編纂委員会(昭和四十六年発行)
 『日本産魚名大辞典』日本魚類学会編(昭和五十六年発行 三省堂)

釣り漁法

（二本釣り・イカ釣り・ホロ曳き・延縄）

鹿児島民具学会員 溝 辺 浩 司

一、はじめに

魚類を釣り上げて漁をする方法は、太古より網漁・突き漁などと共に、漁には欠かせない漁法の一つであった。四方を海に囲まれ、黒潮という大きな海流に洗われる種子島においては、なおさらそのことはいえるし、釣り漁法にさまざまなバリエーションがあるであろう。今回は、種子島の釣り漁法についてその種類、それぞれの釣り漁法の構造・方法・魚種・時期・変遷について、調査したが、その成果にもとづいて、東西海岸、および集落間の比較の上で考察していきたいと思う。

二、概 観

釣りの分類としては、一般に一本釣り、延縄に分けられるが、一本釣りにはホロ曳き、イカ釣りが主としてある。ここでは、純粋なナマリと針と糸だけの一本釣り、イカ釣り、ホロ曳き、そして延縄、その他に分類して述べたい。

概観すると、種子島では以上の釣り漁法を全集落で行っている。その他に、瀬釣りといって丘からの釣りや、シャクリ釣り、エサ曳

きといった種類がある。その釣り方においても集落間で相異がみられる。一本釣りでは、集落によってサオで釣る方法、手だけで釣る方法とがあり、両方とも行う所もある。延縄にしても、船からたらず方法、両端におもりをつけて沈める方法など相異がある。ただし、ホロ曳きは全集落同じである。

釣れる時期・魚種であるが、東海岸と西海岸では潮の流れの関係上、相異がみられる。また、釣りの方法により対象とする魚種が違ふため、時期は異なるようである。全集落を通じて、釣る期間は一年中のようなものである。

次に変遷をみてみると、一本釣りを例にとれば、瀬泊のようにサオ釣りから手釣りに変化した所もあれば、浜之町のようにその逆の場合もある。概して、東海岸より西海岸の方が釣具の変遷も早いようであるし、釣り漁自体も盛んに行われているようである。

三、本 論

1 種 類

種子島で現在、あるいはかつて行われていた釣り漁法をみてみると、先に述べた通り、一本釣り、中でも一般的な、一本糸におもりと鉤状の針がついたサオで釣るもの、餌籠がついたイカ釣り、ニワトリなどの羽をつけ二本針がついた竿によるホロ曳きあげられる。さらに延縄があるが、これは底延縄と浮延縄がある。これらの中で、一本釣り、イカ釣り、ホロ曳き、底延縄は全集落にあるようである。もともと浅川の場合、昭和三十年頃からやらなくなった。また、浮延縄の場合、湊と庄司浦には確認できたが、他集落では確認できなかった。

前にあげた釣り漁法の他に、最近行うようになったようだが、浜之町のシャクリ釣り、湊の餌引き、浅川の丘から釣る瀬釣り（サオ釣りの一種）がある。種子島では以上述べた他に、天秤釣りといって二又の木の枝の又の部分におもり、枝の両端に糸と針をつけてサバなどを釣る漁法があると聞き知っていたのであるが、今回の調査では確認できなかった。釣り漁法の種類は、東西海岸ではほぼ同じである。

2 漁法とその特色

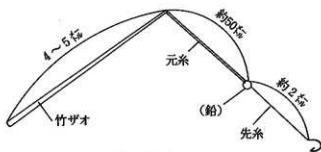
(1) 一本釣り

① 構造

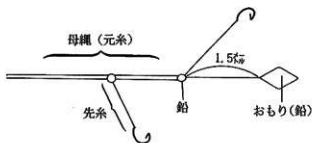
ここでは、餌擬を使わない一本釣り（図①）について述べたい。構造としてはサオ釣りか手釣りかの違いがあるが、先に述べたように、サオから手へ変化した集落もあれば、手からサオへと変化した集落もある。

サオ釣りの場合、四尺から六尺ぐらいの竹のサオに五〇斤の麻の母繩（ママヅナ）、その先に二尺ぐらいのテグス、先にかえし（マチ）のついた針がついている。これは浜之町の浜川与八氏（76）の場合であるが、田之脇の例では四尺間隔におもりをつけている。現在ではほとんどの集落で手釣りが行われており、サオ釣りは田之脇のみで行っている。餌としては、田之脇の脇田誠氏（44）によるとサバ・イカ・カツオなどの切り身だそうである。

手釣りの場合、やはりサオ釣り同様に母繩とテグスががついているが、先端が二本になっており、一本に針、もう一本に鉛のおもりがついている。糸は木製の糸巻に巻かれている。今では、針が三本から四本ついている場合もある。以上は、湊の大河政雄氏（63）の場



〔サオ釣り〕



〔手釣り〕

図① 一本釣りの構造

合であるが、大河氏によれば、餌はイカの切り身を三切れ、サンマの切り身を一切れで、それを一本の針につけるといふことであつた。

② 方法

釣る方法についても、サオ釣りと手釣りに分けて述べたい。

まず、サオ釣りの場合であるが、田之脇の脇田氏の手例を紹介しよう。港を出て魚がいる瀬(ソネ)に近づくと、船を走らせながらサオを船の真下に深さを測って沈め、サオの感触で魚がかかったことがわかるとサツと釣り上げる。田之脇ではサオ釣り・手釣りの両方行うが、手釣りの方がよく行われており、サオ釣りは、キビナゴ漁だけに行われているようである。しかし、浜之町の場合は、サオ釣り一本であつた。

次に手釣りの場合だが、碇を下ろし船を止めてから糸をたれて釣る方法と、船を走らせながら糸をたれて釣る方法の二種類あるようだ。前者は湊・洲之崎で、後者は浜之町・田之脇で行われている。手釣りの場合、サオ釣りと違い、おもりがついて針が複数ついているようだ。

③ 釣れる魚種

一本釣りで主に釣る魚種について、田之脇の脇田氏によると、延縄漁の時と同じソコイオ(底魚)で、アラ・メバル・タイ・アカジヨウなどだそうである。また、西海岸の洲之崎では、田原親義氏(77)によると、やはりソコイオでアカバラ・ヒメダイ・チビキなどで、東海岸と魚種が異なるが、ソコイオである点は同じである。

④ 時期

一本釣りが行われるのは、全集落とも一年中であるが、廻遊魚など魚によって釣れる時期が決まっている場合があるので、最盛期と

低調期がある。また、一日中で朝行くか、夜行くかの違いもある。

まず、東海岸の湊の例をみてみよう。大河氏によれば、最盛期は十月から翌年三・四月頃で、特に四月はムギアラ・ムギソウジといつて愛のとれる頃に、アラ・ソウジが良く釣れるといふことである。これらの魚は南方からの廻遊魚(通り魚)であるそうである。また、漁は一日中行うが、瀬によって釣れる時が異なるようである。西海岸の浜之町の浜川氏によれば、ムロが釣れる六月、グジダイが釣れる十一月から十二月が最盛期といふことであつた。潮の流れの違いか、西と東では相異がみられる。

⑤ 変遷

釣り方の変遷については、サオ釣りが手釣りに変わる事例あり、逆の事例あり、継続して行われる事例ありで各集落で多様であるから、ここでは漁具の変遷についてみてみよう。

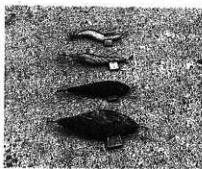
まず釣り針である。洲之崎の手例では、戦前まではジャンガネ(鋼鉄の針金)を町から買ってきて曲げてから火であぶって焼き、湯につけて冷やし、マチ(かえし)はたたいてヒラトウ(平頭)にしてヤスリで尖らせた。しかし今では、できたものを買うのが一般的である。

次に釣り糸である。一本釣りの糸は、長い元糸と細い先糸とに分けられるが、その両方の変遷を浅川の中山哲政氏(52)の話を中心に述べたい。元糸は昔は麻の糸を縫って作つたが、今では木綿である。先糸は今はナイロンであるが、昭和十八年頃までは山蚕の糸で作つた。山蚕の頭を半分つみ取り、中から繭を作る原料となるものが二本出ることからそれを酢酸につけ、両端を引きのばして糸にしたそうである。透明で強い糸だったそうである。

(2) イカ釣り

① 構造

イカ釣りは、イカヒキ・イカトリなどとも呼ばれる。構造としては、サオ釣りと手釣りがあって、糸に木綿の元糸、テグスの先糸がある点が一本釣りと同じだが、イカ釣りの場合、餌の代りに、エ



写真① イカ釣りの餌擬
(庄司浦 坂元嘉也氏(45)所有)
エビ型餌擬
焼餌付(ヤキ)

ビまたはクログダイなどの形をした、本体に十三本ぐらいたばねた針が二段付いている餌擬というものを用いる。餌擬には、エナメルのひもを巻いて作ったエビ型の餌擬、アマ木・クサ木などをけずって、それを焼いて作ったクログダイ型の焼餌付(ヤキともいう)、エビ型であるが木に布を巻いてある餌擬、布でなく色がぬってあるヌリと呼ばれる餌擬などの種類がある。漆では以上のもを全て用いているようだが、たいいの集落は、焼餌付がエナメル製のエビ型を用いているようである。

② 方法

方法は、先に述べた一本釣りとはほとんど同じである。田之脇を例にとってみよう。脇田氏によれば、月夜の晩に出漁し、船を走らせながら釣り糸を海に沈める。特に満ち潮の時行われるのが普通である。二時間から四時間ぐらいたつと、そろそろイカがかかってくる。かかるや否や船を止めて引き上げ、つかまえて船中の生け簀に

入れる。浜之町の場合、かかるのを待つ間、スモゴリ(素潜り)をしているそうである。

③ 釣れる魚種

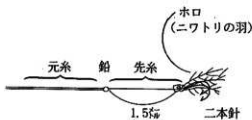
釣れる魚はもちろんイカであるが、イカにもいろんな種類がある。田之脇の事例では、水イカ(マイカ)・甲屋イカ・スルメイカなどがある。

④ 時期

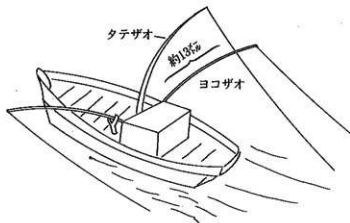
イカ釣りは、どの集落でも一年中行われているが、最盛期は東南海岸で違ふようである。東海岸の田之脇の事例では、十一月が最盛期である。脇田氏によれば、四月から五月がイカの産卵期で、五月か六月頃生まれたイカが大きくなるのが十一月だそうである。これに対して、西海岸の洲之崎では、田原氏によれば夏(四・五・六月)が最盛期ということであり、相異が見られる。潮流と関係があるかもしれない。

⑤ 変遷

ここでは、道具、特に餌擬の変遷について述べたい。東海岸では漆・庄司浦のように焼餌付と布製のエビ型餌擬、エナメル製のエビ型餌擬を同時に用いている。しかし、西海岸では、調査地すべてに変遷がみられるようである。洲之崎の事例では、田原氏によると、昭和初期まで焼餌付を



図② ホロ曳きの構造



図③



写真② ホロ曳きに使用する浮き
(庄司浦)
上から浮き板、ヒコーキ、板
元嘉也氏(45)製作による

使い、その後、桐の木に塗料をぬった又りを昭和四十年頃まで使い、最近ではタタミの縁をほぐした糸を、プラスチックの型に巻いて作った美しいエビ型館擬を用いている。西海岸が新しい型のものを用いているのに対し、東海岸は新しい型と古い型が同居しているのだ。

(3) ホロ曳き

① 構造

ホロ曳き(図②)はホロマギとも呼ばれている。構造はイカ釣りとはほぼ同じで、元糸、先糸があり、先糸の一五秒先に二本針が付いている。餌はなく擬餌としてニワトリがワシの脇の羽が針に付

いている。また、浮きとして船型をした浮板や、トビウオの形をしたヒコーキが元糸に付いている。おもりは元糸と先糸の間についている。

最近ではサオを二本ぐらい船に取り付けて曳く(図③)が、昔は船のトモのヌキに二本結びつけて曳いていたようだ。ホロ曳きはほとんどの集落で行われている。

② 方法

方法としては船を走らせて釣る。ニワトリやワシの羽(ホロ)が波でふるえ、魚がエサの小魚と間違え寄ってきて、針に引っかると魚の重みによって、浮板の場合は引っくり返るし、ヒコーキの場合は波しぶきを立てかかったことがわかる。東西両海岸で同じ方法が行われているようである。

③ 釣れる魚種

ホロ曳きで釣れる魚種についてであるが、西海岸の浜之町の上田定三氏(81)によると、海の上層を泳いでいる浮き魚が主で、アカバラ・サバ・カツオ・サワラなどである。サワラの場合、特に三本針を使用して釣ったというが、潮によって魚種が異なり、サワラがいる潮に限って特に三本針を使用したのだろう。浜之町では、サワラは貴重な魚なのであった。西海岸・東海岸共に魚種はほとんど同じであった。

④ 時期

一年中行われるが、最盛期は、東海岸の浜の場合、正月前後で、カツオは夏、ブリ・ヒラスは冬の初めによく釣れるようだ。西海岸の浜之町の場合は、三月か四月頃がよく釣れるようで、特にサワラは夏によく釣れるようである。

⑤ 変 遷

ホロ曳きの方法の変遷で顕著なことは、船に直接結びつけていたのが、サオの先につけるようになったことである。浜之町の上田氏によれば、帆船から動力船に変わる頃（昭和二十年頃）サオを使いだしたそうである。また、帆船時代には浮き板などは付けなかったそうである。洲之崎の田原氏によれば、針についても自家製の一本針から今の二又針に変わったということである。

(4) 延 縄

① 構 造

種子島では延縄（図④）のことを、ナワハエ、またはナワハリと呼ぶ。構造としては、二通りある。

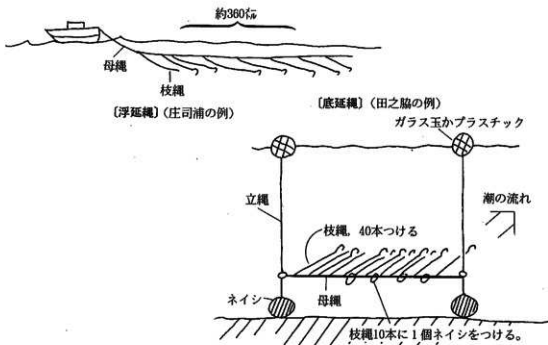
まず庄司浦には、岩元孫太郎氏（85）によると、二〇〇尋（二二六〇呎）ぐらいの母繩に、四十本の針のついた枝繩をつけたものを船のトモのヌキに結びつけ、海に延えて行く方法がある。

次に田之脇には、平園末次氏（84）によると、麻の母繩に一尋（一・八呎）ぐらいのエダ（枝繩）を四十本つけた繩の両端にネイシ（石のおもり）をくくりつけて、目的のウキをつけて底に沈めて行く方法がある。

前者は一般に浮延縄というもので、浜にもみられる。後者は底延縄で、ほとんどの浦で行われている。後者の場合、一本の母繩に四十本の枝繩がついたものを一鉢という単位で表し、一回に一鉢ぐらい延えて行くようである。事例不足かもしれないが、浮延縄が東海岸だけにみられたことは何か理由があるかもしれない。

② 方 法

延縄の方法であるが、浮延縄と底延縄の場合に分けて述べたい。浮延縄は先にも述べたが、船尾から繩を延えて行くのであり、延



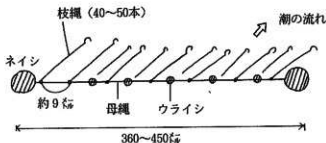
図④ 延 縄 の 構 造

えてしまつたら船は止めておく。以下は底延縄と同じなので省略する。

底延縄は、浮延縄も同様であるが、まず、延える前に山アテによつて魚のいる潮を見つける。洲之崎の田原氏の場合、「ダブをさす」といつて桶の下に石のおもりを下げたものを海に浮かべ、潮の流れをみる。次に船を走らせながら縄を投げ込んで延えるのである。今では、魚群探知器がより正確なので、山アテで潮をみることをしなくなったようである。

③ 釣れる魚種

洲之崎の田原氏によれば、釣れる魚は餌・縄の太さ・針の太さによつて異なり、大縄と呼ばれる太い縄は、餌がサバ・サンマなどで、釣れる魚はアラ・アカバラである。中縄は餌がイワシ・ムロなどで、ハリバカマが釣れる。小縄は餌がザコ(キヒナゴ)などで、底魚であるグシダイ・アカイオ(アカダイ)が釣れるそうである。以上は底延縄の場合であるが、浮延縄は、海の表面および中層に



図⑤ 昔の延縄の方法

アジ・カツオなどが釣れる。

④ 時期

時期としては、一年中行うのがほとんどだが、最盛期が、東海岸の庄司浦では年末から正月にかけてで、西海岸の洲之崎では瀬魚が廻遊してくる春・秋である。

⑤ 変遷

延縄の変遷も、浮延縄と底延縄の場合に分けて述べたいが、浮延縄の場合が確認できなかったため、底延縄の場合についてだけ述べたい。

まず方法の変遷であるが、澳の大河氏によれば、昔は浮きなどつけずにネイシを縄の両端につけただけで底に延えた(図⑤)。延える場所は、山と山の重なり具合、すなわち山アテで確認したということである。ガラス玉の浮き、プラスチックの浮きなどが使われるようになったのは、その後である。

道具の変遷についても若干述べたい。まず縄であるが、洲之崎の田原氏によれば、昔は麻縄であったが、木綿に変わったそうだ。フカなど特別大きな魚には、ワイヤーを用いる集落もあるようである。

四、結論

これまで種子島における釣り漁法について、構造・方法・釣れる魚種・時期・変遷を述べてきた。東海岸・西海岸を比較して言えることは、東海岸が半農半漁の漁村が主で、西海岸が漁業を専業とする漁村が主であるということもあり、やや西海岸の方が東海岸より優位に立っているのではないかとということである。例えば、餌量の

技術では西海岸で質的向上の跡がみられるのに対し、東海岸では、新旧の方法が同時に用いられており、変遷の跡がみられない。また、東海岸の田之脇で、サオを海中に沈めて釣るという方法がみられるが、西海岸にはそういう方法がないのも事実であり、私は、特殊な技術を要する古い方法だと思ふ。それに延縄の針についても、西海岸では釣る魚の大きさにより針の太さが異なるという事例があり、東海岸ではそういう事例が見あたらなかった。これらのことは、西海岸の漁法の優位性を示すものであろうし、東海岸の者が西海岸の漁法を模倣したか、あるいは技術伝播があったかも知れない。しかし、種子島の場合だけでなく、どここの漁村でもその漁村独自の技術を持っており、その技術を他の漁村に伝えることは、自村の利益を失うことにもなりかねないので、避けるべきことなのではないのか。今後は、東西海岸の比較の上に立って、技術交流ひいては文化交流という観点について研究されるべきではないだろうかと思ふ。

(昭59・12・25、昭60・1・3調査)

参考文献

宮崎 千博著『沿岸近海漁業—水産学全集3』（一九六〇年、恒星社厚生閣版）

アテ・ソネ・潮流・他

木下直子

一、はじめに

種子島は九州本土に最も近く、四方を海に囲まれている。しかし、その東側に広がるのは黒潮流れる太平洋であり、西側には東シナ海が横たわっている。気候的には亜熱帯に近い温帯で、いつでも暖かく魚種も豊富なため、一年を通して漁業には適しているといえよう。

しかし、江戸時代から、種子島の浦に住む浦人は島津藩の政策により、藩から漁場と共に田畑と宅地を与えられ半農半漁の生活を営んできた。幕藩体制が崩壊した近代以降も、製糖とその原料となる砂糖きび栽培が種子島の産業の大きな位置を占めていたため、現在でも漁業を専門にやっている人は少ないということである。

これら二つの相反する状況は種子島の漁業及びその発展にどのような影響を与えてきたであろうか。そしてどのような影響を与えていくのであろうか？

以上のような疑問を念頭におきながら、筆者は、アテ、ソネ（曾根）、潮流流、風向、魚種そして「海と人生儀礼」という立場から通婚圏と産の忌という七つの観点から、西之表市の浅川、田之脇、浦田、庄司浦、上能野、下能野、浜之町の七集落を昭和五十九年十二月二十五日から翌年の一月三日まで十日間調査した。その結果を

以後に挙げる。

二、概観

種子島は西之表市、中種子町、南種子町の三つに分かれる。その中でも西之表市は最も北に位置し、多くの漁港を有している。市内の漁協は、東海岸から順に東海地区、浦田地区、西之表地区、住吉地区の四地区に分かれている。今回調査した集落のうち田之脇、浅川、庄司浦は東海地区、浦田は浦田地区、上能野、下能野、浜之町は住吉地区に所属している。

三、調査内容

1 アテ（山アテ）

アテは海上で自分の乗っている船の位置を知ったり、魚のたくさんいる場所を記憶したりする方法のひとつである。目立つ山や山に生えている木を目標とすることが多いので、普通山アテと呼ぶが、津う呼び方をする集落もある。定置網の時には用いないが、流し網漁や一本釣り漁の操業中に潮の流れなどによって魚群のはずれに來てしまった時には、また同じ位置にもどらなければならぬ。そういった場合に山アテをして元の位置にもどり、再び操業を続ける。元の位置にもどった時、最初にいた位置から数分とはずれていないという。また新しい場所でも魚群にぶつかり、山アテでその場所を記憶する場合、ベテランの漁師ほどすばやく目標を定め、記憶するという。はやくしなれば、船が潮に流され、魚のいる場所からずれてしまうのである。

山アテの基本的なやり方は、目標物を二つ決めて、それと自分の船を一直線に結び、同じようにしてあと二直線を作る。この三直線の交わる所が漁場であり、直線を結ぶべく定めた二つの目標物の重なり方、ずれ方で船が沖のどの位置にいるか知るのである。

現在では魚群探知機が導入されており、若い人達は山アテをしないが、方法を見えている五十代以上の人は漁によっては今でも山アテで漁場を覚えるという。アテの目標物の決め方などの細かいやり方は各集落によって少しずつ違っているので、各集落の事例を次に挙げる。

事例一 田之脇

田之脇の奥にある山には、昔、築山がきずいてあり、漁で五〇尋沖に出ても見るこゝとができた。この山と各鼻をあわせて山アテをした。

事例二 浦田

昔は、一本釣りや延縄漁に出る時には、目立つ山や山に生えている木を目標にしてアテを行っていたが、現在では目標になる高い木がなくなってしまうたし、魚群探知機が導入されているので行わない。ただ、喜志鹿崎の沖数キロの所に昔から豊かな漁場がありその場所を確認する時には今でもアテを行う。

事例三 庄司浦

ゲタンツカマエとか、ホータンツカマエとも呼ぶ。まず目立つ山や木と、電信柱や

建物などと、船を一直線に結ぶ。次に近くの鼻からどの位沖に出ているかで自分の船の位置を知る。沖に出れば出るほど遠くの鼻や岬が見えるので、どこの鼻や岬が見えているかで、どれ程沖に出ているかがわかる。

事例四 下能野

アテには山アテと二オアテ（二方アテ）の二種類がある。二オアテは天候が悪い時や陸に近い所で漁をする時に行う。山アテと違い二地点だけでアテるので誤差が大きく、時には十数回もずれることもある。山アテも二オアテもともに一本釣りや網漁で網を海に入れる時に行う。自分の船から一直線を結ぶために目標を定めることを

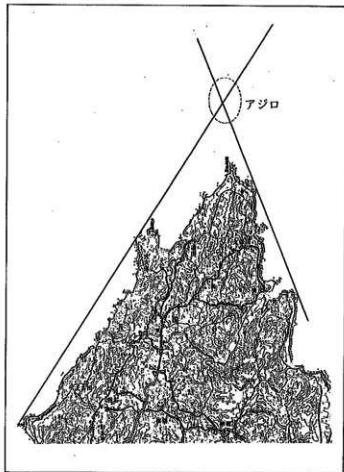


図 1 (国土地理院 50,000分の1地図縮小)

「アテる」という。

事例五 上能野

山アテの方法は下能野と同じだが、ニオアテはない。西海岸は東海岸に比べて岬や鼻が少ないので、アテる時には全て山でアテる（山を目標にする）ことが多い。一度山アテをして場所を覚えると一年位は忘れなかつた。

2 ソネ（曾根漁場）

現在は、昭和二十四年に施行された漁業法により、漁場は第一種と第二種に分かれており、各地区毎に第一種は西之表市で、第二種は種子島全島で決められている。漁船は料金を払えばどの地区の漁場で操業してもよい。ただし、定置網がある場合、その一〇〇％以内で他の船が網漁を行ってはならない。（釣漁はよい。）

漁業法が施行される以前は、各集落毎に地先権のある水域が決まっております。他の集落の船は操業することはできなかった。そのため、魚のたくさんいる漁場をめぐっていさかいがおきることもあったそうである。

それぞれの集落の漁場の中でも、特に魚の集まる場所については各集落独特の名称をつけている。たとえば、次のようである。

アジロ：浦田（図一参照）

マブシ：下能野

（魚や発見者の名前）カソノ：浜之町

この他に、下能野では亀を捕る時などで亀のいる場所をシンゾノ、又はカミゾノと呼んでいる。西海岸の集落では、個人個人が自分の秘密の漁場を持っており、なかなか他人には教えなかった。魚は二つの潮流のぶつかる岬や鼻の先に多くあつまり、浦田では喜志鹿崎

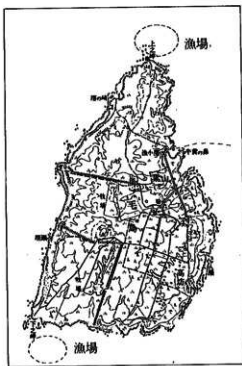


図 2 (国土地理院50,000分の1地図縮小)

沖、馬毛島では上之岬、下之岬沖は今でもよく知られた漁場である。西海岸の集落の漁船は馬毛島の付近で漁をすることが多く、動力船が導入される以前は三丁だち、五丁だちの丸木舟で数時間かけて渡っていったそうである。

3 潮流

種子島は東シナ海と太平洋の接点のひとつであるが、その沖を流れる最も大規模な潮流は黒潮であろう。黒潮は種子島東岸沖を北上するが、もっと近海では大きく分けて北上する潮流と南下する潮流があり、それぞれノポリシオ、クダリシオと呼ばれている。（ただし、最北端にある浦田では、西に流れるのがノポリシオ、東に流れるのがクダリシオと呼ばれている。）

その日の月齢によってノポリシオになる時間帯とクダリシオにな

る時間帯は変わってくるが、潮流が北上しているか南下しているかは船の流される方向や釣りが流れる方向でもわかる。

表1 潮流の呼称

集落名	満ち潮	引き潮
田之脇	ミチシオ	ヒシオ
浦田	ミチシオ	ヒシオ
庄司浦	ミッチオ	ヒシオ
上能野	ミチシオ	ヒシオ
下能野	ダールミ	ヒョングルミ
浜之町	ミチシオ	ヒシオ



図3 (国土地理院50,000分の1地図縮小)

表を見てわかるように、ほとんどの集落で満ち潮はミチシオ(又はミッチオ)、引き潮はヒシオと呼ばれている。下能野ではミチシオをダルミと呼んでいるが、これは上能野や浜之町といった西海岸の他の集落では、引き潮から満ち潮へ(又は満ち潮から引き潮へ)変わる寸前に潮の流れがゆるやかになった状態を示す言葉である。(潮がタルムという)。また、引き潮を示すヒョングルミという言葉は他の集落では聞かれず、また語源もわからなかった。

潮流の変わり目である潮境は、陸から遠目に見る場合は波頭のたち方の違いで見分けることができるが、実際には海に出ている場合は波のたち方や、船の流される方向が変わることで経験的に覚えていくしかない、ということである。

4 風 向

種子島では春から夏にかけては南、もしくは南東からの風が吹くことが多く、秋から冬にかけてはその反対になる。そのため、春から夏にかけては東海岸沖がしけることが多く、秋と冬は西海岸沖がしけやすくなるという。これらの風は季節風と言え、それにあたる方名は意外に少なく、かろうじて下能野で夏の終わりに吹く北風をアキキタと呼ぶ、という話を聞いただけだった。

次に各集落での風位名をまとめたものを次ページに挙げる。

東風や南風などといった古い風位名が今なお生き続けていることは興味深い。これらの風位名のうち最も多く使われていたのは東風を示すコチ又はコチンカゼと、北、又は北西の風を示すアナゼ、又はアナジであった。村によってはほとんど風位名は標準名と同じになっている所もあるが、そういう村も昔はもっと他の呼び方をしていたのではないかと思われる。

表2 風の呼称

風位	浅川	田之脇	浦田	庄司浦	上能野	下能野	浜之町
北				アナゼ			
北東				キタゴチ			
東	マエカゼ	コチ		コチ		コチンカゼ	コチカゼ
南東			ハエノカゼ	ミナミゴチ			
南				ハエ		ハエンカゼ	ハエノカゼ
南西				ノボリニシ			
西				テンポー			
北西				クダリニシ	アナゼ	アナジ	アナゼ

また、これらの風位名のうち、東海岸にある庄司浦では西、南西、北西から吹く風を、西海岸にある浜之町では東風を「陸の方から吹く風」という意味から、チカゼ（地風）と呼んでいた。

5 魚種

ひとつの漁港で一年を通じて、どんな魚が、いつ、どの位水揚げされるかを完全に調査するのは非常にむずかしいことである。一年中捕れる魚はともかく、その季節にしか捕れない魚などは他の季節の時にたずねても伝承者が忘れることもある。また方名の多い魚などは他の魚と混同したり、かん違いしたりしやすいのである。そこで今回の調査では、

① 一年を通じて、主としてどんな魚をどのような方法で捕っているのか。

② 昔はたくさん捕れていたが、現在は捕れなくなってしまった魚はあるか。

事例一 浦田

浦田は昔から西之表市内屈指の水揚げをはこる漁港である。現在曳網漁、一本釣り、ホロ曳き漁の他にトビウオ流し網漁やモジャコ巻き網漁などを行っており、定置網漁も一軒だけ行っている家がある。主に捕れる魚はブダイ類が多く、他にヒラマサ、カンパチ、キハダ、ハガツオ、クエ、イシダイ、トビウオ、モジャコ、カマス、ミズイカなどである。

昔は、現在海水浴場になっている場所でキビナゴの地曳網漁が盛んに行われていたが、現在は海水が汚れてしまったためキビナゴがいなくなってしまう、行われていない。また、十数年前から、流れ藻についてくるモジャコ（ブリの稚魚）を巻き網で捕り、養殖業者に売るようになったが、そのため稚魚が乱獲され、ブリの数が減っている。

事例二 上能野

上能野はもともと製塩集落であり、製塩をやめてからも、自宅

③ その魚が捕れなくなった理由。

という三つの質問をした。その結果、比較的詳しく調査できた浦田と上能野と浜之町について次に事例を挙げる。

消費する分をまかなうために漁をする程度であった。漁業は主としてハダカモグリ（潜水漁。水中にもぐってモリで魚を突く。）であって、他にはトビウオ漁や水イカ釣りを行っている位であった。しかし、動力船が導入されてから、上能野沖に新しく、豊かな漁場があることがわかった。しかし、その後乱獲が続いたため、まずミズイカが激減し、その結果ミズイカをえさにしていた魚類が小型化し、数も少なくなっていた。また五月から九月まではナガラメの解禁期だが明鮑（ナガラメを塩煮して陰干しにした中華料理の材料）として中国に輸出するためたくさんとったのと、ナガラメのエサになる海草（テングサ）を乱獲したため、ナガラメがほとんどいなくなってしまった。

現在ではミズイカ釣り、イセエビ刺網漁、たて網漁、ホロ曳き漁、一本釣りなどで、イセエビ・ブリ・トビウオなどを捕っている。昔は地曳網漁もやっていたが、魚が少なく今はやらない。

事例三 浜之町

浜之町は現在はホロ曳き漁、キビナゴ刺し網漁、イセエビ網漁、曳き縄漁、カマス地曳網漁などを行っている他、趣味でハダカモグリをする人もいる。捕れるのは主としてミズイカ・イセエビ・ナガラメ・キビナゴ・ブリ・ブダイ・クロダイなどで、春から夏にかけてはトビウオも捕れる。トビウオにもヘージロ・アオトビ・メフト・カクトビ・オートビなどいろいろな種類がありヘージロやカクトビなどほうまいが、オートビはあまりうまくない。

キビナゴは昔は月夜を選んで刺網で捕ったが、今では昼間でも出かける。特に捕れなくなった魚はいないが、昔に較べて魚が小型になった。

6 海と人生儀礼

① 婚 姻

調査した集落はどこも同集落内婚の方が多かったが、同集落外婚でもそれほどやかましくは言われなかったようである。ただ、相手の家柄によっては親や親戚がいやな顔をするがあったという。

また、特に通婚を好んだ地域、或いは避けた地域はなかったかたずねてみた結果、東海岸では特に通婚を好んだり避けたりすることはなかったが、西海岸の上能野や浜之町では、昔、一部の地域と通婚を避けることがあったという。しかし一般的に西之表市は身分や階層による差別が少なく、よほど格式高い家でもない限り、結婚する時も家柄や出身をやかましく言われることは少なかったようである。これは在来者集落と移住者集落との関係においても言えることである。

② 産 の 忌

一般に産は穢れであり、特に漁業関係者にとっては出産は血穢の象徴で死の忌より重いとされる地域は多いはずである。

しかし西之表市内の各地で調査した結果、

・ 出産した日一日だけは休む。(田之脇)

・ 昔は出産した日は休んだ。(浜之町)

・ かなり昔にはアカビ(赤日)といって、三日から一週間出漁を

慎しんだ。(浦田)

というように三つの集落以外では産に対する忌の意識などは残っていないかった。浦田の例にあるようにずっと昔は産を忌としていたかもしれないが、それが消え去った時期は早かったのだろう。

また、浦田では「ついでの子」、「ついでいない子」といって、妻が妊娠すると夫が急に豊漁になったり不漁になったりすることが

あり、豊漁だと（「お腹の子は）ついでの子だ。「不漁になると「ついででない子だ。」と言われた。そのことから妻のある男が急に漁のツギがかわると妻が妊娠しているのではないかと、とからかわれたりしたという。このような話は下能野にもあり、下能野では妻のある男の漁のツギが変わったりすると「子メタ（播いた）ネー」とか「作ッタネー」とか言われたという。

四、まとめ

これまで西之表市の漁業について七つの観点から調査した結果を挙げてきたが、ここでそれらの特色をまとめてみたい。

まず山アテの問題であるが、今でも四十年近く漁業を続けてきたベテラン達は山アテで漁場を覚えることが多いという。このように、すでにアテをするのが漁業を行う最年長の人々のみであるとはいえ、魚群探知機が導入されてかなりになる現在でも、山アテの方法が生き残っているということは興味深い。風位名にしても、すでに死語に近いコチやハエといった言葉が今でも使われている。今回の調査ではこのように、漁業の中に「古いもの（又は古いやり方）」が色濃く残っている、という印象をあちこちで受けた。

同じように、潮流に対する名前が少ないことや産を忌とする意識があまりないことは西之表の村々の漁業に対する関心が薄かったことを表しているのではないだろうか？しかしそう決めつけるには問題があるし、軽率でもある。少なくとも漁場に関しては、漁業法の施行以来変わってしまい、古い時代のものは何も残っていない。

五、おわりに

同じ生業という枠の中にあっても漁業と農業では、それを営む人々の意識構造がかなり変わってくるのではないだろうか。たとえば道具やそれを使う手段ひとつをとっても漁民の場合、より機能的で効果があがりそうであれば、新しい方法を思いつきを恐れずどんどん取り入れ、古いやり方と切り変えていく。そういう性格は漁業に対して積極的な漁村であればあるほどはつきり出て来るのではないだろうか。

その反対に、農村に住む人々は新しいものに対して警戒心が強く、よほどの必然性がないかぎり今あるやり方を守ろうとする傾向があるといわれている。そして半農半漁の村でも、漁業に対して関心が薄ければ薄いほど、農村にみられるがちな保守性は漁業を営む態度にも反映されているのではないだろうか。

種子島の場合、最初の方で述べたように島津藩の方針で漁村にも必ず田畑が与えられている。今回筆者が調査した西之表市の七集落も全て半農半漁の村であった。そして、山アテや風位名などあちこちに古い漁業の形が消えかきつつも生きながらえていた。これらのことから、西之表市の今までの漁業は農村に見られるがちな「保守性」を反映した、あまり積極的なとはいえないものであったと推定できるかもしれない。

しかし、まとめて述べたように、筆者の調査した内容だけからそうだと決めつけるのは軽率であろう。筆者は西之表市の全漁村を調査したわけではないし、また調査内容は詳しく正確に書き出したつもりだが、筆者の早合点や誤解があるかもしれない。その場合は叱責と訂正を請う次第である。（昭59・12・25〜昭60・1・3調査）

船(丸木舟・サツマ型・日向型・船霊・船祝い・他)

鹿児島民具学会会員 溝 辺 浩 司

一、はじめに

船は古くから海で生業を営む人々にとって不可欠なものであり、海上交通の手段としても重要な役割を果たしてきた。種子島においても同様であり、黒潮という大きな波に洗われる南西諸島に位置することもあって、船に関する民俗も豊富である。ここでは、種子島の船について、種類と変遷、特色、造船と進水式における船霊、正月の祝い方などを東海岸・西海岸の比較の上で考察してみたい。

二、概 観

種子島では、現在使用しているもの、つい最近まで使用していたものをみると、船の種類は様ではない。古い型では、丸木舟・サツマ型・日向型などの和船、新しい型では、「洋船」と呼ばれる日本全国で一般に普及している船が島全土にある。他に村落によつては、伝馬船や和船の一種である阿波型、ハギブネ(接船)と呼ばれる丸木舟に似た形をしている船もある。船の変遷をみてみると、多少のズレはあれほとんどの村落で同時期に変化している。

次に船の特色についてであるが、今回は古型である丸木舟・サツマ型・日向型の三つを取り出して、その構造・使用方法・使用目的

について述べたい。構造・使用方法は全村落で、ほぼ同じであるが、使用目的については、東西海岸で若干の漁法の違いが見られるようだ。しかし、概して、丸木舟は沿岸漁業が主で、サツマ型・日向型は、沿岸、又は沖合漁業に使用されるようだ。

次に造船と進水式の祝い方をみると、造船についてはサツマ型・日向型は、東西海岸で造船法の違いはないが、丸木舟は、確認できたのが西海岸の瀬泊・浜之町のみのみで、造船法の違いは不明である。しかし、右の二村落の例が全島で一般的なものかも知れない。詳細は後に譲ることにする。進水式のことを種子島では、「船降し祝い」というが、その行程中に船霊を船中に入れる儀式がある。船霊を入れる場所でも、昔と今では船の構造の変化により多少異なっている。また、村落間でも違いが少々見られる。

最後に、正月の祝い方についてであるが、種子島では一般に、正月二日に「船祝い」が行われる。「船祝い」は、村落全体で行うものであるが、その日の朝、船主個人で持ち船に祝いをする。今回は、後者の個人の祝いに重点を置いて調査した。それによると、西海岸内で比較すると、方法は同じだが、供え物に若干の差が見うけられた。また、浜之町の例では、次の日に丸木舟を特別に祝う「丸木祝い」という行事を行っている。以上が、種子島における船の概観である。

三、本 論

1 船の種類と変遷

(1) 種 類

種子島に現存する船を大まかに分類すると、古型と新型に分けら

れる。

古型はさらに、木を削り抜いたクリブネ(刺船)、板を巧妙に接ぎ合わせたハギブネ(接船)に分けられる。前者は、丸木舟(特に種子島ではマルキと呼ぶ)。後者は、サツマ型と日向型、そして田之脇にしかないようだが阿波型がある。「中種子町郷土史」には、ハギブネという丸木舟と同じ形をした船が現存するとある。田之脇の平園末次氏(84)によれば昭和二十九年頃に使われなくなったそうである。

新型のものでは、前に述べた洋船(流船ともいう)があり、ソウバネ、前進型の区別がある。日本全土にあり、動力船として普及した新しい型なので、詳述はしないが、板船が「敷づくり」と呼ばれ、甲板を二枚接いだ造り方に対し、流船が「電骨づくり」と呼ばれ、一本の太い角材に肋骨状に木材を組み合わせて骨組みがなされている点に構造的の違いがある。

(2) 変遷

次に変遷についてであるが、全ての村落で昔から丸木舟が使用されており、昭和初期に本土からサツマ型(帆船)が伝わったようである。次に動力船が普及していった過程を述べると、浜之町の上田定三氏(81)によれば、昭和十五年にヤキダマエンジンを使用し、昭和三十年頃、ディーゼルエンジンが使用されるようになったようである。それに伴い、帆船としての機能はやがてすたれていったらしい。最近では、木造船はプラスチック船の普及により減少しているようである。日向型は、サツマ型と同時期に普及したようだが、サツマ型よりは数が少なかったらしい。

2 特色(構造・使用方法)

(1) 丸木舟(マルキ)

① 構造

丸木舟の構造としては、全ての村落で種子島中部にあるヤクネ五葉松の一本丸太を削り抜いたもので、西村真次氏の分類によれば、後部が割竹型で前部が艇節型の折衷型に相当する。

② 使用方法

丸木舟には、本帆と矢帆の二本の帆、櫂、舵、ミザオ、權などが普通備わっているが、その用法としては次に述べたい。

湊の荒河長次氏(87)によると、帆をつけるのは、オイテカゼ、つまり、トモの方向から吹く順風の時、又はトビウオ流しをする沖漁の時であり、舵も併用するようである。



写真1 洲之崎で現在も使用されている丸木舟。洲之崎にはこれ1艘しかない。(洲之崎 岩坪哲之助氏所有)



写真2 丸木舟(洲之崎 岩坪哲之助氏所有)



写真3 庄司浦のサツマ型(左から3・4番目)ミヨシが覆っていて船体が低い。

る。それ以外のナギの時や、近海での打網漁などの時には、櫓を用い帆柱・舵は付けない。特にトビウオ流しの時には胴木を取ったり、波ががぶらないように「波よけ」をつける場合があったようである。

浜之町の上田定三氏によると、ミザオは、海岸に着いた時に岸壁にぶつからないようにつつ張るために用い、櫓は、速度を増す時にもう一人加わってこれで漕いで手伝ったそうである。しかし、瀬泊などでは櫓は用いなかったようである。

③ 使用目的

沿岸の雑漁業に使う場合が多く、東海岸の庄司浦の例では、エビ捕り、打網、ホロビキに使い、沖漁ではトビウオ流しに使ったようである。西海岸の浜之町の例ではエビ捕り、一本釣や、馬毛島でのカメノイオ捕りに使用した。丸木舟は、浜之町の場合、昭和二十年頃は二〇〜三〇艘ぐらいあったそうであるが、現在も使用しているのは、洲之崎の一艘のみであった。

(2) サツマ型

① 構造

主に杉材、特にミヨシなどは棟で造られ、ミヨシが日向型に比べて長く、傾斜していて航(船底の縦の部分)が短い。また船足が速く、櫓の数から一丁立ち・二丁立ち・三丁立ち・五丁

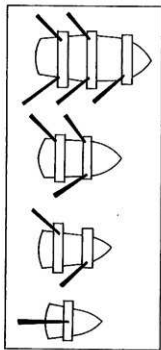


図1 サツマ型の櫓のつき方

立ちの区別がある。例外として、田之敷、庄司浦では五丁立ち・二丁立ちしかない。竜骨がなく、航は板を二枚接いでいて、船梁はその上に二枚、板(ネイタ・ウワイタ)を接いで造る。洲之崎の例では、五丁立ちは今の三丁半の船に相当し、三丁立ちは一丁、二丁立ちは一丁、一丁立ちは〇五丁の船に相当するようである。

② 使用方法

丸木舟同様、帆船で櫓をつけ帆を巻いて走ったが、風がある時は帆で走った。先に述べたが、昭和十五年頃から動力で走ろうようになった。

③ 使用目的

五丁立ちは、洲之崎の例では沖合漁業に適し、トビウオ流し、一本釣、ナワハエをするのに用いたが、三丁立ち・二丁立ちはホロビキ、ナワハエに、一丁立ちはエビ網にと、主に沿岸漁業に用いたようである。

(3) 日向型

① 構造

ミヨシがサツマ型より短く傾斜が急である。またサツマ型より船

足が速く、波の乗りが良
い。「日向船」・「日向造
り」とも呼び、日向(宮
崎)地方から伝わったから
この名がある

② 使用方法

サツマ型と同じく帆船。
現在では、動力船が多い。

③ 使用目的

サツマ型と同じく漁に用い
る。使用数は、全村落とも
少ないようである。



写真4 庄司浦の日向型(一番奥の1艘)ミヨ
シが立っており、船体が低い。

3 造船と進水式における船霊フナダマ

(1) 造船

次に造船について述べたいが、洲崎の船大工、篠田照雄氏
(71)による造船工程を紹介したい。

まず設計図は、十分の一縮尺で手板と呼ばれる板に墨を用いて書
く。次に船の各部品を、ハツリヨキで荒けずりし、チヨーナで仕上
げる。次に帆にミヨシを取りつけ、次に戸立を付ける。それが終わ
ると下の方から船梁を中板、上板の順で帆に接いでゆく。クギはヌ
イクギという湾曲したクギを用い、万力で板と板をしめつけてから
クギを横に打つ。次にヌキを取りつけ、コベリを船の縁に取り付け
る。コベリは、昔は丸太を用いていたが、今は板を使用するよう
だ。それが終わると、最後に帆柱立てだが、ヌキに穴を掘り、その
下のモリに柱をさし込んでトモの方から起こして立てる。

丸木舟の造船を、述べたい。以下は、浜之町の上田定三氏からの
開書による。

まず、山で荒作りするが、これは安城又は牧川で行われる。木を
切る時に神酒と塩をかけ、山の神に立ち退くように、また、ケガが
ないように祈る。次にツケダシをして浜まで下すのだが、その方法
として、あらかじめ丸木舟のヘサキにひもを通してような穴が穿っ
てあり、そこから竹のヘギを輪にし、麻縄を通してコテンと呼ぶ丸太
にくくりつけ、その両端から縄を牛・馬の鞍に取りつけ、二・三頭
で引かせる。丸木舟の下にはコロが置かれる。「ホイイ、ホイイ」
と掛け声をかけ山を降りる姿はきつと壮観だったにちがいない。浜
に下すと、そこから浜之町まで船で引いて運び、同地で船大工に仕
上げてもらった。

(2) 進水式における船霊フナダマ

進水式を「船下し祝い」と呼ぶことは先に触れたが、その儀礼の
内容を述べたい。

まず船主と船大工が、船霊を船中に入れる。神体は、七才以下の
女子の髪、柳の木で作ったサイコロ、一文銭(現在は一円玉)十二
枚、化粧道具である。次に、餅を一年分(三六五個)投げる。沖に
出て取り舵回り、面舵回りにそれぞれ三回ずつ廻り、船主の妻を海
につき落とす。以上は庄司浦の例である。船霊を入れる場所につい
ては、本帆を立てる刷木の取り舵側に入れるのが、澳、洲崎、庄
司浦、浜之町である。しかし、瀬泊の岩坪孫之助氏(77)による
と、昔は本帆の帆柱の根元の取り舵側に入れたが、今は機関場の刷
木の取り舵側に入れるそうである。とすると、前の三村落の例は新
しい形で、瀬泊の例の方が本来の姿だと言えなくもない。

4 正月の祝い方

ここでは、主に船主個人が行う祝いについて述べたいが、まず瀬泊の例から挙げたい。長瀬平吉氏(79)によれば、満ち潮の時、午前九時以降に行うが、前日に海の天気などを見て満ち潮の時刻を見定めたようである。まず船の取り舵側から上がり、機関場の戸を開け二礼二拍手一礼をする。次に神酒を真ん中、左、右の順にかける。次に米を左、右にかけ、塩を真ん中、左、右の順にかける。次にチョコ(猪口)に神酒をつぎ、塩・米を少し入れ、二礼二拍手一礼をして折ってから飲み干す。終わると戸を閉め船の面舵側から下りる。以上が作法であるが、供え物として餅(丸餅)を二段に乗せる人、サシミを上げる人もいた。長瀬氏によると、昔はサシミと酒は倍の量で、半分は公民館にもって行き、午後の「船祝い」で食べ、半分は家へ持って帰って船霊様の厨子に供えたそうである。今は、サシミは衛生上禁止されているらしい。

洲之崎でも方法は同じだが、供え物には一定の規則があるようで、餅が丸型一個、三日月型二個、月の数(十二個)の餅、魚が一対(二匹)、神酒が一升三合、塩が右、米が左それぞれ半紙に乗せる、といった具合である。下野敏見氏によれば、餅十二個は船霊様の数で、魚一対というのは、「欠けの魚」という見方から一対そら



写真5 各船主が行う正月祝い(1月2日)

って欠けていないことを吉とする意味があるということである。ただ、西海岸の事例だけで東海岸の事例が得られなかったのが残念である。

最後に丸木舟の正月の祝い方について、浜之町の例を述べたい。前述した上田定三氏によれば、かつて正月二日の「船祝い」の翌日、正月三日の正午に「丸木祝い」を行うものだったという。その方法としては、まず満ち潮の時、エビス神社の前の浜から、茶わんにシユエイといって、潮水を汲み取り石灰石の石を三個入れる。次に船主の家族が皆集まり、法華宗の本源寺の僧を呼んで読経してもらう。それが終わると船主は、先のシユエイにササの小枝を浸し、家と丸木舟に清めるためのシユエイをまく。そして午後には宴を開き、そこで「めでた節」を歌って飲み騒ぐ。以上が「丸木祝い」の方法らしい。「丸木祝い」という特別な名がついていたのは浜之町だけらしいが、昔はこの港でも同様の祝いをしていたのであろう。ただ瀬泊のように行う日が「船祝い」の日の場合が多かったのかもしれない。

四、結 論

以上が種子島の船についての調査の報告であるが、調査の最終的な課題であった東西海岸の比較があまり明確にできなかった。その理由として、ほとんどが伝承者の記憶に頼るためいささか不明瞭な点があったこともあるし、調査地が限られていたせいもあるだろう。しかし、東海岸が半農半漁の村落で、西海岸が漁業を本業とする村落が多いという事もあって、若干ながら違いが見られたので述べてみたい。

まず、船の数、種類が、西海岸の方がより多いという事である。例えば、サツマ型と日向型にしても西海岸が一丁立ち、二丁立ち、三丁立ち、五丁立ちが一般的なのに対し、東海岸が二丁立ち、五丁立ちの二種類しかなく、それに伴う漁種も少ない。造船所が西海岸に集中していたことも理由の一つかもしれない。

次に、東海岸では、丸木舟がいまでも重要な漁具として用いられているということである。

それ以外の事で特別顕著な相異点は見られなかった。また、隣同士の村落間で、船の種類、数、行事に若干の違いが見られたことは興味深い。

今回の調査で感じたことは、種子島では依然として古い民俗を残しているし、船に対する民俗が豊富なことである。そして、漁民の船への愛着と誇り、畏怖というものが根強いということである。やはり、船は漁民にとっての命に値するものなのかもしれない。

（昭59・12・25～昭60・1・3調査）

参考文献

- 須藤 利一編『ものと人間の文化史——船』（一九六八年、法政大学出版局）
- 川崎 晃穂『造船にみる接ぎ合わせ技術』（一九八〇年、鹿児島民俗七〇・七一合併号）

漁撈儀礼と稲作儀礼

瀬戸口 良 二

種子島は農・漁業が盛んで、古くからの伝承が今なお数多く受け継がれている。また島民の人からも良く調査の行い易い所である。そこで私は今回の実習において、フィールドワークの練習の意味を含めて、『種子島の民俗Ⅰ』の事実を裏証すべく、種子島の漁撈儀礼と、稲作儀礼とについて、調べてみることにした。

一、船霊信仰について

1 庄司満

下園甚五郎氏(88才)によると、船霊様は若い女の髪の毛を紙につつんで、筒に打ち込む。風のとぎはチリンチリンと鈴虫のような音をたて、しけたり、風が変わったりすると、チンチンと激しく鳴く。これは船主にしか聞こえない。船を降りてから、御飯と魚を供える。

2 住吉

船霊様は、七才の女の子の髪と十二文(今では十二円)を紙につつんで船大工のかしらに打ち込む。海がしけたりすると船霊様が勇む。

二、船祝い

1 住吉の船祝い

正月二日に、漁協に(以前は新ベンザシの家)に船主たちが集まって船祝いを行う。女たちはただ準備をするだけである。まずお寺の師匠が、方便品・如来寿命品・如来神力品・陀羅尼品の四本のお経を読み上げる。その時、船主たちが師匠の前に次々に座り、日隆上人の書いたという御曼陀羅を頭にふれさせる。これは海の安全と豊漁を念じて行うもので、一種の御守のようなものである。そのあとごちそうになり船祝い歌を唄う。歌詞は次の通りである。(船は船頭、舵は舵取り、水は水夫の意)

- 船 船へー船へー、船に申す。
 舵 何と承りましょう。
 船 時ころ、潮面、よいそうにごさる。表は錨に向きまーす。
 船 それ一段、ようござりましょう。
 船 ヤーゾー、ヤーゾー、ヤーゾー
 水 ヤーゾー、ヤーゾー、ヤーゾー
 船 イーゾー、イーゾー、イーゾー
 水 イーゾー、イーゾー、イーゾー
 船 イーゾー、イーゾー、イーゾー
 水 イーゾー、イーゾー、イーゾー
 船 エーゾー、エーゾー、エーゾー
 水 エーゾー、エーゾー、エーゾー
 船 取りーかじ
 舵 おっとう
 船 おもーかじ
 舵 おっとう
 船 今のかじ

船 取って候

船 ヤライイ、めでたいなあ、五葉は、めでたーの、のー、若

水 枝も、ヒヤン、栄ゆ

船 ゆー、るー

水 葉も、しー茂るー

船 なおーも、めでたいなあ、えー上下、めでたのー、のー、ヤ

水 ホー

水 思う、ヒヤン、港

船 とー、にー

水 そよ、そんそよーと

船 そよにーそよそよーとー、吹いたー、嵐に乗りーり出す

水 それも、ヒヤン、船頭衆

船 しゅう、のー

水 幸せ、ヤッサノエー

船 嘉例よしの船に、灘よしを乗せてー、船頭から

水 ヨイサ

船 船中衆、皆、嘉例よしやー

ここまでが綱ざらえ歌である。これは操船儀礼、御船歌、嘉例良しの歌の三段から構成されている。庄司浦では操船儀礼に、船に初めて帆をつけた兄弟の伝説が付いている。また嘉例良しの唄は、沖繩のジラバ・ユンタの中でも数多く歌われている。

これに続いて歌われているのが繪歌である。

船 嬉しゅめでたの若様様よ

水 枝も栄ゆー、ゆーる、葉もしーしー、しげ茂るー

以下は聞き取ることが出来なかった。ここまでを昔は船の上でやっていた。今では船祝い歌を知っている人も少なく、この日はテ-

プにあわせて歌っていた。

2 灘泊の船祝い

正月二日に公民館で行われる。出席者は船主だけではなく市長他も招かれ盛大に行われる。ここでも船祝い歌が唄われる。繪歌は江戸時代、種子島の殿様が鹿兒島から帰るとき馬毛島のとこに來たらへ歌之助、歌を申せと命じ袴を着た歌之助が表で歌い、船で水夫たちがそれに掛け合いで歌ったものである。

さて、灘泊の船祝い唄で特筆すべきものは、ここにしかない祝いの歌である。これは伊勢神宮の神木を引き出すときの木連り船の系統からきたもので、一年のうち、船祝いのときだけ歌うのである。歌詞は次の通り。

船 年の初めの初夢に、エイ、如月山（おとづま）の楠の木を、船に造りて、

今おろす

水 エイ、白金柱（しろかね）、押し立てて、エイ、黄金の清車（きよぐるま）をふくませ

て、エイ、手繩水繩（てづなみづづな）に琴の糸、エイ

船 綾と錦を、帆に掛けて、帆に巻いて

水 エイ、宝の島に乗り込んで、思う宝を取り積んで、エイ、そ

なたの倉に納めおくヤライエー

今回は、住吉と灘泊の船祝いのどちらとも実際に見たのだが、どちらも、今年一年の海の操業の安全と、豊漁を願って行う行事であることには変わりはないのだが、住吉のほうは、小規模ながら、お経を読んだり、御守りをおがんだりして、信仰色が強いのに対して、灘泊のそれは、飾り付け、供え物等は昔のままであるが、かなり儀礼化してきているように思われた。しかし船祝い歌に関しては灘泊のほうがよく伝承されていたようだった。やはりこのよう

な行事は無形文化財に指定し、伝承していかなければならないのではないかと感じた。

三、稲作儀礼について

種子島の一年間の稲作儀礼はおおよそ次のようである。

1 田の神祭り

正月十一日の「田の畝入れ」、十四日の「ホダレ引き」と合わせて、田の神を信仰し豊年満作を祈る種子島の重要な稲作儀礼である。一家の主人が、自分の田に行く。一番上の田の水口で、少し土を打ち起こし、三方に竹を立てる。次に正月に門に張ったしめ縄を、三本の竹に張り付ける。種子をまいて餅を供え、「一しきどころに七俵ならしておくらせ」と祭文をとまえる。しかし、現在ではほとんど見られなくなった。

また田植えが機械化され、ハウス育苗となり、田んぼに苗をおろす人も少なくなってきたが、それでもハウス苗床に田の神を祀る人もいる。

2 田の畝入れ

正月十一日に行う行事である。この前に、「畑の畝入れ」を正月四日に行うが、田の畝入れと同じである。

正月は、全部の農機具を手入れして、ユズリハ、モロバ、ウラジロ、餅を供えて祝う。

3 穂垂れ引き

正月十四日、こうさしのモチ米をむす時、セイロから出てくる湯気に、準備していた長い茅をその湯気の上のにのせ、柳の木で作ったはしですこまながら「イネの穂はブラブラ、粟の穂もブラブラ。カライモの根はゴトゴト」などと祭文を唱えながら何回も廻す。そして別に箕の中に入れておいたスクボ（もみがら）にそのぬれた茅の先を入れて引きすると、ちょうど穂がみのって垂れているように見えるので穂垂れ引きという。穂垂れ引きに使った茅やはしは保存しておき、彼岸の中日のタネマキの時、水口に供えて祀る。

4 さのぼり

田植え上がりの祝い行事を言う。その他の仕事のとときには、この行事は行わない。さおとめ（早乙女）、さなえ（早苗）、さのぼり（早のぼり）、すべて田植えに関係しているように考える。昔は今のよう機械植えでなく、多くの人手を要した。そこで、何人かで組をつくり、い（結い）をして植えた。つまり共同作業である。田植えは農家の一大事業であり、植え終われば安心する。種子島の言葉で「エーコトをした」であり、今までの苦勞忘れの慰安会である。これまで見てきた稲作儀礼のうち、家レベルで行うものは今でもしっかり行われているようだが、村落レベルのものは、農業の機械化により、家族だけで十分作業ができるのであまり行われなくなってきたようである。

四、宝満神社の赤米の御田植え祭り

種子島で御田植え祭りが行われるのは宝満神社と真所神社^{まじよ}だけだ

ある。宝満神社は赤米、真所神社は白米である。ここでは宝満神社の赤米の御田植え祭りについて述べてみようと思う。

赤米の御田植え祭りは四月十日に行われる行事である。御田の森では頂上のウバメガシの、木の根元に、白いガル石をおいた素朴な祭壇に、赤米の苗・塩・大豆・甘酒・シユエイなどが供えられる。

神主・氏子役員・葦永の区長・役場の代表・小学校長・中学校長・部落会長（公民館長）・青年団、などが小高い森に入る。神主が、宝満神社から臨時に神を呼ぶという古い伝承が残っている。供えていた赤米の苗を、神主から氏子の代表者へ、氏子代表者から区長へと渡される。この赤米は神様からいただいた米である。

森の祭りがすむと、すぐ近くの御田「オセマチ」で赤米の田植えが行われる。オセマチの田植えは男の人達が植える。昔は、御田植えは校区民総出で行われた。御田を植える間、田植え歌が歌われる。田のあぜに立って太鼓をたたきながら歌う。

御田植えの後、森の前の舟田で、老夫婦が御田植えの踊りをする。男は、黒の着物に黒のハカマ、足には黒タビをはく。女はもん付の着物に足には白タビをはく。白タビのまま舟田の泥に入って、田植え歌に合わせて赤米の苗を持って踊る。その手をまわしながら踊る。昔は、御田植えの間に踊ったが、今はオセマチの田植え後に踊る。

踊りの終わった後、直会が行われる。直会の席には米賣や田を植えた人達が参加する。

シャニンの葉の上にツワブキと昆布のしめ、赤米のにぎり飯をそえる。赤米のにぎり飯は普通の赤飯と変わりなくバサバサとした味がする。（もともと赤米が赤飯の原型であった。）お下りの焼酎で直会がはじまる。数時間後、めでたぶし（お祝いの歌）を歌い、今

年の豊作を祈って直会は終わる。

昔は、この後、お田の森の祭りに参加した役員は社人じいの家に招待され、「マブリ」という行事をした。マブリとは守りで、宝満様が守ってくださったという意味であるという。

宝満神社の御田植え祭りがすむまでは、葦永の農家は、誰も田植えをしてはならない。これが済むと葦永の広い水田の、あっち、こっちで、田植えがはじまるのである。

五、考 察

これまで述べてきたことについて、若干の考察を加えてみたいと思う。

第一に感じたことは、漁業における船祝いに相当する、稲作儀礼は、御田植え祭りではないだろうか、ということである。それは祭りの構成、参加者の心情が似ているし、漁民にとっては、正月が年の始まりであるが、稲作農家にとって、稲作の周期から考えて、四月が一年の始まりではないかと考えるからである。

また、船祝いの、綱さらえの歌に歌われている操船儀礼は、農家の、野の鎌入れ、田の鎌入れに相当するものであろう。正月に、日ごろの作業を歌い、祭ることによって、一年の安全と、豊漁・豊作を祈るものであることと一致すると思う。

全般に、船祝いにしろ、御田植えにしろ年々変化してきているようである。船祝いにおいては、船上で行っていたものがベンザシの家で行われるようになり、今では公民館等で行われるようになってきている。また船霊様の作り方を知っている人も少ない。船祝い歌を歌える音頭取りも少なくなってきた。農耕儀礼にしても儀式

的なものは存在しているが他のものは消えつつあるようだ。また多くの儀礼が形式化し、それ本来の意義がしだいにうすれつつあるように感じた。

六、調査の反省点

今回は初めての調査ということで、かなり失敗だった。自分で感じたことを箇条書にまとめてみた。

- ・ 下調べがたりなかった。また質問事項を決めていなかったために、ついでに聞くことができなかった。
 - ・ メモの取り方が下手で、あとから資料の整理をするときに困った。
 - ・ 見知らぬ土地へ行くと、消極的になり思うような調査ができなかった。
 - ・ お礼状を出すのがおくれた。
 - ・ レポートの内容が事例を述べるだけに終わってしまい、最初予定していた農業と漁業の比較まで深く言及することができず、たいへん希薄な内容になってしまい、その上、提出がかなり遅れた。
- 等の点である。来年は、これらの反省点に立って、より充実した調査を行いたいと思う。

(昭56・12・25～昭60・1・3調査)

参考文献

- 下野 敏見著『種子島の民俗Ⅰ』（法政大学出版局）
 下野 敏見「ヤマト・琉球船歌の構造と展開」（鹿大史学、第三

十号）

会

『種子島の稲作行事とワラ細工伝承教室』（中種子町教育委員

漁業と信仰

東 口 匡 樹

一、はじめに

種子島は南北に細長く、その名の通り種のような形をしている。また高い山もなく、高い所でも海拔二〇〇呎ぐらいだということであった。種子島は美しい海に囲まれた島で、古くから有名なトビウオ漁が行われるなど、豊かな漁場にも恵まれた島である。種子島を囲む海は、先程も言ったように、本当に美しかった。そのため、昔ながらの漁法が未だに行われていると推測した。今回は期間もそんなに長期に渡るものでも無かったため、広範囲の資料を収集するより、ある一定の地域を調査することにした。これからあげる事例は、西之表市の北部に位置する洲崎、島の中央の中種子町、浜津脇で得られた資料である。

二、浜津脇の事例

1 浜津脇の概要

浜津脇は漁業と農業の半農半漁がほとんどである。が、昭和初期では一応畑ももっているが、ほとんど漁業を行っていた人が多数いた。また、大正時代には木炭、ロウソク、澱粉を扱う商業港として栄えていた。

2 漁業

① ほこ突き

網漁前に主流であった漁法である。丸木舟に乗って、長さ四〜五呎ほどで、先が三本に分かれたモリを使用した。このモリはホコと呼ばれていた。カガミと呼ばれる水中をのぞく眼鏡で海中を探り、小型魚から五呎級の大型魚までありとあらゆる魚を突いていく。その中でコウイカの捕り方をみてみる。

・ コウイカの捕り方

嵐の日に親子、又は兄弟で二人一組で漁を行う。上手な方がカガミで水中を見ておき、ホコを使用する。もう一人は櫂を漕ぐ役である。コウイカは必ず雄雌一対か、または雌一匹に対して雄二匹で泳いでいる。そのためホコは二本か三本もって行く。コウイカは雄イカは少し青みがかっていて、雌イカは赤みがかっている。大きさも雄イカの方が大きい。だからといって雄イカから突いてはいけない。そうすると雌イカが逃げてしまうからである。だから、まず雌イカを突く。そして、そのまま海底に突き刺しておく。そうすると雄イカは逃げないのもう一本のホコで雄イカを突く。

② 三重網(ミエアミ)

これまでも普通の木綿製の網もでてきてはいたが、性能が余り良くなくて、まだ突き漁の方が主流であった。しかし、昭和二十三年頃伝播して来た三重網の出現によって、網漁が主流になり始めたのである。この網は外網、中網、外網の三重構造からなっている。網の目は外網が一尺、中網が三寸で、魚は外網の方は苦もなく通ることができているのである。しかし、中網は外網の二倍の長さがあり、常にたっているため通り抜けようとする魚は中網に引っ掛かり、そしてそのまま反対側の外網を通り抜けようとする。そうすると中網

が袋状になって逃げられなくなってしまう。

③ サメ漁

一本の母繩に数本の枝繩をつける延繩漁の一つで、かなり危険とされている。母繩に三十尋間隔で七本ぐらい枝繩をつけて、七〇〇〜八〇〇ぶ沖の浜と岩場の境目に、重いオモリで一晩沈めて置く。餌は潮や陸の方で釣れた魚をつける。そして、翌日見てみると、ウキの位置が違っていたりする。サメが引きずったためであるので、いいサメがかかっていたらいいかと不安と期待で胸をいっばいにして繩をひきあげる。なぜならサメは、ヒレの先が黒いツマグロ、頭の先がとがっていて、最良の肉質をもつトンガリ、そして肉質が悪く、六〜七寸になるホオジロサメがとれるからである。そして引き上げるのであるが、この時細心の注意を払わなければならない。特にホオジロサメは夕マリブカとも呼ばれ、引き上げるまでは何もせず黙って引き上げられるが、鉤をかけた直後物凄い勢いで暴れまわる。ロープが足にからまって海に引きずり込まれかねないので、一気に引き寄せ、肩間をたたき割らなければならない。サメはクリブネより大きいので船の横にくくりつけてもって掃り、島内で全部食べていた。しかし、動力船が導入されてからサメを専門に捕ることも始め、捕ったものは内地に出荷していた。

④ 地引き網

一般に男性約二十人ほど乗った板舟二艘で、海岸から五〇〇ぶほど漕ぐ。昔は動力船は無かったので音がなかったためであろうか、シマアジやムロアジなどが深さ一〜六尋の所まで来ていた。魚群を見つけたら網を降ろす。そして一旦船だけ二〇〇ぶぐらい浜の方へ行き、錨を下ろす。そこから網を引っ張り、網が近づいて来たら、また浜のほうへ船を寄せ、錨を下ろし、網を引く。ある程度の

所まできたら、浜で待機している女性連に網を渡し引き上げる。

⑤ キビナゴ漁

月の明るい夜に船を漕ぎ出し、船首にいる人が棒を海につけておく。キビナゴは棒にこすりつけてくる習性があるので、それで魚群を探し、網を張る。網を張ったら、棒で海面を叩いて網に追い込む。

⑥ エツケ漁

アマキと呼ばれる木を魚の形にして焼き、針を付ける。それを月夜の晩に引っ張るとミズイカが餌と間違っかかるとか。擬似餌を如何に上手に作るかが問題であった。

⑦ 潜り漁

ナガラメ、カニ、イセエビなどが岩の下に沢山いたので竹で引っ掻きだしていた。

3 漁業信仰

① 浜津脇恵比須神社 魚雲供養碑

漁業の神、恵比須様の神社に捕った魚を供養する石碑があった。現在では大漁、トビウオ漁の時祀る。これは昭和十年八月以降に大漁があり漁民は喜んだが、それは数万の魚の命の代償で哀れだ、というこで建てられた。

② 船おろし

これは新しく造った船を進水する前に行う儀式である。縁起の良い未か丑の日に行う。

⑦ まず前夜、棟梁は柳の木を切ってきて来て誰にも見られないように柳の木に化粧をする。そうすることによって、柳の木に魂をいれるのである。そして柳の木を海に流しに行く。次に十二枚の一文

銭を用意し、それに魂を入れ替える。十二枚は十一人の女性の船霊を表す。当日、それをもって行く。

(イ) 当日、まず棟梁がまた陸上にある船に左から乗り込む。そして、十二枚の一文銭を船の中央の左側に埋め込む。次に神様への供え物として、餅を太陽を表す丸型、月を表す三日月型、船を表す半円型、団子状のものを三六五個、これらを一組として二組、さらに御神酒を二つ、塩、米、大工道具を左から積み込む。そして棟梁が安全と大漁を願って祈禱する。

(ロ) 引き渡し式 船主がまた左から乗り込み、棟梁と盃をかわす。終わったら供え物を右から降ろす。次に棟梁と船主も右側から降りる。

(ハ) 最後に進水となる。船に乗っている人々は次々に海にほうり込まれたり、飛び込んだりする。そしてまた船に上がって来る。こうすることによって、もし難破しても無事に上がって来れるように祈願しているのである。

③ 船に乗る時の禁忌

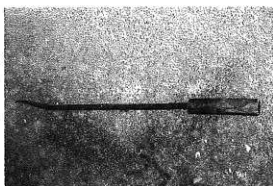
- ・ 船上に女性を乗せてはいけない。
 - ・ 船上で猿、蛇(ながいもの)の話は最もしてはいけない。よって馬毛島のトビウオ漁の際、鯉が沢山いるのに捕ってはいけない。陸上にマムシも沢山いるが触れてはいけない。
 - ・ 家で不幸があったら一週間漁に出てはいけない。
- ※釘などの金物は落としてもかまわない。

④ 雄龍岩、雌龍岩

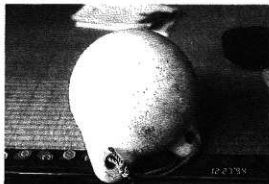
国道沿いにある大きな岩で一つは二本の角のような形をもつ力強い岩、もうひとつは一回り小さく丸い岩、これを雄龍岩、雌龍岩とよぶようになった。これには種子島の起源伝説がまつわっている。



① 魚霊供養碑 (浜津脇)



② クシ



③ ウケ

三、洲之崎の事例

1 洲之崎の概要

洲之崎は西之表港のすぐ北側に位置するのでとても漁業が盛んである。それで漁業の専門化が発達している。つまり網漁の人は網漁だけ、釣り漁の人は釣り漁だけという具合である。

2 漁業

① 伊勢エビ漁

網は横一八尋、縦二尺を一反としてこれを四〇反の建網を使用する。これを陸に近く岩が多い四〜二〇尺の浅いところに沈める。戦前は一晚で約四〇発捕れていた。

② ナガラメ(トコブシ)漁

ナガラメとは真珠貝ににていて、大きさは二〜一〇寸である。月二回の大潮の時にいく。メリヤス襟袢にふんどし、足袋という服装で水深二〜一〇尺まで潜る。岩の下にいたので、引っ繰り返すか、クシと呼ばれる木に鉤状の鉄の棒が付いた物を使用して捕る。また捕ったナガラメを網に入れておくためにウケと呼ばれる浮きを海面に浮かしておく。

③ 追いかけ網

網は横一八尋を六反つなげて、二艘の船でその建網を引っ張り魚を追いかける漁法である。ブダイなどを捕る。

④ ヒキイオ

カマスなどを主に捕る。カマスが来る時期は五月から十一月で大体分かってるのでベンザシ(弁済師)は魚が来ないか気をつけておく。魚群の情報が入るとベンザシは魚群の大きさを測り網の大き

さを決定する。横二尋、縦四尋を一反として一人一反持ち寄り、計四〇反ぐらいつなぐ。この網は目が千目と呼ばれる細かい目をしていてアラテ網と言う。これを二艘の船で引き魚群の回りを囲む。囲んだら網の中央に袋網を取り付ける。袋網の両側には別の二艘の船がいて、これが袋網を引き上げる。この時網の下から逃げないようスミテと呼ばれる潜る人が十人ぐらいて見張っている。

⑤ 延縄(缶流し)

延縄は一本の母縄に数十本の枝縄がついたものである。これは海底なら海底、中層なら中層と一つの層に母縄を横に張るが、缶流しはこれの改良したもので、母縄を縦に張ることよって、上層から海底まで全ての層に枝縄を張ることができるものである。

⑥ 突き漁、キビナゴ漁、トビウオ漁

これらの漁も浜津脇同様行われていた。

3 漁業信仰

① 恵比須神社 水天宮 魚供養碑

恵比須神社に水神様が祀ってあった。下関の壇ノ浦の決戦で死んだ安徳天皇の神様らしくたりやすいそうである。年二回、旧六月五日の六月灯と旧九月二十八日の顯成就に供え物をする。またここにも浜津脇同様に魚供養碑があった。

② 船神様

洲之崎では男の子の髪の毛と女の子の髪の毛を船の中央の横板、左側に埋め込む。

③ 船に乗るとき禁忌

- ・女性に船に乗せてはいけない。
- ・月経中の女性は恵比須神社に入れない。

・死人がでた家族も四十九日間恵比須神社に入れず、一週間船に乗れない。

・針は捨ててはいけない。

・蛇の話はしてはいけない。

・馬、牛などの動物を船上に乗せてはいけない。

四、最後に

今回の調査で思ったことは種子島は豊かな漁場に恵まれているということである。そのため浜津脇には個人で行える漁法が沢山あった。そういう漁法では勿論個人の技術が、魚が捕れるか捕れないかを左右することになる。当然人々はこぞって技術を考え競い合っていたように思える。よって、浜津脇は小さい漁港ではあるが個人個人が多様な漁法を習得し高技術をもっていた。また、洲之崎の方は広い漁場範囲があると言える。そのため、色々な漁をするより二、三の漁を専門にしたほうが効率がよかったのであろう。一つの漁法を専門に行っても、それだけの許容度があったため次々に新技術が導入されていった。それでも両地とも根本的な漁法は昔とあまり変わっていない。また両地に共通することはクリブネを使用し、突き、葉もぐり、網を使用するときも叩いて追い込む、潜って追い込むなど古い漁法が戦後まで行われていたこともある。しかし、経済の成長とともに人力から動力へと変化し、現在ではかなり漁獲量が減ってしまったと言うことであった。

今回の調査は短い期間であったがとても楽しいものであった。それは種子島の人達の明るい性格のお陰であったのは言うまでもない。どこにいても温かく迎えて下さった種子島の皆さん、お忙し

いにも拘わらず長時間お話を聞かせて下さった浜津脇の浦元信義さん、洲之崎の岩坪鉄之助さん、中島定雄さん、お仕事事に何回もお邪魔させて頂き、色々教えて下さった浜津脇郵便局の皆さんに深く御礼申し上げます。